

名 称	三條実美文書
標 題	岩倉具視 奏書

分 類 番 号	51
	1

国立国会図書館

登録番号	
------	--

臣具視謹テ

天皇陛下ニ白ス抑各國締交ノ始ノ幕政衰弛ノ時ニ際シ
條約對等ノ例ヲ得ス國權ヲ奪ハレ國威ヲ失スルヲ以テ人心
卒戾シ國政整ハズ或ハ金匱一缺アラヘテ恐ル是ヲ以海内一
致同心協力國權ヲ復シ國基ヲ固クシ保安ノ道ヲ盡
此先帝ノ遺旨ニシテ陛下モ亦神明ニ誓ヒ期シ玉フ

所ノ聖旨ナリ故ニ大政維新ノ初ヨリ忠藩義國ノ士及艸
莽ノ輩ニ至ルマテ國吏ニ死スルモノ其數幾千ナルヲ知ラス竟
今日ノ鴻業ヲ致スヲ得タリ夫レ身命ヲ抛テ國事ニ殉フル

三 條 家

モ皆聖旨ヲ奉體ニ誠意ニ出サルナレ而ノ干戈既ニ戢リ
名分既ニ正ク條理彌明ニ各藩封ニ人民ヲ奉還シ全國始
一致ノ治體ニ歸シ尋テ廢藩置縣ニ至リ大綱是レ立大權
是舉リ郡縣ノ治全ク成ル於是乎國權ヲ復シ萬國並
立ノ基礎ヲ立ントスルノ聖旨ニ從事セサルヘカラス乃チ辛未
ノ冬陛下ノ目的期望スル旨趣ヲ以テ特命ヲ奉シ歐米
各國ニ使シ各國帝王及ヒ政府ノ考案ヲ諮詢シ臣カ目
擊親察スル所トテ參酌シ條約改正ホノ議ニ及ハントス
抑此舉タルヤ國權ノ復スルト復セサルト聖旨ノ達スルト達セ
サルトニ關係シ至重至難ナルハ固ヨリ言テ俟タス然ルニ臣其

實地ニ就^キ其形勢ヲ察スルニ其改正ヲ議スルノ難^キ更^ニ意料ノ外ニ出^テ功ヲ一朝^ニ奏スヘキニ非^ス實功實力ヲ著^ス至^ラスニハ竟^ニ國權ヲ復^セスニハ聖旨ニ報スル能ハス此^レ實^ニ臣^カ焦心苦慮眠食ヲ安^セサル所アリ夫^レ實效實力ヲ著^ス勉^テ政理ヲ整^ヘ民力ヲ^レ厚^キ至^ラルニニ在^ルニ而^{シテ}其^ノ之^ヲ為^ス亦容易ノ事ニ非^ス故^ニ臣歸朝復命ノ始伏^ク望^ム陛下能^ク聖慮^ヲ此^ニ留^シ成^ラ功^ヲ永遠^ニ期^シ驟進速成^ヲ求^ムル^ヲ大^ニ之^カ目的^ヲ定^ム不動不撓政治是^レ實^ニ民力是^レ厚^{カラ}シ^メ以^テ其實效^ヲ立^テ以^テ其實力^ヲ因^ヒ以^テ國權ヲ復^セシ^テ然^ルニ今臣

三 條 家

奉使復命未^タ其委曲^ヲ盡^スニ暇^アラ^スシ^テ内閣遣朝鮮使ノ議アルニ會^フス^ニ竊^ニ之^ヲ考^{フル}ニ維新以來總四五十年^ノニ國基堅^トス^ルニ非^ザルナリ政理整^トス^ルニ非^ザルナリ治具備^ルニ似^リト雖^モ國權^ハ難測今^ノ時^ニ方^テ未^タ輕^ク外事^ヲ圖^ルニハカ^ラザ^ルナリ雖然朝鮮國我^ト隣好修スル茲^ニ數百年彼^レ非^レ礼^ヲ我^ニ加^フハ我^ニ安^ソ受^テ而止ムベ^ク且遣使ノ議已^ニ略^ホ定^ル臣亦之^ヲ然^リトス然^レモ之^ヲ發遣スルニ至^テハ之^カ緩急順序ヲ審^ニセ^ズニハアル^ハカ^ラ何^ニトナ^レバ彼^レ昧頑固結若^シ礼^ヲ我^レノ朝使^ニ加^ヘハ^ス我^乃之^ニ應^{スル}ノ處置^ヲ可^カラ^ズ我^之ニ應^{スル}ノ處置

ナクシハ 是我方國權ヲ損スルナリ而シテ 彼已ニ端緒ヲ顯ス
故ニ使ヲ發スルノ日乃戰ヲ決スルノ日ナリ 是即軍國ノ大
事宜ヲ熟ク慮リ深ク謀ラズニバアルベカラズ 且今萬國從
衡ノ勢ヲ察スルニ東ニ形シテ而其情西ニアルモノアリ 或ハ
其端ヲ示サスシテ而遠圖ヲナスモノアリ 故ニ表面ヲ以テ
其真情ヲ測ルニ足今ヤ樺太ノ事頻起ル 是乃目前
急亦甚注意セズニバアル可カラズ 凡是ホノ事 先其情
ヲ審ミシテ而シテ 朝鮮連与ノ意ヲ絶タシメ 萬全ヲ保
ツラフシテ而之カ目的ヲ定メ之カ方略廟算ヲ明シ其
他航艦ノ設兵食ノ具錢貨ノ備及内政百般ノ調
理ホニ至ル迄願フ其順序目的ヲ定メ而ル後朝使ヲ
遣フ未タ晚トセザルナリ 若シ之カ備ヲナサズ今願フ使
節ヲ發シ若萬一ノ事アリテ後事不繼而ノ更ニ他ノ
患害ニカルアラバ 雖悔不可追ナリ 故ニ之カ備ヲナサズ今
願フ使節ヲ發スルハ臣 其不可ヲ信ス而萬不得已ノ義
ニ戰ニ從事スルガ如シ至テハ基ヲ堅シ備ヲナスニ非シハ臣實
其不可ヲ知其議ノ顛末ハ之ヲ口陳上奏ス伏冀クハ
陛下事ノ本末勢ノ緩急ヲ深察シ 聖斷アラシテ
臣具視不勝激切屏營至昧死上言誠惶頓首

三 條 家

名称	三條実美文書
標題	清岡公張 建白書

分類 番号	51
	2 663

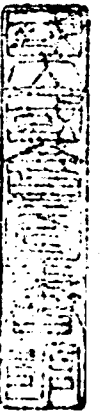
国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

卷一百九

密中

清園公張



臣公張昧死再拜

稔リニ時事ヲ潛議ス罪固ヨリ大ナリ而シテ
感激自カラ己ム能ハス獨リ之レヲ

閣下ニ白ス六竊ニ報スル所アラントス伏テ
願フ

閣下幸ニ其微衷ヲ憐察シ玉ハシ丁夫レ
征南ノ事興リシヨリ衆難買々群議横
出幸ニ政ニ諸州ニ至ルモ猶紛紜セリト

廟謨深遠敢ニ測リ知ル可カラスト虽現今
政垂諸州ノ履行スル所ニ觀テ之レヲ交際

法ニ照ラスニ衡キニ割島大使應接ノ事ヨ
リ今日ノ一挙ニ及フ迄其當シ尽リル
者少ナカラス宜ク衆難群議今日ノ多
キ至ル然ルニ事此ニ及フ既往ノ事復タ論
ス可カラス唯今日ヲ知スル奈何ヲ顧ルニアル
ノミ 臣公張 謹テ以爲ラク古ハヨリ

皇家ノ危険未タ此クノ如キモノアルニ進退ノ
際一ニ國家興替ノ決ニ関ス豈惶栗寒心
ニ堪ユヘケンヤ是ニ於テ情々而後ヲ洞察シ今
日ヲ知セントスルニ事既ニ此ニ及フ勢ヲ頗ル不

可飛氣たり。然猶斷然鋒ヲ欲テ師シ
班ニ佗日必勝ノ地歩ヲ占メ端ヲ更メ以テ
支那ニ對スルニ如カス。若シ果シテ然ルキハ
彼レ必ス我ニ向テ此舉ノ理非シ正サントスル
ニ至ルカ我レ支那ニ向テ責問スル所アラニ
トスルカ一ニ只其義ヲ知ルニ從ヒ論難討議
卓然抗ハテサレハ其間必ス秉スヘキノ機ヲ
生スルニ至ラニ是ニ至リテ公然名義ヲ正シ
天下ニ令シテ彼レハ雌雄ヲ決セントス。闔國
人民孰シカ憤激爲メニ死カシ致ワランヤ

是レ即チ禍ヲ轉シテ福トヤスノ道深ク察
スルハアル可カラサルヤリ今ヤ然ラス徒ニ前
議ニ拘着シ時機シ量ヤラス果進危険シ
犯リニトスルアリ又副島氏應接ノ當否
ヲ釋訊シテ區々ノ論說ヲ費スアリト果
シテ然ルヤ否ヤヲ知ラスト雖到底曠日彌久
日ニ千萬資ヲ費シ獲ル所チ一ヲ贖フ
能ハス竟ニ不測ノ難ヲ蹈ントス噫如此輩
典ニ軍ヲ行ルノ機ヲ議ルヘカラス古人云ハス
運用ノ妙存一心ト今其妙ヲ得ナルノミ

ラズ運用スヲ猶ホ自由ナル能ハス豈慨歎ニ
堪ヘウランヤ且ツ近時動モスレハ事ヲ洋人ニ
譲シ決シ彼ノ口吻ニ取ラントス何リ慮ハカ
ラリルヲ甚シキヤ凡ソ天下ノ名分條理潔
然知リカタキニ非ス何リ人ニ頼テ明晰スル
ヲ用ヒシ其人ニ頼ル必ス自カラ餒スル所アル
ニヨル若シ其餒スル所ヲモラシ以テ倉皇之
レヲ人ニ質サントスレハ反テ其翫哢煽動ノ
憂ヲ招クニ過キルヲニ況ヤ洋人等事ニ因
テ已レヲ利ヤセト歎ス固ヨリ與ニ議スルニ足

ラサルナリ伏シテ願フ

閣下速ニ神算ヲ決シ断然班師ノ命ヲ
下シ渾噩形ヲ歛メ佗日振興ノ大策ヲ
建玉ハコト張ヤ事ニ典ヲナス其次第順
序敵ヲ伺ミ知ルヲ得スト虽時事ニ就テ
之レヲ通觀スレハ目今ハ至要此ニ外ナ
ラス機ソレ過リ可ケニヤ

閣下幸ニ諒察焉誠忌昧死懇款ノ至ニ
不耐

臣公張

頓首再拜謹設

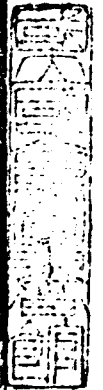
名 称	三條実美文書
標 題	西村貞陽意見書

分 類	51
番 号	3
号	

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

十二



臣貞陽謹言惟ルニ國家ニ君臨スル者孰カ其

治ヲ好ミ其亂ヲ惡マサル者アラン然リ而シテ

古今治亂ノ變皆其勢アリ歟ク其勢ヲ察

シ之ニ應スル者ハ興リ且ツ治ル之ニ及スル者ハ

亂レ且ツ亡フ苟モ其勢ヲ審ニセスシテ妄リニ

治安ヲ求ムル決シテ得ヘカラサルナリ勢ナル者

何リヤ曰ク天下人心歸嚮スル所ノ者是ナリ

蓋シ衆心歸向スル所即チ時運ノ然ラシムル

所ニシテ之ニ應セサルヲ得サル所以ナリ臣伏シ

テ今日ノ形勢ヲ察スルニ

朝廷ノ大議

廟論ノ在ル所ヲ知ル能ハスト虽モ大使帰

朝以來參議以下要路ノ諸官累々職ヲ

辞スルヲ見テ謂ラク内外事務千緒萬端

其之ヲ施ス緩急アリ而シテ各負其指向一ナ

ラサルヲ以テ 朝廷別之ニ處スルノ道アリ其

辞スルヲ問ハサル可シト又兵員邏卒等絡繹

郷ニ歸ルニ及テ再ヒ謂ラク如此ンハ他日必ス

黨興ヲ分チ異同ヲ論シ彼是衝激止ムナク

或ハ國家ノ大患ヲ醸スニ至ラント言未ク了

ラサルニ果シテ兵營ノ火アリ暗傷ノ舉アリ是
ニ非テ人心恟々復ッ兵革ノ變アラシムル頃
日竊カニ聞ク六師ヲ發シ某々ニ縣不敬ノ
徒ヲ征スルノ議ヲ獻スル者アリト臣未ッ之ヲ
信セス何ントナレハ嚮キノ藩カヲ頼ミ暴威ヲ
假リ其志ヲ逞フスル者ノ如キニ非ス又敢テ私
欲ヲ挾ミ朝廷ヲ敵視スル者ニ非ス唯其ノ主
張スル所ノ説ヲ以テ國家ニ盡カセント欲スル
ニ過スト虽モ皆今日ノ廟議ニ服セサル者ニシ
テ其不敬ノ罪問ハサル可カラス律ニ正條アリ

法ニ明例アリ之ヲ司法省ニ委シテ可ナリ而シ
テ彼其罪ニ伏セス恣睢暴行アルニ至テ然ル後之
ヲ討スル亦晚シトナサズ 朝廷何ソ獨リ此輕
舉ヲ用ユルノ理アラシヤ然リト虽モ寬猛其宜ヲ
得ンハアル可カラス今日ノ勢之ヲ置ケハ蓋暴之
ヲ禁ムレハ蓋激ス激スレハ怨ニ怨ノハ則其黨ヲ
募リ其根ヲ堅フセンヲ謀ルヘシ顧フニ天下ノ士
族糊口ニ苦ニ方向ニ惑ハサル者少シ且ツ頑愚ノ
農商舊ヲ惡ヒ新ヲ厭フ者亦少シト爲サス
一旦之ヲ煽動スルニ至テハ其禍將サニ測ルヘカ

ラサラントス蓋シ今日ノ事固ヨリ尋常處分ノ
能スヘキニ非ス必ス非常ノ英斷ヲ用テ以テ之
ヲ處セサル可カラズ宜シク人心ノ帰嚮スル所ニ導
キ其積鬱ノ銳氣ヲ驅テ之ヲ朝鮮ニ洩サシ
メハ必ス内國ノ紛擾ヲ紓フスヘシ而シテ朝鮮ノ
事亦輕舉スヘキニ非ス然リト云モ之ヲ内禍ニ
比スレハ其輕重固ヨリ辨シ待ツサルナリ故ニ速
ニ朝鮮處分ノ内旨ヲ下シ嚮キニ此論ヲ主張ス
ル者ヲ以テ之カ將校タラシメハ彼ニ縣ノ徒皆欣
々然國家ノ爲ニ身命ヲ顧ミズ成功ヲ奏スル

ニ至ラン是乃チ内禍ヲ轉シ外寇ヲ制スル者ニ
シテ其勢カシ審ニシ之ニ應スル所以ナリ且ツ此
舉必ス兵士シム毎縣ニ徵スハクシテ之ヲ一方ニ
偏スハカラス若シ之ヲ一方ニ徵シ單ニ其力ニ
頼ルトキハ他日復必ス今日ノ如キ者アラントス
是實ニ國家ノ大事_臣日夜憂苦寢食シ
安ンヤサル所ナリ苟モ要路ノ諸官唯其前論
ヲ主辰シ全國ノ形勢カシ察セズ強テ彼徒ヲ抑
壓セント欲セハ獨リ其變測ル可ラサルノミナラ
ズ或ハ前議ヲ護シ私意ヲ達スルヲ求メ却テ

國家ノ興廢ニ關セサル者ニ近カラントス臣洪嘆
ノ至ニ堪ハス敢テ謹テ妄意ヲ獻ス伏テ請フ
朝廷幸ニ賢議ヲ盡シ裁酌ヲ賜ヒヨ臣貞陽
誠恐誠懼頓首再拜

明治七年一月廿日

開拓使左等出仕西村貞陽

太政大臣三條實美殿
右大臣岩倉具視殿

名称	三條美実文書
標題	宗重正渡韓の外務御策議

分類番号	51
	4
	2002

国立国会図書館

登録番号	
------	--

中五宗五渡轉

253653
122
昭和26年2月11日



宗五

宗氏渡鞏之儀使
節、名義ヲ不以宗
氏從來ノ縁故ニテ彼
通問ニ專維新以來
兩國間壅塞セル事情
開通ニ交際隣好ノ
道ヲ開シ周旋ス力カシ
ミ在リ彼能永釋シテ
我使臣待ニ十分礼
遇ス以テ之形勢カラスハ宗
氏使命ヲ命ヤラシム不
可ニ事ナカルベシ

宗氏渡鞏月越ノ上彼好款各
ナラハ速人ニ上テモシノ機密ヲ
諸人ニ

外醫門各書

宗從四位下任兼左衛門少尉
之果議

一昔宗氏ノ祖波韞交係ノ由量ヲナセし時ハ将斥ノ

明宗 宗氏外務大臣ニ任じし其官ヲ以テ彼ニ送ル
 処ノ書契賜シハ番メテ彼ノ手ニ在リ故ニ今日ニ至リテモ
 在公館ノ官負彼ニ對シテハ總テ宗氏外務大臣ノ命トシ
 以テ應接致シ居候事

今般宗氏渡韓ノ節ハ前件ノ事態十六免毛角毛
外船大五ニ渡任初度事

外務省

一大正ニ優任セラル、英紋國ニ對シテハ四國ノ故ヲ以テ自ラ
 液幹ニ盡力セシ事ヲ乞ヒ許可ヲ得タル旨ヲ示シ若シ
 刺余ヲ表敬シ及ヒ大正ノ職掌ヲ主張スル等ノ事ニ
 至リテハ深ク其誠ヲ察シテ更ニ變テ應スヘシ

宗氏復讐ノ席所ハ對則ニ下向シ先同知ヲ先同使
シ及シ其候様ノ見ヲ緩急自ラ反轉スル一事

以上

書架文校華

特ニ正ノカ務大ニ任シ

尋交々事ヲ牽ラレム

名称	三條実美文書
標題	宗重正渡韓の意見書

分類	5/
番号	5 225
号	

国立国会図書館

登録番号	
------	--

力

四

内呈

國立中央圖書館藏

重正

不肖ノ身ヲ以韓國使節ノ内命ヲ

辱ス其重任タル固ヨリ多言ヲ待ス

朝命ノ厚ト祖先ノ旧交ナルトヲ以ノ

故ニ敢テ曾鉞ヲ顧ミス謹テ以命ヲ奉

スルヲナス是行也天下億兆ノ属目ス

ル所成否和戦ノ変スル所重正苟モ大

命ヲ受ク奮發以力ヲ致サ、ル可ヲス

丹誠ヲ披瀝之所思ヲ陳ス昔重正祖

經茂力世ニ當リ始テ好テ韓ニ修テヨ

リ茲ニ五百有餘年室町氏ノ交通スル

實ニ宗氏ニヨル少貳大内以下歳使船
遣スモ亦宗氏ノ文引ヲ以信トナス
約シテ曰宗氏ノ文引ナキ賊ヲ以之ヲ
待ニト依テ對馬ノ人ニアラサル接ス
ルニ禮ヲ以セスシテ待ツニ漂人ヲ以
ス徳川氏再ヒ隣交ヲ修テヨリ以来前
盟ニヨリ旧約ヲ尋子施テ當今ニ至ル
宗氏韓國ニ旧誼アルハコレヲ以ナリ
去ル明治ノ始メ外國官ノ命ヲ以家老
樋口和節ヲシテ一新ノ顛末ヲ韓ニ報

知セシム彼其書中皇上勅ノ語アルヲ
以受ルコトヲ肯セス使者空ク境上ニ
止ルコト数月是ニ於テ朝廷佐田白
茅等ヲシテ韓ニ入テ其情勢ヲ探索セ
シム彼陰ニ其实ヲ探知スト雖モ其對
馬ノ人ト云フヲ以訓導別差モ相見コ
トヲナシ又會々馬渡外務少丞獨國ノ
公使ヲ伴ヒ韓ノ辺海ヲ測量シ釜山ニ
至ル是ヨリ先キ韓米佛ト兵ヲ交テ且
頑愚ノ俗黒装ノ者概ニヲ以夷狄トナ

ス謂ク嚮ニ宗氏ノ使者特命ヲ帶シ来
テ朝廷誠意ノアル所ヲ諒ク今之外
務官負洋夷ト云テ同シテ我カ邊境ヲ
窺フ我カ曾テ彼ト隙ヲ啓モ日本殊
ニ知サレ可ニヤト我使ヲ拒ム最モ甚
シ朝廷又更ニ吉岡弘毅森山茂廣津
弘信等ヲシテ外務大亟丸山作樂カ書
ヲ齎シ往テ東萊釜山ノ兩使ニ説シム
彼其外務ノ使ナルヲ聞ヤ馬渡カ輩ト
云セハ訓導別差モ面接ヲ辞ス其説論

スル所ニ於テ一モ從コトナシ其明年

廢藩置縣ハ令アリ重臣任テ鮮キ京師

ニ上ル己ニシテ外務亟ニ持セテ以テ渡

韓ノ命ヲ受ク幾クモ無シテ廟議共

渡韓ヲ止メテ先皇使者樋口和節一新報知

ノ使ヲ召歸シ更ニ又前ハ嚴原ハ参事相

良正樹ヲシテ宗氏ノ使トナシ森山廣

津トユカシハ嚮ニ朝廷屢々渾厚ノ

命ヲ諭ス韓國為ニ應ヤス韓國其親信

スル所獨リ宗氏ニ過ヒハナシ故ニ重

正ヲ外務丞ニ任じ隣交ノ事ヲ掌ラシ
ム。朝廷隣邦ニ於て斯ノ如ク其厚篤
ナリ宜ク森山等ニ面じ其陣スル所ヲ
聴納スヘシト云フヲ以テ彼其例ニテ
ラナルヲ以テ其國議ヲ終止三年ノ後
ヲ待テ卷フ可シト是レ於テ正樹等閑
ヲ越車筆ニ入リ迫テ府使ヲ見シト請
フ彼辭スルニ病ヲ以テ正樹等百方辨
説スルモ彼相見ナレハ又他術アリト
トナシ其要領ヲ得ズシヲ歸ル。然レ於

一 七年十レトモ彼國執後ハサレ猶前
目ノ如レ重正西陲ニ居テ世々將命ノ
職タルヲ以畧辺情ヲ知レリ夫韓ノ作
タルヤ素リ自誇尊大ノ風アリ加フル
二 交通スル所亦極テ少キヲ以聞見後
一 狭ク方今海外ノ形勢其何タルヲ知
一 ス所謂先王ヲ稱シ旧典ヲ固守ス苟
モ因襲スル所ハ不便ト雖モ之ヲ廢セズ
難ニスル所新例ヲ用クニ在リ故ニ之
三 接スルニ三海外市國ノ形勢ト

皇國方今一新ノ光景ト云ハ以スル得可
カヤス是彼我其程度ヲ同セス事相及
スル所以ナリ世ノ言ニ曰皇氏ハ韓ノ
親ム所其詭聞サ其公由クニ由之レ一
ヲ知ラニヲ知ラサル所ハ詭ナリ先ニ森
山廣津力韓ニ入ルヤ否カ到ラサ其所
ナク辨既又勤タリト云ハ之而ホラ其
成ラサル所以ノモト唯彼力情ニ悖ル
モノナレバ今重ニト雖モ其好惡
ヲ察セズ其去就ヲ審ミセズ唯ニ名義

條理ヲ先トシ外務ノ順序ヲ追カ如ク

ナラハ恐クハ成功ヲ奏スルノ期ナキ

ノミナラス朝意彼ニ貫徹セス彼モ

亦其意ヲ述ニ及ハスニテ遂ニ干戈ヲ

動カスニ至ラニ是重正痛志苦心

スル所ナリ廟堂ノ大議ハ重正窺ヒ

知ルヘキ所ニアラサルモ今使節ノ内

命アル所以ノモハ其旧諺アリテ彼

カ信スル深キヲ以其欲スル所ニ就テ

互ニ情實ノ尽サ、ル所ヲ尽シ其誠意

二 朕 廿二 入ニ 加 為 十 三 重 正 庸 劣 三

顧 ミ ス 命 三 辭 セ 廿 三 所 十 三 重 正 竊 二

之 三 思 三 廟 議 既 二 然 三 八 宜 三 其 疑

團 三 解 三 以 先 ト ス 八 三 其 疑 團 三 解 八

渠 カ 忌 ム ト コ 口 ノ 外 務 官 負 ノ 在 韓 ス

ト モ ノ 三 退 カ ミ 八 又 外 務 局 負 ノ 同 行

姑 三 之 三 止 ム ル 二 三 然 三 三 渠 カ 諸

三 所 大 體 二 害 ア ラ 廿 三 三 八 暫 三 之

三 免 三 一 二 宗 氏 ノ 旧 誼 三 以 三 先 ツ 之

烈 應 接 ノ 門 三 閑 三 朝 意 ノ ア ル 所 三

陳述ニ

天子親政藩ヲ廢シ縣ヲ置

外國ノ交際ハ外務省ニ於管スルノ儀

ヲ説明シ而後新ニ外務ノ官使ヲ遣シ

交際ノ時式ヲ講明アラニモ未タ以晚

トセシ今其同行ヲ~~止~~トヲ請モノ

重

功ヲ專ニセントニハアラス又私

意アリテ然ルニアラス唯事ノ順成ヲ

欲シラナラシテ其情ニ悖リ疑

ヲ其初ニ招キ渠面接ヲ拒ニ至ラハ

千言万句弁論ストモ其功十カル可シ

後令宗氏參旧誼アモ重ニカヲ尽ス
コト能ハス進退実ニ途ナキ至ラニ
重ニ取テ一己ノ私ヲ顧ルアラス恐
ラクハ国威ヲ汚シ朝命ヲ辱メニ
ト是重ニ使命ヲ奉シ夙夜集慮スル
所ナリ伏シテ惟フ此事ヤ閣下ノ
内命ヲラサレモ固ヨリ陳述セニト欲
ス然レモ宗氏ノ韓ニ於ル世疑ナキコ
ト能ハス故ニ黙スルヲナス事ノ成否
素ヨリ必シ難ニ上雖モ今閣下ノ恩

言ヲ蒙リ忌諱ヲ憚ラス思フ所ヲ陳ス
言不敬ト雖モ事成功ヲ期ス閣下莫
クハ尊觀ヲ辱シ重正カ哀情ヲ諱察ア
ラニコトヲ重正頓首再拜

名 称	三條実美文書
標 題	家重改正 建白書

分 類 番 号	51
	6 118

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

才
二
百
十

内
呈

宗
重
公

去歲森山茂カ使スルヤ韓國前非ヲ悔ニ始テ命ヲ奉其下
當春復タ茂ラ^使セシム尋盟將サ^日ヤ^ト屈指其
報ヲ待ツ今聞韓人我服色書契ノ先規ニ違フヲ以テ嫌忌
ノ念ヲ生シ相見ノ禮ヲ行ハス茂辨說スルモ遂ニ從
ハスコ^ニ於テ朝議茂ヲ召還スト韓人昨日ハ之ヲ約
シ今日ハ之ヲ肖ク狡猾憎ム可シト雖モ是其習俗ニシテ
今ニ始ルニアラス然レテ此事ノ如キ實ニ兩國人民ノ大
事タリ若情實ノ齟齬ヨリヤラ^ニ于^及遺憾
ナキコト能ハス重正不肖ナリト雖職ヲ奉シテ尋好事
ニ任シ夙夜以テ憂苦スルコトハヲ^ナス故ニ事ヲ成否素リ

必シ難シト雖モ沈黙座視スルハ國家焉尽ク終所必示アセ
ス今謹テ陋見ヲ陳ス伏シテ請フ閣下幸之ヲ裁セヨ
一韓俗固陋未タ宇内ノ形勢ヲ熟知セス旧例ヲ固守シ朝
使ヲ拒ム然レトモ未タ絶交ノ語アラハ是其和ヲ失スル
ノ長計ニ非ルヲ知レハナリ其速ニ命ヲ奉セサル者ハ蓋シ
惜實齟齬スル所アリテ朝意未タ貫通セサルカ故ナラ
シ今之ニ處スルモノ先ツ其疑ヲ去ラシムルニ即シ其疑
ヲ去ラシムルハ其信スル所ニ就テ徐カニ之ヲ導クニア
リ森山茂等尽力數年今ニ命ヲ致スヲ得サルモノ其ヤノ
任ニ當ラズシテ其説ノ不可ナルニアラサルナリ唯其疑

ヲ雖タルヲ信ラ得サル哉ヨ能ムニ故ニ才能ヲ士アリト
雖其ヤヲ施ス所ナシ重正修好五百餘年彼カ信ヲ受ル
既久ニ故ニ今韓國ヲ説カント欲ス重正カ拙劣ナル或
ハ才能ノ士ニマサルコアラシキス依テ之ヲ思フ昨春
閣下ノ内命ノ如ク重正ヲシテ官銜ヲ表セス彼地ニ渡航
セシメラレハ重正彼ノ官吏ヲ見之ニ告テ曰ニ韓ノ日本
ニ於ル唇齒ノ国タリ今朝命ヨハ貫徹セズ隣交將サニ
絶ニトス吾之貴座視スルニ忍ビス官ニ奏請シ親ヲ来レ
シト區々ノ文字其他枝葉ヲ論入姑ク之ヲ措キ具サニ朝意
ソア所ヲ陳述シ且ツ彼カ深意ヲ探問シ彼弥絶ヲ欲セ

サル時ハ其請フ所可ナル者ハ之ヲ納レ不可ナルモノハ
断然コレヲ作ケ先尋盟ノ實ヲ舉ゲシ修好先ヲ成リ然ル
後新ニ官使ヲ發セラレ更ニ交際ノ軀裁ヲ講明セラレシ
コト未ダ誤ラ晚トセシ彼若シ旧習ヲ固守シ頑愚説ク可
カラサルモ亦重正二分ノ事タリ敢テ國威ヲ汚カスコト
ナク又後圖ヲ妨ケナケン

重正カ家對及ニアリテ世々韓ト相好ミス室町氏ノ交
通スル実宗氏ニヨル少貳大内己下歳使船ヲ遣ルモ亦
宗氏ノ文引ヲ以テ信トナス約シテ曰宗氏ノ文引ナキ
賊ヲ以テ敵ヲ待ニト故ニ對馬ノ人ニアラサル接スルニ

禮ヲ以テセスシテ待ツニ漂人ヲ以テス豊臣氏ノ韓王
ヲ召スヤ韓ノ君臣危疑肯セス重正力袒義智ニタヒ韓
ニ入リ説ニ利害ヲ以テス韓人頑固従ハス遂ニ文祿ノ
後アリ徳川氏ノ起ル義智ヲシテ復タ旧交ヲ修メシム
韓人文祿ノ後ヲ以テ我ヲ怨ムコト深ク三タヒ其使ヲ
殺ス義智其間ニ周旋スルコト数年和終ニ成ル是ニ於
テ宗氏將命ノ職タリ他及ノ人ノ韓ニ渡航スルヲ禁ス
徳川氏公命猶宗氏家老ヲ傳ヘ新幕府ノ
官吏モ未タ使節ヲ入ルヲス故ニ韓人誤謂ク日本ノ
命ヲ傳フルモノ獨リ宗氏韓人自奉通知此實

ハ宗氏ノ私交ノ如シ一新報知以来外務官船ニ彼地ニ
来往スルモ皆宗氏ノ文引ヲ帶ス故ニ諸道ニ泊シテ

薪水ヲ供スルヲ得韓國来往ノ官船昨年迫ハ本文ノ如ク宗氏ノ
文引ヲ帶ス其後改テ本省ノ印ヲ用ユ

名 称	三條実美文書
標 題	佐田介石 朝鮮事件献美

分 類 番 号	51
	7 655

国立国会図書館

登録番号	
------	--



才二百一

朝鮮事件
獻策

朝鮮事件獻策

佐田介正

恭教白石 竊に沉思するに朝鮮の予件疾に主一玉はまゝの百害
 沸し勢の難救するに固く朝鮮の我皇國體を失はるるを
 許す所とすといれども今日我皇國兵を動すべからざる所以のその
 まゝありて王政は復して以來未だ幾もまゝの人民未だ力向を得ざる
 者多し百有未だ整はざる者多し兵を不可動の一也二す兵の強弱は必國
 のちたるに關するに國疲る時に兵必ず弱きを得ざるを得ず我々今や
 官庫空虚し天下の民皆百年の富を失へり是を以て天下の融
 融を塞ぐに逐日逐月國財の衰減す勢は干潮の退減するを以て甚

是れ海に兵を動かすことなるは勿論彼等の内國なるも兵を
動かすに時を待たず三つの患目前に應ずるも是れ亦海に兵を
動かすことなるは四つの兵の要に非ざる重きに非ずし我に今や天下の
士庶人上を怨むるも其の如し此時大軍を動かすに彼を伐
むことして内訌を醸せん事掌上に足る如し今日も我は彼を
台湾の子供の類に化るべし恐る彼を征伐するに道中一日を待たず
其の年早己大凶年の軍に向んとす昨年九割一割大風災あり今
夏大旱中興の事雨水害なるは小國に大旱中雪を降す
その後相續て氣候順ならず秋收も乏しく且何ぞ天災あり

んじけり。而して流府縣たに一粒の救餓の俵、米也又亦米
を賣入るをきくして天保七八の年ぬき一粒不熟の天下一統の大
饑ふ。ぬき何んぞ秀吉は朝鮮の使者きたまふ。くるき。七年
の久きを經て遂に勝する能はずして秀次も死して和を乞ふ。我
も今日の朝鮮は佛を討て虐せし加之我日は國の一昨年、東
征韓の舉動今は陰に存する事を知らぬ。一は聊虐せし徳を
言せし。礼も及ぶ。ぬき肉情を想像する。我日は兵を引更
もぬき十分の勝負相立。なまふ。或はぬき。後。徳
とて成。確乎。内援を得。かきん。ぬき。ぬき。ぬき。

と言ふ礼も長すぎ理あつたや況や我れにお我彼れは我れ
地の利百倍す伍令ひ我日本兵は勝利を得るも三五年
に事終るぞ一死も長き月日の間三生憎大凶歳も周
來る所患も競ひ無う又内國の樹膠もふふも佛獲し
百害並ひ生し必ず救ふべき勢あるべし固て朝鮮の事
礼の罪は所根伐するの理あつと雖今や海所へ兵を動し
つ時此す況や彼朝鮮淫淫の予件をこゝ監觸を立度て考へ
尺も彼れが礼の罪も先廟事上已れを怨むく忍ひまふさま
理もき此すう仔細はめ何れと見るは彼朝鮮人攘夷の怒氣

逆炎を逆し攘夷の腥血未乾する如し我皇國が使者を遣はしむる彼れ
美國公法の雛形を以て外交際を勧めまゝなる彼れが攘夷の怒氣
我れに痛きるを得ず因て我使者にすれを以て待するハ其勢ハ
自ら衰ふるを得ず之を我に成癸亥の如き様を仕へま
す也——時ハ比例——思ふに美し我等様の後蜂起の以て彼朝鮮
に使者を以て外交際を勧めます。予わくハ我れも彼使者
を如何待遇せん又如何彼書翰を言へん言ふれ必ず彼れが
右ハあるともある彼れに譲るべき事あるとし此理を待て
彼れを怒ハ彼れがる事礼も許しまらんあることす況や

内は征すべしと云ふ所収のもの教付あり候令い君父の仇は討
しと雖も是又仇の教知の大疵を生し疼痛益々増はれ
討つて理ありて討つて御す一今我朝鮮の難を尋ねんとす
るに皆同一因て後年彼は報ひまよふも即今期を延べ勢を
得る時を俟て入めす 又見よと云ふ右の如き 皇國の文付を
み教知の大疵疼痛を蒙りけり數年の兵を海かきあへ玉
い恐る亡國を憂ふべきを得る所亡國の大予に比較せられ
今日朝鮮の予を思ひまよふもれ國を救ふの良策行するに之
るをうらみせし一途は美人面上の腫物を生ず時にお醫

て曰ふ一人ハ之を破るハ治し難しと一人ハ若し面上の腫を破る
ハ必ず跡ハ癰を生し絶世の美を賊ハた毒を散するまめ
ずとす今朝鮮の如きも伐て如金一玉やと愛い後ハ潰る國
ハ癰を生せざるやを得ず因て今お逢の良策を授け自ら破
るを謝し 皇國の清威光を損せざる様ハ如金一玉を授け
終ハ彼れ旧盟ハ復し和議を結い鄰交を厚くす。まめハ
實ハ 皇國の大事なるに非ずや我ハ朝鮮の病ハ為帝ハ此れハ
為帝の醫を以てハ之を治さ難し因て今試ハ醫を獻す。一之
ハ折るる醫の由来を語る。一為て西京相國寺中興僧西笑と

いふ老あり秀吉朝鮮の役を屢請むれども用ひず終に陣

するに依て西笑坐視するに忍ひず小西幸長に陣を随て朝鮮

に去る後秀吉和を乞ふに及て西笑朝鮮に往來してそのを遂

にむる後徳川家に及るに及て和議を結ぶに及て西笑亦

朝鮮に往來す此由緒に依て朝鮮人來朝のるに相國寺天

龍寺建仁寺東福寺萬壽寺の五山を令して司るにむ

五山一統なるを因て對馬に以て町庵丁酉ノ歲ヲ以テコノ庵ヲ建トタルユニ以テ町庵ト名リといふ

僧室を建て之を五山の福壽所とて一山毎に三年凡そ

三年に一回して法一新年を勸め來れり此由緒に依て此

田朝鮮の事には附右の内の内証の考を以て彼地の事に向
てある朝鮮人もあるといふ二百年來の懇親も有る殊に
方々も亦所々世俗といふは主南にすぎなくハ彼れを必ず
容るゝ知りてめ付れりも主南の之なる徳義も又其縁といハ
意外に法教合を得て一亦便に運ぶるなりと其意も尤も
是れ向振に於てハ吃度なく信つゝ知るゝ途に和を有る
る 會國の法外なる事勢を抱極の運ぶるなりと其意も
時々沛一新以來百有餘年信を以て右極の事々法用いせざる
に奉欽なりとあるあり上は古も矢石彈丸の中にも立危を扶

ヲ難を救ふ事ハ之ハ僧侶に限れる事ナク餘人ニ施して予ニ因
て此四朝辭の如きも僧侶相應の仁を蒙る事ナク世益新
聞ニ號附録活上はる此新聞十九丁三十二丁ニテの如き披
覽神を在りてする事ナク古來矢石彈丸の月ニ立僧侶急を扶
難を救ひ一々張百の一程載せしむる事ナク此四の法比例
も自らも備へて一頃等の正轉當も此備の事兄弟親族並に
一怒を懷ぐ能はる事ナク餘海内の正轉佛經セハ法轉をされたる
醫といふ病を治すの實効の事を云ひて一必ず形や法に依る事
ナク此切道所ふ觀恐忠告伴伴恐法僧敬也

欽
上

名 称	三條美美文書
標 題	幸島宗則上中書

分 類 番 号	57
	8

国立国会図書館

登録番号	
------	--



太政大臣三条實美致 外務卿青島支則

別紙朝鮮國之何等國之見認むべき漢文を
示す。使員之於此必其難きを以て尋ねる。然るに
之を過る。未決の事。故に都令且使員彼
應接する。萬一暫時の縁で、而して彼國の極
上再起する。之を難く。之を又回國する。
獨立國之見認。使節の王使而來する。方可
然る相考。條約の條約。熟議する。之を類する。段
廻進する。也。

八年一月

夕

承

以

朝鮮國ハ何等ノ國ト可見認或ノ議

一 朝鮮ヲ何等ノ國ト見ルニ就テニツニ今ツハ獨立國ト見

ハ半屬國ト認ルニアリ

一 獨立國ト見ハ半屬國ト認ルニ付テ我國ノ名譽利益孰ト
勝レリトスルヤ

一 帝ニ現今ノ名利ノミナラズ後來我國進步ノ勢ト各國
リヲ認ル処ノ得失ニ於テ如何トスルヤ

一 半屬國ト見ルハ足利典皇臣及ヒ旧幕府等ノ例ニアルハ
我邦相當大臣ト彼國王ト書信ヲ通スルハ事カ

按スハ從前彼國ニ於テ事大トヲ以テ大ニ事フルノ省言也故ニ

トヲ論ヤス西不失禮ト云フヲ推立テ我トノ通信上往々清國

ヲ天朝ト崇奉スル事ヲ主張ス是果シテ清國ノ屬名

ニ甘ニスル所ナリ其甘ニスル所ニ隨力セテ他ノ屬國ト認ルトキハ

彼ノ時便ニヨリテ或ハ清國ヲ口授トシ清國ニ亦事宜ニ

付テハ屬地ノ名ヲ冒ス事アルヘシ縱令一時清國ニ於テ朝

鮮ハ我屬ニ非ストノ言アルモ若シ後來事アルトキハ恐ク清

國ノ與關ナキヲ保チ難カラシカ然ラバ終始我ヨリ開化ヲ導ク

ノ障礙トナテ畢ル竟隣國ヲ通シ僅少ノ商路ヲ開ク

ニ過キサル迄ニテ進歩最難カルヘシ故ニ現今ノ爲ニ易キモ

後來ノ化ニ難キアリ宜ク其初メヲ熟図ス可シ

一 獨立國ト見ルニ付テ又二様ノ交際アリ可シ

其一ハ獨立ト見認メテ我ニ等大臣ト彼國王ト通信スルニアリ

按スルニ我ヨリ彼ヲ獨立國ト見認メ彼モ亦強ク清國ニ對シテモ只我ト彼ト其國君ノ尊嚴ニ差アリニ疑懼シ敢テ其親交ヲ避ケ辭ヲ不得已情實ニ托シテニ等大臣ト通信スルヲ願ハ、其願意ニ應ジテニ等大臣ト彼國王トノ通信ニ可及カ但シ如此スルニキハ後來清國ノ關係ヲ脱シ且稍我國威ヲ張ルニ似タリト雖トモ然レトモ真ニ兩國修好條

規ヲ講明或ハ全權公使ヲ駐劄セシムル等ノ事ニ及ホ
スハ程遠キ事ナラフコトヲ矢張亞細亞中ニ畫スル種
ノ交際ト見ル可キナリ

其二ハ親交ヲ奉ヒシメ西洋ノ各國ニテハ小國ヲ獨
セシムル法ニ准シ互ニ國書ヲ通シ修好條約ヲ結フヘシ
按ルニ彼我ノ交際結ぶ處ニ歸シテハ凡可シク其事
ナシ但シ即今ハ彼ノ情ニ適セザル可シキカ

右獨立半屬ノ見認様ニ付テ何ヲ得タルトスルヤ

按ルニ清國ノ半屬地ト見テ我ニ等大臣ト彼國事ヲ等持通信

不ハ我ニ上國ノ名ヲ占ム故ニ下等ノ禮ヲ執ラシム似タリト云
要之我ハ虚名ヲ取リテ其實ハ清國管轄ノ一地所ニ飯スルニ
若シ獨主國ト認メテ漸々不羈權力ノ占ムヘキヲ知ラシムトキハ遂ニ
清國ノ國與ヲ解キ且後來西洋ノ各國ニ對テ和戰
等ノ事アルモ彼國必ス我ニ依賴スルノ思ヒ生シ不知不知
彼國外交ノ權ヲ我ニ遇有スル機ヲ得ルニ至ラシ其將
立ト認ムニ付テ親文ト大臣通信トノ二様アリト云凡半屬
ト見タテ最下ノ交際ト為スヘキヲ

前議朝鮮國と何等國と見認ふに或ハ兩國間交
際上注意スルキ大眼目ニシテ今般我小作ノ必ス難議ス
ルニ雖も及然レモ被國ニ於テ聘費スル爲メニ必要ノ議ナ
ヘシ

且故ハ従前被國ノ信使ハ即國重使ニシテ我幕府へ書信ヲ
齎ラシ来ルノ例ナリ這般派来ノ信使直チニ國書ヲ齎ラスニ
至ラストモ後来兩國通信ノ適主ヲ知シテ要スルキ必セリ

而ルニ彼我協議妥辦ノ際彼方懇一書ノ世ニ及フヘキモ亦豫考
セサルハカラス懇一言此ニ交フエカリ我より凡ソ世等ノ事ハ信使来朝

セ乃チ我外務省ニ於テ議定スヘシト切切ルトキハ彼我意ノ如
何ニ在ルヲ計リ難キニ疑懼シ且ウ使休ヲ派出スル時着目的ヲ
得サルヨリ或ハ使休來期ノ決ヲ法滞スルコトナシト謂フ可カラシ
故ニ我亦此大事件ヲ公議決定スルニ非ストモ豫メ廟議在
ハ所ヲ同ト被國ニ對シテハ使員ノ心得極チ以テ懇誠開導シ
彼ヲシテ疑懼法滞——ナカラシムヘキハ實ニ今般信使ヲ促シ來ス為
メ第一義ナリ

右陳スル所ハ兩國交際ヲ可ナリニ結成スヘキ為メハ使休ヲ來ス
上ニ付テノ事ナリ而シテ我内國ノ大勢ヲ考察スルハ朝鮮國
交際ノ如キモ今一時ノ便道ヲ以テ彼ト既ニ之ヲ結ビ或ハ將ニ之ヲ

結ハントスルノ際ニ方リ必ス物議ナキヲ保チ難シトモ力物議固ヨリ
意トスルニ違ハラス然レトモ其内外ノ情好ヲ洽クシ漸次其軍
ヲ得ニトナラハ須ラウ一轉スルモ亦可ナラシカ試ミニ尤ニ陳ス

今般來使ヲ約スルニ彼ヨリ從前ノ信使王即使國ニ傲ラテ派出シ

來ルト又ハ稍下等ノ使即禮使ヲ以テ遣遣シ來ルトヲ論

ス唯我一新ノ情實ヲ諒シテ之ヲ祝賀使心得リ以テ

兎ニ用モ來朝セシメ親シク我今日ノ勢情ヲ見聞セシム

ルヲ主トシ時域ニ應シテ善向タル節目ヲ假定シ其間互

ニ使使ヲ來往シ漸ク々南路ヲ固キ深ク内外ノ大勢ヲ洞

察シテ後待遇ノ返適ヨリ修好條規等ノ事ニ論及ス

即令強々大際重ノ議を決スルニ又フニキカ

同日朝鮮事件ハ年々朝野トモ素チ顧ミ

カカ如クナリカ昨年未上下議院皆起々ニ幸ヒニ全殺

成局ヲ結ノ期ニ至リタニ願フハ先ツ廟議ヲ固フセシ

シ度尤モナリナ言形變化ニ随ツテ眼ヲ轉ス様ニナト

不期ニ大進歩ヲ得ルモ是斯ノ僥倖ニ成ル事ハ必

疎漏相半ハニテ或ハ後悔ヲ振キ或ハ果議ヲ未ク

可ク故々殺使負ノ費達モ精密算畫ヲ要スル必

倉卒ニ成達ヲ望ムハ方々附テ前未ノ如キモ半ノ屬獨

身認メ今ニテ是ハルニ早キトナリハ後一轉方ニ出

或ハ廟奎別見ハ可_レ有_レニ見_レカ_レ所_レ事_一
半成_三主_二ハ_一日_一及_レ掌_一ノ議論_一萌生セ_レカ_レ様_一懇切
祈願ス_レ所_一ナリ

七年三月

唐津弘信
森山云

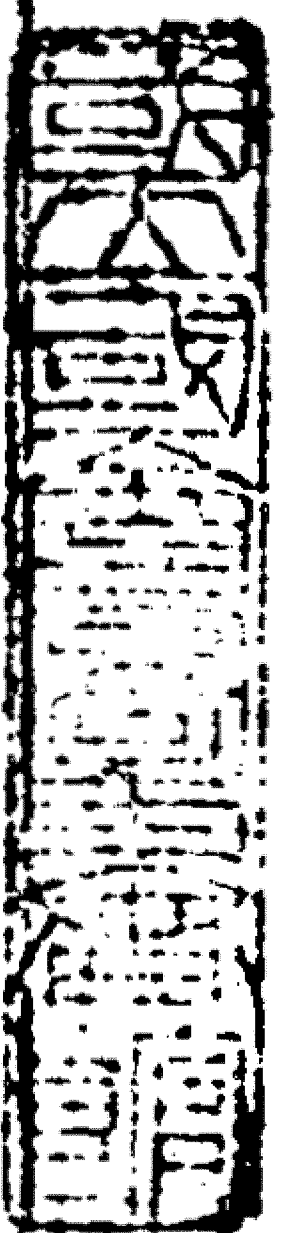
外務卿閣下

名称	三條実美文書
標題	山縣有朋 島尾小孫太 意見書

分類	51
番号	9 0 6
号	

国立国会図書館

登録番号	
------	--



朝鮮國ト開戦、機ニ臨ミ即今行軍
ノ編制ニ在リ一師團ヲ以テ征軍ニ備ヘ
且ツ之カ需用ニ應ス可キ運送船ヲ供
スノミナラス海上、護送ト彼地ニ於テ揚
陸ス可キ地形ノ要害ヲ得ニカ為メ少ナ
クモ戦艦四五隻ヲ要セサル可カラス
以上以テ出征第一師團ト定メ其海陸
総軍ノ指揮ハ專ラ第一出征師團司
令官ノ專任トナス可シ
此出征第一師團ノ開航スルニ當リ馬関
ニ海陸軍需用ノ物品ヲ蓄積シ吏員
ヲ置テ其事ヲ司ラシメ
地諸軍ノ需

ニ應セサルヲ得ス其物品凡ソ左件ノ如シ

第一彈藥及ヒ攻戰ノ諸器械

第二食料被服及ヒ他ノ諸雜品

第三石炭

此馬関ニ駐在スル吏員ハ敢テ多數ヲ要セス如何トナレハ大概ノ諸物品ハ之ヲ東京本省ノ指令ヲ以テ豫シメ之カ備ヲナシ彼地ニ蓄積庫ヲ設ケ置モノナレハ該地ノ吏員ハ只ニ運搬及ヒ受取方ノ手續ヲナシ及ヒ食料等其地臨機些少ノ品物ヲ買入其米ニ應スルノ任ニ過ガレハナリ此師團出軍ノ機ニ及テハ直チニ熊本鎮臺ノ本營ヲ當分小倉ニ移シ廣島鎮

墨、歩兵一大隊ヲ長府ニ屯在セシム以テ
此要衝ヲ保護シ、地ノ交通線上ニ不
測ノ患ナカラシム可シ故ニ海軍ヨリモ堅固
ナル戦艦一二隻ヲ出シ此港内ニ備フヲ尤モ
緊要トナス

此第一出征師團ノ發程スルヤ直ニ莫ニ出
征師團ノ編制ニ着手ス可シ此莫ニ出征
師團ハ實ニ國家不測ノ禍害ニ備フル者
ナルカ故ニ出師ノ目的ハ必シモ韓地征軍ノ
援軍トシテ着目セス故ニ之ヲシテ中西國ノ
間ニ召集シテ臨機ノ運動ヲナスニ備ヘ置カ
可キハ左ノ三件ニ限ル

莫一、地ノ征軍不利ノ景況

第二 清國トノ關係ノ景況

第三 内國ノ景況

此第二出征師團ノ召集ヲ布令スルノ機ニ臨ムハ必ス

鳳輦ヲ大坂ニ駐メ以テ征軍ノ本營ト定ム可シ故ニ此第二出征師團ハ專ラ本營ノ指揮ヲ仰クノミナラス其第一出征師團ニ隔地ニ命ヲ奉シテ全ク一軍ノ連絡ノ部分ニ在ル可シ

若シ清國トノ關係ニ於テ第二出征師團ヲ召集スル時ハ海軍ヲ全力ヲ盡シテ以テ幹地ノ交通線ヲ防禦シ且ハ瀬戸内及ヒ馬関ノ不虞ニ備ヘ清國艦隊ヲシテ我禍害

トナラシメサル丁ヲ図ラサルヲ得ス

右ニ内國ノ景況ニ於テ第二出征師團ヲ
召集スル時ハ敢テ海軍ノ全カヲ要セス聊カ
不虞ニ備ルノ數ニテ足ル可シ

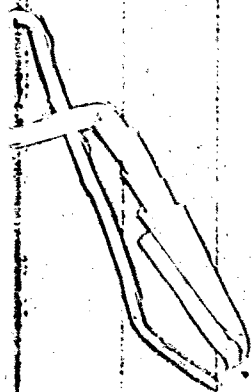
若シ地征軍不利ノ景況ニ於テハ第二出
征師團ノ第一旅團ヲ直ニ召集シ從テ其
全軍ト共ニ大坂ニ本營ヲ遷シ先ツ海軍戰
隊ヲ遣ツテ其急ヲ救ヒ徐ニ進退ノ圖ヲ議
ス可シ此第二征軍ノ第一旅團ヲ直ニ召集
スルモ之ヲシテ韓地ニ進入セシムルノ景況ハ
其時機ニ関スル者ナリト雖モ萬一此ノ不利
ノ報告ヲ受ル時ハ内地ノ景況ニ關係シテ
カラカルカ故ニ速ニ之ヲ召集シテ中西國ノ

間ニ死在セシムルヲ以テ最緊要トス

昨春解隊セシ壯兵ハ第二出征師團編制
ノ時宜ニ於テ之ヲ再ヒ召募ス可シ

陸軍卿山縣有朋

明治九年一月十九日 陸軍大輔島尾小彌太



名 称	三 條 実 美 文 書
標 題	黒田清隆 意見書

分 類	51
番 号	10
号	

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--



清隆謹テ白ス伏テ唯ミルニ嚮キニ朝鮮國ト訂立セ
 ル修好條規第十一款ニ通商章程及ヒ條約中應ニ補
 添スヘキ細目ハ六個月ヲ出テス要負シ派出朝鮮
 國京城或ハ江華府ニ會シ商議訂立スヘキ旨シ掲載
 セリ夫レ兩國盟約ノ言ハ至大至重其訂スル所ノ期
 決テ違フ可ラサルハ固ヨリ論ヲ待タス況ヤ未開ノ
 國ニ對シテハ殊ニ信義ヲ重ンシ彼ヲ依違遷延ノ
 術ヲ用ユルヲ得サラシムルニ非レハ其能ク條約ヲ
 遵守シ永遠渝ラサルヲ保チ難シ今ヤ要負派遣ノ期
 漸ク迫ル然ルニ通商章程ハ其條目頗ル繁碎ニシテ
 詳密考査之カ爲ニ旬日ノ功ヲ費サ、ルヲ得ス而メ
 又海路遼遠航程阻滯ノ虞ナキニ非ス萬一期シ愆ル

有ラハ信シ外國ニ失ヒ其輕侮シ來ハ其害豈ニ淺鮮
ナランヤ宜ク今ニ及テ委負シ選定スヘシ且又彼國
ノ沿海シ測量シテ其岨易シ考究シ通商ニ便ナルノ
地ヲ擇ヒ條約中二十個月シ朝シテ開ク所ノ港口シ
豫定スルハ今日ノ要務ナリ朝鮮ハ沿海危岨ノ地多
ク冬天激浪ノ時ニ當テハ航行不便ナレハ宜ク今ニ
及テ軍艦シ獲遣シ季節シ失ス可ラス彼國修信使モ
不日來着ス可キナレハ前件今日ニ施行セラルル片ハ
亦以テ我ノ誠シ交際ニ盡シ信シ履ミ約シ守ルノ實
シ表スルニ足ル尤モ事ノ宜キヲ得ル者トス凡ソ是
等ノ事料ルニ閣下ノ既ニ熟思裁定スル所ナリ但清
隆 前キニ該國ニ奉使シ關係ノ事件ナルヲ以テ暫止
スルニ忍ヒス敢テ鄙見シ上陳ス伏テ願クハ採納シ

賜ヒ速ニ舉行セラレシヲ恐懼再拜

明治九年五月二十五日

參議黒田清隆

太政大臣ニ條實美殿

名称	三條実美文書
標題	島性精 建白書

分類 番号	51
	11

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

九十八

朝鮮事件ニ付建言

朝鮮ノ變報我政府ニ達スルニ來内務卿ヨリ時々其景況為心得報知有之候内本月七日磐城艦長青木少佐下ノ関ヨリノ電報寫ニ京城異變アリ國王無事王妃其他大臣貴官十三名死ス大院君政事ヲ執ルト有之ニ依レハ彼激徒等王城ニ迫リ開國主義ヲ把ル廷臣ヲ死ナシメ國王ヲ廢シ大院君ヲ擁立シ新政府ヲ置キタルモノ、如シ果シテ然ラハ我公使ヲ暴撃シタル問罪處分ニ於ケルモ到底平和ノ談判ヲ用ユ可キニ非ス直ニ激徒ニ向ツテ宣戰ヲ要スルノ外無之



實ニ容易ナラサル一大事件ト奉存候抑彼
國十年以來我國ノ誘導スル所トナリ稍改
進ノ氣運ニ趨ムキ既ニ本年英米等ト諍盟
スルニ至リタルモ其國情往々頑固ノ陋俗
ヲ脱シ得ス常ニ外交ヲ嫌忌スル趣ハ嘗テ
聞及ヒタル所ニ候エ共嚮ニ我居留人ニ横
害ヲ加ヘタルスラ深ク驚クヘキ暴行ナル
ニ猶何ノ圖ラレ弥凶威ヲ逞フレ遂ニ斯ノ
如キ舉動ニ及ハントハ今其自國政府ヲ覆
シ反乱ヲ謀ルハ兎モ角恣ニ我國ヲ侮辱ス
ルニ至ツテハ其亡狀モ亦太甚シ之ヲ忍ブ
ヘクニハ就レカ忍フベカラサラン速ニ膺
懲ノ舉ニ及ハレスニハアラス然リト雖又

一歩ヲ退キ之ヲ考フレハ我國モ亦維新前
ニ在リテハ鎖攘ヲ唱ル者頻リニ相黨引レ
屢外國ニ對シ暴行ヲ加ヘシ事モ有之タレ
ハ我國當時ノ情况ヲ即チ朝鮮ノ今日ニ現
出シタルモノニテ畢竟宇内ノ形勢ニ暗ク
人智未開頑迷ノ致ス所ニ由ルモノナレハ
倭令宣戰ノ場合ニ至ルモ我軍士ヲシテ努
メテ殘酷ノ所為ナク公明正大ノ恩威ヲ施
サシメシ事必要ト奉存候夫一タヒ干戈ヲ
動カスニ方ツテハ我精練ノ兵ヲ以彼未熟
ノ兵ニ當リ又我直ヲ以テ彼カ曲ヲ討チ加
之彼ノ國內開國ヲ望ミ激徒ヲ惡ム者モ亦
幾許ノ多キアルヘケレハ倭令軍ニ主客政

守ノ勢ヲ異ニスルアルモ亦昔年豊臣氏征討ノ時ノ如キ勞且難キノ比ニ非ルベシ一舉ノ下城下ノ盟ヲ請ハシムルヤ必矣只恐ラクハ我兵士憤怒ノ餘殺戮ヲ極メ掠奪ヲ恣マ、ニシ事平クノ後モ彼國人ヲシテ我ヲ怨ム骨ニ入ラシメン事ヲ既ニ維新奥羽征討ノ際自國同士スラ勝ニ乘スレハ其殺掠ヲ恣マ、ニシ王師ノ名ヲ累ハセシ位ナレハ況ヤ我ニ屢亡狀ヲ加ハタル彼國又ニ於テヲヤ残酷ヲ極ムルノ慮ナキニアラス又豊臣氏征韓ノ時モ我將加藤小西等ノ驚悍驍勇ヲ以百里流血ノ醜狀ヲ現セシ故三百年ヲ経ル今日ニ至リ猶韓人ノ我ヲ蛇蝎

視スル不義是等ハ深ク鑑ミルベキ所也然
レハ則今回ノ拳其節制ヲ申明ニ嚴ニ殺
戮閩掠等ノ所為ヲ禁セラレ又賊平定ノ上
ハ彼國人ヲシテ我恩威ニ信服シ永ク隣交
ニ乖ムカシメサラン事切ニ冀望スル所ニ
御望候右ハ廊廡ニ於テ萬衙定算可被為在
シテ小官等ノ容喙ヲ要セラレサル義ニハ
候得共所思ヲ黙止スルハ不忠ノ次才ト奉
存候ニ付敢テ不憚忌諱此段建言仕候

誠惶頓首

明治十五年八月十日

岩手縣令島 惟精



太政大臣三条实美殿

朝鮮子印

名 称	三條実美文書
標 題	河上友右 建白書

分 類	51
番 号	12
号	

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

九十七

建言書

河上左右

書ヲ大政大臣三條實美公閣下ニ上ル本年七月
二十三日朝鮮人其國都ニ在ル我公使館ヲ焚襲
シ我公使ヲ掩殺セントス其兇逆無道直ニ懲伐
セスンハアル可ウス且朝鮮人ノ我ニ接スル曩
ニ我國使佐田某ヲ屈辱シ尋テ雲揚艦ヲ砲撃ス
當時猶征討ノ論大ニ起ル今夫公使館ハ我政府
ヲ代表スル所而シテ彼之ヲ焚襲シ公使ハ我
天皇陛下ノ代理者也而シテ彼之ヲ掩殺セント
ス是則我



天皇陛下ヲ掩殺セントシ我政府ヲ焚斃スル者
ト亦何ソ其科ヲ異ニセンヤ其罪惡貫盈天人共
ニ怒ル所我國力ヲ擧ケテ之ヲ懲伐シ此國辱ヲ
昭雪セスンハ天地沒身ノ大屈閣下ト左右等ト
復何ノ日カ能リ之ヲ伸暢スヘケンヤ其然リ曩
ノ征討ニ於ル大臣等或ハ之ヲ非トスル者アリ
ト雖モ今日ノ事ハ決シテ相關スヘキニアラサ
ル也夫其兇信ノ始テ我ニ達スルヤ直ニ海陸ノ
軍備ヲ嚴ニシ單進速行以テ膺懲ノ師ヲ耀スヘ
シ如何ソ再ヒ公使花房某ヲ派遣シテ復其事情

ヲ訪問スルヲ用ユルトヲ爲シ之ヲ派遣スルハ
之ヲ召回スルノ勝ルニ如カス否之ヲ召回スル
ハ大軍ヲ發遣シテ其國都ニ單入スルニ如カサ
ル也況ンヤ我敵李昰應代テ其國政ヲ執ルノ再
報已ニ達スルニ於テヲヤ復何ソ顧慮遲回スル
ト之レ有ラン或ハ曰内治未タ洽カラス國庫未
タ充實セス海外出師ノ事以テ容易ニスヘカラ
スト左右曰内治猶未タ整理セス國庫猶未タ充
實セサルハ洵ニ然リ然ト雖モ今ヤ内ニ乱民割
據ホノ事アルニアラス而シテ國庫亦全ク空乏

ト謂フニハアラス然ルヲ安ソ是等ノ事ヲ以テ
出師ノ議ヲ沮格スルトヲ得ンヤ此言ヤ文明ヲ
倣稱スルノ弊ヨリ來ル者ナリ請フ文明ノ弊ヲ
言ハシ昔ハ羅馬ノ立其文物精華議論縝密而シ
テ蠻氏ノ爲ノ其國ヲ凶サル南宋ノ代文藝大ニ
閑ケ理論頗ル備ル而シテ胡元ノ爲ノ其國ヲ亡
サル其此二國ハ要スルニ人ニ進取ノ氣象活潑
ノ精神ナク萎靡振ハス以テ其國ヲ凶スニ至ル
者此ヲ文明ノ弊ト謂フ或ハ又曰朝鮮ヲ征服ス
ル太易シ然レトモ支那俄羅斯ノ大國恐クハ

之カ説ヲ來スヲラン是我カ最モ慮ル所ト又其
甚シキハ彼乱民我公使ヲ掩殺セントスルカ如
キハ乃チ未だ國民ノ常情是ヲ以テ直ニ出師ノ
大故ト爲スヘカラスト曰フ者アリ此人ヤ所謂
進取治潑ノ元氣ナク文明ノ弊ヲ踐シテ羅馬南
宋ト共ニ我國ヲシテ覆滅セシムル者也之ヲ陣
頭ニ斬テ天下ニ徇シテ可也竊ニ惟ルニ閣下ハ
明治維新ノ元勳而職大政大臣タリ上ハ我
天皇陛下ノ信任スル所下ハ我三千五百余万人
ノ信賴スル所而シテ我國ノ榮辱安危亦皆係焉

左右等ノ閣下ニ望ム所豈周召伊呂ノミナラン
哉今ヤ朝鮮ノ征討スヘキ實都テ前陳スルカ如
シ伏テ請フ速ニ其實ヲ奏上シ大師ヲ發遣シ是
膺是懲シテ以政府國民ニ對スル所ノ義務ヲ盡
サレシムラ若夫朝鮮國ニ關スル東洋政界ハ左
右卑見ノアル有逐次將ニ獻言スル所アラント
ス唯閣下諒察ヲ賜ヘ恐懼無已

明治十五年
八月十一日

滋賀縣士族

河上左石



大政大臣三條實美殿

十年

行
韓
建
福
書

河
上
左
君

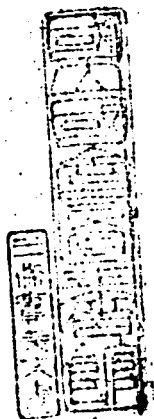
名 称	三條実美文書
標 題	土午変果意見書

分 類 番 号	51
	13

登録番号	
------	--

朝鮮事宜二通
井上藩書

竹溪



朝鮮事宜

平壤

中興

咸興

元山

南浦

海州

新義州

朝鮮ニ向テノ政界ヲ面岐ニ分テ其ノ利害ヲ論スル左ノ如シ

一我國ノ利益ヲ保護セント欲セハ朝鮮ニ干渉シテ、獨立ヲ幫助スルニ在リ、

今朝鮮ヲシテ公然清ノ藩屬ニ歸セシメ清ヨリ

砲台ヲ築キ、兵艦ヲ繫キ、我ニ迫ルノ勢

有ラシメハ、我ニ在テ其ノ害最大ナリトス、故ニ我レノ

利益ヲ保護セント欲セハ、朝鮮ヲ幫助シテ、獨立

國ト為ラシメザル可カラズ、蓋シ其ノ獨立ヲ幫助ス

ル方法ハ、條約各國ニ懇懇シ、各國ヲシテ獨立國

ト認定セシムラ、第一ノ籌畫トス、然リ而シテ此ノ

籌畫ハ容易ニ辨了シ得ルモノニ非ス、何ナレハ、

各國ハ朝鮮政府果シテ能ク内亂ヲ鎮壓
スルノ實力有ル歟又内治ヲ自主スルノ實權有
ル歟ヲ觀察シテ、始テ其ノ獨立國ト否トヲ判定
スベキヲ以テナリ、故ニ今朝鮮ノ獨立ヲ幫助セシ
ム欲セハ速ニ武器ヲ與ヘ教師ヲ借シ、内亂ヲ鎮
壓スルニ足ルノ兵ヲ訓練セシムサルヲ得ス、而シテ又
其ノ利源ヲ開ク爲メ、礦務ノ如キ、農具ノ如キ、
或ハ之ヲ新設シ、或ハ之ヲ改良シ、國力ヲ永遠ニ
鞏固ナラシムルノ事業ニ着手セシムベシ、此レ則チ
一歩一歩我レノ干涉ヲ進ムモノニシテ、此ニ至ルハ
朝鮮ノ獨立ヲ保護スルヲ能ハサルナリ、但茲ニ
一ノ慮ルベキハ、清國ノ感觸ニシテ、今我カ此ノ如ク
朝鮮ニ干涉スルヲ見ハ、疑心鬼ヲ生スルノ誘ノ如ク、

必ス我レヲ以テ深ク惡意ヲ蓄藏スルモノトシ、猜忌
ノ積、早晚戰端ヲ開ク有ルモ知レ可カズ、戰端
一ト開キ、結テ仇敵ト為ル時ハ、千百年忘ク解ク
可カラズ、此ノ時ニ當テ、我レノ財力、以テ之ニ給スルニ
足ル歟、我レノ砲器船艦、以テ之ニ應ルニ足ル歟、
是レ最モ豫メ講究ヲ要スルモノナリ、
一亞細亞ノ大局ヲ全セント欲セバ、日清ノ親睦ヲ
厚スルニ在リ、

曩キニ台灣ノ役有リ、頃ハ琉球ノ舉アリ、清
國ハ常ク我レヲ疑テ、侵奪主義ヲ執ルモノトス、
今又朝鮮ノ變アリ、彼レ專ラ我レノ所置何如
ニ注目ス、我レ如シ亞細亞ノ大局ヲ全スルヲ以テ、政略

目的トスルハ、幾分か我レノ利益ヲ放擲シテ、
清國ノ猜忌ヲ解カザル可カラズ、但清國ノ交誼
ヲ重スル為メ、朝鮮ヲ漠視シテ其ノ歡心ヲ失フ
如キハ、亦吾隣ノ策ニ乖ス、今兩全ノ謀ヲ為スニハ、
朝鮮ヲシテ、一面ニ清國ニ事ルノ禮ヲ失ハシテ、
一面ニ之カ保護ヲ與ベシ、而シテ清國ノ嫌疑ヲ
避クル為メ、砲臺ノ如キ、教師ノ如キ、礦務農事
ノ如キ、朝鮮ヨリ我レニ倚賴スル件ハ、總テ朝鮮
ヨリ先ツ清國ニ通報シ、其ノ異議ナキヲ待テ、

我レヨリ之ニ應シ、清國ヲシテ、我カ朝鮮ヲ待ツハ、
一ニ善隣ノ好意ニ出ルヲ知ラシムベシ、然レ時ハ、
清國猜忌ノ念漸次ニ消滅シ、琉球處分ノ如キ
モ、東洋ノ守リヲ固スルノ政畧ニ出テ、土地ヲ貪ル
ノ主義ニ出サルトノ感觸ヲ起シ、多年ノ葛藤
或ハ一朝ニ解散スルモ知ル可カラズ、此ノ如キ時ハ、
亞細亞ノ全局、廢ラハ破裂ノ憂ナキヲ保ス

名 称	三條実美文書
標 題	山縣有朋 意見書 欽

分 類 番 号	51
	14

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

朝鮮、事変終了後、政界、要

點、獨立ヲ幫助スルニアリ獨立ヲ幫

助スルハ假リ條約ヲ締結シタル各國

ヲレテ獨立國ト認定セシムルヲ以テ第

一策トナスノ一點ハ既閣議決定シテ其緒

ヲ用キ目今計畫スル所ナリ然レテ

其獨立國ヲ制定スルハ内亂ヲ鎮壓

スルノ實カニラ以テ第一トス然ルニ獨

尹雄烈ノ情陳スル所ノ一點ト又今

般來朝スル所ノ全權大臣ノ情訴

スル要點モ亦兵力ヲ養成スルヲ第

一トシテ中心獨立ヲ籌畫スルノ精

神に出る確信も可き似たり故に彼
我政府に依頼する點を酌量し暗
ニ之を幫助し朝鮮の獨立の基礎を
立てしメ朝鮮の歡心を得るに於て我
政府の方略を施さる可からざる時
機なり支那の感觸如何に至る我
干涉の深淺を拙由んモノニシテ
既前陳の如し其の情訴に應じて我
好誼上より幫助を隱々中々施さず
たし支那より之を以て戦端を開く
口實と爲し難かるべし且つ現今此ノ
干涉無カラんモ支那の猜忌の容

易ニ解リ可カラザルノ場合ニ至リシ

来付必シモ此ノ~~事~~一事ヲ以テ

大影響ヲ生スルノハ無カルベシト思

考ス

要スルニ此等ノ運用ハ其人ニ存スルモ
ノニシテ徒ラニ議論ヲ以テ之ヲ判決シ
難キモノ

乃阿

名 称	三條実美文書
標 題	秋水蘭次郎 朝鮮事変 岡本監輔

分 類 番 号	57
	415

国立国会図書館

登録番号	
------	--

才
百
之
十
七

上
意
見
一
通

上朝鮮吏直

阿波固本監輔肥前秋永蘭次郎謹テ 三條公閣
下ニ白ス伏シテ惟ルニ朝鮮近日ノ吏巷説紛ヒ
トレテ新報ニ具載セリ未ダ悉ク信ヲ置クニ足
ラズト虽モ然レモ其大要ニ曰ク清人朝鮮ノ兵
ヲ率升テ我兵ヲ王城ニ攻撃シ士卒死傷スルモ
ノ幾人アリ曰ク彼我ガ公使館ヲ圍ミ公使濟物
浦ニ遁レタリ曰ク公使館及ビ兵營火ニ罹リ焦
土トナレリ曰ク我ガ民ノ京城ニ在ルモノ數十
人ヲ虐殺シ且婦ヤヲ強姦セリト凡此數ノモノ



ハ益疑^ヒテ容^レザルモノナリ。某等竊ニ悔スルニ
朝廷朝鮮^ノ禮接スル至^ラザル所ナレ其^ノシテ
開化ニ進マシメ以テ兩國交際ノ誼ヲ厚クセシ
ト欲ス未ダ嘗テ一毫ノ虛偽ヲ容ル、トアラザ
ルナリ故ニ彼氏ノ辱禮ヲ我ニ失スルモ常ニ之
ヲ問ハザルニ置キ以テ其悔悟ヲ禁じ特典ヲ與
テ其償金ヲ捐ツルニ至レリ。宇内萬國我が高義
ヲ仰ガザルハナレ而レテ今又此舉アリ。聖
明天地ノ量ヲ以テスト虽モ一日モ或ハ放過ス
ベカラザルナリ。然レモ某等聞ク是ミナ淵源アリ

リ朝鮮内訌ノ初、國王公使ニ城闕ヲ警衛スル
ヲ乞フニ清兵不意ニ其東門ヲ襲ヒ朝鮮フレニ慮
シテ我ガ士卒ヲ殺傷ス公使禦ク一能ハズシテ
西門ヨリ出デ國王遂ニ清兵ノ爲ニ拘セラル其
公使館及び兵營ヲ火モ亦清兵ノ指示ニ係ルト
然ラバ則チ我ガ先罪ヲ問フベキモノハ清ナリ
朝鮮ニ非ザルナリ而シテ朝鮮モ亦安ゾ其責ヲ
免ルコトヲ得ンヤ某竊ニ惟ルニ今縱ヒ使ヲ發シ
罪ヲ朝鮮ニ問フモ彼頑固ノ徒スデニ王ヲ擁シ
清兵フレガ援ヲ爲セリ使者項背相望ムト虽モ

夏功ニ益ナク反テ他人ノ侮辱ヲ致サシムル恐
ル今ノ計ヲ爲サシモノハ速ニ兵ヲ發シ罪ヲ清
廷ニ問フニ如ハナシ某等清國今日ノ狀ヲ熟察
スルニ能ク数十年ヲ維持スルモノニ非ズ諸
大魚ノ腹既ニ潰餓臭腐シテ鱗鬣依然タルニ譬
フ其ガク久シカラシヤ又諸ヲ腐朽セル大木ノ
一處ニ午ヲ著クレバ百處皆碎クニ譬フ尤モ虞
スベキナリ而シテ其民校櫓ニ性ヲ成シ其意ヲ
得ルニ當レバ恣ニ虐威ヲ弄シ大言恐嚇シ意ヲ
失ヘバ因循遁逃シ夏ニ托シテ左支右吾セリ臺

灣及ビ琉球ノ吏ノ如キ此術ニ非ザルハナレ
與ニ條理ヲ論スベキモノナラレヤ亦豈與ニ東
洋ノ文明ヲ圖ルベキモノナランヤ今有ニ佛國
ト兵ヲ構ヘ國內騷擾シ反乱尋テ起ラントス國
步艱難ナルヲ此ノ如クニシテ此舉動アリ是自
ラ敗滅ヲ取ルノ道ナリ故ニ來等切ニ謂フ今日
ノ計ハ速ニ二三ノ大艦ヲ發シ精兵數十人ヲ載
セ直ニ山東ニ抵リ蓬萊ノ水鎮ヲ襲ヒ一舉シテ
之ヲ拔キ其地ニ割據シ徐ヒ北嚮シ以テ其罪ヲ
問フベシ李鴻章等が驕兵幾十萬アリト虽モ慮

ルニ足ラザルナリ柳蓬萊ノ地東南山嶽重疊シ
西南鄒魯聖人ノ郷ニ接ス全國人心ノ仰ク所ニ
シテ其氏モ殷富ノモノ多シ之ヲ得バ吾資ト爲
ニ足ラン提督以下ノ警守スルモノアリト虽モ
之ヲ直ニ天津ヲ恃ニ比スレバ其難易相懸スル
啻ニ天淵ノミナラズ況テ其水土氣候ノ我ニ適
スル他處ノ能及ブヤ非ザルヲヤ苟モ經畧宜
シテ得テ地方人民ニ我が威德ニ感ゼシメバ四百
餘州ハ意ノ如クナラザルハナク必ス橫俗ヲ變
シテ文明ニ至リ我邦ノ藩屏トナルノ益アリ

各國交侵シ爭テ其地ヲ割ノ日ニ方リ我先^ヅ此處
ヲ得テ以テ根據ト爲ス豈大愈快ナラザラシヤ
嗚呼神州スデニ七百餘年ノ隆興ヲ舉ゲ大小諸
政秩然トシテ緒ニ就キ文物大ニ興ル前古ノ無
キ所ナリ而シテ漸ク奢侈ニ趨クノ弊アリ土木
ノ議租稅ノ說舉國ノ人心洶ヒトシテ安カラズ
此時ニ當リ乃チ此變アリ是或ハ天ノ戒ヲ警ム
ルナリ宜ク速ニ尚儉ノ令ヲ發シ上下一體節約
シ務テ冗費ヲ省キ以テ外征ノ軍士ヲ厚クシ士
族子弟輩ノ封賞ヲ希フモノヲシテ奮前シテ力

ヲ効サシムベシ庶幾バ上下交泰シ人心協和シ
以テ禍ヲ轉シテ福ト爲スベシ威ヲ東洋ニ振ヒ
以テ宇内ニ雄飛セシハ此一舉ニ在リ豈千載得
ガタキノ好機會ニ非ズヤ如シ姑息モテ之ヲ處
セシカ益清人ノ爲ニ輕侮セラレ朝鮮王モ亦其
因ル所ヲ失フヲ悔イントス何ノ面目カ以テ歐
米各國ニ對センヤ是豈ニ國威ヲ外ニ損スルノ
ミナラズ國內ノ人心モ之ガ爲ニ激動シ將ニ不
測ノ禍害ヲ醸サントス實ニ國家盛衰安危ノ係
ル所ナリ一念此ニ及ベバ感慨ノ胸ヲ衝クヲ覺

ヘガ方今

聖明上ニ在レ元老諸臣聚議ス某

等因ヨリ其遺算ナキヲ知レリ喋ヒトシテ論建

スルハ實ニ蛇足ニ屬セシ某等當テ清國ニ遊ビ

頗ル其人情習俗ヲ悉シ其甚カ興シ易クシテ空

論ノ能ク事ヲ所ニ非ザルヲ知レリ忠憤ノ餘リ

自ラ己ムリ能ハズ敢テ瞽言ヲ陳シ以テ參酌ニ

備フ伏シテ冀クバ閣下ノ幸ニ察シタマハシ

一々某等恐懼或罪

明治十七年十一月二十四日

秋永蘭次郎

岡本監輔



三條公閣下執事

名称	三條実美文書
標 題	東京専門学校有志 甲申事変ニ付建白書

分類	57
番号	16
号	

国立国会図書館

登録番号	
------	--

第百三十八

草莽布衣ノ某等謹テ一書ヲ



三條公閣下ニ呈ス這回韓地ノ事變相起リ候ハ我カ日本帝國ノ大事ニシテ其終局ノ如何ニヨリ我カ帝國ノ体面ニ管係アル少クナラサルト奉存候若シ今日果斷ノ御所分無之ニ於テハ我カ帝國威權ヲ損シ國家ヲシテ容易ナラサル位地ニ立至ラレハ儀禮存候抑モ清軍及ヒ朝鮮暴民ノ我カ帝國ニ對シテ無禮ナルハ今更ラ某等一同ノ陳述致スミテモ無之次第ナルカ彼等カ我カ公使ヲ襲撃シ剩ヘ日本人ト認ムル中ハ之ヲ殺害スヘトナド揚言致シタルカ如キハ言語同斷ニシテ我カ帝國臣民カ悉ク切齒扼腕致ス所ニ御座候右ニ就キ大政府ニ於テモ既ニ特派大臣ヲ御差遣相成リタルハ充分ノ御談判有之儀トハ奉存候得共草莽布衣ノ臣民ハ尚ホ杞憂ヲ抱キ劍ヲ撫シ抗慨罷在申候實ニ彼等カ我カ無辜ノ人民ヲ屠戮シ我カ商估ノ財産ヲ掠シ我カ公使館ヲ一炬ニ附セルカ如キハ我カ帝國ノ名譽ト

威權ヲ毀損スル極ノテ甚シキモノニシテ建國以來二千五百有餘年久
シキ未タ曾テ之レアラサル所ナリ若シ此ノ時ニ際シ断然手強キ即所
分ナクシハ斯カ大耻辱ヲ洗フ一軌ハサル儀ト奉存候此レカ爲ノ某等
ノ思考仕ル所ニテハ左ニ列叙スル箇條ノ要求ヲ爲シ彼レ若シ之ヲ
承諾セサルニ於テハ直ニ問罪ノ師ヲ起シ正々堂々陣ヲ張り彼レヲ
シテ懾服致サセ候ハテハ到底我カ帝國ノ体面ヲ全フシ我カ帝國ノ威嚴
ヲ輝スルニ至リ兼ル儀ト奉存候

第一 清國ニ向テ朝鮮國在留ノ支那兵ヲ撤去シ爾後ソノ干
渉ヲ絶ツ

第二 清韓兩國ニ向テ這回ノ首唱者ヲ死刑ニ處センヲ要
求スル

第三 清韓兩國ニ向テ實際損害ノ外充分ノ要償ヲ付シタル
右ニ陳述致候ハ帝國臣民ノ挙テ切望スルノ要点ニシテ其他今回ノ地

者ハ禮ヲ厚フシテ葬ラシムル及ヒ死者ノ遺族ハ相當ノ手當ヲナサシムル
等ノ如キニ至リテハ外交上ノ慣例アルト存シ候得ハ敢テ某等ノ上申ス
ル迄モ無之義ト奉存候唯タ某等ノ切望シテ止マサル所ハ亦一清國ヲシ
テ朝鮮ニ干涉セシメス又タ日本臣民カ満足スル所ノ多額ノ償金ヲ要求
スルニ在リ外交上ノ極機固ヨリ草莽布衣ノ能リ知ル所ニアラハ儀ト
ハ存シ候得共若シ萬一右等ノ要求ヲシテ満足セシムル能ハルカ如キアラ
ハ我カ帝國ニ取リ此ノ上モナキ耻辱ナレハ苟モ我カ臣民クモノハ紛骨
碎身以テ國威ヲ輝カサル可ラハ儀ト決心罷在候某等神速リ
情急ニシテ充分ノ衷心ヲ吐露スル能ハス仰キ願フ唯タ一片報國
ノ丹心ヲ即酌量有之閣下海容ノ至仁ヲ垂レ某等一同憂國ノ微
衷ヲ貫徹セシメ賜ハ、當ニ某等ノ幸ノミナラス實ニ帝國臣民ノ満足
佳儀ト奉存候右愚衷ヲ陳述仕リ度尊嚴ヲ憚ラス敢テ之ヲ左
右ニ呈ス某等恐懼頓首再拜

明治十七年十二月廿五日

三條實美殿

殿下 東京專門學校寄寓

吉田直太郎

伊藤幹次郎

富樫重隆

吉田復平治

中川吉十郎

山田鏖太郎

島倉祐次郎

木下省吾

高橋莊平

上遠野富之助

小村定脩

新瀉縣平民

大澤 邦太郎



廣島縣平民

森田 卓治



武蔵縣平民

尾臺 多一郎



愛媛縣平民

大成 和一郎



岩手縣平民

南部 剛一



三重縣平民

佐々尾 新吉



佐賀縣平民

馬場 慶太郎



京都府平民

山本 憲一



中京 銓治郎



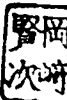
長野縣平民

黒川 安司



高知縣平民

岡崎 賢治



新潟縣平民

松村 得明



今

奥田 春定



岡山縣平民

水田為太郎

新河縣平民

大堅成了

福岡縣平民

千田精一

廣島縣士族

原發太郎

新潟縣平民

久保田文之輔

福島縣士族

松田正定

長野縣士族

太木亮

大分縣士族

松井從郎

秋田縣平民

塙淳助

大坂府平民

片岡橘太郎

北城縣士族

神經造

大坂府平民

中寅次郎

石川縣士族

久保田照納



長聖縣士族

高木守三郎



長崎縣士族

北村住吉



長野縣平民

江崎喜三郎



大分縣平民

小野祝三郎



岩手縣士族

小泉清志



青森縣士族

川田水穂



長崎縣平民

小川寅六



岡山縣士族

関順一郎



廣尾島縣士族

竹下笑之助



全

袖木角衡



山形縣士族

齊藤斧三郎



新潟縣平民

上野関太郎



岡山縣平民

三浦雄策



富山縣平民

北本發四郎



兵庫縣平民

中治 榎 浩

埼玉縣平民

石内 浦 吉

石川縣平民

武部 用之

大分縣平民

首藤 貞吉

埼玉縣平民

中村 武雅

岡山縣士族

大谷 豐治郎

福島縣士族

門馬 尚經

鹿児島縣士族

宮原 友紀

山形縣士族

佐藤 新太郎

愛知縣士族

鈴木 熊太郎

全 平民

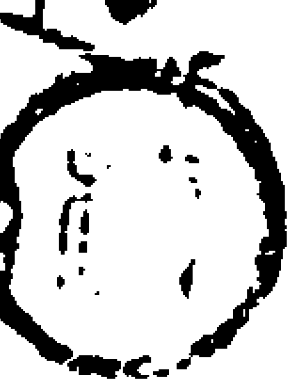
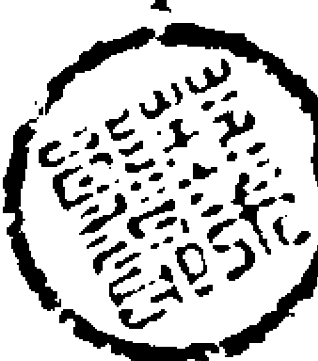
横井 弥曾次郎

熊本縣平民

木村 田勇治郎

長野縣平民

古橋 銚太郎



官城縣民

松本縣民

德島縣民

松本縣民

三幸縣民

松本縣民

立原縣民

打土縣民

清玉縣民

京都府民

福岡縣民

埼玉縣民

宇都宮縣民

長野縣民

菅野源吾

小泉近次郎

小川請出

川島朝太郎

樋田銀太郎

松枝萬次郎

寺沼利昌

森兵四郎

奥貫退藏

佐竹時之助

泥堂久之物

坂齊道一

三浦九二郎

堀内七十郎

長野縣平氏

小野澤幸



三重縣土族

本林 三



栃木縣平氏

川島有



〃

石崎兼



〃

中島恒三郎



石川縣土族

園部喜太郎



愛媛縣土族

川口龍吉



京都府土族

稻葉重吉



福井縣土族

加藤松之助



栃止縣土族

出口和



〃

鹽谷和



岩手縣土族

上田重



長野縣土族

溝口重太郎



青森縣士族

赤石貞藏

島根縣士族

猪口久吉

福岡縣士族

佐田栄之助

長門縣士族

早川早治

〃

多田如助

千葉縣士族

渡邊亨

〃士族

平野高

三重縣士族

小林廣造

石川縣士族

内藤捨次郎

島根縣士族

池田清太郎

茨城縣士族

野村得三郎

大坂府士族

田中松三郎

島根縣士族

米原光太郎

靜岡縣士族

大石勉三

朝鮮事宜

岐阜縣平民

鈴木茂三郎



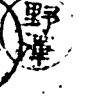
新潟縣士族

速水金治



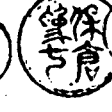
朽木縣平民

野沢弥植



新潟縣平民

保倉為七



鳥取縣士族

堅口松夫



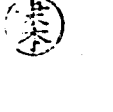
長野縣平民

大塚禎之助



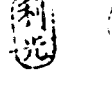
朽木縣平民

栗本了基



大分縣士族

利光孫太郎



新潟縣平民

加藤信次郎



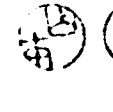
佐賀縣平民

中村常一郎



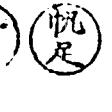
福岡縣士族

帆足采次郎



福岡縣士族

山本勝助



福岡縣士族

安田次郎



福岡縣平民

深田鶴松



名 称	三條実美文書
標 題	富国強兵論 高嶋 嘉十郎

分 類 番 号	51
	17 574

国立国会図書館

登録番号	
------	--

中百四十一

富國強兵論

今ノ人口ヲ開ケハ則富國強兵ヲ説ク而メ其事
切ハ未タ攀ラス丈レ國ヲ有ツ者ハ富強ヲ欲ス
ル前世ヨリ然リ獨今ニ始ニ非ス又惟君主宰相
ノ心ヲ此ニ勞スルニ非ス凡ソ國事ヲ以テ念
トスル者誰カ富強ヲ願ハサラン是天下ノ公憂
也而ルニ其効驗ノセモ世ニ顯レサルヲ何ソヤ
且古ノ富強ヲ謀ル者目前ノ仇敵アリテ然ルニ
非ス其情猶緩ナリ今ハ則外交大ニ開ケ數十國
ノ人雜然来リ進ニ其習俗氣象我ト異ナリ動モ



スレハ違言アリ朝ニハ手ヲ握テ惟リ交ユルモ
夕ニハ銃砲ヲ以テ相對ス此時ニ當リテハ修約
モ恃ニ足ラス公法モ據ニ足ラス近リ之ヲ支那
英佛ノ交際ニ驟シテ明瞭ナリ達ニ之カ豫防ヲ
為サレハ星屑凌虐ヲ免ル可ラス是其勢甚急
ナリ而シテ十數年來富強ノ實攀ルヲ見ス清韓
未ッ敬畏ヲ加ヘス歐米ハ輕視シテ猶幼稚ノ者
ヲ爲セリ是有志者ノ憤慨スル所宜ク汲々トシ
テ具策ヲ講求スヘシ然ルニ固循日ヲ度リ奮茂
功業ヲ興スノ蹟ナキハ何リヤ豈其レ富強ノ術

應キ力夫海軍ヲ擴張シ鉄道ヲ國中ニ遍布スル
ハ今日ノ急務ニシテ則富強ノ基ナリ鉄道ヲ遍
布スレハ僻陬遐邑ノ物産モ興スヘク無産ノ士
族業ニ就クヘク鑛山モ開クヘク無職游手ノ民
因テ以テ使用ニ供ス可ク牧畜樹藝以テ不毛ノ
地ヲ利用ス可ク一方警アレハ四方ノ兵一電ヲ
以テ徵聚ス可シ故ニ陸兵モ多數ヲ要セス是等
ノ利益勝テ計ヲ可ウス海軍ヲ擴張スレハ非常
ノ防禦ハ勿論大ニ航海ノ業ヲ開キ商船ヲ護シ
各地ニ貿易シ移民ヲ護シテ海外魚主ノ地ヲ

墾闢ニ内産外業一時ニ興ル富强ナラサルヲ欲
スト虽氏得ニヤ念フニ此二項ノ急務タル朝野
ノ諸賢豈思ヒ至ラサルノ理アラニヤ然ルニ未
タ具事ニ及ハサルモノハ抑亦何ノ故リ豈具資
金ノ裕スヘキ無ヲ憂フルカ若夫然ラハ之カ
資ヲ得ル何ノ難キカ之レ有ニ是レ多方ヲ要セ
ズ倍價ノ印紙ヲ絹帛各種ニ貼用シテ是レリ夫
レ國中産スル所ノ繭絲一歳十萬行李アリ其内
四万個海外ニ輸出シテ貿易品ノ策大利益タリ
其餘ノ六万個ハ内地ニ銷費シテ各種ノ織物ト

ナル是豈惜之可ラスヤ夫絹布ハ輕暖ニシテ
美麗ナリ然レ綿衣モ亦體ヲ掩ヒ寒ヲ禦クニ足
ル絹衣ヲ用エルハ畢竟奢侈ニ属ス之ヲ禁スル
モ亦不可ナシ然レ禁スレハ人不平ヲ懷キ又陰
ニ禁ヲ犯スアリ是罪人ヲ生出スルノ道ナリ今
煙草藥種ノ法ニ倣ヒ必ス印紙ヲ貼シテ賣買セ
シ人其印稅ヲ賣クスレハ其價必倍蓰ス奢侈ヲ
好者モ終ニ之ヲ用ヒサレニ至ル是レ禁ヤスレ
テ其實禁ト同シ之ヲ期スルニ五年若クハ七年
ノ限ヲ以テスレハ人モ亦綿ヲ服シ忍ヲ以テ期

ノ萬ルヲ族ツヘシ其間帝室王公ノ家具他已ヲ
得サルノ用アリトシテ一万個ハ費エヘシ其餘
五万個ノ蘭絲ハ海外ニ輸出スヘシ一個ノ價大
抵二百五十弗五万ノ直一千二百万弗ハ毎歲海
外ヨリ銀貨ノ輸入ヲ増益ス五年ニハ六千二百
五十万七千ハ八千七百五十萬是豈ニ二項
ノ資ニ充ルニ足ラサランヤ人或ハ言フ絹布ナ
ケレハ老幼寒ヲ苦ムハシ織元業ヲ失フテ飢ニ
艱ニヘシト是好息ノ論ニテ国事ノ多難前ニ當
ルヲ顧ミサルモノナリ且シ其輕重緩急ヲ計リ

見ヨ鑿啓キ禍結マハ費ス所幾許ナルヘキヤ硝
煙彈雨ニ數千萬圓ヲ消散シ糧食夫役國民ノ負
擔モ亦數フ可ラス終ニハ流離顛沛溝壑ニ轉ス
豈只木綿ヲ服シ常職ヲ失フノ比ノミナランヤ
暫ク忍ンテ木綿ヲ服シ五萬ノ蘭絲ヲ以テ年ニ
一千二百万弗ヲ得テ海軍ヲ擴張シ鉄道ヲ滿天
下ニ敷設シ國力ヲ強盛ナラシメテ見ヨ近日朝
鮮事件ノ如キ支韓ノ弱兵無禮ヲ我ニ加ル事能
ハス清佛ノ葛藤ノ如キ我進ンテ中間ニ立テ以
テ講和ヲ得セシムヘシ此ノ如キノ威カアレ

未舶ノ外人只我好意ヲ失ハニテ之レ懼ル焉
リ繫ヲ啓キ禍ヲ醸サンヤ小ク忍ハスニテ大謀
ヲ遺ルハ君子ノ取ラサル所ナリ織元ハ失業
ヲ慙マハ無息ノ資ヲ貸シ木綿ヲ織リシメテ可
ナリ天ノ未夕陰雨セサルニ及テ牖戸ヲ綢繆シ
大禍ヲ未萌ニ銷スルハ今其時ナリ在上ノ君子
宜ク斷行ニテ疑ハサルヘキ所ナリ

明治十八年一月十九日

高嶋嘉右衛門

謹白

名称	三條実美文書
標題	鷺尾隆聚 甲申書作：竹菴見書

分類 番号	57
	18 5/2

国立国会図書館

登録番号	
------	--

中
百
三
十
九

建
言



鷲尾隆聚謹テ書ヲ太政大臣殿下ニ奉ル維新以來日本
ト朝鮮トノ間ニ於テ曾テ懷アリ西郷隆盛江藤新平前原
一誠等過激ノ議ヲ建其末路皆暴行ヲ爲シ變乱ヲ起セリ其
不當ハ論ヲ俟タスト雖其原由ハ朝鮮ノ無禮ヲ憤ルニ固ル朝
鮮ノ無禮ヲ尋繹スレハ沂テ清國ニ及フ情實アリ又今日ニシテ
將來ヲ逆察スルニ朝鮮ハ日本ト清トノ爭端ヲ釀地ナリト評シテ
或ハ違ハサルヘシ去年十二月朝鮮ノ變殊ニ日本ト清トノ直接關
係ヲ生セシ者ノ如シ隆聚身遠隔ニ在テ其事實ヲ同知スルヲ能
ハサルハ堪テ極論スルニ由ナシト雖竹添公使朝鮮國王ノ依頼ニ応
シ兵ヲ率テ之ヲ護衛ス清兵妄リニ此ニ侵入シ先ツ砲ヲ發シ我兵
ヲ死傷セシム其亡狀固ヨリ論ヲ俟タズ然ルニ清人巧ニ言ヲ設テ日本
人ハ朝鮮ノ暴徒ヲ助テ彼國變ヲ惹起シタル者ノ如ク論スル者ア

リト雖抑朝鮮人ニシテ國政ニ與ル者其暴徒ナルヤ正人ナルヤ之ヲ
知ルニ由ナク又一朝ニシテ之ヲ断定ス可キニ非ス且今日ニ至リ彼ノ國王
ハ我全權大使ニ謝罪書ヲ出シ殊ニ謝禮書ヲ表ス若シ竹添公
使ニシテ彼ノ暴徒ヲ助ケ國王ヲ威迫セバ彼國王豈我ニ向テ謝禮
書ヲ出スノ理アラニヤ況ニヤ彼ノ變時國王ノ我公使ニ一意依頼セシハ
一二外國人之レヲ目撃セシナルヘシ如斯實況ハ我公使ノ求メテ之
ヲ爲シタルニ非ス彼ノ依頼ニ應セシナリ清兵何ノ故ニ妄リニ之ヲ襲
撃スルヤ清兵ハ清政府ノ訓令ヲ承テ來ルモノナレハ其罪ハ之レヲ
清政府ニ問ハサル可ラス今ヤ枝葉タル朝鮮政府ハ既ニ我ニ向テ其
罪ヲ謝シ而急難ノ救ヲ受タル謝禮書ヲ出シ且償金若干ヲ出
スヲ以テ我大使之ヲ許シテ而根本タル清國ノ無禮ハ之ヲ責問シテ至
當ノ處方アルハ殿下ノ賢明固ヨリ隆聚區々ノ言ヲ俟タサルヤ明矣

頃者朝野人心如何ヲ觀ルニ市童僮卒ニ至ル皆清國ノ罪ヲ糾サ
シテヲ望ム是人心ノ傾向一致スルヲトスルニ足ル而シテ此人心ノ傾向スル
抑故ナシトヤス從來清國自ラ中華ト唱ヘ傲然他ヲ蔑視シ曾テ
我ニ無禮ヲ加ヘシヲアルヲ以テ今般事最我カ人民ニ感觸ヲ與ヘ
滿天下磅礴鬱勃ノ氣一時旺盛セリ今ヤ之ヲ率ヒテ其希望
ニ滿タシム内治ノ効モ亦大ニ裨益スル所多キニ居ルヲアラシ側ニ聞ク
宇内各國清國人ヲ待遇スルモ輕蔑ヲ極メ本邦人ノ如キハ其待
遇清國人ニ勝ルヲ遠シト是無他

皇威ノ赫々タルト諸賢公ノ勵精圖治駸々トシテ文明ニ進トニヨ
ルモノナラシ今ニシテ清國ニ屈スル所アルハ此國威威ハ挫折ニ墮チ
終ニ挽回ニ難カラシ然ラハ則眼前支度ノ如何ヲ顧ルヘキ所ニ非ル
ヘシ爰ニ既往ヲ回顧シ將來ヲ逆察シ殊ニ都鄙近狀ヲ具シ

妾リニ尊嚴ヲ冒瀆シ國家ノ大事ヲ建言ス斧鉞衆遁
ル所ニ非ス誠恐誠惶

明治十六年一月三日

正四位伯爵就鷲尾隆聚



太政大臣三條殿下

名称	三條実美文書
標題	久保田右作 佐々木太郎 甲申事件：清國へ 石井重倫 句罪便り紙巻和16冊

分類番号	57
	19 526

国立国会図書館

登録番号	
------	--

朱百三

朱百三

朱百三

朱百三

大正十一年

問罪ノ大使ヲ清國ニ差遣スルヲ請フノ書

新潟縣越後國北魚沼郡小千谷町平民久保田右作
佐藤太郎石井重倫等頓首再拜郷黨ノ有志代リ
謹テ書ヲ太政大臣三條公閣下ニ奉ス客歲土月
四日朝鮮事變ノ報至ルヤ海内切齒言議沸ク
カ如シ夫レ朝鮮ノ事タレ内閣ノ不和ヨリ生レ變倉
卒ニ起リ事端ヲ悉サント因ルト曰フト雖モ清兵ガ我
國旗ニ向テ發砲且吾人民ヲ殘殺スル者三十人ノ
多キニ至リテハ天下ノ士激昂慷慨歎憤心ヲ懷カサ
ルヲシ或ハ義勇兵ノ團結ヲ謀ルアリ或ハ不幸干戈
ヲ動カスニ至リテハ從軍セシト乞フモノアリ皆曰リ我政
府ハ必ズ問罪ノ使節ヲ清國ニ向テ發遣スルベシ

又曰我政府必不淸韓兩國之向問罪ノ使節ヲ
發ハツラルシト已ミシテ升上外務卿ヲモツ特派全權
大使トモツ朝鮮ニ向ツ差遣スルノ命アリ是ニ天
下士皆曰我政府大使ヲ直ニ淸國ニ差遣セス
シテ朝鮮ニ差遣セラルモハ先ツ朝鮮ニ至リ其罪
ヲ問ハ且其事端ヲ悉クスニヨリ朝鮮已ニ其罪ニ
服セ他日我ニ對シ宣詐偽ヲ以テ其罪過ヲ掩
蔽スルヲ得セヤ故ニ我政府ノ先ツ大使ヲ朝鮮ニ
差遣セラルモハ蓋シ他日淸國ノ詐偽ヲ以テ巧ニ
已レノ罪過ヲ掩蔽スルヲ防クヘキ也豈亦策ニ善
ナル者ニ非ズヤ今者朝鮮已ニ其罪ヲ謝シ約スルニ
五款ノ條件ヲ以テ是ニ於テ天下ノ士皆曰曩キ
ノ五年ノ役ニ比シ何其舉措ノ寬且大ナリヤ

既^こし^て又^{また}曰^いり蓋^{しか}し朝鮮^{朝鮮}ノ事^事一旦^{一旦}變^変害^害卒^卒。
起^{おこ}り事情^{事情}頗^なル憫^{ひん}ム可^可キ者^者アリ故^故ニ我^我大使^{大使}朝
鮮^{朝鮮}ノ要^要償^償ヲ輕^軽減^減シ他^他日^日清國^{清國}ニ向^向テ大^大ニ其^其罪^罪ヲ
問^問フ所^所アリシト欲^欲スルナリト爾^爾來^來天下^{天下}ノ士^士日^日夜^夜刮^刮目^目
大使^{大使}ノ清國^{清國}ニ發^發遣^遣セラル^ルニテ望^望ム所^所實^實ニ飢^飢渴^渴
飲^飲食^食ニ於^於ケルカ如^如シ然^然リ而^而今^今ニ至^至リ未^未シ大^大命^命ノ
下^下ニシテ是^是ニ於^於テカ世^世間^間不^不學^學無^無識^識ノ徒^徒或^或ウ
朝鮮^{朝鮮}ノ事^事今^今平^平穩^穩ニ歸^歸シ又^又憂^憂ム可^可キ者^者ニト
噫^噫何其^其廉^廉耻^耻ヲ知^知ラザル甚^甚キヤ孔^孔昭^昭所^所謂^謂是
ヲモ忍^忍ム可^可リシハ孰^孰ヲカ忍^忍ツ可^可カラサル也^也者^者矣^矣名^名者
右^右作^作等^等僻^僻遠^遠ニ存^存リ未^未シ廟^廟謨^謨ノヲル所^所果^果シテ何^何ヲ
知^知ラズト雖^雖モ切^切ニ思^思フ今^今時^時ニ當^當リ清國^{清國}ニ向^向テ問^問
罪^罪ノ使^使節^節ヲ發^發シ彼^彼ヲシテ其^其罪^罪ニ服^服セシメスニハ國

辱何_レ以_レカ雪_レリ得_レ國威何_レ以_レカ張_レリ得_レ
祖宗廟社ノ靈何_レ以_レカ其威_レ震_レ齊_レ得_レ
將來外蕃_レ交際又何_レ以_レテ其宜_レヲ得_レヤ果
シテ然_ラハ士風漸_ヤリ沮喪_レ庸耻_レ地ヲ拂_エ恐_ラ
カ_レ今_レより以後外蕃侮_リテ受_クン言_フ可_カラサレ
モ_レア_ラシ大_ニ日本帝國ノ威風_ヲ將_テ自_レ是_レ地_ニ墜_レ
テ_レトス_ルハ奚_クモ然_ラハ後世今日廟堂ノ諸君
子_ヲ果_シテ何_トカ謂_ハハセ_テ有_テ作_テ等如此_ノ言_ヲ
聞_ク毎_トニ未_レノ嘗_テ痛哭_シ流涕_シ長太息_スハ
ア_ラサルヤリ既_ニシ_テ自_ラ思_フ宣_ハ今日廟堂諸君
子_ノ賢明_ニシ_テ此_ノ苟且偷安_ノ說_ヲ持_テス_ルハ
ヤ_ト深信_シテ疑_ハカ_レナ_リ然_リト雖_モ今_ニ至_リ猶
未_レ大使發遣_ノ命_ヲ下_タル_ヲ見_ス是_ヲ以_テ此_ノ不

學無識國威ヲ汚辱スル說起ル所以ナリ
不肖者作等事ヲ好ム者ト非スト雖氏國體ノ關
スル所如是重且大キリ苟クモ神州民々モ當
默トシテ止ム可クシヤ伏シテ惟カ速カニ戎備ヲ
嚴シ早ク清國ニ向ヘ問罪ノ大使ヲ差遣ス
レテラ不肖者作等日夜憂々懷ニ忘ル能ハズ敢
テ稟リテ狂瞽ヲ陳ス激切屏營ノ至リ任スレ
不肖者作等誠惶誠恐頓首再拜

明治十八年二月七日

新潟縣越後國北魚沼郡

小千谷町十三番平民

石井重倫



同縣同國同郡同町

百十五番地平民

佐藤太郎



同縣同國同郡同町

百三番地平民

久保田右作



太政大臣三條公閣下

名称	三條実美文書
標題	師富達太郎 甲申書件=件意見書 江頭 鴻

分類	51
番号	20 5/5
号	

登録番号	
------	--

臣等既書ヲ奉リ朝鮮ノ事件ヲ論清國トノ關係ヲ
陳ス諸フ其餘意ヲ述ヘシ夫レ非常ノ變ニ方リテ非常
ノ斷ナカルヘカラス非常ノ變ニ方リテ非常ノ斷ナキ中事
蹉跌シ悔ユト雖_氏追フヘカラス退テ考ルニ我 國ト清
國ト東洋各國ノ中最モ親交ヲ厚ウスヘキ國也然
リト雖_氏義ニ於テハ親子兄弟ノ國ト雖_氏敵國トナ
ラサルヲ得ス是理ノ當然ニシテ論ヲ俟タサル所ナリ今
ヤ清國ノ我 國ヲ待ツ傲慢無禮至ラサル所ナシ顧
フニ其底意事ヲ朝鮮ニ假リテ甚至臺灣ノ役ニ報ヒ且ツ
琉球ノ變ヲ生セシメント欲スルニラスニハ或ハ我 國地狹
ク人少キヲ侮トリ國權ヲ蔑如スルノ傲心ニ由ルナルニ若
シ斯ノ如クナレハ 國ノ恥辱焉ヨリ大ナルハ無ク上

先王ノ威靈ヲ辱シテ下ハ全國三千五百餘萬ノ同胞ヲ
蔑ニス。是豈臺灣ノ暴民ノ我漂泊人民ヲ凌虐セシ類
ヒナラシヤ抑朝鮮在駐ノ清兵ヲ以テ臺灣ノ暴民ニ比
シ朝鮮派遣ノ國兵ヲ以テ漂泊ノ人民ト同視スルノ
理ナキハ天下衆人ノ知ル所ナリ。然ラハ則チ堂々タル對
等國ノ間ニ於テ其局ヲ結ハサルケシヤ。臣等切ニ以謂ラ
ク斷然朝鮮在駐ノ清兵ヲ退カシメ其主謀ノ者ヲ誅
セシメ將來清朝ヲシテ朝鮮ノ內治外交ニ閑與スルヲ無
キヲ誓ヒ將テ損害ヲ一時ニ償ハシメ且ツ其大臣ヲシテ我
朝廷ニ來聘謝罪セシメ凡ソ此數ノモノ一毛服セサルヲ
ル中ハ直チニ六師ヲ整ヘ疾雷ノ如ク兵ヲ進メ一舉ニシテ
北京ヲ拔キ再舉ニシテ荊襄ヲ取り進シテ蜀漢ヲ畧シ
三面犄角ノ勢ヲナシ畧スル所ノ地ハ悉ク封建ノ制度ヲ

設ケ漸次大軍ヲ進メ

王師ノ向フ所響應セサルハナク暮年ナラスシテ之ヲ定メ然
ル中ハ彼レ邦境廣シト雖氏人類多シト雖氏其用ヲ爲ス
ニ足ラス勝負ノ數豫ノ見ルヘキノミ故ニ一日之ヲ伐タサ
一日

皇國ノ不利一年之ヲ征セサレハ一年

皇國ノ不幸也且ツ夫レ勢ハ強弱ニ由テ變スルモノナレハ彼レ
軍國ノ政ヲ舉ケ富強ノ勢ニ乘シ遂ニ暴虐ヲ我ニ加
フルヲ甚シキ胡元ノ如クナルモ知ルヘカラス否ラズハ彼レ疲
弊ノ極心スヤ魯英佛獨ノ如キ強國ニ俟セラレシノミ
果シテ然ラハ

皇國ノ不幸也且ツ夫レ勢ハ強弱ニ由テ變スルモノナレハ彼レ
是ヲ以テ今日清國ヲ征スルハ之ヲ滅スニアラスシテ實ハ其

國ヲ興スナリ故ニ断然開戦ノ主義ヲ以テ強ク談判ヲ終
ヘ緩急ニ處置アラシメ今日ノ急務ニシテ 國家
保安ノ策之ニ如クナカラン尚シ優游トシテ不断ニ坐セ
ハ全國ノ人心四分五裂大害ヲ不測ニ生シ國ノ安危知
ヘカラン至ラシ而シテ凡ソ遠征ハ糧運ニ苦ミ兵食ニツ
ナカラン之シキノ憂ヒアリ且ツ内地紛擾ノ慮リナカル人
カラス是故ニ節制鍊磨ノ兵士ハ悉ク外國ニ出スヘカラン
シハ海陸鍊磨ノ兵ヲ三万ヲ假シ七万ノ義勇兵ヲ加
合シテ十萬トシ糧ニ敵ニ因リテ用ヲ國ニ取ルナク前段
封建ノ策ヲ用ヒ仁ヲ施シ義ヲ示シ以テ 國威ヲ宣
揚セハ名正ク言順アラテ天人ノ與スル所勝ヲ制スル
掌ヲ反スカ如ク糧食需ノスシテ得敵城攻メスシテ援
クヘシ蓋シ用兵ノ術ニ至リテハ所謂人ヲ致シテ人ニ致サレ

サルノ一點ニ止マリ宜ク將帥ノ任スヘキ所ナレハ臣等又何シ
カズハシ唯冀クハ

廊廟貴顯ノ士一日ノ苟安ヲ

事トシ數百年ノ大禍ヲ遺シ賜フヲナカラシテ災
リト雖モ兵ハ所謂國ノ大事ノ死生ノ地存亡ノ道悉ク
是ニ係ルヲ以テ

廟謨一定ニ歸シ民心ヲシテ一致セ

シムルノ方策立タサレハ師ヲ千里ノ外ニ曝シ遂ニハ言フ
ヘカラサルノ大患ヲ生セン故ニ内治ノ改革モ亦其宜ニキ
ヲ制セサルヘカラズ

(臣等別ニ定論陳セリ更ニ其詳ニウカナルヲ陳セシ)

内治茲ニ舉リ

事ニ簡易カニ從ヒ民ノ疾苦ヲ忖リ人心ヲ收攬セハ外

征茲ニ於テ行ハレ天下ヲ掌手上ニ運ラヌヘシ果シテ斯ノ

如クナラハ何ソ 國威ノ張ラサルヲ憂ヘシ何ソ敵國ノ

強キヲ懼レシ臣等區々ノ心默止スルニ又心ヒス敢テ愚心竟

ヲ陳述シ參觀ニ供ス冀クハ均埃ノ微衷ヲ察シ

國家ノ大計ヲ定メ賜ハシテ至誠懇願ノ至リニ堪ヘ
ス然レモ事息ムヲ得ス果シテ兵ヲ用ヒラルニ至ラハ臣等
微カト雖モ一隊ノ義勇兵ヲ募リ

皇師ノ先道ヲ清メシ臣等斯ノ如ク危言ヲ呈シ各鎖
ヲ避ケサルモノハ近クハ

天皇陛下ニ對シ奉リテ不忠トナシテ畏レ遠クハ

古聖先王ヲ仰キ奉リテ不義トナシテ懼ルレハ也謹
ニ曰ク君辱シナルレハ則テ臣死ス蓋シ今日ノ謂乎
臣等僭越罪實ニ追ハ所ナシ誠恐誠惶頓首敬白

福岡縣筑後國御井郡篠山町寄留

明治十八年二月十六日

師富進太郎

同縣同國三潞郡蘆塚村

平民

江頭

鴻



太政大臣三條實義殿

執事

名称	三條実美文書
標題	高島勲之助 樺山資紀 建言

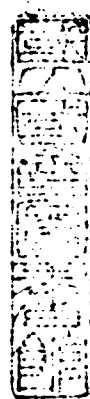
分類 番号	51
	21

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

250481
10
昭和26年11月6日

建言



今回朝鮮変乱事件ヨリ日清韓三國ノ關係ヲ逸起シ事體重大ニ涉リ曩ニ外務卿ヲ大使トシテ該地ニ派遣セラレ朝鮮國トノ紛議ハ速ニ結了セリ然ルニ清國ニ對シ之カ區處ヲ爲スニ至テハ其好結果ヲ收ムルコト蓋シ至難ナルヘシ抑今回変亂ノ起因ハ朝鮮國兩黨ノ政權ヲ爭フニ在リト雖モ之ヲ養成スル者ハ則日清兩國ノ軍隊彼地ニ屯在シ互ニ相嫉視スルニ原因ナルコトハ衆ノ普ク知ル所ナリ然リ而シテ更ニ之カ原因ノ在ル有リ無他我政府ハ夙ク宇内ノ大勢

ヲ洞察セラシ政體ノ組織ヨリ教育、法律、陸海
ノ兵制、凡ソ萬般ノ事業畢ク法ヲ歐米諸國、
採擇シ漸次文明ノ域ニ進歩スルモ清ハ依然舊
套ヲ墨守スルヨリ遂ニ西國政界ノ對峙全ク反
對ノ方向ニ出テ彼ラシテ猜疑疾視スルノ念慮ヲ
醸成セシムト先年臺灣ノ征討琉球ノ處分榮
宗城ノ砲撃江華ノ定約花房公使ノ遭難事
件等陸續相生シテ之ヲ刺激シタル由ル者ニ至
素ヨリ一朝一夕ニアラサルナリ其他細小事件ニ至
テハ一々枚舉スルニ遑アラズ然リ而シテ我政府ハ能ク

其時機ヲ制シ每舉我ニ伸ヒテ彼ヲ屈セシメタルモ
政畧其宜キヲ得ルヲ以テ幸ニ平和ノ局ヲ結ブヲ
得タリ然レ氏外貌ノ平和ハ一時ヲ弥縫スルニ過
キスシテ内心ノ劍戟ハ磨礪已ムコトナリ世運ノ
盛衰大勢ノ傾向ニ從ヒ彼ノ猜疑愈積ミ彼
ノ疾視愈甚シク年一年ニ禍氣ヲ誘致シ危
殆ノ勢日ニ迫リ之ヲ膚寸ノ雲丹ニ相合シテ天下
雨ナラントスルニ譬フ是ノ妖雲ノ陰翳ヲ一掃シテ
青天白日ヲ見ルノ後ニ非サレハ兩國間ノ安寧
平和ヲ永遠ニ保持スル能ハズ此ヲ論ヲ待タサルナリ

今次朝鮮事變ノ際我公使ノ護衛兵ヲ率
ヒテ王宮ニ在ルヤ縱令何等ノ理由アルモ清兵俄
然外ヨリ勢來シ三面ヨリ包圍攻撃シ我兵ヲ殲
殺セシト企テタリ我兵ハ實ニ困難ノ域ニ陥リ止ムヲ
得ス急ニ守縮ヲ張リ苦戦數時間ニシテ敵ヲ撃
退スルヲ得タリシモ全ク正當防禦ノ外ナラサリシ故
何者ヲ濫ニ我軍隊ヲ死傷シ我國體ヲ辱カシメ
其狼藉多禮殆ト名状スヘカサルノ極ニ至ル刺
清兵ハ清國軍ニ混同シ在京城ノ我商店ニ亂
入シ我人民ヲ屠戮シ我婦女ヲ殘虐シ又清國軍

艦ノ水兵南陽地方ニ於テ吉松某ヲ執ハ殘酷ニモ
其身ヲ苦シノ僅ニ朝鮮人ノ救助ニ由テ一生ヲ全フシ
タル等其他清國人カ我人民ニ對シテ暴戾苛虐
ナルハ我國人ノ切齒スル所ニシテ義以テ之ニ報ヒサルヘ
カラサルナリ及顧スル現今我國ノ財政極困難ヲ
告ケ加フルニ陸海ノ軍備未ダ整頓充實セサル所
アルヲ以テ宜シク忍耐シテ十全ノ日ヲ待テ然レ後ニ事
ニ從テハモカ如シト雖モ又惟テ國庫ノ滿盈兵備ノ
充實ハ果シテ後年ヲ期シテ待ツルモカ是レ決シテ豫
切ニ難カルヘシ孰レ彼我ノ國勢ヲ考フルニ土地ノ大小

貧富ノ差等有テ例ハ我ハ一歳十隻ノ軍艦ヲ
調製スルハ彼ハ亦一歳十隻ヲ製出スルコト我ハ
一歩ヲ進マハ彼ハ十歩ヲ進ム其國力ノ權衡ヲ得
サル固リ論ナキヲ以テ茲ニ空シク時日ヲ遷延スル
ハ彼ニ利ミシテ却テ得策ニアラサルハ故ニ断然果
決ノ處置ニ出テ國權ヲ振作シ 皇威ヲ高揚ス
ルハ今ノ時ヲ棄テ將ク何ノ日ニカ在ル實ニ千載一
遇ノ一大機ニミナリ吾ハ否クズシテ苟且ノ策ヲ出テ
一時ノ平和ヲ強繼スルニ於テハ彼ハ驕リ我ハ怒
他日彼ハ外患解クルノ後ニ至リ彼ハ驕リ益長

我ノ怒リ益積ミ一激ノ下忽チ血雨ヲ兩國ノ間
ニ濺クミ至ルハ明ク白ク火ヲ觀ルカ如シ夫レ方今
ノ針砭ヲ維持シ兩國ノ安寧平和ヲ永遠ニ保続
スル前ニ陳述スル如ク妖雲禍氣ヲ掃蕩シ去ル
アラサルハ決シテ能ハサルハ伏シテ清ク我政府内外
ノ情勢ヲ觀察シテ此ノ千載一遇ノ好機ヲ失フ
ナク非キヤノ美斷ヲ以テ非キヤノ事ヲ決行セラレ
ニコトヲ懇願冀望ノ至ミ堪ハス小官等憂國ノ
情衷懷ニ切ナリ敢テ漫リニ戦ヲ好ムヲアラス唯其
機ノ早キミ利シテ勉キノ得策ニアラサルヲ確信ス

ルヲ以テ敢テ僭越ノ罪ヲ冒シ鄙見ヲ陳奏ス
誠恐滅惶頓首謹言

明治十八年二月

陸軍中將高島勲之助
海軍少將樺山資紀

太政大臣公爵三條實美殿

名称	三條実美文書
標題	甲申書變=町建白書字

分類 番号	51
	22 200
	4

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

建白書寫

草莽卑臣某等再拜頓首敬白ス夫レ威權擴張スヘク禮
義卑屈スヘカラス故人推ト禮トヲ失フキハ人其人ニテラス國推ト禮
トヲ廢スルキハ國其國ニテラス伏テ唯ルニ我

朝朝鮮ニ於ケルハ唇齒兄弟ノ國也宜ク對等ノ推ヲ持シテ同列ノ
禮ヲ失ハサルヘシ然レ彼レ屢々非禮ヲ我ニ加ヘ暴虐ノ所為一ニシテ正
ラズ豈我

國威ヲ張リテスラ彼ノ非禮ヲ正サザルヘシヤ然リト雖モ朝鮮人民皆
愚國勢弱小宜ク寬宥ノ處置ナルヘカラス支那ノ如キハ自稱誇
大ノ國ニモ推ヲ重シシ禮ヲ厚ウスベキノ理ヲ識ラサル朝鮮同視スヘ
カラス抑モ今回朝鮮ノ暴行ヲ見ルニ支那大ニ干與スル所最モ甚シト
ス臣等顧フニ平素朝鮮ノ内治ニ関シ外交ニ係ルモ凡ソ支那政府
ノ左右スル所ニ出ラサルハナク動モスルハ朝鮮ノ變故ヲ生スルモノ支那ニ



建及之勢に我

神州皇々ノ國ヲ以テ朝鮮獨立ノ國ヲ待ツニ支那隸屬國ノ一ノ國ト對
等ノ禮ヲ執ル如キノ次女ニ至ルモノナレドモ夫レ對等ノ禮ヲ以テ同
列ノ禮ヲ取ルト虽氏傍ラ斯ノ如キノアル時ハ同列ノ禮是ニ於テ
失シ對等ノ權是ニ於テ廢ス國ノ大恥焉ヨリ甚シキハナシ臣等
草莽ニ處ルト虽氏常ニ彼カ是ト慢ラ憤リ我

國威張ラサルヲ歎ス況ンヤ天下豪傑有識ノ士ニ於テヤ臣等以テ調
リ

廊廟之上ニ坐シテ國ノ重權ヲ執リ要路ノ職ニ在リテ天下ノ安危ヲ
司ルモノハ上

先王ノ威靈ニ由リ下億兆ノ心ニ從ニ宜ク先ツ支那ノ無禮ヲ問フ朝
鮮ノ罪ヲ正シ以テ國人ノ大恥ヲ雪キ

皇威ヲ四表ニ輝カスヘシ然ル頃者聞ク朝鮮ノ談判既ニ其局ヲ結

「我要求應スル満足點至レリト國ノ景福宮實ニ賀スヘシ然レモ臣等私カ怪ム事」清韓兩國ニ関シテ僅カニ枝派一方ノ談判而已之ヲ終ルノ容易ナルヲ臣等淺カノ見ヲ以テ之ヲ安ホスルニ事ハ朝鮮ニ生スト屈氏實見ニ支那ノ關係ナリ然ラハ則テ事變又ノ由テ生スル所ヲ討索シ對等ノ權ヲ重シシ同列ノ禮ヲ正ウシ断然清韓兩國ノ曖昧ヲ糾シ其正スヘキハ之ヲ正シ其譴ムヘキハ之ヲ譴メ緩急其宜シキヲ制セバ既往事變ノ處置ヲ誤ラズ將來不測ノ禍害ヲ豫防スルニ足ルヘシ然ノ事平和ノ局ヲ結ブヲ能ハスハ直ニ問罪ノ師ヲ興シ無道ノ支那ヲ討テ非禮ノ韓民ヲ懲ラシ大義ヲ天下ニ信フヘキノハ豈一日ノ苟安ヲ恃ミ只タ和ヲ之求メテ國ノ大恥ヲ顧ミラルヘケンヤ然レモ朝鮮ノ談判ハ既ニ其局ヲ結フ既往ノ事之ヲ言フモ詮ナシ臣等亦其冀ハクハ

廊廟議支那ノ自稱誇大ノ國ヲ待ツニ優柔ホリ手段ヲ尋テハ大

英断ヲ取リ前日ノ罪ヲ責メテ宥スナク彼若シ罪ヲ知ラスハ速
カニ軍ヲ戒メ海陸ノ兵直今ニ其王都ヲ屠リ偏師荆襄ヲ襲ヒ
(吳越及安南地方ノヲ云ハカルハ即今佛國ノ事ヲ所ナシハナリ)長驅シテ蜀懷ヲ衝キ三面合撃一
擊シテ支那ノ十八省ヲ定メ上

先王ノ威靈ヲ張り下ニ億兆敵愾ノ志ヲ達センノ賜ハナクナリ
ヲ斯クノ如クナラハ

先王建國ノ射嚴然トシテ内ニ益々文明ノ真域ニ進ミ外ニ愈々萬
國ニ威稜ヲ示ス足リ對世ナリ權是ニ於テ立同列ノ禮是ニ於テ
行ハルヘンテヤ

本朝紀綱大ニ張り軍食充備シ加フルニ變報以來全國ノ士民切齒
扼腕或ハ義勇カノ兵ヲ募カリテ以テ

皇軍ノ先鋒タラントテ冀メ或ハ金穀ヲ奉ケテ以テ軍資ニ供ヒテ以テ
ミテ節義ノ士四方ニ奔走シ

國家、大計ヲ佐_レト欲ス而ハ支那ノ情况ヲ察スルニ紀綱廢弛シ上下
離叛シ兵制整_ワス賞罰訂明ナラス軍國ノ政一トシテ與_ル所ナク其
兵多シト虽_モ氏用_{ユル}ニ足_ラス其食備フト虽_モ氏給スル能ハス豈彼
我優劣ノ計校論セシテ明ナラサランヤ是ニ由_リ之ヲ觀シハ實ニ
千載ノ一時失_フヘカ_リサルヲ機也故ニ臣等淺劣敢_テ愚忠衷ヲ陳
狀ス百言ハ一面ニ如カス請_フ階前教尺ノ地ヲ假_シテ臣等可_キ意ヲ
盡_シメヨミ女_リニ威嚴ヲ冒_リス恐懼止_ムコナシ

福岡縣筑後國有志總代

明治十八年二月

真木直人

本莊武八郎

本莊順太

牛嶋栄次郎

阪田藤内

鹿野 淳二

玉井 讃吾

妹尾 未之進

池田 百人

吉川 新五郎

師富 進太郎

堤 衛

元丸院議長伏野常三殿

蘇軾詩集

泰山南嶋中

朝
清
國
海
軍
大
學
印
行

明治七年

丁



名称	三條実美文書
標題	藤田茂吉 著 建白書 尾崎行雄

分類 番号	51
	23 666
	止

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



中二百十二

朝鮮政界ニ關スル意見、私書

朝鮮政略ニ関スル意見私書

其等謹テ再拜三條有栖川西大臣殿下ニ申上候某等殿下ニ
於ル國ヨリ平日ノ交宿音ノ親アルニアラス私書ヲ以テ尊
聴ヲ冒スハ甚タ唐突失敬ノト存候正共事苟モ國家ノ大
計ニ関シ一時ノ得失即チ永遠ノ利害トナルノトニ至テハ
敢テ蕪言ヲ進テ高考ノ資ニ供セサルヲ得ス是レ憂國ノ微
意區々ノ末禮ヲ顧ルニ違アラサルカ故ニ候目下朝鮮ノ變
ハ誠ニ我邦至大至重ノ事ニシテ今日処置ノ得失ハ即チ後
来大利大害ノ因ヲ分ル、所之ヲ姑息ノ為ニ委ス可ラス某
等竊ニ按スルニ我邦ノ地形タル東方ハ渺然大平海ヲ控エ
一旦有事ノ日敵艦ノ此ヨリ来寇セント欲スルノアツモ懸
軍萬里傍近ニ歩ヲ休息スヘキノ所ナケレハ敵艦必シモ斯
迂道ヲ取ラス縱ヒ此ヨリ来寇スルモ亦久ヲ持シ難シ深
恐ル、ニ足ラサ也惟タ深ク恐ルヘキ所ノ者ハ西方日本
海一帯ノ水路ニ居ル也本海ハ朝鮮ノ沿岸ヲ左涯トシ我邦
ノ半面ヲ右涯トシ其間甚ク接近セリ若シ外國ヲシテ一々

に左涯形勝ノ地ニ拠リ居常兵艦ヲ此ニ屯艤スルノ便宜ヲ
得セシメハ日本海軍ノ制スル所ト爲リ苟
モ我ニ少隙アルハ彼レ必ス其武力ヲ恣ニシテ来リ
リ我ハ毎ニ其侵擾ヲ被ラサルヲ得ス侵擾ノ極マル所ハ又
タ必ス國家ノ獨立ニ関係スルノ禍ヲ致サン而シテ日本近
海ノ鎖鑰ト称スヘキ者内外二門アリ曰ク台湾曰ク朝鮮ト
名湾ハ較ヤ遠フレテ手下ス一容易ナラス且ツ既ニ佛國
ノ爲メニ先鞭ヲ着ケラル後來ノ如何ハ姑ク置キ之ヲ今日
ニ議スルノ必スシモ急切ナルヲ見ス朝鮮ノ若キハ是ニ異
リ其斗出ノ端ハ正サニ我邦ノ蜻尾ト相戮シテ門ノ兩扇ヲ
成シ俱ニ日本海最緊ノ関口タリ故ニ我レ朝鮮ト相合同シ
テ斯鎖鑰ヲ堅守セハ以テ外艦ヲシテ一步モ脚ヲ日本海ニ
容ルハ一能ハリラシムルヲ得ヘシ苟モ然ラス朝鮮ヲ以テ
外艦屯艤ノ処ト爲サシムルノ不幸アラハ我邦ハ決テ復タ
日本海ノ安寧ヲ保持ス可ラスニテ患害ノ由テ起ル蓋シ測
ラレサル者アラシク是ヲ以テ朝鮮ヲ輔テ其獨立ヲ全フシ彼

我ノ情誼ヲ厚フスルハ即チ我邦自ラ已レノ獨立ヲ守ル所
 以ノ至謀也前歲以來彼レノ我ニ無禮ヲ如ヘ損害ヲ蒙ラセ
 シ者一ニシテ足ラサルニ我政府ハ毎子ニ寬典ヲ以テ之ヲ
 待チ頃日ハ又々其填補金四十万兩ヲ免ルシタルカ如キ其
 誘導扶助ノ懇薦ヲ極メラレシハ乃チ彼レヲ愛重シテ我輔
 車唇齒ト為ス力故ニシテ其意此ニ在ルベシト信候
 然レ氏某等熟ラ彼國ノ情形ヲ觀ルニ國王頗ル進取ノ志ア
 リト雖ニ其勢孤弱ニシテ之ヲ遂行スルノ器ニ非ス臣下若
 干ノ士所謂ル開化黨ナル者稍ヤ有為ノ材氣アリテ國王ヲ
 輔翼賛成スルト虽氏又々門閥資望較ヤ卑クフシテ且ツ其
 數極テ寡シ其他ハ所謂ル事大黨ナル者朝野ニ充滿人樞要
 権力ノ地ハ皆ナ事大黨ノ占ムル所トナリ社會ノ実柄攀テ
 此輩ノ手ニ係レリ加フルニ彼國財用大ニ窮竭シ動モスル
 ハ救フ可ラサルニ至ラントス故ニ縱ヒ國王及開化黨ノ徒
 進テ支那ノ干渉ヲ排絶シ文明ノ治ヲ布キ國威ヲ振起スル
 一ヲ務メ能フベキハ地位ニ達スルトスルモ財用窮竭ノ病

アリテ後ヨリ~~之ヲ~~制肘スルトキハ蓋シ十分其圖ヲ展ヘ難
キ者アラン況ヤ~~東大党~~即チ支那ヲ仰戴スルヲ好ムノ輩社
會ノ實柄ヲ制シ~~之ヲ~~制主及開化黨ノ力ハ竟ニ之ニ勝フ可ク
ルハ勢ナルヲヤ夫レ事大党既ニ勝ヲ可ラサレハ支那ノ干
渉決テ免ル可ラス支那ノ干渉決テ免カル可ラサレハ朝鮮
ノ獨立ハ復タ維持スベキ莫キ也何ヲ以テ之ヲ謂フ~~之ヲ~~朝鮮
政令敗壞シテ武力腐朽セル自家ノ獨立ヲ維持スルヲサヘ
之レ苦マントス豈ニ他人ヲ保護シ扞禦スルノ力アラシヤ
今ヤ歐洲諸國英ト云ヒ獨ト云ヒ佛ト云ヒ露ト云ヒ苟モ些
少ノ無禮ト損害トヲ已レニ加ヘラルハ~~之ヲ~~アラハ其罅隙ニ
投シテ以テ其内事ニ干渉シ若シクハ其要港ヲ占取スル如
キハ其屯モ欲スル所也此時ニ及テ支那ノ之ヲ措置拒作ス
ル~~之ヲ~~能ハ~~之ヲ~~勿論支那ノ朝鮮ニ干渉シ居ル~~之ヲ~~ハ即チ
チニ斯葛藤ヲ造出スルハ本トナルヘキナリ之ヲ要スルニ
朝鮮ニシテ支那ノ干渉ヲ免ル可ラサル以上ハ我邦之ヲ輔
テ其獨立ヲ全フセシメ我輔車唇齒トナスヘキノ望ナシ朝

鮮ノ獨立全フスベキノ望ナキ以上ハ我邦ノ安寧危フム可
ク、コレヲ獨立亦ク憂フ可シト存候
是故ニ某等ノ見ル所ヲ以テスレハ宜ク今回ノ変ニ乘シ彼
レノ我レニ加ヘタル無禮ト損害トヲ責メ進ラ彼レノ内事
ニ干涉シ以テ之ヲ併略スルヲ務ムヘシ何トナレハ彼レ
ノ我レニ加ヘタル無禮ト損害トハ從來一ミシテ足ラス而
カモ我レハ毎ニ寛典ヲ以テ之ヲ待チタレハ今回ノ變ニ及
テ武力ヲ以テ之ニ臨ムモ天下列國ニ對シテ我レ方疏説明
ノ辭有ル一也我レ先鞭ヲ着ケテ朝鮮ノ保護ヲ司ルトキ
ハ自餘各國之ヲ蠶食シ若クハ鯨吞セント欲スルモ勢爲ス
能ハサル一ニ也既ニ之ヲ併畧シテ我掌上ニ置クトモハ日
本海ノ鎖鑰ハ悉ク我レニ歸シ我邦ノ安寧ト獨立トハ甚々
其基ヲ鞏固ニスルヲ得ルト三也且ツ朝鮮ヲ放テ今日ノ情
形ヲ遞傳義續セシムルトキハ骨肉相殺ノ慘交モ其内ニ起
リ外國之ヲ虐待酷遇スルノ悲モ亦タ相繼テ至ラントス故
ニ我邦早ク之ヲ保護シテ其悲慘ノ途ヲ杜サキ以テ其國家

ヲ安穩ニセシハ同類相愛ノ公義茲ニ全フシテ彼國ノ文
明必ス大ニ發達ス方ニ向フベキト也苟モ然ラス今四亦
タ姑息ノ局ヲ結フトキハ縦ヒ條約ノ面我汚辱ヲ雪ク足
ルベキ賠償ヲ取ルモ彼レノ財用窮竭ヲ以テ迎モ之ヲ完納
スル能ハス其非策タル一也有名無實ノ賠償ヲ取テ自ラ満
足スルトキハ天下列國我レノ大度ヲ称ヤスシテ反シ我レ
ノ怯弱為ス無キヲ侮リ大ニ輕蔑ハ念ヲ長セン其非策タル
ニ也且ツ我レ從來數度ノ汚辱ヲ忍ビ彼レノ無禮ト損害ト
ヲ赦ルシタルニ猶ホ今回ノ變アリ若シ今ニ及テ英斷果決
ノ為ニ出テ、痛ク之ヲ懲ラスニアラスンハ後來ノ事亦タ
豫期ス可ラサル者アリ一時出師ノ費用ヲ憚カリ後來無限
ノ損害ヲ招クハ財政権畧両ナカラ宜キヲ得サル者其非策
タル三世況ヤ我レ手ヲ束テ自餘各國ノ蠶食鯨吞ニ任スハ
我邦ノ安寧ト獨立トヲ危フスル實ニ測ラレサル者アルヲ
ヤ其非策タル也夫レ今回ノ變ニ棄ミテ朝鮮ヲ併畧スル
ノ利タル斯四理由アリ之ヲ供畧セサルノ害タル斯四理由

アリ四害ヲ去テ四利ニ就ク。狹提ノ童子ト虽モ其去就ヲ決ス
ルヲ得ヘキ也。是ヲ以テ今回ノ変ニ即テ平和姑息ノ局ヲ結フ
ハ其等断々予トノ不可ナルヲ保證セシト存候。然氏今日ニ
於テ武力ヲ用テ朝鮮ニ臨マント欲セハ先ツ支那トノ葛藤ヲ期
待セサル可ラス。支那トノ葛藤ハ其等カ國家ノ為ニ尤モ希
畚スル所也。夫レ支那ノ兵備ノ憤々トノ振ハサルハ凡ノ彼國
ニ游テ實際ヲ親睹セル者ノ熟知スル所。且近者佛國トノ葛藤
ニ於テ其実益々吾人ノ耳目ニ暴白シ彼ノ兵士百萬アリト虽
モ唯タ敵ヲ望テ遁走シ良家ニ入テ抄掠スルヲ知ル耳。彼ノ
兵艦百艘アリト虽モ唯タ陣ニ臨テハ其堅艦利砲ヲ棄テ逃レ
手素無事ノ日ニ在テハ聊カ以テ將校晝寢ノ処ト為ス。我知ル
耳。葛藤ノ極ル所我レ支那ト戰ヲ開カハ我十餘隻ノ兵艦ト二三
萬ハ兵士トハ以テ支那全國ノ兵艦兵士ヲ壅破スルニ餘アリ。是
レ其等誇負ノ空言ニ非ス。苟モ支那ノ事情ニ通曉セル者ノ
常ニ洞察セル所也。我高モ支那ニ戰ヒ克タハ天下列國未タ
日本ノ名ヲ知ラサル者及ヒ稍ヤ之ヲ知ルト虽モ日本ハ纔

カ支那ノ属邦タルニ過キスト妄想セル者忽ニシテ日本ノ
實ヲ知リテ其輕ス可ヲサル者タルヲ思ハシ其國威ヲ耀揚
シ國位ヲ進升スル蓋シ少ホニ非ル也且ツ我レ既ニ支那ト
戰ヲ開カハ今日支那ニ向テ反對ノ關係ヲ有セル佛國ヲ誘
ヒ直ニ我ト攻守同盟ノ約ヲ結ハシムルヲ得ヘシ既ニ佛國
ト攻守同盟ノ約ヲ結ハシ我ハ則チ歐洲文明國ト對峙ノ地
位ニ立ツ者ニシテ其後來ノ利益ノ多且大ナル量ル可ラサ
ル者アル也是ヲ以テ我レ朝鮮ヲ俟畧スルニ因テ繼キ起ル
所ノ支那トノ葛藤ハ國家ノ為メ尤モ慶スベキト存候
以上陳ル所ノ鄙見鐵下苟モ以テ取ルヘシト為サハ請フ之
ヲ朝ニ主張シ國家ノ大計ヲ御謀被下族様某等ノ銳意誠志
以テ殿下ニ望ム所ニ御坐候何分書辭草々ニシテ未タ十分
中懷ヲ詳盡スルニ足ラス殿下公退ノ餘若シ某等ニ面晤ヲ
賜ハシ其等幸ニ縷述悉陣シテ高問ニ對フルヲ得シ然レモ
殿下ノ聰明ナル必ス尊慮ノ既ニ此ニ及ヘル者アラン果テ
然ラハ某等ノ幸復外何ヲ以テ是ニ加ヘン請フ垂鑑ヲ賜エ

矢枝森尾犬箕藤
野元田崎養浦田
負長文行勝茂
雄辰藏雄毅人吉

朝陽
一
卷

蘇其才
田南
其
古
入

名称	三條実美文書
標題	命 去 清

分類 番号	364
	1

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

三條大臣閣下

外中八

明治十五年



朝鮮人俞吉濬上書

明治十五年



伏以下生俞吉濬尹致吳以霸旅之踵遊

白理之下竊喜兩國之情誼能保萬世之親

睦矣不幸近者逆賊逞應狀弑敵邦之國母殺

害自家之私親又延及于

友邦之公賓此空

前絕後所無之事也生等叫地呼天誓不共覆

載而自顧智不足以經事力不足以報仇哀々哭

泣控告

大邦伙乞

閣下特垂矜憐惻怛之情以察生等窮迫之狀



馬是應性未殘酷前日執政之時殺人如麻而其
間為朝臣所論不得已還政于敝國主上退處私
第常自憤鬱期欲一售狼毒而勢移權去
不能易發故陰招暴虎之輩充滿門庭暗造
浮幻之言騷擾人民敝國政府以自國主上之所自出
也故不能禁制至昨年冬有一發之舉而事
竟不成則歸之其子愚蠹之載先矣迺今者則
蓄謀秘發至于此境生等出在 貴國雖不能
詳知顛末然自今日以後是應是敝邦人民之

所共讐也而在 貴國亦為可討之敵也故

貴國應有問罪之兵此事關于足應非在敵國

政府則生等感戴義舉徹骨未忘伏惟生等

義之所在宜縞素從之以圖報國家之讐而又伏

思之此舉只以貴國問罪之誼為名則敵邦全國

之人皆當驚惑思與 貴國為敵必至大舉而

後可以成功雖曰功成在東洋今日之事勢不可

大興擾亂之端也伏願

閣下以其兵借敵邦之人為復讐之舉則敵邦有

義之士亦當蜂起相應可合為一不至大舉而事
歸萬全夫以明罪之舉無復讐之義則名正言
順一舉而兩得者也生等又有日夜恐懼之懷
焉若又以明罪復讐之名告知于賊輩則賊輩
必當迫于勢力大禍將及于敝國主上與東宮此
不測之機而亦可豫睹於未萌者也伏乞
閣下作一書于呈應告以奉戴君父勿使有犯
越之舉而假表和意以緩其心派送軍艦航于
仁川近海徐觀時變以救全敝國主上與東宮
以處安地然後明正是應之罪則一以成

貴國救死之義一以成生等復讐之忠而可以
保全君父於危死之中伏願

閣下諒察之生等當前至馬關與朝士金玉均徐
光範相議而未知

閣下之處分若何故先此奉白不敢長言伏乞

閣下下鑒後即賜尺堦之餘地敢有哀憤之上
達

壬午貴八月六日下生 俞吉濬

尹致昊

上書

名 称	三條実美文書
標 題	命 告 瀧

分 類 番 号	364
	2止

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

250463

5

昭和26年11月 日

三條

大臣閣下 下執事

外務十二号

明治十八年?

朝鮮俞吉濬

謹封

伏以生等、敢陳猥妄、以瀆

白聽、退處旅舍、伏俟

嚴責、向辱伴者、下問馬關之去

就、生等、誠惶恐、不知攸措、竊自顧人微、言賤、不足取信、重

也、故不揆濫突、再煩

執事、伏乞

明公、恕而察之、夫患難相救者、隣國之道也、雖敵必報

者、臣子之義也、今弊邦、有不意之患難、有難救之讐

敵、是在生等、為必報之義、在

貴國廟堂之政略、救之

可也、不救、亦可也、然、事係弊邦之內訌、以弊邦之人、宜不控

告於 貴國、反可嫌

貴國之欲有干涉、時勢不同、事

機有異、故、不可不謀之

貴國者也、而其為羞愧、無面



立天下、豈生等之所樂為者哉、實不得已之事也、彼是應
發積年之謀、逞乘時之狀、然彼亦知以今日之朝鮮、不能
敵貴國新式之兵、則談判之間、必不生逞庭而箇々屈
從、可償者償之、可謝者謝之、假悔前日之不知、願結平和
之局、至其時、生等不敢知貴國亦有如何之處置、又未
知是應就迷不悟、自取禍敗、而弊邦與清國、有舊來
關係、則清國欲因此機而逞專制之計、必不袖手傍觀、藉
兵而借名於問罪、是應使弊邦人受其指揮、則弊邦
自此不能復謀獨立之事、舉全國之權、盡歸之清人之掌
握矣、若或事不至此、是應本來依賴清庭者也、隱然有
敵貴國之意、則必舉外交而全歸之清廷矣、然則清
廷將執朝鮮外交之權、以立於萬國之間、而至於今般之

廷將執朝鮮外交之權、以立於萬國之間、而至於今般之事、亦必代為談判、若貴國不受、則清人以為朝鮮是我所屬之邦也、又其外交皆我所知也、云爾、至其時生事、又不敢知、貴國有如何之處置、而與邦全國之人民、內不能救國、毋之讎、外而受他人之羈絆、遂失本國自有之權也、是故生等敢不辭唐突之罪、累辱

台鑑者也、若貴國不得已、至開戰之端、請勿以貴國行之以生東洋之風波、惜之與國之人、以濟兩國俱利之道也、然非敢願強費不可費之兵、以為與邦人復讎敵也、以為與邦人謀獨立也、惟

明公案之生等、非敢效不得熟中者輩之所為、妄希生
事於無事之時、以濟私憾也、生等、豈敢有他心哉、生等、以
布衣、不敢與知於兩國大事而、若如所陳、則弊邦之盛衰
安危、惟在 貴國應對之如何、而其外、非生等、所可集
及者也、伏乞

明公教之、敢達蒙昧之見、恭候

乘輜萬福

陽曆八月十三日 下生

俞吉濤

尹致昊

上書

名 称	三 條 実 美 文 書
標 題	ハワイ皇帝御親書泉

分 類 番 号	34
	1

国 立 国 会 図 書 館

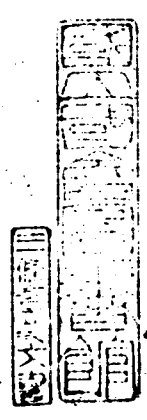
登 録 番 号	
------------------	--

左府奉旨傳一見王為首年一為上具親

人帝曰敕使

御親書案

長呼有子



啼哇國皇帝江之

御親書案未定稿

告

陛下曩キニ敎邦ニ来遊セラル、中朕圖ラス握

手相見ルノ歡ヲ得朕カ本懷何事カ之ニ若カレ

唯恨ラクハ陛下淹留ノ日久ニカラス談話未タ

熟スルニ暇ナク勿々訣別ス爾来輦輿益々安寧



邦ヲ發セラル、ノ後亞歐米各邦ノ繁都盛市ヲ
巡遊ヤラレ風土人物ノ奇ヲ探ラレ客歲初秋ヲ
以テ恙ナク貴都ニ着輦アリシト聞ク朕茲ニ平
安ヲ賀ス陛下更徽京ニ滯留ノ日話次朕ニ説クニ
亞細亞聯邦合従ノ策ヲ以テセラル朕深ク陛下
ノ卓見ヲ賞賛ス加之朕ヲ以テ之カ盟主統領ノ
任ニ當ラシメントスルノ如キハ陛下朕ヲ信愛
セラル、ノ誠心ニ出ンモノニレテ朕寔ニ感銘

ニ堪ハサ^ルナリ惟^ルニ我東方諸邦ノ衰頽スル

日既ニ久シ且^レ少ク寸ヲ累子尺ヲ積ニ漸次以テ

大勢ヲ挽回スルニ非ス^レハ焉能^ル之カ強盛ヲ致

スヲ得^ルヘケニヤ此時ニ當リ東洋諸邦ハ互ニ相

同盟連合ノ策ヲ固フシテ以テ其力ヲ合一ニシ

夫ノ有力ナル歐米各国ト對峙シ獨立ヲ將來ニ

全フスルヲ計ルハキハ目下東洋諸邦ノ急務ニ

シテ其命脈ノ關ス^ルナリ然^レモ之ヲ熟慮スル

ニ其事業々々宏大悠遠ニシテ其結果、如何ニ
至テハ漠然豫測スハカラサシモノ、如シ清國
ナリ印度ナリ中央亞細亞ナリ其風土人物ヨリ
言語人情ニ至ルモ各其類ヲ同フスルモノ少シ
又其版圖、如キモ東西或ハ千里ニ遶_直ルモノアリ
故ニ之ヲ思ハハ彌々遠ク之ヲ謀ルハ益々難
シ況ンヤ不肖何ヲ以テカ能ク盟主ノ重任ヲ擔
負スルヲ得ンヤ陛下夫レ之ヲ諒察セラレヨ

又顧テ敵邦内地ノ現況ニ就テ觀察スルニ民心
ノ活動日一日ヨリ劇々ニシテ其勢輒モスレハ過

激ニ流レ國家ノ秩序ヲ錯亂スルノ兆アルハ陛

下モ亦嘗テ目撃セラハ所ナルヘシ故ニ治術

制法モ其進歩ノ程度ニ從テ改良ヲ加ヘサレハ

得ヲス朕是ニ於テカ民心ノ歸向ニ先テ密歲十

月詔ヲ下シ明治廿三年ヲ以テ立憲ノ政體ヲ創

立シ君主專制ノ舊習ヲ一洗シ國會議院ヲ開カ

ントスルノ事ヲ宣告セシメ普子ノ朕カ主旨ノ
アル所ヲ全國ニ知ラシメ前途施政ノ標準ヲ顯
シ國家又紛乱ノ患ナカラシメントス國會ノ制々
ル專ラ之ヲ歐米各邦ニ模擬スト虽國自ラ天然
固有ノ質アリ故ニ彼是ノ情形難易ヲ斟量シ制
法ノ其適宜ヲ得ルニ非レハ美法良制ト臣等ハ

然而テ

画餽ニ屬スルノ患ナキヲ保セヌ朕カ奉朝補佐
ノ臣日夜子々唯事ノ完成セサラレヲ憂フ内政

、狀情既ニ斯ノ如ク夫レ煩多ナリ然ルヲ朕一
朝之ヲ放棄シ去テ海外萬里ノ地ニ出遊シカヲ
異邦ノ事ニ專ラニセントスルハ朕カ敢テ爲ス
ニ忍ヒサル所ニシテ是即チ亘細亘聯邦ノ策ヲ
以テ之ヲ今日ニ奉行シ難シトスル所ナリ然
リト雖朕深ク此鴻業ヲ將來ヲ期シテ以テ大成
ニ至ラントヲ熱望ス故ニ居常之ヲ胸裏ニ存シ
朕アレハ以テ其企圖ノ方畧ヲ考察シ敢テ僕怠

スルヲナカルヘシ陛下ニ亦朕ニ告グルニ其所
見ヲ以テセラルニ斯ノ如ク相互ニ心肝ヲ吐露
シ以テ前途ノ策ヲ賛助シ他時万一ヲ補裨スル
ヲアラハ豈特ニ日布兩國ノ幸ノニナランヤ又以
テ全亞細亞ノ福祉ト云フハキナリ書ハ言ヲ盡
サス陛下夫レ之ヲ諒察セヨ書外餘事ノ如キハ
外務卿井上馨ヨリ陛下ニ奏上スル所アルヘシ冀
クハ陛下之ヲ聴納セラレ其之ヲ信スル又朕ノ

言、如クセラレヨ皇天陛下ニ萬壽洪福ヲ降授
ナラレトヲ祈ル

陛下、良友

於東京赤坂離宮

御名

明治十五年一月 日

布哇國皇帝陛下

名称	三條実美文書
標題	川村純義 報告書

分類 番号	34
	2

登録 番号	
----------	--

別紙朝鮮事件海軍卿ヨリ
届出間入回覧候也

明治三十四年八月十日 三條太政大臣

大木系儀
山田系儀
松方系儀
黒田顧問殿

金剛觀天城觀馬路觀義二日

金剛觀馬路觀義二日
所祭航義共只今別能通報有之候条
此段也江候也

明治十年八月一日
海軍省村純義
大佐大佐殿

川村海軍少将

陸軍中佐

馬場大蔵少将

今朝釜山へ行

壬午八月丁日

午前〇時五十分馬場大蔵

私云云云

奉體出體都台西庭

今曉着體道花房公使三南會候處京城交
事、大略別紙、隨、稍相、候、有、外務、御
來着、上體、體、有、候、如、何、可、有、被、中
談、候、陽、兵、到、底、海、陸、身、仁、川、港、被、若、造、候
義、故、片、特、早、被、地、着、體、其、負、揚、陸、手、答
相、成、候、方、上、果、有、若、急、中、體、可、然、存、明、朝
衆、航、事、遂、時、議、候、就、談、判、着、平、為、道
藤、領、事、仁、川、使、衆、都、台、相、成、候、系、此、旨、也
庭、上、候、也

子、事、月、吾

馬、陸、金、剛、體

中、體、隊、司、令、官

江和海軍少將

川村海軍卿殿

建之太山在田副田領事、前田領事ト交
代元山港轉勤、有磐城艦義、天城艦着次
其前田領事、彼來為致金山、青港同所
之副田領事、彼來為致元山、磐城艦候様
相達置候、此首之併セテ也、江候也

機密弗止七漏信相認候後午後三時頃東萊
府使突然來館政府より公書ヲ奉レタル間其
爲メ來館致シタル旨申聞別紙寫、訓令本書ヲ
示レ放此度、事變ハ全ク内亂ニ屬スル所奈端
遂ニ貴國ノ公使館ニ及候政府ニ於テモ多數ノ大
員其殃ニ罹リ、兵卒ハ冬ク救徒タル以テ其保
護モ不行由故真以テ氣、毒千萬、次第ニ
付早速貴政府へ書契モ可差出候得共先
急ニ此意ヲ領事館ニ通知シ本國ニ報知
方依頼可致ト、命令有ク候旨申聞尚前
案ノ意味ヲ種々所解候内本使大院君ヨ
リ私書ヲ轉送其意味此度、事ハ全ク朝

鮮國ノ内難ニ日本國ニ関シタルコトモ無ク
処其余勢公使館ニ及ヒタルハ真ニ不安ノ至リ
也併ニ朝鮮人民ハ遠方ニ在テ大声ヲ発シ
小石ヲ投打ツ位ガ極点ニ決レテ内逼レテ國ヲ
抹ノ事ハ無ク使員等其辺ノ性質ヲ不弁
唯其形勢ノ劇ヲ見テ驚愕ノ余過慮シタリト
思ハルモ然有テ候ニ付昨日未此度事変
イ首謀人御尋申タレモ未タ不相分トモ被申
聞候得共小官ハ此私書ヲ送りタル人コソ此首謀
人ナルヘリ被考候旨申出シタル処少シ答ヘタル容体ニテ
何処より聞ヒタルヤト事故小官在京中所聞
ノ持説履歴及ヒ此度事変結果ヲ察シ
加フルニ世間ノ評判ヲ以テスレハ決ニ聞違無ク

事ト信用スル旨ヲ述ヘタレハ真ニ何人ナルハ何レ不遠
内其確報ニ得ラルヘシト申シタリ府伯ソ謂所ニヨレハ
国王ハ身上何ノ異変モ無之哉台鎬ハ此節病
氣差重リ命旦夕ニ在リトノ報知ナレハ今頃ハ既ニ
歿去シタルトハ思ハル是ハ自棄ヲ仰キタル歟又ハ進メタルナルヘシ
関詠翔ハ無変ナル由其外ハ大抵第廿七号 附
属書ノ如シ府伯ニハ御口上ノ趣ハ兎ニ角政府ヘ轉
報可致旨申聞歸府為致候後兼テ居留地ヘ出
入致シ候最モ海津陸軍中尉親シキ京城人朴
永圭ト申者京城遁逃シ来候趣海津中尉ヨリ聞及
候間同中尉相談ノ上同人ニ就キテ中尉聞取候分
別紙乙號ノ通り有之東萊府報知ノ廉ト大抵
符合候様被察候尤朴永圭ハ軍艦便ニテ淺野

朴永圭
山道ト
相意ハ
ニ同人共
ニテヲ冀
存シ日
扱セト
ニテ特

眞ニ何人ナルハ何レ不遠

タリ府伯ノ謂所ニヨレハ

六之浅台鎬ハ此節病

ノ報知ナレハ今項ハ既ニ

仰キタル歟也出中ナルヲ以テ

大抵第廿七号附

ノ趣ハ兎ニ角政府へ轉

候後兼テ居留地へ出

尉親シキ京城人朴

ハ趣海津中尉ヨリ聞及

就キテ中尉聞取候分

ハ府報知ノ廉ト大抵

王ハ軍艦便ニテ浅野

。朴永圭ハ閩泳翊ノ腹心ノ者ニテ亂ヲ避ケテ釜
山ニ遁レ来リシ者ナリ別紙聞取候序閩泳
翊意如何ヲ海津中尉ヨリ朴永圭ニ問ヒタル
ニ同人答テ曰ク閩泳翊ハ日本ヨリ手強キ談判アラ
ニテヲ冀望シ其吏アル迄ハ何レモカ潜伏シ生
存シ日本ノ軍艦仁川灣ニ来ル等ノ事アラハ之ニ
投セテ欲ス又日本ヨリノ談判穩カミテ今ノ形勢
ニテ持續スルハ生存ノ望ナシ云々

吳鑑一同下関、渡航仕候此報、外務卿へ
上申致し候間、為念此段申上置候也

明治十五年八月三日

領事副田 節

辨理公使花房義實殿

議政府爲相考事、日昨軍卒之作鬧事、不
容不急、通知於日本、故今方撰出書契、
因夜下送、先以此意備辭、公幹於領事官、
是遣形止馳報、宜當向事合行移關、請照
驗施行、須至關者、

右

關

東萊府使

壬午六月十一日

申時

幕動ノ趣ハ岡氏ヲ滅シ外人ヲ斥クル爲メ大院君
カ企テタルニテ其使役シタル者ハ訓局ノ軍兵五
千七百七拾五也先是訓局ノ軍兵ニ給料ヲ渡
サハル事已ニ一年間本年六月ヲ至リテ壹ケ月分ニ
給料ヲ渡シタルニ其給料陳腐米ナルヲ以テ兵卒
軍資監ノ至リテ庫直ニ逼リ之ヲ改テタルヲ以テ
庫直ハ旗惣四名ヲ_{下士}捕縛シタルニ兵卒其冤
ヲ武衛都統使李景夏及壯衛大將申正臨
ニ訴ヘタル所皆不知ト答ヘ且行テ捕縛ニ同意ト令
セシ都兵卒ハ又捕縛ニ同意ト捕廳ニ入りタルニ
其名諱ニ屢セラレ二名ハ將、教サレモスル有様ナレ
ハ即時二名ヲ赦ト出シ直ニ大院君ニ至リ以事

ヲ得ヘタリシニ大院君等猶守意ト案テ事ヲ奏
ケント企テ居所ニ怡モハ時機ノ會ミタル大院君乃
曰汝等之願意ハ其道閑寂リヘキ間夫ト云スル
姓名ノ者ヲ盡ク誅殺シ日本人ヲ廢殺セヨト別紙
ニ如ク自ラ姓名ヲ書シて與ヘタルハ兵ヲ率即チ去
テト百名ヲ糾合シ先下部監謹錫ヲ繫ク次ニ清
水館ニ入リ夜ヲ至テ兵ヲ率一送リ集リ手ヲ四方ニ分
チテ諸岡ヲ撃ツラ別紙記名ニ者ヲ殺シ王宮ニ迫ル
大院君モ自ラ王宮ニ入リ兵ヲ率ヲ戒メ且曰唯我ニ
テ用ヒヨ我今國家ノ事ヲ憂セトストテ即チ
入テ王宮ニ迫リ遂ニ王后ヲ殺殺シタリ
廢亂後ニ形況ハ凡テ日本人ニ親ミタルモノ及ヒ
開化ニ意アリト称セラル、者ヲ捕ヘ或ハ殺シ或ハ

獄ニ繫ク等ニ頻ル優クナリ國王ハ無事政府
ハ常ニ異ナル事ナク大院君カ政道トナリ百事ヲ
總裁モ百姓及ヒ兵卒ハ皆倭人ヲ殺シタリト
テ雀躍喜舞スルに至ル此景唯京城内外ノミナ
ラス下東ノ途上ニテモ能クコソ倭人ヲ殺シタリ
ト云者一二ニ止ラス閔泳翊洪永植ハ未タ死セス
隠匿セリ現ニ政府ノ意向ハ飽マテ日本ト戦フ
ト云意ニ非ラス必罪ヲ謝スル外ナカルニ然レモ若
此終ニテ和親ニ至テハ朝鮮人ハ猶日本人ヲ蔑
視シ人心愈清國ニ向ヒ假令和親ニ至ルモ眞乎
ノ和親ハ難カルヘモ憂乱ノ為ニ害ヲ蒙リタル
場所甚タ多シト雖モ其重ナル者ハ別記之
如モ清水館近傍ニテ相踏踐シテ死ニタル者

此時王ハ床下ニ潛ミ王后ハ何レヘカ匿レタリ兵卒
皆王后ヲ殺セタタト呼ハリタレハ王床下ヨリ出テ
后ヲ弑スルノ理アラハ我自ラ手ヲ下サント云ヒテ王
后ヲ呼出シタリ此時大院君毒酒ヲ持シ謂テ曰
ク之ヲ吞サレハ国家治ラス宜ク之ヲ飲ムハニ
后不得已之ヲ飲テ斃ル

及ニ銃ニ当テ死シタル者三十名計監營ニテ

將校壹名南門内ニテ池田ノ為メニ切ラレタル

モノ是ハ同人ヨリ切ラレハラ
現ニ見タル者ノ趣其外ハ刀ニテ殺サレタル

モノナモ堀本ハタミク下都監ニ在テ鮮人ノ尤モ惡ム処当日

下都監ヲ出ルニ当テ飛石ニ額ヲ破リハチタキヲナシ切リ出タルニ

石ノ下ル雨ノ如ナルヲ以テ刀ヲ脱シテ人ヲ切ラセトセモラ背後ヨ

リ棍棒ヲ以テ右手ヲ打タレハ刀ヲ取落シタルヲ賊徒无

刀ヲ執テ之ヲ切り殺シ遂ニ片タトナシタリ人アリ片体ヲ

集メテ苞ニ盛リ何ニカ捨タリキ又々岡田池田黒澤

南大門外ニテ死ス死体ハ門内ニ一ヶ門外ニ蓮地ニ一ヶ

大路ノ曲角ニ一ヶ監營前ニ三ヶ巡査ナラシ清水鉾方

ノ蓮地ニ一ヶ後ニ何レニカ取捨タリ先頃上疏ニテ

獄ニ繫カレタル白樂寛九日韓曆ニ獄ヨリ引出シ直ニ兵

隊指揮ヲ命セタル也

漢城灰盡ナリシ家大畧左ノ如シ

天然亭

閔泳翔

閔謙鎬

閔台鎬

同毀没サレタル家

前領議

李景應

京畿監司

金輔鉉

尹滋真

李鍾承

尹雄烈

韓聖根

李鎬翼

海軍省

海軍省

金玉均

今回死傷大臣

中宮殿

世子妃

前領議政

李景應

宣惠堂上

閔謙鎬

子 某

京畿監司

金輔鉉

參判

閔昌植

輔國大臣

閔台鎬

前惠堂

尹滋息

前大將

李鍾承

南陽府使

尹雄烈

參判

韓聖根

司

李鎬翼

其餘上中下死人不可形記

名 称	三條実美文書
標 題	長上馨・長上毅 佐渡電報 軍

分 類 番 号	24
	3

国立国会図書館

登録番号	
------	--

乙号

トノ系ニテ

井上毅

井上

現存條約ノ權利ニ從ヒ平穩ヲ旨トシ外國ノ干渉ヲ受ケスシテ直接ニ朝鮮ト結局スルハ我が準チスヘク且準チセシト欲スル方途ナリ乍併合國カ提出シタル^{グロトラフニシス}要求ノ勸解ヲシテ若シ朝鮮ニ忠告シ他ヲシテ我國ニ向テ神速ニあるナリ陽々シク禁ヘシムルニ止マラシメハ之ヲ領有スベシト雖モ之ヲシテ若シ干渉又居中勸解又之ヲ歎スルモノナラシメハ我が於テ之ヲ拒絶セサルヲ得ス將又馬建忠ヨリ^リ提出ヲナシタルナキガ如クシテ我が之ヲ彼ニ求ル理由アルナシ乍併合主義彼若シ之ヲナ

廿八日、米國ノ提督アリ、受領スルト回報ノ砂束ノ下ニ
之ヲ受領スルモ妨ナシ

貴方ニハ直ニ朝鮮、暹羅、之他國及花房ノ形、
付充分ノ報告ヲ得、嘉勉ノ海船ニテ之ヲ回送ス、
之陸上ノ負、收及軍艦ノ收書、清國出金ノ一ニ要ス、
充分ノ報告ヲ得ル、一ニ要ス、緊要ナリ

好意ノ勸解

好意ノ勸解

甲子

下ノ森井上毅ヲ機密電報ノ如譯

花房氏ハ竹添ニ托シテ左ノ云ヲ申越セリ

米國軍艦モノカミ^{カミタニ}艦長ハ吾等ノニ居間調善ヲ

為サシヲ申出タリ是ハヨレグ^レ氏カ合衆國大統領ノ

意ヲ函ケテ同艦長ニ通達セシナリ花房氏ハ米法

二國ノ居間調善ヲ函知スルモ指問甘之哉但トハ

米ノ調善ヲ函知シテ法ノ調善ヲ吾等ス^{一キ}偏

形裁所制令ヲ待ツ法國ナリハ何ノ電報モ世ニ裁

ハ日正四ノ午前十時五十分

井上毅

加勢卿宛

名称	三條実美文書
標題	長上警 宛 電報 軍

分類 番号	34
	4

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

源

花房ノ報告并ニ中山ノ吐ク依リテ事ヲ得タリ

政府の數度花房ノ請を止メテ之ヲヤカス此時當リ
馬達忠ハ花房ヲ止テ湯島を賣リ來リ清國政府
ヲ訪テ停調ノ意ヲ今ノ通ニ受テ何日カ大決着ヲ要ス
ルコトナリ船リヨリハ花房ヲ出シ船等ヲテおきテ
和安島ヲ停泊セシメテ言出スルハ花房ハ閣下ノ親ヲ
侍ヒ馬房ノ停調ヲ以テケサリシガ如ク之ヲ減ルヲ許
スルコトナリ肉々血々シムルト見エ而シテ忍ビ難ク帰ル
似テトシテ李雄元副使トシテ金宏基ノ仁川府ト見
越シ氏中雄元ハ病氣ハ今全愈ナリト云フ也
ヲ以テ何事モ決定セズ花房ハ上陸シテ李雄元ニ面會シ
テ後ツキナリ事ハ決着ナリハ廿五號巡艦船ヲ
乗リテ仁川ハ大約二日ナリ費ヤシ三十日仁川府ニ於テ
親會シ双方ノ批准ヲ二月ヨリ交換スルヲ約セリ此

於テ馬達也モ今迄國モ停波ヲ成サズ思フク馬達也
ハ密ニ我ヲ幫助セリ大波ヲ連シ行事極多又ヨ彼
ヲ誘カシ出セリ曰ク王様ハ来ヨ死セズシテ何所ノ方遠
ニ居ハトノナリ金玉均ハおり也ニ在ハト又工同ノ漢
湯者ニ於テ大波ヲ成ス向人云シタリト云フ
船中希ニ陸兵ノ多ク新氣流リシ之ヲ極ニテ死スルモ
ノアリ

九月三日

手前ナリ可貴

手前ニ可貴也

下ノ森

也

井上ゆゆ々

名 称	三條実美文書
標 題	壬午変 花房公使報告書

分 類 番 号	34
	5

国立国会図書館

登録番号	
------	--

太史臣三冬寒美殿親展

外務卿井上馨



本年

大政官三條公使
外務省

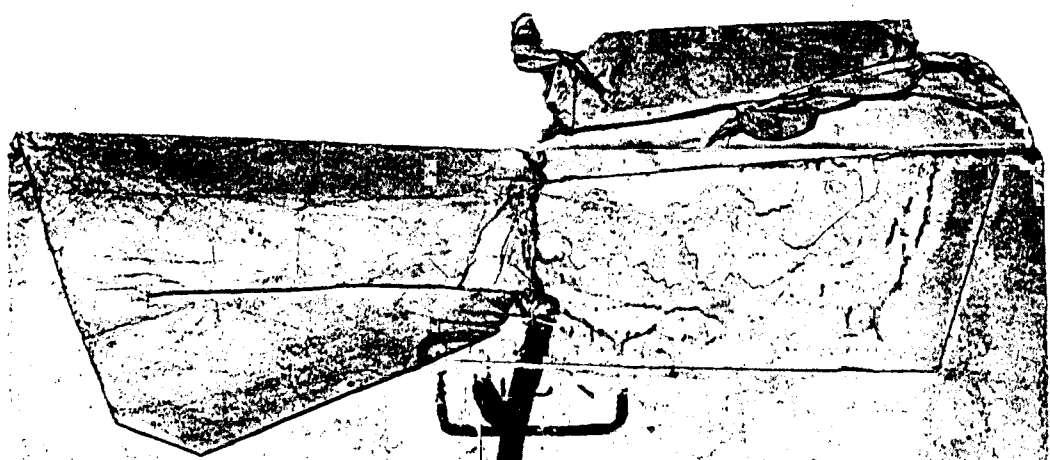
年

急

機密親展

明治十五年
花房公使韓事報告書類





朝陽壬午年歲次丙子年

事案事件去九月六日京城ニ入り同方國王ニ謁
 見要求ニ條單呈進三日間ニ決着可キコト
 述即領議政洪淳穆ニ對委任ヲ命セ一尋
 之卜會商スル旨直詢シテ依テ該條單ヲ領議
 政ニ交附シ候云云旨決着ノ由申説ニ別歸後
 聖旨ニ至リ遂行下公意亦見ク自不可延擱理
 由書送致メ奉仰議政不著書ニ山後者審ミ
 命ヲ受ケ外公及有月數日後ナラテハ勿論政府
 者趣メ奉云云旨初限ハ漫然消滅メ付シモ未
 ニ使事ニ對シ是已狀ニ當リ我ハ臣位ヲ得ヤレ
 三月韓廷乙ニ高麗王ニヒキモト奉仰サレ不
 得執國王ハ養狀美乞留返國廿三日奉仰引
 拂信物浦川取メ奉領強政ハ西面ニ書翰



孝裕元二所謂
橋山寺宇ニテ當
テ孝裕元二所屬
ニ性後セシ人ナリ

別來ニ生歟ニ書中ニハ再議請成ニ云有シテ其
二日乃亦ウ傳テ生有テ議スルヲ待ツ方答書有
要如形陽因書裕元金定集ニ云人ヲ以テ正副
全權大臣トシテ派出政ニ對面談判ニ末遂件
安結今ニテハ其後二時於滿地浦駐印於慈
使事猶該使尤要求ハ件ノ内々歟ニ有テ
關係スル六項ニ連シテ着子スヘキモノ有テ批准ヲ待
行フ、數ニ多シ他二項即開行里程ヲ擴張メ公使以
下内地並居ニ多自ニ必世ニ傳ニ傳ニ傳ニ傳ニ傳ニ傳
トナシ此ノ批准ヲ取ル方ニ取計執シモ調中爲
在偏大條ニ有テ著ニ著ニ著ニ著ニ著ニ著ニ著ニ著
誠意補ニ自シ送呈仕ル方ニ定意ニ著ニ著ニ著ニ著
實化極程ニ少ナクナリシ故ニ著ニ著ニ著ニ著ニ著

明治十五年一月三十日

西郷隆盛 西郷从政

西郷隆盛 西郷从政

此の如く又高麗に自領地を、西郷隆盛に寄託し、
ハルビンに據るに大膽に欲するが如く、西郷隆盛は
与事と云ふ人

夫れ亦、ハルビンに自領地を、西郷隆盛に寄託し、
差地に埋葬するが如く、尤彼の所へも、西郷隆盛は
夫れ亦、ハルビンに自領地を、西郷隆盛に寄託し、
人の所へ埋葬するが如く、尤彼の所へも、西郷隆盛は

丁馬二氏ノ孝勳

八月十日丁汝昌馬達忠等威遠揚威超勇ノ三軍
艦ヲ率_井テ仁川港ニ到_リ省金剛_ノ砲及近海_ノ書_ノ友
ト_モ訊_ハス_ニ十日丁汝昌兵士ヲ載セ_ル為_ス威
遠_ノ多_クテ_ハ勝_ハス_ニ廿二日六管_ノ兵ヲ軍艦三艘_ノ南_ノ六
艘ヲ以_テ率_井テ南陽湾ニ繫泊ス_ニ是日布_レ港ニ
泊ス_ル所ノ超勇揚威ノ二隻モ亦回港ニ移_ル未_タ云_ハ此時ハ
着セ_ル兵船ニ隻_ハ元_ノ船ニ隻_ナリ
ト_ハ又_ハ馬氏_ハ後_ニ寄_ル書_ヲ求_メ諸_ノ兵士陸續_ニ上岸_ニ翌_ニ廿三日馬氏約
ソ二百名_ヲ許_ス兵ヲ帶_テ京城_ニ入り南別宮_ニ住_シ廿四日朝
近_ニ後書記官_ヲ我_ノ諸_ノ飯_ニ訪_ヒ使_ノ已_ニ去_リ庫_キ自_ラ公
使_ニ面_ニ晤_シ其_ノ夜_ハ花_ノ鳴_ニ別將_ヲ管_ニ宿_シ花_ノ島_ハ濟_ノ物_ノ浦_ヲ廿五日
公使_ノ往_テ答_ヲ拜_スル_ヲ迎_候ニ急_キ韓_廷ヲ整_理ス_ルノ因
ナル_ヲ以_テ姑_ク期_ヲ緩_メテ如何_ト申_進ス_ニ依_テ我_ノ當_地南

マルハ僅ニ二日間ノミト答ハテ話サ時ニテ別ル馬氏其
後直ニ帰京セリ聞ク所ニ據ルハ同日午後清兵二
十許名ヲ、京城、西大門ヲ守衛シ又兵ヲ以テ王京ヲ
攻メ大院君ヲ南大門外ノ山ニ誘出し直ニ南陽ニ送
リ即時揭示ヲ諸處ニ貼シテ其主意ヲ通諭ス即チ別
紙抄本ノ如シ廿七日丁汝昌大院君ヲ以テ天津ニ移ル
ト云馬氏其後、挙動ハ未詳兵艦超勇号ハ廿九日
仁川港ニ来リ数刻ニシテ南陽ニ面ル現ニ南陽ニ在リ所
ノ清艦ハ軍艦六艘商船一艘ナリト前日清艦ハ見
テ報スル所ナリ

清人揭示

欽命三品頂戴辦理朝鮮事宜候選道馬

欽命廣東水師提督軍門辦理朝鮮事宜瑚敦巴圖魯馬

記名簡放提督軍門辦理朝鮮事宜西林巴圖魯丁

為

欽加布政使銜隨辦朝鮮事宜阿南候補道魏

曉諭事。照得朝鮮為

中國藩服之邦。素秉禮義。比年以來。權臣
竊柄。政出私門。毒積禍深。遂有今年六月之
變。夫弑妃辱王。殘民虐吏。一時並發。千古之
至變也。仇變之興。必有主者。或由於累宗積
威之漸。或根於奸邪異志之萌。原李各殊。聖皇
斯判。頃者變告上聞。道路流傳。皆言爾國太公

寧知其事。

皇帝用是赫然震怒。念爾國太公既知其事。必能得其主名。

命特遣師。臨爾國境。先以國太公入朝。親問事狀。一俟罪人之得。更申天討之威。殲渠款後。明率典訓。廷旨殷切。敢弗祇慄。今統領北洋水師丁軍門。暫與國太公航海詣闕。處人骨肉之間。全恩明義。我

大皇帝自有權衡。必不於爾太公有所深責。但舉動倉卒。恐爾上下臣民。未諭斯意。妄生疑悞。以元代執高麗忠宣忠惠為例。大員乎。聖意高深。此外或從前亂黨。因以畏迫。更造異

恐脫與字

謀。目前大兵。水陸齊進。已有二十營。此後繼
發者。海上相屬。爾自度待。王師可以顯拒。兵力
可以相抗。嚴陣相待。儘可一戰。否則深鑑禍福。
早自効勞。幸勿執迷怙惡。自速誅夷。而震恐
良善。嗚呼。

天朝。爾朝鮮臣主。誼猶一家。本軍門奉命而
來。則休

皇帝之至仁。為軍力之律令。雷霆日月。備聞
斯言。告諭。尚共信諒。特諭。

右通諭知

光緒八年七月十三日

八月十二日、使仁川湾ニ着明十三日ヲ以テ上陸直ニ仁川ヲ
經テ入京ノ儀ニ決定先是近藤奎祐友玄九日、高田ニ着
所齎第一號、又函ヲ高平府使ニ交付シ仁川府使病死シ後任
未タ来ラズ高平府使
始仁川府使
ヲ兼ネタリ朝鮮政府ニ達セリト雖モ未タ何ノ挨拶アルシ
間カス依テ更ニ近藤奎祐友玄ヲシテ第二號ノ通ヲ高平
入京之趣ヲ通報セシム聖十三日朝鮮政府ヲシテ家
第一號ニ答ヘタル速狀第三號ノ通ヲ玄隊ヲ引連ル
、或ハ一分ノ疑慮アルニ因テ然ルカ今國大公卿施指
揮ヲナシ果然ニテナリ臣等主外ノ慮リハ心上ニ状態
スル何伴、按友方ニ下往多ク少聲佈スヘシト申来
ル日玄曹判書趙寧夏、清國武達卿ニ来リ預ノ名
刺ヲ通シ修刻来會セシヲ乞ヘ臣既ニ起程ノ時、臨
ムヲ以テ今亦仁川ニテ會セシヲヤリ遣シ玄友二中隊

ノ幸と出立仁川府に到ル新府使任景鎮より迎へ公
堂ヲ拂テ旅次に充ツ日夜十二時趙寧夏来リ云當日
ノ夜軍民皆寝キ外ニ禁制スヘキ云力ナシ僅々領官等ヲ
エテ貴館ニ報知セシメタルモ實ニ僕ノ意を以テ出シノミ
賊大綱ニ迫ルニ及レテモ身ヲ以テ主上ヲ掩ヒ危難ヲ避
ルニ數回ナリシ今大院君政權ヲ專ラシテ聖意を以テ一通徹
スル能ハス云使若シ入京アラレハ少クモ一大隊ヲ引率セラ
ルヘシ云少キトキハ却テ侮ヲ生セシ今夜僕京に返リ主
上ニ謁シ密ニ云使ノ入来及馬建忠ノ来リタルヲ奏シ
以後日再び此地に來ヘキニ付願クハ姑クは府に留マリ以テ
再報ヲ待タレト云使曰然ニ此府に留マルヲ得スト雖
モ何ハ云多ク休息セシメ以後日ハ一隊ヲ物花鎮に先
着セシムヘシ若シ際再び貴下ニ面スルヲ得ハ報ヲ聞テ後

ニ發定スヘキノミ聖十四日イ号揭示並テ各所ニ張示ス
且近着並行友ヲシテ仁川府使、照會ニ由十五日ニ云云物花
簞ニ先署スル旨ヲ通知シ以テ之ヲ京畿觀察使ニ報ス往
後第五六七八九千號ノ以テ日ハ使第十一號上奏並
テ作リ仁川府使ニ付シ京城ニ達セシム聖十五日敕云一
中隊ヲ發シ揚花簞ニ先署セシム杉村濬武田邦左郎同
行伴梅友尹成鎮及る侍友云云昔運等來ル京城
館宇多クハ頗敗セルヲ以テ旅館ニ充ツヘキナニ相當ノ
場所取込ニ迄姑ク入京見合セシヲ後ス依テ其非ヲ論
シ聽カス尹成鎮又曰大院君云貴國之輩一慎徳ニ費云
ノ時開港ヲ延期セリト果シテ此ノアリヤ否答ハ
テ曰知ラス又曰政府今般樓務衙門ヲ廢チ故ニ交際ヲ
務ハ臣前ノ通リ礼曹ニテ掌ルヘシ云云趙寧夏金宏集

亦来ル趙曰る既、奏聞ヲ經ルト雖、臣大院當路聖衷暢
ルニ由ナシ大院今公使ノ随兵入京ヲ喜ハス必ス之ヲ城外
ニ置カント欲スヘシ公使宜シク断然入京アルヘクレテ其公
幹ノ如キハ願クハ僕歸京ノ後ニ提出セラレテ一ヲ兩三日
ヲ經ハ僕京ニ歸リ内ヨリ賛成セハ必ス好策ヲ結フニ到ラ
ン希クハ公ノ趙某ヲ信シ僕ノ言ヲ采用シ玉ニ一ヲ公使曰
貴下姑ラク濟物浦ニ滞ルトナラハ公幹後ラニ貴下ノ歸
京ヲ待ツヘカラス貴下若シ意アラハ速カニ歸リ盡力セ
ラルヘシ云々此日仁川府使ヨリ淺山顯三ヲ招キ昨差出
シタル上奏書ヲ返付シ且議政府ノ命令文ヲ示ス其意
云公使奏書格式ニ適ハス敬ヲ欠ク所アレハ此意ヲ喻シ
テ返付スヘシ云々盖書體擡氏標出ノ式ヲ用ヒサルニ因
ルナリ云昔運又来リ政府關文ヲ示シ公使ノ姑ク此地

ニ留マラレテ其ニ并ニ十二郡委シヤカス迄ニ聽カス翌十
六日朝も時ニ役装程楊花渡ニ到ル云昔蓮又来リ曰楊
花鎮ニ逢伏波亭アリ多ク距ル幾ニ一里有之日祿所ニ止
リ京城ある舎ノ整頓スルヲ待レニテ乞フ似曰本方旨ヲ
ニ再来唯當サニ進テ潮下ニ赴キ謁フ乞ヒ速カニ公幹ヲ
理スヘキノミト江ノ濱リ鎮ニ至ル京畿觀ある似洪祐昌来
リ迎ヘ且曰京内人心未タ總カテス且旅館ノ設未整ハス
幸ニ伏波亭堂宇ある廣夾大宛ノ別新ハクハ姑ク此ニ住
留セラレニテ公役之ヲ謝シ直ニ入京ヲ命ス洪祐昌曰ク
然ラハ僕等歸リ甘用ニテナスヘシ而テ食率ニ出屋舎
ヲ擇フニ暇アラス今夜宿ニ可淋溢厭フヘキアルモ敢クハ
之ヲ咎ムンカレ尤モ唯一夜ヲ過コサレヨリニ至レハ至ニ善カ
ヲト定スルノ計モアルヘシ公役曰後即近藤某某某某

一小隊ヲ分チ洪祐昌ヲ伴ヒ先着セシム城内南山下涯岨

李大將ノ宅ニ至ル聖廟大ぬ李鍾函ノ家ナリ去ハ二十四日暴徒乱入家財ヲ破毀シ李鍾函回舎ニ逃ル現ニ柱壁間斧刀ノ痕アリ

存セ李元潤園堂宇稍廣シト雖二中队兵ヲ忠ルニ是

ラス近藤洪祐昌ニ獲シ統理樞務衙門ヲ借リ旅次トナ

サント欲シテ往復ノ間夜既ニ深ク使モ亦暑到終ニ以テ

ヲ以テ假館トシ翌日ニ至リ前約ヲ蹈ミ更ニ他ニ移ルコト

ヲ促スト雖モ洪祐昌病ヲ稱シ来ラス伴梅左等皆言ク

左右ニ托シ相逃レントス收回督責終ニ掌樂院ヲ聞キ之ニ

充ント云

近藤亦事記及陸軍士官ト同シク行テ之ヲ見ルニ堂署數

棟アリ稍用ノ適スヘキモ地亦兵備ニ便ナラス李大將宅湫

溢ナリト雖モ後ニ南山アリ警備ニ便ナリ依テ姑ク李宅ヲ

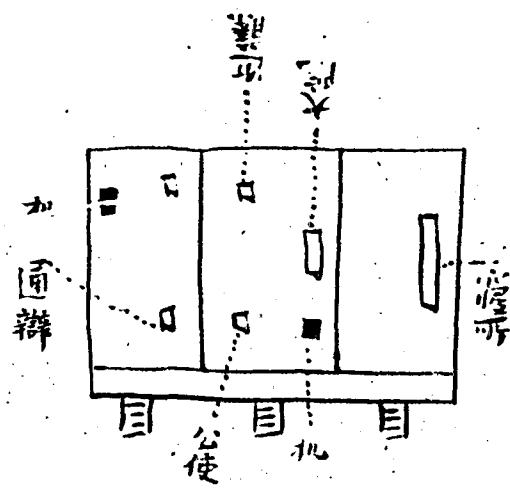
本館トナシ近傍ノ家セ軒ヲ増借シ掌樂院ト併セテ

獲術を願ふ者ノ靈トナセリ十七日直キニ福とセリヲ乞フ
伴梅女來答ヘテ曰今明る日中祭式アリ引見ニ便ナラ
ス更ニ明日ヲ待タレニヲテ請フ所は曰今日殿下速カニ引
見ヲ賜ルニ非サレハ交際少危未ク定マル所ヲ知ラス本使自
ヲ來ニ來テ大テ理セトス豈一日モ待消スヘケヤ然レ
氏今明る日ハ姑ク先立ニ隨ヒ之ヲ待ツヘシ明後十九日
至テハ必ズ引見アラシテ望ム若シ却テ其命ナクハ本
使窮湖下ニ迫リ之ヲ乞ハシノミ又曰本使茲ニ來ル貴方
廷未ク何ノ一命アラス果シテ本使ヲ款接セラルノ意ナ
ルヤ何ト前日李祖淵來リ講修程る官ヲ命セラレタ
リ但ニ正官ハ金宏集ニ命セラレタリト雖モ今趙寧夏
ト傳聞ヲ訪ヒ未ク返ラスト云フ近藤ヲレテ之ニ會セシメ
曰今番ノ事件至大至重尋常ノ幹ノ比ニ非ス唯當

サニ執政大臣ト議スヘシ議修官ノ以ギハ其任ニ當ラス共
ニ議スルニ是ラサルナリ十八日朝近藤伴接所ニ至リ謁見
ノ初ハ空フスヘカラサルヲ議シ尹成鎔ニ迫リ政府ニ
到リ決ヲ取ラシム李祖淵モ亦坐ニ在リ自ラ云國大公所
ニ到リ其由ヲ稟セシト云午後慰問宰臣趙秉鶴來信使
慰問ノ王命ヲ傳フ且云秦王四日引見セラレシト欲セラル
・モ障リアリ不能故不豫云即以後二十日正午牌ヲ以テ引
見アルヘシト又一日ヲ緩スト雖其期既ニ定マレハ再ヒ之レシ
爭ハスハ日彩高冷少將仁禮少將及海陸各員若干來
着ス同十九日禮曹判書李膺正來ル唯山寒ヲ悔ヒ寒暖
ヲ話スルニ李祖淵又來リ曰國大公今闕内ニ住リ一夜
ニ休ミ見ヘシト欲スルノ意アリ云使モ亦以テ主アラハ僕當カ
・之ヲ取計アヘシ云使曰國大公若シ見シトスレハ敢テ

辭セズ此ノ李奎ヲ寄セテ曰ク。以日復之後國大ニ一見ノ
彩ノ儀當サ。引導ヲ爲スヘシ。今廿日午時伴接友迎ヘ
テ前導ス。家々ニ中隊前後。今ハ鹵簿ヲ整フ。以候近
藤奎記カヲ奉ヒ。敷化門ヲ下。輿伴接友及等備衣
等出迎。肅章門ヲ過キ。朝熙堂ニ至リ。左階ヲ上リ。三揖
ニテ王坐ノ前。進ム。領議政及六曹長官侍從等左右ニ
列立ス。殿下曰。遠路再至。恙ナキヲ賀ス。以候曰。謝々。且曰ク。
去月廿三日ノ変災。古今未曾有ノ一タリ。焚館逐使
取辱ヲ蒙國ニ與フル尤モ甚タシ。理當サニ興師以テ向
フ可アルヘク。レテ又恐和局ノ一タヒ破レテ又補フヘカラサルヲ
故ニ義質奉旨再来。今方ニ貴朝廷ニ議スルアラントスル
ナリ。義質甚タ恨ム。来テ貴國ノ大喪ニ逢フモ未タ之
ヲ奉吊スルノ期ニ及サルヲ殿下曰。堀本中尉年来家

去事ニ盡力セシモ不幸以度ノ凶変ニ罹レリ深ク以テ憾
トス公使回今我國受クル命ノ恥辱ヲ洗雪シ且舊法ノ方
法ニ付貴朝達ニ求ムル所アリ希クハ專對ノ大臣ヲ定
メラレシメテ殿下回領議政及礼曹必重クシテ專對セシ
ムヘシ公使回既ニ之ヲ命セテタルヤ回未レ回然ラハ以冊
子ヲ以テ之ヲ殿下ニ奉呈ス義實ノ旨ヲ奉レ貴國ニ求
ムル所即是ナリ第十三號布一覽ヲ經テ專對大臣ニ
下命アラシメテ懷中ニテ奉來ケ
條未ク出シ呈ス殿下取テ一覽此時領議政ヲ顧
目受テ然ルヤ
尋テ領議政ノ答ヘ、
依テ受取シレシ公使回兩國交際既ニ絶ントスルノ今日ニ當
テ唯此ノ要請ノ件アルハ以テ舊好ヲ維持シハ全局ヲ
保クントスルヨリ他ナラス之ニ對スル貴朝廷ノ決意ハ即チ
交誼銜續ノ令ル所ナリ今日ヨリ三日間ヲ期トス庶クハ
此期ヲ誤ラズ決意ヲ賜ラシメテ殿下回專對大臣御



改領後ヨリレテ相應ノ回答ヲナサシムヘシ右ニテ公使退クテ告
 三楫ニテ階ヲ下リ閤門ヲ出シハ李祖淵来リ迎ノ一門
 アリ延賢門ト云門ヲ入レハ一堂アリ大院君ノ居トス堂
 三室ニ分ツ奥一室ニ寢床ヲ設ケ中一室ニ茵ヲ敷キ
 机ヲ置ク表一室ハ泛員之ニ滿ツ公使階ヲ上リ表室
 ニ入ル大院君出テ迎ヘ公使ノ手ヲ把リ中室ニ入り所設
 ノ茵上ニ坐セシノ今番ノ凶変勢焰貴館ニ及ヒ愧悚
 堪ハス公使曰今番ノ辱吾國ノ凌辱ヲ受ル之ヲ甚
 シキハナシ一般ノ公憤殆ヒト制スヘカラス然リト雖吾政府
 猶不局ヲ保テ旧好ヲ維持セントシ再ヒ義質ヲ派遣
 シ雪辱善後ノ方ヲ定メトスルナリ大院君曰然クハ雪
 辱等ノ語ヲナシ玉フナカレ今番ノ事意吾朝廷受ル所ノ
 損害ハ貴國ヲ猶甚シク時公使ノ誤更ニ先徒ノトニ

及ハントス大院君俄カニ筆ヲ把リ書シテ曰請フ此牒ヲ
止メヨ属恒ノ聆ヲ恐ル、ナリトシ使曰閣下鎖國ノ説アル
久シ西洋人皆知ラサルナシ今日閣下當路外交ノ事果シテ
之ヲめ何曰往年立碑外交ヲ戒ム當時洋人ノ此爲甚
道甚シキヲ以テナリ今ヤ時勢ノ前ト異ナリ公使曰碑アリ
於存ス貴國今日ノ主義ニ障リナキヲ得ルカ日國ノ交リ
ヲナス宜シク心ヲ以テ心ト交ルヘシ形ヲ以テナスヘカラス碑
ノ有無之ニ關セス一國ノ向背ヲ定ムル唯彖方寸ノ中ニ
在リ云、此時人アリ向キニ國王ニ呈セシ彖要求冊子ヲ携
ヘ来大院君ニ耳語ス大院君其傳取テ机上ニ置公使
謂テ曰引見ノ時直ニ主上ニ呈進セラル體面ニ於テ甚差
ナラス今之ヲ返付ス須ク順序ヲ蹈テ上奏セラルヘシ領議
政既ニ專對ノ命ヲ受シ他室ニ在テ待ツ儀フ之ト會ニ改

領議政洪熙穆ヲ
洪英植ノ父ナリ系ヲ
承ムルヨリ云セシマ
リ人トシ

メテ其手續キヲナサレヨ又使客ニ日ヲ期セラレシ趣ナレ
凡ソ行フヘキアレハ即坐ニ病スヘシ不能行ノ事ニ至テハ
列座行ヘカラスハ等ノ返答何ソ日ヲ限ルヲ要セシ於此
ハ一國ノ其國主ニ直呈スルノ理アルヲ病レ且領議政既
ニ他室ニアルト聞キ枉ケテ之ヲ取メ暇ヲ告ク大體ス起テ
揮送ス是ヲ肅章門外内兵曹ニ於テ領議政ニ會シ更
ニ冊子ヲ交付シ且使客ノ期ヲ二十三日午牌ト定メ且
曰ハ期ヲ過キ返答ナケレハ朝鮮政府之ヲ拒謝シテ舉
行スルノ意ナキ者ト見ルヘシ領議政曰都テ教ノめクス
ヘシ右ニテ畢リハ使帰館更ニ十四日ノ通リ派使謝返
ノ儀ハ素ヨリ要求ヲ俟タスニテ朝鮮國ニ於テナスヘキ
義務ナルモ尋常使ヲ派スルノ心得ニテハ不都合ナル

ヲ以テ特派大員以謝日本國ノ一項ヲ沒告ストノ趣ヲ以
テ領議政ニ照會ス翌三十一日朝鮮政府三日ノ期ヲ延
緩セント欲スルノ色アリ右ニ更ニ其期ノ遷延スヘカラサ
ルヲ述ヘ第十五號ノ通牒照會ス之ト引連ヒテ備力ナ
キ昔運高永喜來リ近藤奎祐及ニ會シ三日ノ期ヲ
緩メニテ求ム近藤駿ニテ之ヲ斥ク以テ夜領議政ヨリ
派大員ノ沒告ニ對スル返答來ル十六號ノ通牒其意
時系喪ニ際スルハ貴方ヨリ使節ヲ受クルモ系ヲ單出
スニ及ハス迄頃奎契ヲ出セシハ貴國人ノ損傷多キヲ以
テナリト等又辭儀ル少慢翌廿二日領議政ヨリ十七號
ヲ以テ今般始メテ山陵省審判標ノ命ヲ受ケタリ往
返幾天ヲ費ヤスヘシ帰來ノ上ナラネハ相續ニ取掛ケ難
シトノ返答來ル夫朝鮮國王既ニ三日ノ期ヲ諾シ專對

ヲ領祿政ニ命シ又命スルニ山陵ノ下ヲ以テ出テ他ニ往カシメ
東國ニ幹ヲ理スルノ地ナカラシメ期限ヲ後ニ延ビ歸セシム
ルニ至ルニ其所爲專恣ナルト父際子孫ヲ輕蔑スルノ
甚ニキ咎今番ノ事件ヲ藐視スルニ出ル者ニ非スレテ
何ゾヤ既ニ事ヲ藐視スル以上ニ終ニ旧好ヲ維持スルノ
念ナキ知ルヘシ於是ニ倭ハ高橋仁禮少將ト祿ニ斷
然京城ヲ去リ仁川ニ歸ラントシ十八号上奏書ヲ作
リ其非ヲ鳴ラシメテ歸去ノ由ヲ報シ十九号去ニ併セ
テ之ヲ領祿政ニ達シ近藤奎記友ニ命シ館ニ留マレ
あ日没事ヲ理セシム翌二十三日卯六時出京少將モ
亦皆帰去ル五里洞ニ至リ二十号領祿政ノ回答ヲ得タ
リ然ルニ其辭意肯テ自ラ責ルノ態ナリ爲メニ急行シ
遂巡スヘキニ非サルヲ以テ直ニ仁川府ニ抵ル日巳ニ

暮し且属泛皆往行之上下甚困憊スルニ因り此ニ駐宿
ス府使任榮鎬迎接款意例ノ如シ翌廿四日同府より
二十一號差ヲ領議政ニ告セ再ニ其政府ノ事体ヲ輕
視セシテ責メ公使京城ヲ去ルノ理由ヲ述ヘ之ヲ府使
任榮鎬ニ托シテ京城ニ送歸セシム年府使より馬建忠
公使ニ會晤セシカ爲メニ京城ヨリ馳テハニ來ルヘキ由ヲ報
ス因テ暫リ之ヲ待ツ薄晚馬氏來訪公使之ト晤譚ス
馬ノ意願ル居中停調ヲ爲サント欲スルノ口氣アリ
系乃訓示ノ意ヲ照シテ之ヲ謝布シ且韓廷ノ亡狀
ナルヨリ終ニ京城ヲ去ルニ至ルノ由ヲ略々説明ス馬ハ乃チ
韓廷ヲ整理シ院スヲ斥クルノ意アルヲ以テ姑ク系
行ヲ緩クセシヲ勸メ且韓廷ノ内政ニ干涉スルト重
氏友誼ヲ以テスルニ止リ属國ヲ以テ遇スルヲ爲サス等

未証より對話ハハ仕出素由
及能鮮政府若し旧に難
セシト欲スレハ其ノ領議政ノ
内自ラ進ニテ仁川ニ到リ八件
ノ返答ヲナスヘシトノ至ニ候ナリ

閑話求時ニシテ歸ル翌廿五日ハ仕獨先ツ濟物浦ニ至ル
昨夜近藤奎記名京城ヲ還テ同也ニ歸ルハ報知アリ
シヲ以テ之ニ會シ其京城ニ於テ金寶集李祖淵等其
テ奎記名ヲ訪ヒ奎記名ト對話ノ趣并ニ馬建忠ノ系
旅館ニ來訪セシ等ノ話ヲキ、高鴻仁禮ハ少將ニ會シ
テ本末ヲ語り又花治ニ往テ馬氏ニ答辨シ尚其日付地
ニ在テ韓廷ノ答フル所アルヲ待ツ自ラ告グ馬氏ハ直ニ
京ニ歸ル馬ハ昨夜仁川ヲ花治
ニ到リ別將營ニ宿ス薄暮如歌浦丸號船ニ
入ル廿六日早曉仁川府使ヲ領議政ノ還函ヲ二十轉達
ス其意仍ホ自ラ其非ヲ覆スト雖氏亦頗ル高麗ヲ希
フノ情アルニ因リ廿三號奎記名ヲ以テ答メ、二日間舟ヲ停
メテ其來リ就クヲ志ス、ノ意ヲ示シ亦府使ニ付シテ將
還セシム然テ廿八日領議政ノ奎記二十三號來ル

使ノ傳知ヲ喜。即チ豫旨ヲ以テ大員ヲ派出ス（キ由ヲ
報ス午時過キ迅鯨艇入港談古井上毅未着午后三
時往榮鶴舟より國王ヲ李裕之會家集ニ命シ令權
正副大臣ト爲シ仁川ニ到ル條款ヲ妥議セシム旨ノ諭之
ヲ二十四號ヲ傳（且七日兩使舟ニ來リ之ヲ待ツ夜十
一時兩使來ル往復獨豫午前五時及ニ未夕決セス
兩使暫ク退イテ細商シ再ニ來ルヲ約シテ廿九日
午時會家集約ノ以テ來ル但李裕元ハ病ニ因テ來會
シ難ク延ヲ告ケ依テ會ト談判收利廿二使ナラサルカ
爲メニ專斷スルヲ得ナルヲ以テ談又決セス以テ自ラ花
満ニ往キ李裕會スルヲ約ナリ進リ去ル午後四時盡記爲
記爲等ヲ帶同ニ花満ニ指リ李會家使ト前談ヲ究
詰シ終ニ妥結ヲ得テ歸ル（付收田ノ談知ハ別ニ筆記

アレ本便洋商ニ暇ナキヲ以テ次便ニ譲ル三十日午時
李金為使卜濟物浦ニ會シ案件ノ約束ニ蓋印互押
シ兩國ノ紛議茲ニ其局ヲ結ノ約束續約等另冊並
別ノ如シ

第千号

近藤領事携帶托仁川府使送寄政府書函

逕啟者、七月廿三日、有貴國人數百、圍公使館攻之、且於仁川府、再行襲擊等因、本官向在英國船壳號、上奏

貴國

主上殿下、如另本、想既經御覽、今本官特奉本國

欽命、再進貴京、將有所問、護衛以兵員、望於貴京內、更擇館舍、以充駐留、併望豫設兵員止宿之處、肅此專泐、敬具、

明治十五年八月五日

辦理公使花房義質

統理機務大臣

閣下

領議政

閣下

第貳号

逕啟者、花房辦理公使、駕明治号船、本日午牌
到着濟物浦、明日將取路仁川、進往 貴京也、再
昨小官會富平府、預議公使館舍、及隨兵止宿
等事、該府使約速得 政府回題、而為通報、至
今未有所聞、無乃遷延乎、茲先報道之、 貴下
轉報之 貴政府可也、敬具、

明治十五年八月十二日

領事兼外務書記官近藤真鋤

仁川府使 貴下

壬午六月二十九日
八月十二日

大朝鮮國

領議政洪淳穆
仲

大日本國

辦理公使
閣下

揭示

我兵來此。非有他意。日前我公使之在京。亂民作
黨。焚館弄兵。故我政府特派兵護衛公使。固非以
事干戈。則耕者不害鋤。織者不止杼。各安其業。萬
勿惶懼動搖。

明治十五年八月

大日本公使館書記官

第五号

逕啟者、我公使以再明日進京、隨員衛兵、比前稍
 多、沿路宿次、不無缺便之虞、故明日奏公使衛兵一
 小隊、及隨員杉村濬等、先到楊花南岸、為之準
 備、敢煩 貴下告之 貴政府、為此尚祈 敬具、

明治十五年八月十四日

領事近藤真鋤

仁川府使任榮鎬 貴下

第六号

謹依來書、當即修報、而花房公使、每以幣境人民
致騷事、屢有軫念、至於揭榜通衢、其盛意已
荷萬々、若公使行期、幣職雖不敢進退、而衛兵先
進之際、道路駭散、不言可想、預悶、不宣、

壬午七月初一日

八月十四日

地方官任榮鎬

領事官近藤真鍬呈下

第七号

明日癸公使衛兵一隊、前往楊花南岸之事、既為
 仰告、而今據公使再教、南岸不容多衆駐宿、則
 勢不得不分宿北岸云、故再以此意仰告、望貴下
 更報於貴政府為圖、端此敬具

明治十五年八月十四日

領事近藤真鋤

仁川府使任榮鎬貴下

第八号

未示謹依、而楊花南岸、本多人家、野濶地平、可容幾千人、而曰不可容衆者、未知意下如何、既有公使所教、第當轉報、而一江南北、不須分說、北岸則有津將、如無京營文蹟、似有阻擋、此意轉告公使、如何、更請賜答、不宜。

壬午七月一日

八月十四日

地方官任榮鎬
領事近藤真鋤呈下

第九号

啟者：本官以明日將進貴京也。要先發衛兵一隊、
 赴楊花鎮、分宿南北岸、以便本官前往、望
 閣下下令于津將、善遇無渝、肅此專泐、敬具、
 明治十五年八月十五日 辦理公使花房義質
 京畿觀察使閣下

第十号

照回者、往事愧不可言而有此 先施感泐、示事
 謹當如 戒、而舩隻艤待即承 國太公命意方指揮渡
 津矣、僕亦欲於中路進晤、可借一席、惟希 統亮不備、
 壬午七月二日 京畿觀察使供祐昌

八月十五日

花房公使行軒下

第士号

此各彼政府ヨリ書体格式ニ合セサル趣ヲ以テ返却セリ

日本國辦理公使花房義實敬

奏嚮者乱民横暴義實欲趨候

大闕而不得也終定計避難躬犯鋒鏑潰圍歸

國事實出倉卒

陛辞礼欠款嘆交至無不心馳

左右義實今特奉本國

欽命將晋侍

闕廷伏惟

殿下乾綱是張公明處事自有咸孚之道茲具

由飛

奏惟祈

聖鑒併頌

寶祚萬安

奏

明治十五年八月十四日
日本國辦理公使花房義實敬

第十三号

八月十六日公使進京、途上於予
差備官 玄普運呈函

伏念、使行之今日入京、非但民心之關懷、在我接待之
 節、必無頭緒、而尊使一行、亦難保困惱也、距京十里、西
 江上有伏波亭、尊使若幾日先住於此亭、再四入城、恐
 為未晚、且距京不遠、凡事可以先有往復就緒、而民心亦
 可有稍靖之漸、此所以我國太公教意申勸也、請閣下
 勿孤此意、直為駕往伏波亭、則為兩國事、不勝幸甚、伏
 望 熟察焉

玄普運 至誠仰告

第十三号

八月廿日使謁見、節帶去国王呈閱、後領議政、交付七九約單

第一

自今十五日内。捕獲凶徒巨魁及其黨與。從重懲辦事。

第二

遭害者。優禮瘞葬。以厚其終事。

第三

撥支五萬圓。給與遭害者遺族。並負傷者。以加體卹事。

第四

凡因兇徒暴舉。日本國所受損害。及準備出兵等一切需費。照數賠償事。

第五

擴元山金山仁川各港間行里程。為方百里。朝鮮新以楊花鎮。為開市場。咸興大丘等處。為往來通商事。

第六

任聽日本國公使領事。及其隨員眷從等。遊歷內地各處事。

第七

自今五年間。置日本陸軍兵一大隊。以護衛日本公使館事。
但設置脩繕兵營。朝鮮政府任之。

第十四号

逕啟者、去月二十三日事变、貴朝廷義當派使以謝其過失、如拘通常信使之例、輕視事體則、我朝廷亦不能甘受、歟、接此項固至當之理、不須由我國要求之、然惟慮其或忽諸、故更提出、以供注意、即每昨日、捧呈案件併行、可也、肅此專泐、敬具

明治十五年八月廿日

辦理、後花房義實

領議政洪淳穆閣下

別單

特派大官、修國書、以謝日本國事。

第十五号

逕啟者、昨日捧呈 案件、以再明日午牌賜決答為
期、既經

上奏、確不可動、乃 閣下以便宜行事之任、收接之本

官素信 閣下之親來決答、必不誤期、但安危之所係、

毫不可忽、諸特茲注告、惟請 留神、肅此敬具

明治十五年八月廿一日 辦理公使花房義質

領議政洪淳穆閣下

第十六号

照覆者、本國所遭事變、寧受鄰國之有慰、未必
 自本國先遣信使、至若書契委通、實出於
 貴國人所傷損也、荷此提示、實感敦好之誼、
 而昨日案件、方作山陵者、審之行、幹事幾日後
 還歸、可以回報、肅此敬復

壬午七月初八日

領議政洪淳穆

辦理公使花房公使閣下

第十七号

八月廿二日收到

照覆者昨既奉晤而今始承山陵看審後封標
 之命晚方發往可費數個天笑事係慎重不
 敢晷刻是緩而隣國大喪貴下亦當有致
 念諒之焉肅此敬復

壬午七月初八日

領議政洪淳穆

辦理公使花房義實閣下

十八号

日本國辦理公使花房義質敬

奏、再昨辱賜

陛見、以本國要請案件、躬進

上奏、且期三日賜決答、幸承臨期委領相為應酬
之

諭、然而本日接領議政洪淳穆書函、曰今朝始承
山陵看審封標之

命、曉方發往、可費數個天矣、義質深怪
殿下曩許義質以會同領相理事、而今又

命以他事、使

兩國公幹、無由按期講定、夫焚館逐使、辱國之甚、
非樽俎之所可結局、唯我

主上夙知

殿下睦隣盛意攸在、故使義質先圖雪冤辱持舊
好而

殿下輕忽

兩國交際如此、則義質之望殆絕、當歸
奏事由、但以

兩國數百年交好一朝將湮、不得不一言、因茲
上奏、惟祈

聖明照鑒

明治十五年八月廿二日

第十九号

逕啟者、頃接領相手柬、知其承
命外出、與前本使所奉

諭意、甚相矛盾、本使已諒 貴國本無以此件妥
商籌辦之意、則駐京曠日、固屬無益、擬於明日
起程回國、具

奏候命、奏摺一本、望代捧
呈、以供

主上乙覽、為荷、臨歧匆々、敬具、

明治十五年八月廿二日

大日本國辦理公使花房義質
大朝鮮國政府各位均照

第二十号

八月廿三日於五里洞叔接

身滯敷所復 命似在明艮此是典禮攸重也
向晤在初七日

山陵封標成 命在於八日之朝這間差遲庶可
諒之曉美傳來

華函於此處茲先告實開錄左方 另加三思順
頌

時祉敬具

壬午七月初十日 卯時

領議政洪淳穆頓首

辦理公使花房義實閣下

另陳

另示詳悉。隣交議并。固知事體甚大。而國家喪
禮儀典。尤為嚴重。想
貴下亦所當念。差過數日。可有議并者。何不俟
其回。如是悻々。實為
執事不取。至於
奏摺代
徹。亦在僕之復命
以後事。並
諒之焉。

第二十一号

八月廿四日 仁川府使送寄

昨在途次接閱

台函具悉 示意本使再來 貴京實係我國欲
和衷共濟以雪冤辱持舊好而

貴國藐視事體以已約之期任意推諉使本使不
復得隱忍駐京

閣下俟 奏章經

乙覽後披讀一過則自悉其由矣本使美

余駐京已歷年所豈不望 兩國交誼帶礪勿渝哉

雖然事已如此徒切惓々之衷希

閣下諒之敬具

明治十五年八月廿四日

辦理公使花房義質

領議政洪淳穆閣下

第二十二号

八月廿五日由仁川府使送來

照覆者。美此 教示。不勝訝惑。雖以三日為限言之。
 本非我政府所敷定者。且
 公使回轅。促在限內。恐非所以周全敦好之意。大抵
 以簡書期會等微事。有此噴舌。極為悶然。何不深
 諒。罔所以 重臨商辦之地。區々企仰者厚耳。肅此
 敬具。

壬午七月十二日

辦理公使花房義實閣下

領議政洪淳穆印

第二十三号

八月二十六日托仁川府使發寄

茲接七月十二日 貴函內開三日為限、非我政府所敦定者、大抵簡書期會等微事、有此噴台、極為悶然、夫三日之限、既經

聖聽、

閣下亦以專對之任承領之、况這般事件、尚難遲速、關係甚大、要答立期、豈謂微事、

閣下而有此言、實不耐怪訝、但至其重臨商井區々企仰之語、即覺

貴政府意猶在保全敦好、果然則八件行否、所擇孰在、大事所定、本使豈付勿卒、為停船二日、以待決答、想

閣下來臨、必有所 教肅此敬具、

明治十五年八月廿六日

辦理公使花房義實
領議政洪淳穆閣下

第二十三号

八月廿六日由仁川府使寄来

照復者荐承 教示感佩良深三日為限之語今不
必更事觀縷而以

貴下之急促 回轅遂致商辦之遷延有若通好之
為碍豈不嘆咄哉念及永保和約乃至 停船二日
深感不孤之 厚意也餘留另具肅此敬具

壬午七月十四日

辨理公使花房義實閣下

領議政洪淳穆 印

另具

因本國遭變遂延及

公使館字乃至倉皇避禍寔深愧恨以其民
心之姑未綏靖因循月餘懲年之舉有志未
逮復致

公使以弁事不赴期悻々出京心所不安
豈可勝言哉方今萬幾悉稟

主上獨斷故即派大員庶可諒之也

第二十四号

八月廿日 仁川府使任榮稿持参

外封
(諭着)

大朝鮮國開國四百九十一年七
月十四日議改府奉
諭着李裕元為全權大臣金龜集為
全權副官前往仁川獎日本辦
理公使妥議條款欽哉

第廿五号

日本曆七月廿三日之夜朝鮮兇徒侵襲日本公使館職事人員致多罹難朝鮮國所聘日本陸軍教師亦被慘害日本國為重和好安當議并即約朝鮮國實行下開六款及別訂續約二款以表懲前善後之意於是兩國全權大臣記名蓋印以昭信憑

第一

自今期二十日朝鮮國捕獲兇徒嚴究渠魁從重懲辦事

日本國派員同究治若期內未能捕獲應由日本國辦理

第二

日本官胥遭害者由朝鮮國優禮瘞葬以厚

其終事

第三

朝鮮國撥支五萬圓給與日本官胥遭害者遺族並負傷者以加體卹事

第四

因兇徒暴舉日本國所受損害及護衛公使水陸兵費內五拾萬圓由朝鮮國填補事
每年支十萬圓待五個年清完

第五

日本公使館置兵負若干備警事

設置修繕兵營朝鮮國任之

若朝鮮國兵民守律一年之後日本公使視做不要警備不妨撤兵

第六

朝鮮國特派大官修國書以謝日本國事

大日本國明治十五年八月三十日

大朝鮮國開國四百九十年七月

日本國辦理公使花房義實

朝鮮國全權大臣李裕元

朝鮮國全權副官金完集

日本國ト朝鮮國ト嗣後益々親好ヲ表シ
貿易ヲ便ニスル為メ茲ニ續約ニ款ヲ訂定
スルコト左ノ如シ

第一

元山釜山仁川各港ノ間行里程今後擴メテ四方
各五十里ト為シ朝鮮二年ノ後ヲ期シ條約批准
周歲ヲ算シテ更ニ各百里ト為ス事
今ヨリ一年ノ後ヲ期シ揚花鎮ヲ以テ開市
場ト為ス事

第二

日本國公使領事及ヒ其隨員眷從ノ朝鮮
内地各處ニ遊歴スルヲ任聽スル事

遊歴地方ヲ指定シ禮曹ヨリ證書ヲ給シ地
方官證書ヲ驗メ護送ス

右兩國全權大臣各々諭旨ニ拠リ約ヲ立テ
印ヲ蓋シ更ニ批准ヲ請ヒ二個月ノ内

日本東京ニ於テ交換スベシ

大正九年
九月○朝鮮

年 月 日

日本國與朝鮮國嗣後為益表親好便貿易茲訂
定續約二款如左

第一

元山釜山仁川各港間行里程今後擴為四方各五
十里朝鮮期二年後自除約批准之日更為各百里
事自今期一年後以楊花鎮為開市場事

第二

任聽日本國公使領事及其隨員眷從遊歷朝鮮內
地各處事

指定遊歷地方由禮曹給照地方官勘照護送

右兩國全權大臣各據

諭旨立約蓋印更請

批准二個月內

日本朝鮮

明治十五年九月

於日本東京

交換

大日本國明治十五年八月三十日

大朝鮮國開國四百九十二年七月日

日本國辦理公使花房義實

朝鮮國全權大臣李裕元

朝鮮國全權副官金宏集

名 称	三條実美文書
標 題	壬午変に付詔勅 案

分 類 番 号	24
	6

登 録 番 号	
------------------	--



東洋全局ノ大平ヲ保全スルハ朕力
切望スル所ナリ、然ルニ今度朝鮮ノ依
頼アルニ由リ、隣交ノ好誼ヲ以テ、其ノ
自守ノ實力ヲ補助シ、各國ヲ以テ其ノ
獨立國タルヲ認定セシムル政畧ニ涉リ、
而シテ直接ニ我カ國益ヲ將來ニ保護
セント欲スルノ閣議ハ其ノ當ヲ得タルモノ
如シ、然シテ隣國ノ感觸ヨリ、或ハ不虞
ノ變アルニ備スル為メ、武備ヲ充實スルノ
議ハ尤國ヲ護スルノ要點ナリ、但海
軍擴張ノ如キハ其ノ理論ヲ定ムル易シ
シテ其ノ實效ヲ收ムル難シトス、其ノ

經費ヲ永遠ニ支給スルノ計畫ハ如

何又海軍現時ノ規制之ヲ外國ニ比

照シテ完備スル士卒ノ訓練之ヲ

實戰ニ用テスル所ナキ歟其ノ擴

張ノ順序、着手ノ方法、更ニ閣議

ヲ盡シ以テ朕カ意ヲ安ンセヨ、

名 称	三條実美文書
標 題	朝鮮条約批准関係書類

分 類 番 号	24
	7

国立国会図書館

登録番号	
------	--

寒威未去候得共各位益御清穆奉拜賀及陳ハ朝鮮
條約批准交換之情況探偵之序ニ清政府決策
ニ據様承以各并テ愚按建言如左

明治十六年一月廿九日在上海長徳領事「デニ」
方今休暇ヲ得テ華威頓ニ在リ一々之ニテ更ニ任
地ニ赴カント云其面話ニ

我韓條約ハ已ニ成レリト聞ク之ヲ交換スル使負ハ誰ナルヤ
彼余過日ヲゼミラールカントニ勸メテ云ヘリ北京在任ノ「ヨ
ニグ」ハ以前且下ニ属シテ日本ニ到レリ故ニ交換使負ニ
當ルモ日本ニ對シテ好誼ナラスヤト

我國在留「ビンガム」ノ書記官トシテ新ニ命セラレタル「ガ
ワルド」ナルモノ其使負タラントノ風評アリ如何

彼其評アリト云レ彼未タ詳細ニ至ラス其風習ヲ知ラサ

ル人ハ不適當ナラント思ヘリ

我何頃マテニ交換ノ運ヒニナルヘキヤ

彼知ラス然レモ今ヨリ一月ヲ過キサルヘシ

我我邦曾テ韓ヲ獨立トシテ結約セリ若シ他國同轍認

可ナケレハ我獨リ固定ノ地位ニ棄ラレハカリシニ今其難

ヲ脱セシハ貴國ノ恩惠ナリ然ルニ一昨日ニ桑港ヨリノ

電報ニ日本ヨリ郵船「コパチ」号ヲ入港ス其報ニ李鴻

章ハ檀香ニ会シ球事ヲ問ヒシヲ載ス且下之ヲ讀ミタ

ルヤ

彼讀ミタリ檀香云球事ハ穴戸公使ノ應接ニテ純論絶ヘ

タルモノナリ余檀ハ此件ヲ諒スヘキノ任ヲ帶素ラスト載セ

タリ

我清ヨリ球事ニ望ミ所ハ双方ヨリ此島ヲ自治別トシ兩國ノ

中間ニ在テ何レニモ屬セサルモノトセント主張セリ然レモ此小島ハ自治ノ兵艦ナキ故ニ孰レカノ保護ニ由ラサルヘカラス

彼然レモ貴國之ヲ放棄スルモ實利ニ関係ナカルヘシ

我然ラス三百年來收入セル租税より年額六七万圓ナリ之ヲ放棄スルヲ欲セザルナリ清コト實利ニ関係ナキモノナリ云々其他種々ノ利害ヲ陳示シタル茲ニ之ヲ贅セス

彼余ハ貿易主管ノ任ナシハ我合衆國ト親睦通商ノ兩國相戦フニ至ル我國人其害ヲ共受スルカ故ニ最メ之ヲ避ルヲ以テ我任トセリ余ハ兩國曲直ノ判者タルヲ好マス只平和ヲ望ム

我我國素ヨリ平和ヲ望ムカ故ニセザルカラントシノ勸ムル所ニ從ヒ実テハ派遣シ總理衙門各官ト商談シ已ニ議成リ訃印ノ前日ニ至リ云々ノ辞柄ヲ録シ彼方ヨリ破議セル

カ如レ是レ我カ平和交誼ヲ切望セルノ微ニアラス

彼之ヲ聞テリ

我然レモ孰レノ曲直ニ論リ皆既往ニシテ今尚不相ノ解ケサルヲハ明コナリ當テ我ヨリ強レニ送シル使負テ以テ講和ノ局ヲ結ビ能ハサリシ故ニ更ニ我ヨリ使ヲ函スシテ好マサルナリ

彼清ヨリ函スルモ亦清ノ好マサル所ニ故ニ双方ノ使負熟レカノ一地ニ會合セハ如何

我是レモ亦便方ナリ然レモ凡ソ何等ノ處カラ以テニ協同スルヤ豫メ之ヲ知ルノ便アラハ幸ナリ余數日前ニセミラルガントニ球件ニ付講和ノ方案アラハ幸ニ密示ヲ乞フナリト同クタリシニ一年前李鴻章ノ書ヲ接シ書中日本ノ非ヲ諱ムノ數語ノミニシテ別ニ所望ヲ載セスト答フルノミニシテ「ビミール」

ノ案ヲ言ハス過日新育ニ帰ルト云々不遠再出スヘト言
ヘリ再ニ同氏来ラハ呈下ヨリ其意見ヲ問ヒ試ニテ之ヲ
彼諾ニテ別ル

同一月三十日「コモドール」ニエヘルト東館ノ對話

我 且下朝鮮ト約スル所ノ条約ハ已ニ數日前批准成ルト聞ク米
政府之ヲ交換スルハ不遠ナルヘン何歟カ

彼 答フル「能ハス然レモ去歲政府ヨリ巨細互交際費トシテ五十
ドルヲ増シテ議院ニ問ヘリ此議決スレハ特使ヲ派シテ交
換スヘケレモ恐ク此間ノ兩院中ニ決セサルヘン然レモ交換ハ之ヲ
急ムヲ得ス余按ニ結約ハ清政府ノ切ナリ結尾ノ交換ハ日本
ノ方ヨリ為スル兩國ニ均ク交換ヲ表スルカ如クナルヲ以テ批准ヲ
「センガム」ニ委シ長壽ニアル米艦ニ搭ヒシメテ交換セハ至ンロウ

ント過日國務三書記ニ勸告セシニ同官モ異議ナキヨウニ見
ヘヨリ

我或ハ北京駐在「フヨング」ニ命セラントノ覬覦アリテ其ク

彼同公使モ好シ或ハ豆畑豆ノ情況ヲ知ルモノヲ擇ツタ宜シトテ上海

總領事「フデニ」ニシテ此任ニ當ツルヤモ知り難シ此人事ニ熟ス

ルヲ以テ本ヨリ好シ熟シモ特殊ノ費用ヲ省クノ方法ニ由

ラサルヲ得ス

我不遠批准交換ハ疑ヒモモナラン

彼五千ドル増額ノ決議ヲ俟ツニ違フラス

我然ル上ハ強ク日清ノ爭端起ルノ憂ヤキヲ喜フ

彼決シテ然ラズ余在法ノ際滿官^{清ノ高}官ヲ指スヲ見ル毎ニ日本ヲ罵

詈シテ止マス必ス生平ノ憤怒ヲ雪ヤントスヘリ故ヲ以ニ三年

前ヨリ海岸砲臺ヲ増築シ鐵艦ヲ備フテ三年ニ六

艦ヲ改メヨリ送り來り來歲モ他ノ大艦ヲ得ヘシ後ニテ造
ル所ノゴシボートハ合シテ二十余此軍備ハ皆日本攻撃ノ用ナ
リ二兩年中兩國戰鬪興ラン決シテ之ヲ避ルヲ得ス

我 清ノ形勢ハ斯ノ如キカ

彼 且ツ清政府ハ日本ノ内備ヲ探索シテ精微ヲ令セリ海陸操
練ハ英佛獨人ヲ聘セリ皆日本ヲ敵視スルカ爲ニ如是勉勵
セリ李鴻章左宗棠等其魁メリ各國韓ヲ獨立視ス
ト否トヲ問ハス別ニ怨望ノ原因アルナラン只密ト秘カニ内約ア
ランヲ恐レテ或ハ急案ヲ憚ルノ色アリ云々

「ヒエハ」ハ交際官ナサルヲ以テ其言ノ所淡泊ニシテ見
聞ノ後ヲ吐露シテ色藏ノ忌憚ナシ

我 且下再ニ韓ニ使スルヲ好マスヤ

彼 余此府ノ「子ウ」ニテ一艦建築ノ命ヲ得宇多忙ナリ且曰ク

再渡ラモ好ス然レ今一年モ日本ニ遊ブハ好ミサルニハラスニ
ノ余話ニテ分ル

曾テ外務卿ヨリ示シタル「ヨシグ」ト吉田大輔往復ノ書中「ヨシ
グ」ヨリ李鴻章ニ日清平和ヲ圖ハ西國ノ益ナリト云ハルニ李
著ノ摺本ト議スヘシト然レ昨今ノ電報ニ摺本既ニ天津ニ達
シ李ニ答フル辞ヲ載セタルヲ傳播シ強戰期迫レルヲ外人
等トモ果シテ「ヨシグ」モ戰備ノ實徴ヲ見テ李ニ講和ヲ勸
メ上海領事モ其豫防ヲ計リ「シエヘル」トシニ至テハ避リヘカラスト
新言セリ曾テ摺本既「ヨシグ」ヲ示シタル所モ虚言ニハラス
ヤ我政府ハ摺本其他ノ報告ヲ以テ俄ニ海陸
軍皇張アルヲ聞ケハ彼是ノ形蹟ヲ以テ清ノ攻勢ヲ
備アルヲ信スルニ至ル兩年前マテ「ホルマン」及品川ノ報告

「デヘンシフ」ニ止ルヨウを見ヘテ我之ヲ輕視スルノ色アリ清ノ内地
ニ在ル者ノ報告未タ尽リ「ワアリシカ知ルヘカラス」一事前先生佛
公使「ロケツト」或日上野外務大輔ニ清ノ軍備盛ナリ日本攻撃
ノ内情明白ナリ然ルニ日本ヨリ公使モ送ラズ軍備ヲモテサス
寧ニ「隠ルカ如シ」他日悔ルモ及ハサル不足アラント云ヘリ此頃實
對外ニ在テ及屬シタレバ内閣ニテ早ク上院アリントナルヘン三年
前ヨリ海軍ノ諸艦過半廢毀ニ屬セルノ諺アリ實則モ其
放棄ノ害及軍ヲ在清ニ使仙臺ノ利ヲ陳ニタムモアリトヤト
覺ヘタリ然レシモ今ハ既往ヲ奈何セシ

愚按・今神速ノ防備ヲ急シハ不測ノ大事ニモ及ヘシ我ニ軍備
独ニ和議ニ向テテ並併セサルヘカラス大艦増備ノ多サ年月
ヲ復ラズル故ニ先ツ防衛「デヘン」ニシテ着手スルヲ肝要トシ防
禦第一ノ要港ハ東京横濱大阪神戸長崎横須賀箱

館等ニ水雷火口トテ備フルナリ其造り數ハ当路ニ於テ
他邦往來ノ實ヲ探知セ申ルナルヘシ是ニ輕キ子機密ニあるハキ
警備ナシモ全ク彼ニ洩ルヲ防クヲ能ハサルヘシ然レモ港口何ハ
ノ位置ヲ以テ柔火ノ点タルヤヲ深ク秘スルノ方法アルヘシハ僅
ニ洩ルモ或ハ恐怖ヲ點示スニ足ルナラン當テ傳船ノ碇港
ニ近キ能ハサリシカ如クナリ大艦全備ノ期ニアラサハ攻勢ヲナ
ノ如ク斷念シ現存ノ船ハ皆防禦ニ施用スヘシ碇港亦爭
ノ時獨ノ船出ササテ以テ決シテ水上ニ爭ハサリシカ如シ

市ノ如クニテ即令テ防禦ヲ為スハ準備をモ亟急ナルヲ要スルモ
傍ヲ速ニ平和ノ議ヲ固ラサルヘカラス 宗則ノ記臆スル所ハゼ
ラールガウントレノ訓能該ハ球ノ二十島^{ニハ三ナリトカ}ヲ割與スルノ件
ノミニシテ條約ノ^ニ日英人清ノ内地ニ通商スルハ割
島ノ交換トシテ追加見解ナリシ此過分ノ所望ハ「ガウントレ」ノ初

案ニ違ヒ其内思ハ李ノ所言モ無理ナラズトス
ルヤモ計リカタシ曾テ李ノ書ニ頻ニ日本ノ非
ヲ陳シ其所望ヲ述ヘサリト云フ教詔中李ノ
所言ハ過言ナリトモ云ハス又我所望ヲ完善ナ
リトモ云ハサルヲ以テ察スルハ外聞ニモ抵觸
アル所アラシカ條約ニ各國人ニ許シテ我ノミ
ヲ除クハ穩アラサルヲナシ我邦ノ海地禁商
ト比肩セル互相ノ点ヨリ結約セルモノナレハ
清官ノ所存モ全ク不条理ニハアラサルノミナ
ラズ誰ノ所見モ斯ノ如キヤ知ルヘカラス我内
心ヲ推シテ其非ヲ懺悔セハ球件ノ序ニ奇糾
提議セシトスルニ似テ若ニ對テニ弱點アレハ
付コト見ケレモ本復ノ後ナレハ異

ノ自然ノ勢ナリ乃魯ト對抗ノ事之ヲ謀シ其治
ヤ直ニ拒マリ若比得堡ノ成議ヲ我當時早ク知
ルヲ得タラハ別に便法モアリシナランニ其知
ルノ遅キモノ大不費ナリ我理モ時機ニ投エサ
レハ取敗ノ例鮮カラヌ予既往ノ過誤ヲ尚遂ケ
ニトスルハ得策ニハアラス
故ニ小島割典ノ一題ヲ以テニ内地通商ノ件ハ
清官ノ言フカ如ク修約改云ニ譲リ速ニ殊件ヲ
詰ラスルヲ宜ヒトス諸君我一步ヲ譲ラントス
トモ直捷ニ斯ク減價セニトハ言ヒ忌ナ場合ナ
レハ中間ノ變動ヲ以テ不得止一步ヲ譲レハ形
ニセカレハ面白カラス是レ本ヨリ公然タル中誠
ニハアラス魯英獨佛ノ中ヲ面看スルトモ無偏

ナリト思ハハ、ハ米、ミ且「ヨニグ」ハ我球件ノ
情ヲ知テ彼ニ在リ先ツ榎本一己ノ所存即チ「
ニヒデニシヤ」ト称シ兩國平和ハ各國ニ関ス
ル云々ノ普通ノ辯論ヲ以テ其意是ヲ同ヒテ其
何如ヲ明察シ能ハスト氏榎本自國ノ意見ハ我
最誠ノ所望ナル余「干渉ヲ除キ古ニ對セシ皮
ノ請求タル球王ヲ旧地ニ復スルヲ除キ互ニ正
負消滅セハ殘シ所ハ割島ノ一事、ニ此ヲ以テ
球件能ク至シハ幸甚如シ。然レモ未タ政府
ノ所「同ハサル」前ニ公使ノ職掌ヲ以テ榎本ノ
一己ノ説斯クナリト清政府ニ公言シテ費ヲハ
大ニ憚ル所ナレハ「ヨニグ」ノ肥裏ニ宗由セシ一
時ノ案ナリトテ一二有力清官ニ同氏ヨリ詢シ

但し權本ニハ内閣セシニ略同意ナリ若し閣下清官ヲ指ス
同意ナレハ權本ヨリシテ其政府ニ同ハシムヘシ
如斯難件ハ双方一步ヲ相讓ルニアラサレハ
静点ニ歸シ難キ云々フヨングレニ周旋ノ功ヲ
十分許サセシ外面ヨリ肝要ナリ此手段ナレハ
内閣ノ推知如何ニ預セス閑議ニ拂ラル、手續ナリ
此等ノ起因ヨリ双方ノ同意ヲ豫知シ我政府ノ意見
ヲ更ニフヨングレヲ以テ内通セシ後公然直接
ニ兩使臣會議緒ニ就クノ順序ナリ
過日案則上海米總領事ニ諮セシカ如ク我使員ヲ
北京ニ派シテ諮成ラス此次キハ清ノ使員日本ニ
來ルヲ当然トスト云ヒシトキ領事云清ハ之
ヲ好マス双方孰レカニ會スルヲ宜シトスト然

愚者之見
其言其言

一、北京ニ非サレハ天津、ナリ、上海、或ハ長崎
 等ニテ中間他演、地ナシ外例ニ端西ヲ
 結約、地トナセモ端西ヲ談判、例ニ加ハ
 一、非スヤテ忘レタリ併ニ球談ハ後來ノ
 害ヲ起ル、程ノモノニモアラヌ唯一面爲ヨリ
 被談ニナリタル地ナシハ快カラサルヤ如シ從
 其曲ケテ平和ヲ乞フ、使臣ヲ日本ニ派スルハ
 普ノ如キ大國ニ屬シタル外聞ニ立ル者ニ使
 ニ「二、感情ヲ輕セハ公法開議ノ時ニ至リテモ
 可カカ違言ハアルマニ併ニ此等ハ」ヨニグ
 千解リ実箇、ル證アラニ「二、我スルナリ但
 詰、間ハ随分「二、力シキ意方アル」之「二、都
 合ニ從テ「二、然後「二、命シ「二、此「二、開議結約

セニハルヲ可トス

然レ此^北平和ノ談決ハ我防禦ノ警備完全ヲ速ニ
セサレハ好結果ナリ能ハス若攻弁ノ西用ニ
備フ期ニ其一ヲ遅延セハ大率ニ油^ルノ遠ヲ
ラサハク恐ル此書明後日即二月三日本府ヲ遣
ニ三月一二日ニハ本邦ニ達スルナラニ上海領
事 *Q. W. Penney, U. S. Consul General at Shun Kwei.*

モ本府ヨリ濃程前ナルハシ若建言中平和ノ策
ニツキ便法ヲ助ル為此領事ニ會メシムルヲモ
アラハ電信ヲ賜リテ遅クハアルヨシキ力抑新
談ノ國府ニ駐在ノ公使ノ口ヨリ達スルハ已ノ
一意ヲ以テ輕率ニ濃言セハ彼ノ疑点ヲモ匿キ
出ニ彼意ヲ探ルモ容易ナラサル場合アリ他邦

駐五十ハ其駐在國ニ對スル事ハ外ハ已ニ
見ト稱シテ下便ノ時ハ抹却スルノ便アリ此
事ハ本十三リザニドニ曾テ事件ニ生スル
館中ニ於テセシト云ヘリ此時ハ天津ニ在リ
テ以テ其腹末ヲ知レリ今ハ上海ニ隔在ニ其
使ニ過スルヲアリヤ更ニ問ハサレハ知リ難
ト其氏迂而或ハ慎重ノ義ヲ尽スルヲ聞
サレハ一言陳ニテ萬一ノ用ヲ望ム
右宗則在米所聞ニ因テ我政府即テ至急御處
件ニ件致建言貴國御採擇所伏御火也

華盛頓駐在公使 寺島宗則

明治十六年二月一日

三條大政大臣殿
有栖川元大臣殿
岩倉右大臣殿
井上外務卿殿

名 称	三條実美文書
標 題	條約改正電報編纂 才1集

分 類 番 号	54
	8

国立国会図書館

登録番号	
------	--

明治十六年十二月十一日以後

條約改正電報編纂

第一集

自第一号至第六号

參事院



伊藤公

内容：送リタル英廷意見書ノ撮要

英廷ハ日本ノ固請ニ応レ且ツ收入増加額ハ第一ニ之ヲ通貨改良ノ用途ニ充ツヘキ保証ヲ信シ関税増加ノ事ヲ承諾ス英廷ハ曾テ会議ニ提出セル税則案ノ趣旨ヲ認容シ其細目ニ至テハ更ニ修正ヲ待タレトス但レ外國人ニシテ内地ノ高買ト自由ニ交通スルノ便宜ヲ擴充シ外國人ヲ保護シテ通商上ノ妨害ヲ排除スヘキ約束ヲ加ヘレトス英廷ハ日本ノ發議ニ応レ税則ニ

関スル問題ハ其他ノ事項ノ決定スルヲ待タス
レテ量定ヒレトテ承諾シ自國ノ公使ニ訓命シ
下レテ直ニ條約ヲ訂結セシメトス英廷ハ日
本ノ果メ各國政府ト約束セル條項ニ率遵レテ
其全國ヲ関クヘキニ於テハ其税則適用ノ事ヲ
請求スルハ至当ノ事ナリト公認ハ是以若シ他
國政府ノ承諾ヲ得ハ則税則ニ関スル條約中ニ
一項ヲ掲ケテ以テ十年或ハ十二年ヲ經テ同盟
國双方ヨリ十二ヶ月前ノ報知ヲ与ユルニ於テ
ハ則テ條約ヲ終結シ否ラサレハ猶ホ其條約ヲ

存續スヘキ旨ヲ約定スヘシ但シ條約有終ノ權
ヲ実行スルノ時ヨリ三ヶ年以前ニ於テ日本ハ
成約ニ基キ實際適愜スルニ足ルヘキ方法ヲ以
テ其金國ヲ開カサルヘカラス英廷ハ此ノ如ク
許讓ヲ爲シテ其友情ヲ啓表スルモノ日本視テ
之ヲ尊重スヘキヲ信シ且ツ日本ハ其報酬トシ
テ外國人トノ交渉ヲシテ益便利ナラシメレド
シ謀ルヘキヲ冀フナリ故ニ英廷ハ旅行免狀ノ
制度ヲ擴張スル事并ニ外國船舶ニシテ未開港
ノ間ニ往復貨物ヲ運漕スルコトヲ許スヘキ事ヲ

要求スヘシ又後來領事裁判ヲ廢止スルノ趣意
ニ依リ外國裁判官ヲ以テ構成セル法衙ヲ設立
シ外國人ノ上ニ裁判權ヲ施行スルノ一事ニ関
シテハ英廷ハ日本ノ請求ニ応セリヲ冀望ス
ト雖モ諸般ノ新法及ヒ裁判手續等完備シテ成
譯ヲ經ルノ後々ニ非レハ何等意見ヲ開陳スル
ヲ能ハス現行條約第廿三條最愛欽慕國ノ接遇
ニ関スル條項ハ英廷ニ於テ何等改正ヲ加ユル
ヲ欲セス税関通商規程保險藏敷賠還税銀港
則及ヒ燈臺税ノ諸項ニ関シテハ英廷ハ之ヲ日

本及ニ外國政府委員ノ會議ニ附シ其他商標并
專賣免許ノ保護ニ関スル事項モ亦速カニ商定
セシムルヲ企望ス

十二月十一日

花房

波得堡府ニ於テ一千八百八十三年十二月十五日

在英公使ヨリノ電報

日本駐劄英國公使ハ一月中旬ヲ以テ仙國郵船ニ搭レ發途スヘシ同公使ハ過日英廷ノ意見書中ニ載スル要旨ヲ辨明セリ同公使及ヒ其他諸人ハ皆ナ余ヲレテ英廷ハ通商及ヒ司法上ノ事項ニ関シ最モ懇篤ノ友情ヲ啓示シ成ルヘク日本ノ望ム所ニ副シテ欲スルノ精神意ヲ懷クモノナリト信認セシメレトス情勢此ノ如キニ至テハ條約改正ノ事ニ就テハ最早余カ倫敦ニ在ルノ職務ヲ要セサルカ如シ尊慮果ノ之ヲ然

ツ
ト
ス
ル
ヤ
否

東京外務省伊藤公

條約改正ノ件ニ関シ内容ニ露廷意見書ノ写ヲ
得タリ其載ル所税則ノ主義ヲ認諾シ最愛欽慕
國條款ハ雙務ノ約束ナクシテ相互ノ明條ヲ以
テセシメテ要求ス而メ條約有終ノ明條ヲ掲ク
ルハ我政府カ果シ東京會議ニ於テ揚言シテ
ル如キ寬優ノ意向ヲ実行ス一キニ於テハ別ニ
異議ナキトシ啓示ス又外國人ノ上ニ施行スヘ
キ裁判權及ヒ行政ノ事ニ関スル問題ヲ商議セ

レ1.ハ露廷ノ聊力超超スル所ニ非ルヲ附言
ス諛意見ノ写ハ郵便ニ讓ル

彼得斯堡府ニ於テ一千八百八十三年十二月廿日

花房公使

伊藤公

閣下ノ電報三通既ニ之ヲ落掌ス余ハ條約ノ本
 体ニ明載シタル関稅增加額ヲ以テ通債改良ノ
 用途ニ充ツヘキ事實ヲ認容スル能ハス定期有
 終ノ事ニ至テハ余ハ雙務約束ノ案ヲ撤回スヘ
 キヲ主張ス如何トナレハ全國ヲ関クト條約ヲ
 終結スヘキトノ兩案ハ事共ニ同時ニ出サルヘ
 カラサルヲ以テナリ而メ條約ノ効力ヲ存続セ
 レノレヨリハ寧ロ更ニ他日ニ改正ノ期ヲ頼ム
 ニ如カス旅行免狀ノ制度ヲ擴張シ内地ノ商賈

ト、交通ニ自由ナラシムヘキ一事ニ至テハ余
ハ別ニ其間ニ異議ヲ有セスト雖モ之ヲ許ス必
外國人ノ上ニ施スヘキ裁判權ノ幾分歟ヲ我ニ
許讓セラレレトシテ要ス沿海貿易ノ事ハ談判記
ニ明言シタル如キ取極ヲ以テ期限ヲ十年ト定
メ更ニ此ノ特權ヲ授与セレト既ニ余ノ胸算中
ニ在リ然レトモ兎モ角モ此ノ特權ヲ授ケレニ
ハ其期限ヲ確定シ而メ其定期ハ復タ新條約ノ
期限ト符合セサルヘカラス最愛欽慕國約款ニ
関レテハ余ハサヲモ一千八百八十八年独清附

添條約、倣レテ之ヲ請求セサルヲ得ス以上列挙
スルモノ、外ニ余ハ警察及ヒ地方行政規則ノ
事ニ就テ幾子ノ許讓ヲ覓ノサルヲ得ス英廷意
見書ノ旨趣ニ拠リ更ニ我ヨリ何等許讓ヲ為サ
レテ余カ卑見ヲ以テスレハ現行条約ヨリモ一
層危害アルモノ、如クナラント思ハル君レ各
國政府ニレテ英廷ノ發議ヲ贊成スルヲアラハ
余ハ此ノ如キ趣旨ヲ以テ新條約ヲ訂結セレヨ
リ寧ロ數年ヲ待ツニ若カスト断定ス是以余ハ
此ノ機ニ乘シ我ヨリ抗議シ發スルヲ詢ヒ止ム

ヲ得サルモノト認ムルナリ先ツ此ノ事ヲ執行
シ而メ後チ森公使帰朝ヲ請ハ、則其請ヲ許ス
ヘレ英廷意見書ノ事ハ直ニ之ヲ青木公使ニ報
道シ氏ニ命シテ其事ヲ以テ独廷ニ提出シ我改
府ニ在テハ曾テドーノフ氏ニ明言シタル所ノ
外更ニ一步ヲモ譲ルヲ能ハサル旨ヲ啓示セシ
メ而メ猶ホ独廷ニ請フニ寛優ニ出テ毎当ノ局
ヲ結フヘク其威ヲ用ヒテ居仲調處ノ策ヲ施サ
レヨヲ以テセレムルヲ良全ノ策ナリト思考ス
閣下モ亦宜クドーノフニ面晤シテ同一ノ策ヲ

施スヘシ猶ホ伊國及ヒ其他ノ政府ニ謀ル所アリ
●ヌレ露廷ノ意見書ヲ見ルニ其議スル所甚ク
寛優ナリ然レトモ最愛欽慕國約款ハ相互双務
ノ約束ニ出サルヘカラス宜シク花房公使及ヒ
ダビドフヲシテ事ヲ謀ラシムヘシ

井上

松山、於テ一千八百八十三年十二月廿二日

在英日本公使

是下十五日附ノ電報ニ付テハ是下宜クダラレ
 ビル公ニ傳フルニ英廷カ刺下ノ情勢ニ臨レテ
 敦厚ノ友誼ヲ表シタルハ我國ノ深ク鳴謝スル
 所ナルノ誠意ヲ以テスヘシ然レトモ此ノ時ニ
 当リテ是下公ヲ持レ平ヲ乗ルニ於テ敢テ憚ル
 所ナレトセハ則チ竊カニ公ニ指明スル所アレ
 英廷ノ意見書中ニハ往々我國ノ冀圖ニ背クノ
 要旨ヲ載ス我國敢テ抗議セサルヲ得サルモノ
 アリ乃チ其要領ヲ列舉スルニ左ノ如シ

我國ニ於テ條約ヲ終結ノ權ヲ実行スル前三ヶ
年ヲ以テ試驗期ト定ムヘキ一事ニ至テハ我國
ニ於テ實際如何ニテ能ク此ノ如キ約束ヲ履踐
スヘキ歟殆レト解スヘカラサルモノアルヲ以
テ之ヲ承諾スルヲ得ス内地通商ノ目的ヲ以
テ旅行免狀ノ制度ヲ擴張セシムハ必ス裁判權
ノ問題ト聯帶スルモノナルカ故ニ今持リ其一
ヲ定メテ復タ其ニヲ顧ミサル如キハ到底行レ
難キモノトス是以此ノ事タルヤ裁判權ノ問題
ヲ商議スルノ時機ニ達スルマデハ止ヲ得ス在

再未定ニ歸セシメサルヘカラス

沿海貿易ハ東京會議ニ於テ發議シタル如キ傭

使船隻ノ制度ニ依リ定期ヲ議スルニ於テハ僅ニ之

ヲ許スヲ得ヘキノモ最愛欽慕國約款ニ関シ

テハ足下ハ當ニ同公ニ逼迫切論ヲ云フ今一層寬

優ノ意見ヲ加ヘシヲ以テスヘシ少クモ拙速

政府ノ發議シタル所ニ倣ハ則チ我國ニ於テハ

稍彙諾スルニ足レリト認ムヘシ其他瑣細ノ末

事ニ至テハ我國敢テ糾紛論スルヲ欲セサルナ

リ

足下宜シクグラレビ

連ヲ
ル以上

ノ諸項ニ関シ我國

ノ意見ヲ痛論スヘシ蓋シ公ニ逼迫

スル

儼然タ

ル式法ヲ以テ辨難スルヲナク必ス機密ノ内話

ヲ以テレ公シレテ我國ノ希圖スル如キ趣旨ニ

基キブレケットニ授クヘキ訓令ヲ變改セ

ムルニ敢テ憚ル所ナカラレムヘシ猶ホ事ノ顛

末ハ宜シク電信ヲ以テ報告スヘシ英廷意見書

ノ事ハ足下既ニ之ヲ青木ニ報道シタル乎若シ

否ラサレハ則チ當ニ速カニ之ヲ報道スヘシ

伊藤

在獨日本公使

英廷ノ意見書ニ對シ余ハ左ノ如ク森公使ニ訓
命ヲ下レタリ

我國ニ於テ條約終結ノ權ヲ実行スル前三ヶ
年ヲ以テ試験期ト定ムヘキ一事ニ至テハ我
國ニ於テ實際如何ニテ能ク此ノ如キ約束ヲ
履踐スヘキ歟殆ト鮮スヘカラサルモノアル
ヲ以テ之ヲ承諾スルコトヲ得ス内地通商ノ目
的ヲ以テ旅行免狀ヲ擴張セレトハ必ス裁判

權ノ問題ハ聯帶スルモノナルカ故ニ今特リ
其一ヲ定メテ復タ其ニヲ顧ミサルカ如キハ
到底行レ難キモノトス是ヲ以テ此ノ事タル
ヤ裁判權ノ問題ヲ商議スルノ時機ニ達スル
コトハ止ムヲ得ス茲再未定ニ歸セシメサル
ヘカラス沿海貿易ハ曾テ會議ニ於テ衆議ニ
タル如キ傭使船隻ノ制度ニ依リ且一定ノ期
限ヲ立ルニ於テハ僅ニ之ヲ許スヲ得ヘキ
ノト最愛欽慕國約款ニ関シテ宜シクグラレ
ウ井ル公ニ逼迫切論スルニ今一層寛優ノ意

見ヲ加ヘンイタ以テスヘレサクモ独逸政府
ノ發議シタル所ノモノニ倣ハ、則我國ニ於
テハ稍彙諾スルニ足レリト認ムヘレ其他瑣
細ノ末事ニ至テハ我國ノ敢テ屑々紛論スル
ヲ欲セサル所ナリ

今日ノ情勢ニ到リ足下ノ見ル所猶其機會ノ
乗スヘキアリトモハ請フ其機ヲ失フコトナク
独逸ノ外務省ニ提出スルニ以上ノ論議ヲ以
テセヨ而シテ下宜レク畢生ノ力ヲ盡シテ独
廷ヲ説キ其勢威ニ頼リテ以テ英廷ニレテア

ラレケツトノ祭報前其持説ヲ變ヒテ我國ノ
所論ヲ賛成セシムヘク施措スル所アルヘシ
電報ヲ待ツ

伊藤

名 称	三條実美文書
標 題	朝鮮公使所添進一印機密通信

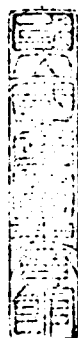
分 類 番 号	34
	9

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

朝鮮駐在公使所洋信一紙機密通信

明治十六年



機密信第三号

去一月十二日付機密第二号信より内重信重侯
 内近口中更に外務衙門より新設の朴泳孝
 初より日本黨之親近を朴泳孝内務致し夕
 一頃に於て被行せん方、帰着し總て外交に
 此等諸公統理衙門に擔任し相成申候
 金完集ト談判ノ事、親則に相渉りし處、
 集云「有」衣店ニ使ハル、談判致し先見
 有之先ツ大伴ヲ一刻ニ遣ハス、品ニ寄リ
 上リ或ハ下ンコトモ有之見込ナリ、小官ニ我
 貴國トノ貿易ハ殆ト三百年ノ久シ、故ニ後
 ノ商民互ニ貸借モ有之、故ニ事ニ付新夕、
 来々西洋各國ト同視スルハ、情誼ナシ

諒ノ事ト存小免モ角モ立郡ト同様ニ關係
ニト間立郡ト均一ニ相成度万一支郡ト税則ニ
ニ差出果有之ト云ハ不レ平ト相考ルナリ金云々
清國ノ限リ特別ナル可カラザレハ論ヲ俟タス
他ノ各國ト云ハ皆同一ノ章ノ程ヲ設ケルモ亦
一清韓條約中ノ如五條ニ言明シタル五ノ税ハ
從來清韓ノ境界即義州會寧ニ於テ貿易
場ニ双方收税上預メノ懸弊有之且接續
費用モ相違ルル事故其等ヲ改正シテ五
ト相違ノ如ク今度新設スル普通ノ海關
トハ今ノ其性質ヲ強クセシモノト有之ト間立
會ト云ハ

元レシンドルハ嘉善大吏條理立涉通商

勅系理正三品に被任日に出勤し奏内ノ節
朝鮮ノ冠服ヲ着用致し

閔泳聖ハ歸國後無程院昭ノ上協理交際
通商事務被申付ル処再三辭退ノ上遂ニ
當分役ノ處ニテ就職致し同人儀去一月廿三日
通商章程取リ調ハ名義ニテモんシドムフ李
祖洙閔應植ヲ同行シ天津上海向ニ出發
致シ或ハ韓人ノ言フ所ニ據シ閔泳聖ヲ支
那黨引ルル爲メ今度ノ清國行ヲ支那黨ヨリ
推シ立テタムナリト

馬達常二一兩日前、議政府贊儀兼通
商事務正三品に被任是モ今ノ朝鮮ノ官負
ト相成リ奏内ノ節ハ朝鮮服ヲ着用致し

朝鮮ノ官負役前ニ交際ヲ嫌ニ成之ヲ相
由ノ邊近日ニ至リテ却テ往來ヲ好ニシ
尋問サレ敷シヨリ初面ノ人ト答メ尤モ
迎酒者ヲ供シテ飲不ニ皆ニ薄儀ニ付隨
政ニ差違者ト様子ニ及ニ及時ニ尋問
ニ頗ルニ痛ヲ覺ル
右内申ノ由也

明治十六年二月八日 總理公使府臣達一即

外務卿井上馨殿

支那ノ朝鮮ニ干涉スルハ其ノ意專ラ日本ノ干涉ヲ
 禦クニ在ルニ似タリ日本ヨリ兵ヲ派出セシテ支
 那モ亦兵ヲ派出ス日本ヨリ礦山ノ事ニ説キ及ヒタルヲ以テ
 花房清柳浦支那モ礦山ニ着手セントス日本ヨリ教師ヲ借シ
 兵ヲ訓練セシテ以テ支那モ教練ニ從フヤリ此等皆日本ヲ
 猜疑スルノ點ヨリ出ルモノニシテ我カ琉球置縣ノ故智ヲ捷ニ
 虚ニ乘シテ朝鮮ヲ吞噬ヒニシテ專ラ其防禦ニ汲ミ
 タルモノ、如シ

今日ノ勢ハ甲乙ノ兩男一ノ兩女ヲ爭フニ譬フ甲男ハ舊好ノ
 兩女ヲ乙ニ奪ヒ去ラシテテ怒レシ男ハ新識ノ兩女ヲ甲ニ根
 リテリレニテテ怒レシ乙ニ競テ心カヲ奪ヒ以テ兩女ノ心ヲ攬ント
 欲ス然ルニハ兩女實ハ惑溺スベキ迷途ニ客儀ニ非ズ仍テ人ヲ
 シ男ヨリ意氣地ヲ去リ甲男ノ為スマニ任セ一切煩着セザル

ニ松テハ甲モ張り氣振テハ要ヨリ為メニ心力ヲ費スルノ愚ナ
ルヲ悟リ隨テ兩妓ヲ根引キスルノ妄念或ハ消滅スルモ難
斗

論者或ハ云フ朝鮮若シ清ノ内屬ニ歸スル時ハ法ヨリ
日中ニ接近スルニ釜山ノ如キ地方ニ炮台ヲ新築シ或ハ
軍艦ヲ常置シテ駭ニ或ハ迫ルニ憂有ラント此ノ論遐慮
ト云ハバハルヲ得ズ試ニ見ヨ法國直隸及東三省ノ要
地ヲ除クノ外警備ノ整頓セル必要有ルヤ内地都此ノ如
シ要シ域外ヲ守ルニ難クランヤ且艦令更ニ有ラニ云ルモ要
用ニ距大永ク堪ル所ニ非ズ況ニト法兵ハ鴉片ヲ掠メ婦女
ヲ掠スルハ等ノ惡習有リ果シテ釜山ニ永駐セバ地方ノ人民
怨怒ヲ抱キ却テ日本ニ傾向スルノ憂ヲ生スベシ此レ我國ノ
為メ所請魚ヲ驅ルノ機ニ類スルモノ之軍艦ヲ常置スルニ

至テハ支那後來ノ實力如何ニ由ルヲモテ果シテ艦隊ヲ
釜山ニ常置スル丈ケノ軍艦ヲ所有スル勢有ルヲ當テハ
日本ニ迫ルノ憂豈獨リ釜山ノ一隅ニ止マランヤ

今日法國干渉ノ大ナル件ヲ挙クル時ハ第一法韓貿易
章程ヲ制定セシメテ又ニ法兵駐^在且韓兵ヲ教練スルヲ
第三馬建常モルレントルノ友名ヲ選舉セシメテ第四礪
山着手ヲ怠慢スルヲ

法韓貿易章程ヲ訂シ且恩別ハ極密ヲ十一号ニ具條ハ略
ス

第二法國士官ノ教練ヲ最ニ振奮ヲ惜リ又ケルト同例ニ
第三馬建常韓兵ノ教練ヲ最ニ振奮ハ法國ニテ西人ノ友友
府州ニト同例ノ待遇ヲレハ朝鮮ニテ自ニノ權ヲ有セシ
ル

第四回 礦一途ハ拓商局總辦唐景星ヨリニテ案策ヲ
 建議シ政府ノ取捨ヲ云フモノニテ是亦自主ノ權
 ヲ有セシムル途ナリ

今日ノ得蒙ル哉。一切ヲ拂ヒズシテ静ニ前途ノ運ヒヲ看
觀スルニ如クナリト雖ヒ比々一慮ルベキモノ一俤五那經解ノ人上下
一般ニお見ト曰快ニテ施ヲ以テ之ニ臨ム時ハ畏シテ命ニ從ヒテ柔ヲ以
テ其接スル時ハ押シテ我僇ヲ勵ム風習ニ付一切手ヲ引
テ看觀スル法ニ至リ兼リハ就テハ時有テ刺ノ如ク時有ニ
斥ノ如ク寛猛中ノ宜ヲ得恩威並施ハ偏ニ我廟堂ニ此
手心ニ及ミテウラトラフ

先王ノ京ノ節ハ專ラ溫和ヲ以テ交際ヲ親密ナラシムル胸
襟ニ及ミテ如ク勤臣ノ上韓女トニ三回ノ談判ヲ試ミ初テ佛
顔ノミテハ百ヲ還ヒ不ナラ信認セ、仍テ向後ハ鬼面ヲ扮
シ應接セ、多古ニ覺悟セ、古愚見ミテ以テ信肉異ナリ也

二月十三日

井上殿
山縣殿

竹添進一郎

前五衛將尹相和上疏

伏以臣以草野寒微之蹤、材畧謏劣、識見謏陋、卑值
聖明之世、晚竊忠良之科、三品、恩資已極、榮耀
六旬、賤齒、無他、嘗為有子七人、三子登科、揆方懷惕、
恒切戒懼、惟願少須臾、無死、見世子卽下之學、日
就而德日新矣、今六月之變、忽出於千萬慮之外、
此誠剖判以來、所未聞之變也、言之臆塞、思
之膽裂、而皇天眷佑、
坤聖還位、雖愚夫愚婦、孰不蹈舞懽欣、如赤子之更
遇慈母、而苟非、

世子卽下之達、天至孝、烏可以致此乎、堯天瑞日、乍
晦旋明、周邦休命、雖舊維新、猗歟盛矣、於不美哉、第
伏念軍亂之出也、為其將者、設或不知、責在元帥、若

知而不知是逆臣也。誅之可也。奚徒止於島配。荐棘之律乎。向日庭鞠草草。了勤。故軍兵之漏網者。散在鄉谷。投入賊黨。目下所見禍將不測。臣之為憂者此也。嗚呼。天朝之遣將討逆。計出扶網。恩威并行也。隣國之渡海開港。意在通商。利害相較。而今此機務處之設。始果是當今極務也。交隣之方。通商之節。何莫非此箇中。排置而噫彼。嗤々蠢氓。不知機務之關係如何。但以前所未聞之事。歸諸疑恠。訛言相動。時騷轉甚。何不至命有司之臣。斷成條件。輪示四方。以破重惑。以定羣心也。嗚呼。在廷之臣。無論大小。何者非。

殿下之臣乎。衣君之衣。食君之食。今為五百年之久。則其在共休戚感之地。豈忍袖手傍觀。恬然無愧乎。一

自軍亂以後，遂逐家眷於鄉庄，但寄食於奴僕，此將變出不意，豈言逃走之計也。興言及此，寧不痛迫哉。嗚呼，官官害古聖王皆達之，況乎瞽之類乎。瞽瞍之出入言禁，雖有嚴禁，則掌法之官宜其奉承之，不暇而適聞以一瞽詞投之，遽逸。秋曹之官如是，而法何以行，令何以立乎。自之不取者，此也。嗚呼，語曰：雞鳴而起，戎士為善者，齊之徒也。此古昔聖人勉人勤工之訓也。詩曰：匪雞則鳴，蒼蠅之聲，此齊侯賢妃箴君晏起之辭也。殿下以天縱之聖，本秋隆盛，一日萬機，猶恐不及，況今國步多艱，宵衣旰食之時乎。夜而討論經史，則帝王之治規瞭然在目矣。晝而接見賢俊，則民國之庶務易如反掌矣。不此之為，而終夜失眠，體候必多

愆損至晝就寢神氣易致昏惰近日所謂別入侍之
臣未知以何書討論何事接見而無一人直言極諫
格君心之非雖欲圖治而朝臣無補治之心雖欲求
言而朝臣無進言之誠雖有堯舜之聖何以致堯舜
之化也然則殿下深處九重之中日以聲色自娛
不知危亡之機迫在朝夕者非殿下之過也即
朝臣之罪也上自公卿下至大夫之列者非但為
殿下之罪人也亦將為天下罪人也
殿下何以教世子邸下而以何辭垂之竹帛傳之
後世耶臣之節々痛迫者此也嗚呼臣是先正臣
之九代孫也以不和臣後裔固不敢擬議於外國事
務而此有大不然者天朝之期欲使外國通一知
音專為保護偏邦之計則何必以兵革為懼而反與

之文、接、歟、我國雖偏小、羣賢輩出、孔孟之學、管葛之才、無代無之、需世以用、則設或倭洋諸國、衆讐而入、一鼓而定、不足憂也、嗚呼、古語曰、臨淵羨魚、不如退而結網、雖今日、殿下行先王之道、遵先王之法、則堯舜之化、可以挽矣、漢唐之治、可以期矣、臣當有所講究於心者、即治國安民之要也、請條陳之、嗚呼、

機密信（平九号）

通口統理濟南支店通商事務を理毛レニシテ其ノ如ク此ノ如ク
ニ揚花鎮ニ設ルニ多ク一村故ニシテ之ヲ多ク設ルニモ別々
勿レ感ニシテ見レ上流ニ在ル麻浦ニ稠密ナル市街毛有レ
朝鮮ノ船舶孤獨ニ寄ルニ（通商ノ場）有揚花鎮ノ前港
ヲ麻浦ニ轉移スニ朝鮮ハ申ニ不及通商各國共ニ便利ヲ
得ベシ故ニ揚花鎮ノ寄ル場ヲ麻浦ニ移シ（多國ニ以
テ後中入分旅ノ貴國ニ於テハ承取スル）（國ニ思慮毛
シ）有尤所ノ地形ノ多狀ヲ直ニ目撃シテ其ノ不便
ニ對照シテ其ノ有率ニ思慮毛ル（其ノ有率ニ思慮毛ル）
有所ニ面シ（有差支）有所ノ移設（其ノ有率ニ思慮毛ル）
ニシテ其ノ有率ニ思慮毛ル（其ノ有率ニ思慮毛ル）
麻浦ニ居ル地前故ノ移令（其ノ有率ニ思慮毛ル）
（其ノ有率ニ思慮毛ル）

在相輝

井上外務卿殿

楊花津互市場移轉ノ議

楊花津、互市場ヲ移シテ麻浦ニ南シ、利害左ノ如シ

一 麻浦ハ楊花ノ上流一里許ニ在リ、水改ヤ、遠キモ、大小船舶ノ
繫泊、多ク麻浦ニ在テ楊花ニ稀ナリ、以テ麻浦ノ便ナルヲ見
ルベシ

二 仁川ヨリ京城ニ至ルニ、麻浦ハ本道ニシテ楊花ハ支道
ナリ、隨テ楊花迄ハ不便ナルヲ覺ス、

三 楊花ヨリ南大門ニ達スル迄ハ麻浦ヨリノ道迄ハ比色ハ
是場宜シキニ似タレ、凡、路幅狭クシテ里程少シリ、遠
シ

四 麻浦渡頭、西ハ朝鮮ニ在テハ繁盛ナル市街ナリ、
楊花ハ民家稀ク、一村々タルニ過キス、

五 楊花兩岸ハ空地多ク、隨意ニ居る地ヲ定ムルヲ

得べし麻浦ノ北岸ノ人家稠密其南岸ハ砂漠十
倍下ニ流リ居る地適當ノ地所ヲ見ズ

五ヶ條ニ就テ楊花麻浦兩地ノ利害ヲ比較スルニ
麻浦ノ不利トスルモノハ楊花居る地適當ノ地所ヲ見
かぬ若シ麻浦ニ居る地ニ適當ノ地所ヲ見
止メテ麻浦ニ移スハ却テ其便利ヲ得べし

械密信第一号

一 清國提督吳長慶、學問モ有シ極メ志操貞率ナル人物ニル由上ニ
別シテ慈意ニ注来、乃チ同氏、言フ所ニ據シ、朝鮮人心一時不穩大
ニ共乱反ラ重刑ニ處シタル後、漸次靜謐ニ帰スル、安否ト併シ乱
民、逃散セシモノ、終愛ニ作スノ勢ナシトモ雖、仍テ黨々ノ糾ハ兵隊ヲ引上
テ至リ、不ヤ然ニ大共ニ駐在スル、贊同巨大ナル、苦シム以テ三月比、兵
半ヲ引ケ、徐リニ朝鮮國ノ動靜ヲ觀察スル積リナリト同氏又云、汝此、長官
慈親ニ有シ、乃チ下ニ兵率ニ至ル、汝汝觀視タル、要々々々、乃チ此上屬
ニ注来シテ慈親ヲ表スベシ又云、朝鮮ニ極テ貧困ノ國ナル故、通商ヲ開ケテモ西
洋人、餘リ注来致スル、故唯恐ルベキ、魯國ニシテ朝鮮ノ魯ヨリ奪取セラレ様
我國ト貴國ト共ニ倭寇致シ度ナリ又云、朝鮮國王、朋君ナシ、臣要政人、皆門
戚ニ、限ル年數、河津モ寧モ不ト又云、礪山ヲ開墾セ、利益ニあベキト朝鮮臣等
自辨、力盡、之、去建、成國、信款モ致ス、公又キ、國ニモ信款、致ス、乃チ、兵、款、

深キ國ニテ政方多し云々

清心山兵隊モ正銀ノ通用ニ餘程達感歎所候ニテ普ニテ西ヲ轉
文ニ引換ヘキコモ吾國文條ニ引換ヘテ由候ニ轉換御意ハ然
清心山兵隊モ正銀ノ通用ニ餘程達感歎所候ニテ普ニテ西ヲ轉
ト為ル共今ノ如クニハ低幣一圓ニ換銀三百五十文ニ由テ常々
洋銀一圓ヲ二圓ノ低幣ニテ交換シテ割合ニテ餘程ノ換耗
有内申也

左組解

明治十六年二月九日

新野及竹添進一郎

外務省井上智多郎

機密信第六号

別紙一冊甲號古々先般清国招商局總辦唐景星
英人某ヲ同行シテ京畿江原二道ノ礦山ヲ巡覽
シ其ノ景狀ヲ具陳シタルモノニシテ末ニ開礦着
手ノ方法ヲ五條ニ分テ朝鮮政府ニ申立ハ

一 右兩條ノ内朝鮮政府自辦ニ一議ハ機密ヲ購入
スルニ巨大ノ費用ヲ要スルノミナラス礦山師雇給其他
百端ノ入費連テ朝鮮ノ貧政府ニ於テ支辨ノ方
法ハ相立テ同部ト思考致シハ

一株主ヲ朝鮮國民及ヒ支那人ニ募ルニ一條右ハ朝鮮國民
ニ株主トモ相成ヘキ有力家ハ全国中ニ幾人モ有
シ同數左ハハ到底支那人ヨリ引受クン儀ニ否支那
内地ノ開礦スル株主募リハハ隨分骨折シハ模様ニ承取ハ

[illegible]

然ルニ朝鮮ハ支那ト違ヒ平坦ノ地少クシテ唐氏ノ見立
ル銅鉄礦モ皆深山ニ有ミ且ツ其ノ近傍ニ炭礦ハ見
リ不申位ニ事ニ日置械ヲ備ヘ付ケ鉄道ニテ運出スル等
ノ論ハ架空ノ妄想ト謂ハサルヲ得ズ忒數十萬兩ノ一費ヲ
拭ケルヘシ或ハ其功ヲ遂テ得ベキト雖モ招商局ニ走レ
走テノ餘裕無シ且互那人ニ朝鮮礦山ノ株主ト
相成ルヲ冀望スル者多ク有之可也左ハ到底數千萬兩
ニ募集無見束テ存

一 然ラハ則チ日本ヲ利礦ニ事ヲ擔當セシメ又支那ヲ故障
ヲ申入レハ必定ニ付朝鮮政府ヨリ允許ハ出來ヤ否
歟又假令允許スルトモ得ル所ノ利ハ莫ク損ヲ償フニ足ラガ
ルベシト愚考致シ

一 仍テ考フルニ朝鮮國ニ開礦ハ支那ニ急遽ニテ着手セシ

ムルニ如カズ支那ヨリ着手スルモ前陳ノ景況ニ付其現
ヲ羨スル能ハズ半途ニテ廢止スルナルベシ左スレハ支那ノ
人望薄ク相成我國ヨリ善後ノ策ヲ施スノ都合モ可有
ニ萬一支那ヨリ数十萬ノ資カヲ募集シ得テ開礦ノ功ヲ
奏スルニ於テハ朝鮮國モ隨テサシク富有ノ色ヲ形ハシ漸
次開化ノ道ニ進歩スルヲ得ベシ苟モ開化ニ進歩スルハ
支那ノ干涉ヲ厭ヒ支那ノ頽衰ヲ厭ヒ日本ニ傾向シ日本ヲ
慕シ敬スルノ心ヲ深フスルハ必然ナリ是レ則チ他人ノ力ヲ以テ石
田ヲ開墾シ其ノ收穫ノ功却テ已レニ歸スルノ類ニシテ
支那ニ在テハ勞シテ功サナク我國ニ在テハ袖手ニテ利ヲ
獲ルモノト愚考ヲ致シ

一別紙一冊ニ号ハ唐景星礦山巡視ニ節國王ヨリ護送
ニ申付タル趙存億ナル者ノ日記ニ有エ右ニ同封呈

入貴覽以尤各地礦石之見而於之先公使館付磁
林中尉之手之入之甘今者正金銀行草御法郎ノ歸
朝便之托之送上以司其筋之テ御試騷有之智也

左朝鮮

明治十六年二月九日

辦理公使竹添進一郎

井上外務卿殿

唐廷樞看山錄

茲將已歷各府礦山情形開具節略送請
台覽

十一月十四日赴江華府廿一日回京當在江華時
徧歷城南城西各山其城南摩達山見有金星層石
土人說係金實係無用之物城西高麗山有吸鉄石
礦甚好可鍊成鋼惜乎雪積滿山未辨礦穴之深淺
且穴頂有墳塋二處將來開採勢須擇地遷葬二十
四日北行二十六日在永平邑之金柱山看得銅礦
一處銅頗佳且離小河只有里許取水容易二十七
日在金柱山東地名張家口看有棕色鐵礦鐵頗佳
槽寬六尺從山腰斜生若從山下開洞取之不難二
十九日在金化邑之三巨里看有鐵礦其石色青鐵

質頗好。又在該邑之梨實洞。看得銅礦二處。大約係
出於一槽。其銅却比金柱山銅旺。而色亦高三十日
至。金城之鵠岩。是日大雪。且山高二百丈。未能登山。
初一日上山。看鉛礦。洞深百丈。取出鉛石。驗視鉛不
甚多。幸每百兩之中。有銀貳錢。尚可化算。金城南十
里。地名麻灰洞。產水灰石。初二日至金城東昌道。看
硫黃礦。驗得係鐵黃。可作鑛水之用。又在鍾路乙介
洞地方。看得銅礦。其銅與金化梨實洞之銅相仿。初
三初四。從冒道至狼川。所經各山。多見有薄層石。可作
瓦用者。初五日在狼川南十里。看得白粉石。可作桌
面之用。初七日在洪川東五十里。看有土人之所謂
銀礦者。驗得係硬鉛。且礦質不佳。初八日看得該邑
東六十里之泉甘里。鐵質與永平錢相若。十一日回

京前後遊歷一月之久。經過十餘府縣。盡係萬山叢
集。而各山均係班星石。正係出產五金之石。決不能
與煤並駕而生者。是洪川一處。似非有煤之區。細看
地圖。黃海全羅慶尚三道。平地頗多。應有產煤之地。
只好俟來年。再往探覓如何。

朝鮮高山多。而平地少。百姓稼穡維艱。且生齒日繁。
既無別業可圖。似宜籌謀於未雨。開海禁以廣經營。
啓地寶以充國用。此乃富強之急務也。擬等遊歷兩
旬。已看礦十餘處。銅鐵多而且佳。確有實據。就已看
江華永平金化洪川四處之鐵。金柱山梨實洞二小
洞三處之銅。而論約可供百年之用。其附近該處。尚
有別礦。或鄉人已知。未經引看。或鄉人未知。尚不知
幾何。此等佳礦。若仍聽鄉人謹守成法而不變通。雖

百年不能見利。緣土法開採先易後難，愈開愈深，洞
不透風，無可點火，泉多出水，無法厚，乾棄之則資水
無着，強之則性命攸關。此土法之斷難操勝者，苦
機器參以新法，既無水火之患，又工人操縱自如，運
愈速，人愈衆，出礦愈多，此先難後易之法。但用新法
至機器固需籌鉅款，用洋匠又須延用得人。日本
至有鑄鐵之爐，而不適用。湖北僅有採煤之匠，而不
見效，均皆可鑒。況各府銅鐵等礦雖多，而左近無煤，
可採其礦又產於重山疊嶺之中，運動又非容易。是
朝鮮之開礦不但比外國難，即比中國亦難。欲改難
及易之法，又非鐵道車不可。是開礦鐵道係表裏相
通，鐵道藉開礦以成，礦質藉鐵道而運。若產五金之
地無煤，或運石而就煤，或運煤而就石，均可。是開採

五金各礦、首在覓有合用之煤、次在陸續安放鐵道、
二者不能缺其一、三事并辦、又非千數百萬兩不可、
果能踊躍從事、一氣呵成、不但各道之礦均可開、而
運礦鐵道漸、推廣、北達元山、南通金山、誠通國富
強之一大關鍵也、樞創辦直隸之利平礦務、經已六
年、今秋始見成效、現又蒙衆商推舉、督辦安徽煤鐵
銅鉛諸礦、經已集資三萬兩、明春擬赴英國購置
機器、兼僱洋匠來華開辦、如朝鮮以礦務鐵路爲心
需、必行之事、請將後開二策、決其一、其餘招商章程
及礦務鐵道定例、容俟大局定後、仿照泰西各國
案參商呈核、

一、天下各國之礦、莫不歸商自辦、以期經久、今朝鮮
礦務、應否歸商、國家只收其稅、若歸國家自辦、

害自應由國任之。若需樞代辦機器，或僱用華洋
工匠，自當効命。

一、朝鮮與中國本屬一家，不應與外洋同視。各道之
礦，既准商辦，若一時乏領袖之人，樞自願招商，先
聽朝鮮官商附股，尚缺股份，均同一體沾潤。所需
地畝，或照時價繳交，或將地價作股，均聽朝鮮之
便。

永平錦柱山銅礦距京一百二十里、

山內地鐵礦、距京一百六十里、

金化三巨里楊谷鐵礦、距京二百五十里、

梨實洞銅礦、距京二百五十里、

金城堂峴鉛礦、距京三百三十里、

鍾路銅礦、距京三百三十里、

昌道硫黃礦、距京三百里、

洪川泉甘里鐵礦、距京二百九十里、

梧里洞鐵礦、距京二百三十里、

果隅金礦、距京二百十里、

甲号ノ沢文

譯文

唐廷枢省山録

茲ニ已ニ歴タル各府礦山ノ情形ヲ以テ節略ヲ開
具シ送りテ免覽ヲ請フ

十一月十四日江華府ニ赴ク廿一日京ニ出ル江華ニ在ル時ニ當リ
徧ク城南城西ノ各山ヲ歴過ス其城南ノ摩連山ニ金
星ノ層石アルヲ見ル土人云フ金ニ係ルト實ハ無用ノ物
ニ係ル城南ノ高麗山ニ吸鐵石礦アリ其外好ニ鍊ルテ
鋼トナスベシ惜ヒナク雪積山ニ満テ未タ礦穴ノ深淺ヲ
辨セス且穴頂ニ墳塋ニテ冢アリ將來開採セハ勢ニ便
地ヲ擇ヒ遷葬ス可シ二十四日北行ス二十六日永平邑ニ至
柱山ニ在リ銅礦一處ヲ看得タリ銅質ハ佳ナリ且ツ小
河ヲ離ル、只一里許アリ水ヲ取ルコト容易ナリ二十七日

金柱山ノ東地名張家口ニ在テ棕包ワッパ鐵礦ヲ看ル
鉄礦ハ佳ナリ槽ノ寛サ六尺山腰ヨリ斜ニ上テ若
シ山下ヨリ洞ヲ開カハ之ヲ取ルコト難ヤラフ二十九日
金化邑ノ三巨里ニ在テ鐵礦アルヲ看ル其石ハ青ク
鐵質頗ル好シ又談邑ノ梨窠洞ニ在テ銅礦ニ處
ヲ看得タリ大約一槽ニ出ルニ係ル其銅却テ金柱山
ハ銅ニ比スハ旺ニシテ色亦高シ三十日金城ノ偶岩
ニ至ル是日大ニ雪フル且高キコト二百尺未タ山ニ登ル能ハ
十二月初一日山ニ上ル鉛鑛ヲ看ル洞ノ深サ百丈鉛石ヲ
取り出シ驗視スルニ鉛甚タ多カラス幸ニ毎百兩ハ中ニ銀ニ
錢アリ尚ホ化算ス可シ金城ノ南十里地ヲ麻房洞ト名
ク水灰石ヲ産ス初二日金城ノ東昌道ニ至リ硫黃礦ヲ
看ル驗シ得ルニ鉄黃ニ係ル鐵水ハ用ニ作ル可シ又鍾路

洞地方ニ在リ銅礦ヲ者得タリ其銅心梨家
洞銅ト相伝フ初三日初四日昌道ヨリ狼川ニ至ル
所ノ各山多ク薄層石ノ毛ヲ作ル用ト作スヘキ者ナル
ヲ見ル初五日狼川ノ南十里ニ在リ白粉石ヲ者得タリ
桌面ノ用ト作ス可シ初七日洪城ノ東五十里ニ在リ土人ノ所詣
銀礦ナルモノヲ見ル鑛ニ得ルニ硬鉛ニ係ル具ハ礦質佳ナリ
初八日該邑ノ東六十里ノ泉甘里ヲ者得タリ鐵質永平縣
ト相若ク十一日京ニ回ル前後遊歴一月ノ久キ十餘箇縣
ヲ經過スルニ盡ク萬山ノ叢集ニ係ル而シテ各山均ク班星
ニ係リ正ニ五金ヲ出產スルノ石ニ係ル汝等煤ト並ニ駕ス
生スル能ハサル者是レ洪川ハ一處煤心ハ區ニ在リサルニ似
テカニ地固ヲ者ルニ黃海全羅慶尚ノ三道平地頗ル多
惠サニ煤ハ至ルノ地ナル可シ只好ト來年ヲ待テ再ヒ往

百枝校權雜記生

日二二系記二別集一九四十七年一月二十六日未入所二廿二

籌謀
仁禁
學士
子
維
意
紀
寶
三

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

遊歷所到已二廣二省凡二十五年

且 庄 子 八 確 ト レ テ 実 據 丁 巳 有 凡 万 江 門 五 丁

火
洪州
金
金
金
金
金
金
金
金

論
不
二
論
百
年
用
二
供
不
可
其
閱
新
地

別
礦
り
或
ハ
郷
人
已
知
ル
モ
未
タ
引
道
ヲ
不
成
、
引
上

求之ヲ知ラサルモノ尚或何ナク知ラズルモノ也

御人謹テ成法ヲ守リ安通
ニ他ハ百年ト

利見レ下二曉一六二レ土法ノ開採ハ易ニ先ニ黃ニ後ニ

愈々洞愈々深ク洞ニ風ヲ透セズ火ヲ點スヘキナク泉多
 ク水ヲ出シ法ノ岸乾スルナキニ縁ル之ヲ棄レハ資本ヲ
 失ヒ之ヲ強エハ性命ニ關ス此レ工法ノ斷シテ勝ヲ操リ
 難キモノナリ若シ機器ヲ用ヒ失スルニ新法ヲ以テスレハ
 既ニ水火ノ患ナク又工人操縦自如ニシテ洞愈々遠ク人
 愈々衆ク礦ヲ出ニコト愈々多シ此レ難キヲ先ニ易キヲ
 後ニスルノ法但シ新法ヲ用ヒ機器ヲ置クハ固ヨリ鉅額ノ
 準備需スルヲ需ム洋匠ヲ用ユルニハ又煩ラク^延用其ノ人ヲ得
 ハシ日本鑛鐵ノ爐ヲ置有ス而シテ用ニ適セス湖北煤ヲ
 採シノ匠ヲ僱有ス而シテ效ヲ見ズ均ク皆鑒ムヘシ況ンヤ各
 府銅鐵等ノ礦多シト雖^延倍ニ煤ノ採ルハキナク其礦又重
 山疊嶺中ニ産シ運動又容易ニアラス是レ朝鮮ノ開礦
 外國ニ比シテ難キノミナラス即チ中國ニ比スルモ亦難シ^延難キヲ

改メ易キニ交エサント欲ルノ故又鐵道中ニ入ラサレハ不可ナ
リ是レ開礦ト鐵道ト表裏相通スルニ係ル鐵道ノ開
礦ニ藉リテ以テ成リ礦物ノ鐵道ニ藉リテ運ニ若シ五金ヲ
産スルノ地ニ煤ナセハ或ハ石ヲ運ニテ煤ニ就キ或ハ煤ニ運ニ
テ石ニ就クモ均ク可ナリ是レ五金ノ各礦ニ採掘スルニハ其
首ニハ用エハキノ煤アルヲ求ムニ在リ次キハ陸續鐵道ヲ安
放スニ在リニツノモノ其一ヲ缺ク能ハス三事并ヒ辦スルハ又十
數百萬兩ニアラサレハ不可ナリ果シテ能ク踴躍事ニ從ヒ
一氣呵成セハ只各道ノ礦均ノ開クキノミナス礦ヲ運ス
ルノ鐵道漸々推シ廣メ北ハ元山ニ達シ南ハ釜山ニ通ヒシ
誠ニ富強ノ一大鍵ナリ桓直隸ノ開平礦務ヲ創辦
ハ已ニ六年前秋始テ成效ヲ見ル理ニ又衆商ノ推挙ヨル故
ニ安撫ノ煤銅鉛諸礦ノ皆辦シ已ニ實金ヲ集ムルノ事

百兩明春英國ニ赴キ機器ヲ購置シ兼テ洋匠ヲ雇テ中華ニ來リ
 朝鮮ニルヲ擬ス若シ朝鮮礦務鐵路ヲ以テ必需心行ノ事ト爲ハ請フ後
 開ニ策ヲ將テ其一ヲ決セヨ其餘招商ノ章程及ヒ礦務鐵道ノ定例
 ハ大局ノ定ム後ヲ俟テ泰西各國ノ成案ヲ仿照シ考商シテ呈候スヘシ
 一 天下各國ノ礦ハ商民ノ自辦ニ歸シ以テ永スラ期セサルナシ今朝鮮ノ礦務
 モ商民ニ歸シ政府ハ只其稅ヲ收メキヤ否ヤ若シ政府ノ自辦ニ歸シハ
 利害トモ政府自ラ任スヘシ若シ概ニ申付ケ機器ヲ代辦セシメ又ハ華洋ノ
 工匠ヲ雇入レシムル自ラ當リテ命ニ從ヒ周旋スヘシ
 一 朝鮮ハ中國ト奉ト一家ニ屬ス外洋ト同視スヘカラス各道礦既ニ商辦ヲ准
 スノ上若シ一時領土ノ人ニ乏シカハ概自ラ願フテ商ヲ招キ先ツ朝鮮國
 官吏商民共ニ株主ニ加ヘスルヲ許シ高キ株主不足ゾハ中國モ均シク同
 様ノ利國ヲ同フセシメン其需ムル地方地所ノ時價ヲ照ラシテ交付スル
 モ或ハ他價ヲ以テ株トナストモ均シク朝鮮ノ便利ニ聽ス

十月二十四日、我明治
十六年一月三日、當

臣於壬午十一月二十四日、奉
傳教、同日申時量、率三遠捕、按王名、變服潛跡、出東
小門、行三十里、夜已深、更抵獲院、彼人一行、先到止
宿、自地方官楊則然、出詰主候、使校卒單、夜則分守
於彼人、所駐處、候過、詎語、我常、盡則或先或後、禁、路
路上喧雜之、弊是、白齊

二十五日、行五十里、中、於松陽、獲行二十里、止宿
於安荃驛、自地方官趙、出詰、又無、是白齊
二十六日、早、行三、至、大川、按路、永、石間、續
堆、英人下、轎子、俯首、徐行、於川邊、有、若、所、獲者、拾
得幾箇石子、以鐵干、致、扣之、試聽其響、後、擲棄之、另
擇一塊小石子、與唐廷樞、遞手、省過、相笑相語、似、是
產金、仍入轎行、十五里、地名萬歲橋店、屬永平郡、店

今、行官、前中

已、之、德、英人

以、和、南、

東一里許有一青嶂屹立全體是石名錦柱山、根
露出石脉其色或紅或綠云是銅苗今年四五月間
池弘寬率鋁軍數百名而來大開鑛口採石鎔化竟
不成銅浪費物力而罷云、礦師到此燃燭入礦打
碎石片出置露明照鏡細看曰銀銅鐵黃四種並產
品亦極佳誠天下至寶而可惜國人不知其法但費
心力云行二十里止宿於永平郡礦師行中有鐵爐
陶罐等器夜間起火爐中將錦柱山所採石子一升
許入爐中猛火數食頃鎔化成銀重可一二錢而西
人懽喜是白齊

二十七日曉相見唐巴兩人宣布

聖意曰我

主上殿下特念西大人水程遠涉之勞

命派卑官

勞問仍使護行以備沿路疎虞云則兩人大喜感惶
萬云自永平早發東行十里地名波水洞產石灰
礦師試看灰品自波水洞又東南行十里巨巖峭壁
左右屹立石徑崎嶇冰雪凌層一行後步山谷最深
處有一村落名曰山內地山下有一座水鐵幕始自
今夏北道人來此得鐵脈開採鑄鐵云礦在山上峻
險礦師入礦試看後礦口周圍以尺量之曰鐵體
入地漸細所產雖不甚多亦可用云仍下山向西
迤北而行五十里止宿於豐田驛自地方官鐵原府
出站支供是白齊

二十八日行五十里止宿於金化縣是白齊

二十九日自金化縣早發從小路向東行二十里地
名三巨里楊谷有鐵礦近地居民設店鑄鐵已多年

所礦深八九丈。礦師入穴採確曰：好鐵品。自楊谷行
三里許，地名梨實洞。今年夏間，池弘寬率鉛軍到此，
開四十餘礦，深或三四丈，或五六丈。銅脈愈深愈露，
而財力不敷，設役旋撤。鉛軍輩尚不散去，留俟墾役
之更設云云。礦師採得銅石，磨碎作屑，入玻璃簞，
體大如拇指，長四五寸，灌黃強水，小許於簞中，暫滯
火上，再灌冷水，小許，又暫沸，銅屑已消融為水，其色
甚綠。又將何許藥水，小許，灌之，水色旋變為深青。曰：
好。自梨實洞向北行，小路三十五里，止宿於金城。
該縣令縣韓昌錫出見兩人，交接之節極精且款，是白
齊。

三十日，自金城縣早發，向西北行，小路三十里，中火
於深峽，孤村，地名鵠巖。自鵠巖向北行二十里，絕峽，

險路止宿於鋸店幕地名靈谷白鶴山別將金鶴根
設店實鋸店軍輩採鋸於堂岷來此鎔化云是白齊
峽邑愚氓用他國人形容服着之恠異競欲一睹所
過邑村觀光者塞道容是無恠假飾觀光人樣雜於
衆人叢中無一探其志聽其言縱有疑駭之心見無
不測之慮對父老等輒以時勢閑喻曰見今歐洲各
國兵強技巧虎踞狼貪周遊敗運於地述九万里之
中以中國幅幘之廣兵力之大猶不得控制廣開海
禁與之立約通商欲知天道人事之變况我青邱一
片其能孤立無援自守劃壇乎此不可不幡然變計
者也我

聖上文武聖神天下全勢洞悉無餘修睦於日本許
和於泰西準今酌古大更國制棄我短取其長學兵

制而自強、拳礦務而自富、且以萬國公法相守、各國不敢肆行侵伐、則豈非一國臣民共享太平乎、今許官商礦師之遊覽內地、即各國通行之規則、實無驚恠、須各安心轉相曉諭云爾、則頗有解惑之民、是白齊。

十二月初一日、唐廷樞則落留於鉛幕、其餘一行、向堂峴而行、峻嶺接天、路險冰滑、着足為難、種、顛仆、行十餘里、踰嶺而下、地名曰堂峴、有鉛礦二口、一則直下數十丈、橫穿幾穴、一則直下八十餘丈、隨其鉛脉、橫穿屢十道穴、自穴中、或至五七里之遠云、礦師與諸人皆脫下衣冠、各自燃燭入礦、線下五十餘丈、養氣已盡、地中陰鬱之氣上衝、諸人氣悶汗流、難通呼吸、礦師亦畏怖、更不得深入、次、出來、使鉛軍取

出幾塊鉛石。回到鉛幕。礦師問質鉛。別將曰。一日取鉛幾許。別將曰。深穴採石。既不容易。一日所得。不過幾十斤云。礦師笑曰。我法則不然。礦中直下最深處。入真火藥幾千斤。連繩燃火。使之山崩石裂。後一日可得萬斤云。此言似不謊。而聽者猶不信然。蘇谷又有今夏新開銅礦云。而在於山谷深處。不得往見。山日已暮。更到鶴巖止宿。夜間鎔化堂峴鉛石。試其銀品。是白齊。

初二日。自鶴巖向東行。小路十五里。到昌道。看硫黃礦。沿溪十餘里。皆產黃。向南行。絕峽險路二十五里。踰大嶺而下。地名鍾路。有銅礦二只。深各十餘丈。採出石子。試看其色甚綠。又向西行五里。止宿於金城。境赤木里。夜間鎔化鍾路銅石。銅品好。云。是白齊。

初三日、自赤水里向西南行、五十五里、中火於瑞雲驛、行十五里、止宿於金城境注波店、是白齊、

初四日、行二十五里、中火於山陽驛、自地方官狼川驛、出站、支供、行四十里、止宿於狼川邑、該縣監李憲基出見、兩人、是白齊、

初三日、自狼川行二十里、地名原川、產石灰、行二十里、越母津江、中火於仁嵐驛、自地方官春川府出站、支供、行四十里、越昭陽江、止宿於春川邑、是白齊、
初六日、行三十里、中火於原昌驛、自春川府出站、支供、被人極為欺侮、行四十里、止宿於洪川縣、該縣監徐夏淳出見、兩人、是白齊、

初七日、自洪川邑東向行五十五里、地名坪川、山上有鉛脉、今春開礦、旋撤云、礦師見石品曰、惡鐵相雜、

品劣無用云。行五里止宿於泉甘里。是白齊。
初八日自泉甘里回程行五十里中火於洪川邑行
三十里止宿於洪川境陽德院。是白齊。

洪川邑東距五十里泉甘里及西距十里格里洞皆
產鐵云而兩人聽之尋常曰沁都與永平金化金城
等地所得銅鐵可以數載三十年開礦不必更求。是
白齊。

自陽德院距五里地名曰下果隅距十里曰上果隅
上下果隅皆產金今年夏間開礦採金器械亦運
云而兩人不欲躬往使洞民採其礦土而來入諸
中將入京後試看是白齊。

西人以銅鐵鉛煤為厚利以金銀屬之餘事金不
神每到銅鐵礦看其土石之成色驗其品質之

果有格致神功。至於深藏巖穴，未曾透露者，今此過路，亦不知為幾十處，而未見尋真之功。雖有銅鐵、非煤，則無用。今行，以未得炭礦為歎恨。是白齊。

初九日，行四十里，中火於廣灘。地方官砥平縣監申錫完，出待站上，接見兩人，行五十里，止宿於楊根郡。該郡守李暉出見。是白齊。

初十日，行五十里，中火於廣州境保安驛。行三十里，止宿於平邱驛。是白齊。

十一日，行四十里，入城。是白齊。

秘密信ヲセテ

韓人ノ言フ所ニ據レハ招商局ヨリ年々金中七万圓減額
 ノ韓商ニ得ル代價ハ端ニテ取立ル筈ナリト云那ノ商法ハ最初
 ニ品物ヲ借ル得ル代價ハ在在ニ取立テ其慣習ハ自前
 陳韓人ノ所言或ハ実事ナルモ難キナ

一 釜山元山津ノ高況ヲ察スルニ輸入ノ第一等ヲ占ム洋布
 ノ一名ニ限リ而テ支那人ノ記号ヲ付シタル品々多シテ韓人
 ノ信用ハ今一切買取不レ得有シ我商人ハ強ト支那人
 ノ下働きヲ成スト曰ク然ルニ向後上海ノ支那人ヨリ招
 商局ノ舟ニテ一直ニ洋布ヲ仁川ニ送り付ルニ於テハ信用ハ勿
 論運賃下直ヲ要ヨリ洋布モ随テ廉價ニ求メテ我商
 人ノ自ニテ洋布ノ販賣ハ到底出オレテ左スルニ我カ
 朝鮮ニ向テ商業上ニ大影響ヲ生セリト云ハカニテ得ル

一昨々四年ノ釜山輸入表ニ據ルニ十五年中ノ表ニ米ヲ入ル

輸入金計百拾万〇百九十五圓ノ内四十九万千〇五十六圓

ハ洋布ニ屬セリ又昨十五年ノ元山輸入表ニ據レハ輸入

金計六拾四万五千四百五十九圓ノ内四拾四万五千二

百〇壹圓ハ洋布ニ屬セリ左スレハ函港輸入圓計九萬

〇五十六圓ハ洋布ナリ本年仁川前港ノ為メハ洋布

ヲ盡ク清メテ一〇二萬八千〇三圓ノトキハ我貿易減額

實ニ九拾五万圓ニ達スル外ニ是迄缺ク務ム四拾五萬圓ニ

至ル進メテ函港ノ事情ヲ察スルニ右洋布ニ對スル物出

物ニ釜山ニ米穀元山ニ砂金金塊等アリテ其數額金

中ト相敵セリ其四砂金ニ塊ニ此リ金ニ米穀ハ函港

ニ屬スルニ函港ニ拘ハラズ釜山ニ向テ輸出スルハ

十ノ計ニ屬スルニ仁川前港ニ屬スルハ仁川前港ニ

金中多クノ廉價ニ相當ルモ金山ハ米穀輸出ノ便
路タルヲ以テ幾カ金中ノ輸入ヲ維持スルヲ得ベシ
況ヤ仁川輸入ノ金中ハ慶尚全羅ニ達スルハ陸路百
里ノ運搬ヲ經ルノ艱難有ルニ付南方以テ我輸入金中
ノ減額ハ其半ニ過キサルベシ假リニ半額五十万圓ヲ
奪ハレタリトスルモ畢竟取次貿易ナレハ我十餘萬
人五拾万圓ニ向テノ利益ヲ失フニ過キヌ五分ニシテ貳
萬五千圓一割ニシテ五万圓之ニ折リ返シ輸出ノ利益
ヲ加算スルモ五万圓乃至拾万圓ノ損失ナリ

一 又顧テ日本全國ノ高況ヨリ論スルハ到底朝鮮貿易
易ハ以テ我ニハ利害ヲ具フル丈ケノ努力無ク僅カニ
韓地ニ居留スル數百ノ商人ニ就テ損益ヲ覓スルニ
一 釜山及ヒ元山津ノ兩港ニ日本ヨリ輸入ノ物品中洋布

ヲ除クノ外ハ海軍及ニ對シニ糧秣ノ巨額ニ上リ其
雜貨ハ僅ニ止ルノミタニハ濟物浦ニ支那ヨリ洋布ヲ
直輸入スルニ至レハ同所ノ開港ハ我日本人民ニ於テ十
分ノ利益ヲ得ルノ目的無ク隨テ我商民ノ商店を
者モ二三十軒ヨリ多キニ至ラサルベシ

一 然辭ノ景況ヲ察スルニ上下トモ貧困ニシテ且糧物割取
十分ノ開化ニ達スルヲ得カルベシ隨テ外國品ニ對シテ
多分ニ有テ消費ト存候

一 貴族及各大臣ノ邸宅ヲ尋問セシニ實ニ矮陋ニ極メ
且ツ居室ノ制作坐卧ノ都合總テ外國品ヲ用エルニ適當
不又之ヲ飾リ有クルノ餘地ナシ故ニ居室ノ制ヨリ論スル
モ外國品ヲ購入スル見込ナシ

一 又外人ノ言フ所ニヨリハ領議政等ハ一月俸ハ米六石

銅錢ヲ合セテ我紙幣九十圓位ニ當ルト云フ判書、我諸省
以下推テ知ルベシ客用ノ器具飲食品ヲ見テモ其貧
困ヲ證スルニ足ル故ニ生計上ヨリ論スルモ外國品ヲ購入
スルノ力ナシ

一 茶ハ葛根湯ニ類似スルモノヲ用エ素ヨリ茶樹ナシ又砂糖ナシ
酒ハ一吸ニ日本ノドブ酒ヲスマセシモノアルニ食事上ヨリ論ス
ルモ外國品ヲ用エルノ見込ナシ

一 王宮ニテ用エル器具又骨董店ニ陳列スル玩物及ヒ市上
ニ賣物スル雜貨ヲ見ルニ一モ目ヲ留ルニ足ルモノナシ此レ又
其貧陋ノ一斑ヲ知ルベキナリ

一 又近テ人民ノ模様ヲ觀察スルニ藁屋ノ尤モ鮮惡ナルニ住ミ
一モ大ヒナル居室ヲ見ズ且ツ一吸ニ懶惰ヲ極メタリ閑ツ所
ニ據レハ一人稍々富裕ニ至ル者アルモ政府ヨリ出金ヲ

被申付甚敷ニ至テ、性命ヲ失フノ憂アリ、故ニ皆、此ニ
墮リ、只一日、空腹ニ充ツルノ食ヲ得ルニ安ニシテ、憂モ富ヲ
歎スルノ思想ナシト

前陳ノ通リ、二月農事ヲ改良セントスルモ、產物ヲ繁殖セシメ
スルモ、上下ノ惡習ヲ一洗スルノ後ニアラザレバ、決して其功ヲ
遂ルヲ得サルベシ、到底腐敗ノ二字ヲ以テ、朝鮮國ノ實情
ト為スルハ、蓋シ大ナル誤チナシト思考ス
右赴任以來、今日迄見聞致シタル末、愚見ノ一端ヲ採録シ
テ、内稟ス也

左朝鮮

明治十六年二月九日 辦理公使館添進一節

外島傳井上馨殿

機密信爲大御

朝鮮國王より批准後倭人使節ノヲ本國派
遣スルキ云々一議ハ先般近々本官等朝
ニ面陳有ル事ト通有ル後成山縣ニシ
テ如何モ定致シタムヤ本派者同々セ
ル事ト通有ル事ト通有ル事ト通有ル事
浅山勢の時立シタル事ト通有ル事ト
取信シ小官相復シ有ル一見ル事ト通
有ル事ト通有ル事ト通有ル事ト通有
ル事ト通有ル事ト通有ル事ト通有

同派調議者ヲ奉シテ全權公使ト爲リ
トシテ李祖謙ニ同伴シテ本國ニ赴キ批准
事ヲ亦理シ仍テ歐洲諸國ニ立寄リ條約ヲ

訂立スル者ナリモ路ヲ天國上海ニ耶
以テ致スナシ氏李鴻章トハ使事ヲ兼
ナリ貴國ニ往ル米國ニ赴カザリシハ支那ノ疑
免ルガ為ナリ此事極メテ秘密ニ保ルハ
過リ淺山ニ向テス能ト謊言ヲ及セリトテ
怨セラシヨ

右使節ノ派出ハ今ノ朴氏ノ力ニ相運
トハ家ナリ

朝鮮ニ往來ヨリハ密契有ル紙面ハ使
中ニテ開封ニ面話スルハ往來ニ至ル
ハ次ニ間ニ離入シ孰クハ秘密ニ事
憂有ル夫ニ故朴氏ニ保ク用ニ致シ
事件ニ至テハ淺山ニ相成シテ將
リ申スルハ

依此十分。考談出来不。此。要。大。意。文。多。書。取。此。信。付。批。准。ノ。催。保。持。リ。を。請。細。シ。テ。示。リ。給。フ。事。出。来。意。ト。小。且。又。時。朴。氏。ト。信。来。致。し。し。時。又。對。黨。ヨリ。同。シ。任。キ。小。惣。念。モ。有。リ。而。此。兩。方。ヨリ。美。和。居。ヤ。リ。

支那政府。朝鮮。内。屬。ニ。シ。テ。論。議。有。リ。ト。李。鴻。章。内。治。外。交。任。其。自。主。ト。明。言。致。シ。タ。末。ニ。付。内。屬。ニ。降。リ。フ。不。宜。ト。主。張。致。シ。タ。趣。朴。氏。考。内。証。致。シ。ト。

朴。氏。又。云。た。し。こ。ど。ん。フ。我。政。府。ニ。テ。宿。入。ル。者。リ。見。建。常。モ。我。政。府。ノ。請。求。ニ。由。リ。李。鴻。章。ヨリ。朝鮮。者。玄。階。上。ニ。未。熟。ナ。リ。改。善。事。亦。有。リ。ト。朴。氏。見。ル。付。付。ケ。タ。者。ニ。先。者。ニ。テ。馬。ノ。月。俸。ハ。

朝鮮より文法し今我政府に適用せ

只今も知て馬毛矢張り朝鮮自主ノ權ヲ保

護スルノ主意ナシ氏諸政府に内務ニ云ヒシトノ論

主者ノ事故ハ知ル憂堪ヘザリ然レハ

朝鮮に大任ナシクスレハ自主ノ權ヲ全スル

クスレハ自主ノ權ヲ失フ等ノ事一人ニ相分リ久者

無クナリ國王殿下ノ苦慮被ル者自今ハ

鮑馬ノ身分ナシ表向政事ニ立降ルハ誤ニ主ラバ

實ニ端癢キ事ノミナリト流涕シテ淺山ニ内治スル

朴氏又云政府に数種ノ常例有シ一ニ權力有シ

者無シ又ハ故一事件起ル毎ニセヤセヤト儀禮

ルノミナリ何事モ果敢トラス只同海關ノ上

カハハ女ナシ氏是以テナリト申シ

夏、至るに、玄、不具、識、人物、多、憂、國、之、念、に、露、視、
そ、之、之、只、之、支、那、之、媚、に、之、既、先、救、同、人、天、津、之、族、
越、之、其、之、能、之、制、之、支、那、同、族、之、意、に、及、之、李、鴻、
章、に、之、入、之、國、李、鴻、章、に、之、左、様、之、馬、座、之、事、
ハ、之、之、事、ト、刻、子、付、ウ、シ、タ、ン、位、に、事、に、之、馬、建、
常、に、招、請、セ、シ、後、に、詔、ト、馬、ノ、奴、隸、同、格、ニ、テ、何、事、
モ、馬、ノ、指、揮、ニ、同、摸、擬、ナ、リ、右、等、ノ、事、殿、下、ニ、悉、
ク、口、美、知、ニ、お、成、居、ル、乃、免、職、ノ、思、召、ニ、止、メ、其、越、之、皇、
大、妃、ノ、姪、ノ、太、常、リ、之、事、故、殿、下、ニ、之、心、痛、被、メ、在、之、
上、清、國、ニ、之、差、優、者、モ、有、リ、旁、に、之、忍、耐、ニ、お、成、居、ル、
朴、氏、ハ、鮮、馬、ノ、尊、爵、ニ、居、ル、國、之、ノ、親、任、ニ、厚、ク、隱、ニ、
中、大、ニ、老、力、致、シ、^其之、様、ニ、之、鍊、兵、一、年、ニ、當、夏、比、
ニ、支、那、ノ、教、師、ヲ、都、合、能、^其之、計、リ、然、レ、後、之、様、

杜氏、韓、宋、元、明、清、人、の、作、業、

使、之、為、多、少、不、同、也、其、中、最、多、者、杜、氏、也、

杜、氏、韓、國、即、下、切、迫、自、主、權、ヲ、主、張、し、一、時、

日、本、之、降、参、上、支、那、之、讓、數、者、ト、反、對、

ヲ、賜、言、然、し、先、任、者、ト、サ、ス、が、貴、族、ト、日、本、

ヲ、好、キ、ト、思、フ、韓、國、後、部、内、ハ、力、車、ヲ、引、廻、シ、

大、ハ、車、ヲ、不、便、ヲ、取、リ、除、ク、ル、等、格、ト、シ、テ、其、

後、習、ハ、其、ノ、先、角、ト、目、立、ト、ス、ル、也、

國、王、殿、下、ニ、十、分、改、革、シ、日、本、之、力、車、ヲ、存、シ、其、

加、ハ、其、代、ヲ、法、制、容、易、ト、ス、ル、可、ト、ス、ル、也、

論、議、者、ト、シ、由、解、シ、難、下、ノ、業、ヲ、シ、テ、自、行、

廣、ク、其、所、文、ハ、武、カ、合、併、シ、テ、其、後、世、ト、ス、ル、也、

...

石内前山

明治十六年二月

在朝野

明治十六年二月

外務省并

檢密信より十號

朴泳孝ハ二三日前、漢城判事ト付ル是迄
王女ノ婚タ人ノ權威過重ノ悲シ有ルヲ以テ容
易ニ職弱不ト命例格ニ由處ニ度ニ國王殿
下ノ特旨ヲ以テ出格ニ此命有ルハ京城判事ハ
我東京府知事ノ及我參視提遊ノ職ヲ兼
有スル後職ニ由處ニ朝鮮ノ役負ハルニ至
月内ニ終職ス者下少シ者朴氏ニ是ヲ踏出シ
ニ退ニ内政ニ預リテト思考セヨ雄
烈ニ前任南陽府使ニ再任致シト是亦併ニ
由申ル也

明治十六年一月一日 朴君ニ授任ニ由リ

外務卿并ニ参事殿

本館子卿

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

法書自付據密分下是與後本月十日

依るべき条約都見左に附陳仕

一主權分限之事

各國通商章程に甲國と乙國とと其國の
利益を謀るに便し、協議するに成りしもの
に、法に依りて、自願より相許るもの
萬事、又、此、次、所、訂、此、時、貿易、章程、
中國優待、
北洋大臣、
行、
制定、
權、
鮮、
臣、

其年另曆朔ヲ尋し且外交大事ハ常ニ清國ニ
咨稟し清帝ノ即位崩御ニ頒詔使朝鮮ニ
下降スル等ノ事兩國屬吏及通文館誌云者
ニ載セテ三百年來一定不變成例ナリ左ノ今
日清國ハ朝鮮ヲ指シテ藩邦屬國ト名ニ謂
鮮ハ清國ヲ戴テ上國天朝ト稱スルヲ決メテ怪
ムコトモナク然レモ今度新ク通商章程
ヲ議立タル對等國協約例ニ從ハルニ其名
分權利ニ彼此輕重凡ハ自然ノ情勢ナリ

二 裁判權限ノ事

西民交涉案件朝鮮各地ニ在リテ清人漢官
ノ裁判權人ハ清官立合ノ上本國官負ニ裁判
歸スルヲ清國者地ニ在リテ清人韓人共ニ屬

官裁斷に帰せし是西國ノ權利ヲ輕重有
ト云凡前条ノ事情アリ之ヲ推セ亦不審シ懷
クヘキニモアリサルベシ現在主屬ノ名分ナキ歐米諸國ト
佛蘭ヲ維持セリ又何ヨシ
神ノ西國ノ名ヲ怪シセシヤ
三兵船遊奕ト事

此条より前同條諸國より朝鮮ノ藩屬ト見做シ
之ヲ保護セシトス以上ノ怪々ニ思フサルベシ

四漢城開棧内地探炭土炭運載ト事

此三項ノ我条約及ト英獨三國ノ後条約ニ載
セザン所ナリ右ノ專ラ通商利益ヲ主トシテ主屬名
分ニ關係ナキモノナシ我より同例ニ從テ要求
シ得ベリ且ツ之ヲ要求セズンバアルベカラズ然レ
モ此三項ハより互相ノ約ニ出ラタレハ彼より互相

許サレハ清國ニ向テ拒マサルヲ得ル此三條ハハハハ
ノ一論題タルベシ

五 漁船往來ノ事

此條モ清國ノ例ニ倣ヒ要求スベキモノナリ但シ金山ト
對州トノ間ニ互相ノ約ヲ成スモ亦妨ケサルベシ何ト
ナレハ其實我漁戶ハ常ニ金山ニ至リ韓人ハ亦金山
對州ニ至ラサルヲ以テナリ

六 輸出入税ノ事

該章程第三款ニ一切海關納税則例ニ悉照スル
ニ定章程辦理トアリ又第四款ニ進出貨物ハ
貨税船鈔ニ悉照ニ被此海關通行章程ニ悉照ス
ルニ輸出入税ハ各國同例ニ從フナルハハハハハハ
易ニ於テ紅基ハ十五他貨ハ五トナルハハハハハハ

古に往來、親則ヲ改正シタルモノ、三有之見

其利害ヲ異ニスルハ此一條ハ、清國管轄ノ下ニ

要之該章程ハ朝鮮國ヲ以テ清國管轄ノ下ニ

清國ノ利ヲ謀ルト雖モモト是レ三百年来一定ニ

名義ニ基キ制定シタルモノナシハ、遠力ニ、獨立國ノ例

之ヲ律ス可カラサルニ似タリ若シ獨逸國ノ例ヲ以テ

セント欲セハ其初ニ立戻リ清韓兩國ノ關係ヲ

朝鮮國ノ分限ヲ定ムル至當順應ノモノト

邊萬ト御議ヲ被盡ク様々望ムモノト

意見有クモ向他日書自ラ以テ具陳スル

右所聞ニ基キ清韓分限ノ章程ハ、對ハ、鄙見概略

申升不行届ク處ハ、一、所指國未成多也

明治十六年二月十三日

在朝鮮

辦理公使竹添進一

外務卿井上馨

機密信箋十三号

訂立仕ニ相成ハ海軍電線一件古ハ五月廿七日
延寧夏金宏集洪英植ノ三名来館ニテ談判ヲ爲
シ以電小見ヲ諭ス如ク一ト達リ彼レニミ達セシメ
少ノ口舌ヲ費シテ以本月四日金宏集洪英植来
館再ニ談判致シ以去三十年ノ年限ヲ是非二十
三ニ縮メ分限中義以末一昨十二日ニ至リ延寧夏
ヨリ附案ヲ起草シ送致シ其ノ約案ヲ一閱セシニ我レノ原
案ニ比シハ小節目ノ増撰ハ姑ク置キ彼レヨリ要求
ノ六六九件々ハ三十年ヲ十五ニ縮メル事電信
分局ノ地址搬置場ヨリ租税ヲ取リ立ル事朝鮮ノ
官報紙ヲ十分ノ三ニ減ヘル事古ハ馬連常ニ耶及
西達古同ノ案終中ニ於テ已ニ便利ナルハ比例ニ立ニ起草シ先

齊洞會館ハ馬建
常ノ寓居ニテ有
之ハ古ノ時始
テ承知致シ

モノニテ容易ニ斂カサルノ精神ト認定スル我ヨリ脅
迫ヲ用ユルノ外ニハ成約ノ見込無ク我兵營ニ箭
ヲ射込タル者ヲ逮捕スルノ期限ヲ誤リタル事又濟
物浦居留地ニ畫見カノ役負ヲ舊曆年内ニ派出セ
サルヲ右兩件ヲ切迫ニ責メ付ケ若シ電信談判不調
ニ於テハ領議政ニ公文ヲ送りテ趙寧夏ノ言ヲ食メ
タル罪ヲ鳴ラシケ様ノ人トハ交渉事務ノ相諮出來不
申候照會ニテ力ノ及フ丈ケ趙寧夏ノ現職ヲ免レサセ
積リニテ本日午後二時趙寧夏ノ請ニ從ヒ齊洞會館ニ
罷然ハ魯内門ニ入掛リ以テ馬建常護衛ノ清兵兩名
門ニ立ケ前行ノ兵隊ヲ拒ミ以テ佛ニ付決山顯截進
ミ入り以テ會談清兵一名ヲ以テ相支以テ召之ヲ撞キ退ケ前
堂ニ入り以テ時ハ一時五十分ニテサレ時刻ノ早キ要ヨリ

待受ケノ都合未タ出来合ハザルト相見暫クシテ
 韓人案内致シ後房ニ通り以テ雪趙寧夏金宏集馬
 建常金允植ノ四名椽先キ出迎ヘ折節大雪ニテ小官
 ノ洋服雪ヲ帶ヒ以テ馬建常ニコヒ會釈シテ支那服
 ノ長キ袖ヲ以テ衣上ノ雪ヲ拂ヒ落シ吳以テ共小官ハ苦ニ數
 顔付ニテ坐ニ就クヤ否ヤ趙寧夏ニ向ヒ今内門ニ
 於テ我カ前行ヲ拒ミタル者有之否ハ貴方ヨリヒヤ付
 タル門番ニ以テ哉ト問掛ケ以テ雪趙ヨリ別後申付
 ケタル事無之ト答ヘ以テ小官云々支那服ヲ着ケタリ
 馬大人ノ從者ナル哉モ難計面白ハ見知り居以事
 故お礼ニ可申ト浅山ハ中付右ノ支那兵ヲ室内ニ
 引ズリ込ミ馬建常ニ向テ御見知りノ者ニ以テ哉ト取リ
 詰メ以テ雪自カノ護衛兵ナル旨相答ヘ遽ニク筆認ニテ右ハ

出迎爲致置の言云語不通ノ事ヲ失礼致シタル
儀ニ付勘辨致シ呉ハ様謝辞ヲ述ヘ且ツ云揚者先
日貴館へ相付ハ節モ門兵暫時柵阻セリ右ト曰様
ノ事ニ付立服致シ呉ハ節モ門兵暫時柵阻セリ右ト曰様
貴官ハ暫時ノ柵阻ト失礼ヲ働キタル者ト曰ニ諒セラ
レハ哉ト相詰リハ吾馬云否ナ決シテ左ニアラス
仍テ只今堂中ニ送り回ニ相付ノ懲辨ヲ申付ベシト
右ノ混雜中趙寧夏金宏集等顔色ヲ失ヒ立タリ
居タリ心配致シタリ模様ハ筆ニモ盡シ難クハ兼ニ趙寧
夏列ヲ見神ノ如ク敬畏スル馬建常ヲ右ノ通り行成
リイゲメ付ハ付一竿寂然ヲ極メハハ安西面ノ椅子
ニ就キ金宏集其ノ右ニ居リ馬建常其次ニ列ニ趙寧
夏左側向山ノ次席ニ居ハタトハ隔リ居ハハ安西面ヲ

今日ハ趙大人ニ用詔有之迹寄リタヒト云テ小友ノ左リ席ニ
 就カシメ夫レヨリ趙ヨリ啓文ヲ取出シテ投討シ更ニ又條約
 草案ノ不當ヲ相詰リ偶ニ金宏集傍ヨリ喙ヲ入レハハ小友
 目ヲ瞋ラシメ下ト詔スル義ニ多シト云テ口ヲ強マシメ十分趙
 ヲ詰責シ再三罪ヲ謝セシメタル上ニテ更ニ金権ノ
 有無ヲ問ヒ質シハ云趙云督辦ノ職ニ居テ事故全
 權ニ非ラズト云フ可カラズ依ヒ總テ此事ノ事ハ統
 理衙門諸員ノ評議ニ掛ケテモノナリ小友云然ラハ
 全権ヲ有セザルハ趙大ニ迷惑シテ云全権ヲ有セズトモ難
 申小友云然ラハ其趣即認有之者ト祇ヲサシ付ケル云
 一層迷惑致シ朝鮮ノ實際ヲ歟ト相辯シ今ニ斷リ以テ
 金宏集傍ヨリ朝鮮ハ何モ不案内勝テ有之萬般即示教
 ヲ蒙ラザレハおろし不申事ハ決山熟知ニ事ハ云趙督辦

其指ニ事ニ直ト斷面賣被下ヘハ脚親切ニ交
際ト存スヘシ昨日一通書向キ公文ヲ以テ脚直又ニ
相成スヘシ指辨ノ面目ニモ相障リ脚志ニ事トハ
存ニ不申此時小宮初ニ金宏集ノ言ニ向ヒ曰ク只今ノ事一言ハ
閑棄テナラズ右ハ全ク小宮ヨリ貴國ノ大臣ニ向テ失礼ニ
ヘタルトノ脚主意ニ付職分上ニ取リ其後ニ差支難
只今ニ脚口上脚書取リ有之故ト紙ヲ實キ付ケ以テ
金宏集大ニ迷惑給ニ再ニ其斷リ以テ推テ其後ニ以テ
左様強迫被成ルテハ實ニ困却トナ述ル小宮ヨリ又其ノ
強迫ノ二字ヲ解又ハ其末小宮云其後ハ余ヲ失礼ト認
メ又強迫トルヤタル儀ハ改テ公文ヲ以テ脚拭合ニ
可成余左様脚心得テ之ト申脚ヲ具ツ云フ諸君ハ
兩國ノ親睦ヲ敦フシ兩國ノ便宜ヲ謀ルトノ脚主意ニ

無之何事ニ寄ラズ我ヲ疑ハ我ヲ擁作スルノ内情
 ト立案ハ有 談判ニモ用ナリト云故ニ席ヲ立テ據リ
 以テ對面シ金ヨリ類ニ有断リ左様ノ意ハ毛頭無之電
 信條約案ニ御意見ヲ示シ以テ議定致スベキ積リトナ
 ンニ付好キ塩言ナリト相違ヘ支ヨリ談判ニ取リ掛リ
 以テ對面シ夏ハ夏ノ為難ニテ何ニモおかり不申金宏集總
 手相手トお成々ヘた彼ノ條約案ハ馬建常ノ手ニ相成
 以テ成是以福新ノ返答ト出来不申小安ノ言ヲ一
 筆證ニテ馬ニ打合セ然ル上討議致シ以
 前條ノ通り最初ニ三人トモ十分ニ膳ヲ取リ振
 以テ甘飯ヲ抵抗ハ致シ得不申以ヘた馬建常議ハ其
 國ノ試験ヲ強佛學ハ可ナリト出来。吾國電信局ノ
 割合モ一ト通り業社致シ以テ政其ノ論議ニ件

出ラセニ其等ハ右ノ威力ニ任セ、無理手法ニ叩
キ付ケルヲハモルレンドルフ杯ヨリ日本ハ未開
ノ弱國ニ向テ寇角ニ壓制脅迫ヲ用ユルトノ感觸
ヲ起シ、海ハ向後交際上大ニ不都合ヲ生ジ、
ト存、且御内訓ノ旨モ可ニ知限ヲ二十五年ニ縮、朝
鮮ノ官報ハ和信ヨリモ先キニ送達シ、又釜山地方ニ
新設スル日本ノ陸電ハ電信料ヲ半價ニ減スベキヲ
承諾致シ、陸揚場ノ地稅ニ至リハ彼レ去リ日本政府
訂約スト云モ其實ハ丁赫官社、海兵隊ナリ而政府ノ
関ナシト持別、是南會海電ノ陸揚場ヲ永代金稅ニ
シテ居留地外ニ貸シ、又ノ儀、實ニ迷惑ニ次ナ、自
是前二十五年間免稅ノ地、而シテ二十五年以後ハ
ノ後實際利益望ニ時ハ更ニ免稅ノ地、亦減額スベ
ハ

キヨヲ書置ハハ双方公平ナ儀可
得トリル意ニ任セリ

古ニテ大器議定ニテハ其ノ威骨ノ未偉ニ此ニ立至リ也

前陳ノ應接振リハ僅ニ其大略ヲ捕シ以テニキ後一時五十分
比ヨリ夜ニハ近時同ヲ費シ電報談判ニ終ルニ應接ハ只
ニ彼ニ迷惑ヲ与ムル主意ニ有シト云フ波リ一言一句我ヲ
之ヲ鍵ニ引掛ケ答回モ彼ニ其罪ヲ謝スル以テ臂ヲ張
リ目ヲ瞑ラシ專ラ威迫ヲ以テ壓シ付ケ以テ我ニ有テ實ニ不
平ニシムルハ其到底ニ朝鮮ハ一ニ受テ力ヲ示シ我ニ思ハ
ルノ念ヲ抱カシメテ非ハ六州ニテ我ニ力ヲ働ク性質ニ有
不厚已古ノ通ニ事指ハ其脚跡諒ノ事即ハ然ルニ威
力ヲ示スノ事屢ニ云ハカシメテ歸ヲ待タズ馬建常

モルシンドルヲ皆朝鮮外交支費ニ充てしむるは後我
下ノ事ヲ持出さしめざる爲に通常ニ齒牙ニ擬ルニ足ら
ト雖モモルシンドルヲ冷笑せしむる心ヲ有し將又米
國條約批准を欲する由ニ付是より時々西人ノ往來モ可
有之然ラハ目前ノ小利ニ屑するヲ止メ日平ハ實心朝鮮
ニ向テ親切ノ交際ヲ爲スモノナリ實心朝鮮ノ開化ヲ誘進ス
ルニ尽力スルモノト西人ニ感觸ヲ爲起し様爲に爲さへ
他日我政略上ニ於テ都合の宜ト爲る我廟堂ニ於テ欲
此道ニ御留意せしめ松懇冀る也
古不承敢内申す也

明治六年二月十四日

在朝鮮

辦理公使竹添進一郎

外務卿并上奏殿

追答

前陳電信局地址免稅ノ一條有如何様トナシテ永代
免祖ノ地所ヲ他國ニ貸スルニ於テ感ホカ國權ヲ毀損
シ且他年如何様ノ禍ヲ醸シハ哉モ難斗ト疑懼ヲ抱
シ是非爭限ヲ定ムルニ非ハハ吾心不取模範ニト不亮
トハ及二十五午ヲ限り而シテ二十午度高利同年
ニ時ニ更ニ免稅事ヲ商議スヘキ旨增加致シハ
一若シ今日ノ談判通ニ一決シ果シテ調印ヲ為スルハ
朝鮮ノ支報ニ係ル分ヲ半價ニテ取扱ハ様下社ニ其
筋ヲ談判有ミ否切ニ其望致シハ金山ヨリ日本ニ向テ
朝鮮政府ノ支報トナシ一月ニ一回可有ミ哉實ニ成
達キ百ト存ク可損益上ニ其望致シハ金山ヨリ日本ニ向テ

古之通日中者其計異以八制鮮政府也
此深故常以實二制鮮為三便五謀り吳山の
下待利を置て他日談判する件と云ふ事或は
終に成る由なき

機密信才十四号

仁川居留地議定之儀迄、朝鮮政府（老掛）
 合于要令十五日別紙寫之通同居留地ハ我例
 二依ニ在國租界ヲ同一ニシテ彼此不區別ナ
 高田及中道ヲ如ニ先般所指示面トハ政務院
 不附其後政府所平ニ意見ナラズトシテ
 一ノ裁ヨリ決テ了拒否理々々此上ハ我高
 田ニ於テ僅地ヲ先取スニ迫ラレテ了スルニ
 尤ハ及リハ村到候ヨリハ意見ヲモテ高田
 田次官職者ノ意見ヲ以テ政府ニ之ヲ見
 臣ニ示シテ了スルハ此後議テお申
 呈スルハ具

在漢城

明治十六年二月十五日 辦理後竹添使署

外務省 井上馨

江戶府 接第...

未定。以林清林浦劃界一事、並望明日派員眼同劃定。等因。到署准此。查劃定租界事、初屬親協辦主政。昨伴出公出者、可因致年內不能勘劃、非我失信。容當見諒。今

貴公使急於查勘其地、應於日內各派員前往踏勘、畫成地圖、但

兩國領土

貴國辦法、意欲同租界、不似俄國、俄國猶嫌此我國外、仍如想貴公使証聖隣交、當代為防微杜漸者、此處煩即查照施行、順頌

癸未正月初八日

督辦交涉通商事宜

辦理公使於添臣...

名 称	三 條 実 美 文 書
標 題	ファンデル・ポット の書翰 井上馨 宛

分 類 番 号	24
	10

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

秘

前使來函譯

機密第三号

拝啓陳首東京豫議會ニ於テ議定之結果函ニ拙者ヨリ我政府
ニ申致シ候覺書ニ對シ我政府ハ日本帝國ト結ビタル條約及區ニ付内閣
意見ヲ拙者ニ通知有之候間此旨閣下ニ御報道及上候
我政府拙者覺書ニ陳述致シ候趣旨ハ大略以テ成ル之由ナリ
シテ數厚チラシム旨トシ以テ其所望ニ隨ヒ緊要ナル問題ヲ討論
シテ欲シ且ツ貿易問題ニ裁判權ノ問題ヲ分離シ提案自
思議無之候又我政府ハ今般特別ニ貿易條約ノ締結ノ場アリ
貿易ノ及所海ノ件ニ付締結各國ヨリ請求スル報酬課金ハ小々
此條約中ニ論明シ此件ニ関係スルモ勿論御承諾有之ヲ信用致候
此期限ニ関シテハ我政府ハ貴國ニ對シ友誼ヲ保有シテ欲スル故ニ
貴政府ヨリ應スルヲ得ル且ツ貴政府於テ之ノ期限後今



年後ハ新條約ヲ廢止スルノ權ハ之ヲ認諾スルヲ得ヘクト存候但
此期限前テ既ニ日本全國ヲ外國人ノ為ニ開キ及貴政府ハ約束
相成候改革ヲ悉ク御施行相成可カラス候

輸出入品稅案ノ儀モ亦ク我政府ニ於テハ貴政府ノ希望ヲ拒ムノ意ハ
無之候唯貴政府於テ砂糖ニ重稅ヲ課スノ御見込ハ遺憾トス
所ニ有之候何ニシテハ若シ如此重稅ヲ課セラレザルハ砂糖ハ和蘭國領
東印度ヨリ日本國ニ輸入品ト相成可申候(是等重稅ノ儀ハ砂糖ハ邊境ニ輸
入品トシテ貿易スルハ日荷條約ニモモリ
我政府ハ稅則ノ細目ハ此件ニ關スル討議ノ結果ニ依リ
稅價ノ算定ハ豫議會ニ於テ選定スル特別委員ノ調査ニ任シ

候ト相定候

最惠國款條ノ素文ハ貴政府御覽論ノ如キコシヨニテ其一部ニ
テ約束候儀ハ遺憾ナラ我政府ニ之ヲ承諾スル能ハス候故ニ談判
再開ノ時該案御修正アリテ希望致シ候

貴國及外國水夫ノ上ニ施行スル裁判權ニ關シテハ我政府ノ意見ハ
 此一点ハ重ニ裁判權ヲ論スル條約ニ係ルヲ以テ貴國各種ノ法律ヲ
 我政府ノ御指示相成ル迄ハ其意向ヲ吐露致サズ候
 我政府ハ成ル貴政府ノ望ニ應スルヲ務メテ貴國ニ對シ更ニ
 友誼同情ヲ表シ候儀ハ閣下何卒前述ノ件ニ因リ御確信アラシヲ
 希望致シ候此段得貴意候敬具

一千八百八十四年三月十日

横濱於テ

フアンデルボット

外務卿井上馨閣下

名 称	三條実美文書
標 題	青木崋蔵 電報字

分 類 番 号	34
	11

国立国会図書館

登録番号	
------	--

秘

青木公使來電譯

独政府ノ訓令ニ據テ、日本駐留独国公使ニサツペイ氏ハ尤ノ件ヲ
ヲ委任セラレタリ

第一、税目、航海事項並ニ他ノ條約ヲモ含み、通商條約ヲ締結スル

〔甲〕日本政府ニ於テ都テ條約ヲ廢棄スルノ權ハ各國ト協ニ熟議シ
遂ケタル方趣ニ據リ、百般ノ裁判問題ヲ一定スルコトヲ日本国法律ヲ

以テハケ年ノ後全國ヲ開リ、約束ニ因ルモノトス、独政府ハ右ノ方法

ニ據リ、英國政府ノ提議シタル三ヶ年ノ試用期限ヲ避ケ、独政府

ハ右年間最惠国並欵ヲ保持セシトス、〔丙〕税目ハ可成其優承諾スヘシ

〔丁〕沿海貿易ノ期限ハ日本政府ノ提議ニ據リ、他ノ外國人ハ頭等裁判

權ニ服スルモノトス

第二、日本国行政法ヲ外國人ニ適用スルコト、右ハ外國人内地交通即チ商用ノ内外

地旅行免狀ノ方法ヲ擴充スヘシトシ、約束アリテ後同意スヘシ尤ニ刑罰並罰金

ハ禁獄三ヶ月若クハ科金五百弗ヲ超過スヘカラス

第三、今後日本政府ノ希望ニ因リ、互相ノ利益ヲ増進スル為メ裁判事件ト係ル新規則

ヲ討議スル所ノ議會若クハ談判ニハ、何レノ時ク問ハスモ同スルコト、即チ日本ノ治内法

權ヲ認メテ日本全國開通ノ件ヲ云フ

右ハ閣下ノ意ニ適スルコトヲ切望ス、且ツ英國公使ハ閣下所見ノ如ク嚴密ニ其訓令

ニ束縛セラレサルモノト案ス、万事内密ニサツペイ氏ト相談アリテ了ス

十七年四月十八日

名 称	三條実美文書
標 題	蜂須賀茂韶 電報 写

分 類 番 号	34
	12

国立国会図書館

登録番号	
------	--

秘

在仏公使來電譯

仏國政府ハ在日本仏公使ニ訓令ヲ送付シタルヲ内容ニ探知シタリ大略尤ノ如シ仏國政府ハ核目及東京豫議會ニ於テ討論シタル各種ノ小事件ヲ約定スル所ノ通商條約ヲ締結スルヲ承諾ス

日本政府ハ十一年中此通商條約ヲ廢棄スルノ權ヲ有ス但シ其前三十年間滿之ニ日本全國ヲ閉キ置カレ可カス

全國ヲ閉キ置ル時ニ要用ナル司法及行政上ノ結構ハ次回會議ニ於テ論定シ別條約ヲ掲載ス此別條約ノ終期ハ右司法及行政上ノ結構ヲ確定シタ後於テ議ス

最惠國款條ニ付テハ其主義ヲ維持ス然レモラ仏國ハ右ニ關スル他邊ノ提議ヲ勘考スルヲ拒ミ

難破船ニ關スル日本ノ提議ニハ充分ノ同意ス

生絲ニ課スル輸出稅ヲ廢シ文學及工業上ノ所有權ヲ保護スキ方法ヲ定ムル可カス
一九一四年四月廿日發

名 称	三條実美文書
標 題	外交政略、標準、定心、議

分 類 番 号	34
	13

国立国会図書館

登録番号	
------	--

255305
昭27年/月9日

外報
為商
雜事



外交政略ノ標準ヲ定ムノ議

明治十七年七月

外務卿提出

岡田

六十二

六十二

秘

方今我邦外交上至緊至要トル所ニモハ我邦ト締盟各國ト間ニ訂結セル條約ヲ改正スルニ在リ現行條約ハ實ニ我邦ノ獨立ヲ損スルモノナリ何ヲ以テ獨立ヲ損スト云フ曰ク現行條約、（一）左ノ條款アリ

日本ニ對シテ法ヲ犯ス其外國人ハ其領事裁判所ニ於テ吟味ノ上其國ノ法律ヲ以テ處罰スヘシ

是所謂治外法權ナルモノ、據リテ存スルノ條款ニシテ我國

土ニ居住スル外國人犯罪ノ所爲アルハ即チ外國領事裁判所ノ管轄ニ屬シ各自其本國ノ法律ニ依テ處罰セラレ

我國ハ外國人ニ對シテ裁判權ヲ有セス又立法權ヲモ實際

上幾部分カ制限セラレタリ何トナハ外國人ハ各自其本國ノ

法律ニ依テ處罰セラル者ナハ我ニ於テ法ヲ立ツルモ若外國



公使ノ承認ヲ經テ其國ノ法律トナシ以テ其國人ニ布告セラル
ニ非サレハ法律ノ効力ヲ有セサレハナリ我既ニ立法及裁判ノ
權ヲ外國人ニ及ホスヲ得ス是ヲ以テ夫ノ國家ノ秩序安寧
ヲ保全スルニ最緊要ナル行政警察等ノ諸規則スラ眼前
ニ之ヲ犯スモノアルモ相當ノ處分ヲ施スヲ得サルナリ是即チ獨立
ヲ損スルモノニ非スレテ何ソヤ凡ソ自主獨立ノ國ハ其國土内ニ於
テ立法司法行政ノ全權ヲ有シ毫モ他國ノ干涉ヲ容サルナリ
是故ニ我帝國ノ面目ヲ全フセント欲セハ必ス獨立ヲ回復シ立
法司法行政ノ全權ヲ我ニ握有セサルヘカラス蓋シ我國ノ獨
立ヲ回復スルノ方法唯ニアルニ一ハ兵力ニ依リ一ハ平和ノ談判
ニ依リ治外法權ヲ廢撤スル即是ナリ然レモ歐洲諸強國ヲ敵
ト爲シ兵力ニ依リ我國ノ獨立ヲ回復セントスルノ不可行ノ事タルハ
論ヲ俟タス然レハ則チ平和ノ談判ニ依リ治外法權ヲ廢撤

元ヲ國ルノ外他ニ我國ノ獨立ヲ回復スルノ方法ナキナリ

抑条約改正ノ事ハ明治四年岩倉大使歐米巡回ノ時
ヲ以テ之ヲ各國政府ニ談判アリレト雖ハ當時彼我ノ意見
妥協ニ至ラス遂ニ我東京ニ於テ之カ議ヲ開クニ決シタリ然ル
ニ爾後我國内多事ニシテ政府事ニ此ニ從フニ暇アラズ為メ
存再數年ヲ經過シ明治十一年二月ニ至リ海關稅則ヲ
主トシテ更ニ改正ノ議ヲ各國政府ニ提出シタレハ是亦十分
ノ好結果ヲ得ル能ハス明治十二年九月外務卿更迭ニ際
シ更ニ閣議ヲ定メ海關稅則改正ニ加フルニ漸次内地ヲ外人
ノ為メニ開キ以テ治外法權ヲ漸廢スルヲ以テ条約改正ニ自將
来ノ目的トナスニ決シ各國政府ニ向テ數回ノ論辨ヲ費シ終ニ
我東京ニ於テ豫議會ヲ開キテ各國各個ニ條約ヲ改定
スルニ先テ之カ改正ノ基礎ヲ論定スヘキニ論議調定シ明治

十五年一月ヲ以テ該會ヲ開クニ至レリ而シテ我政府決定ノ旨
趣ニ基キ爾來數回ノ談判論辯ヲ累ニ漸ク各政府其
使臣ニ付ルニ訓令ヲ以テシ不遠シテ公然本議ヲ提論ス至
レリ今ヤ本官將ニ各國政府ニ向テ我政府ヲ代表シ其主責任
ヲ尽サントスニ方リ先ツ閣議ニ向テ切ニ請フ所モノアリ即チ我
政府外交政畧ノ主義ヲ確然一定セラレ内ハ以テ官民ノ方向ヲ
一ニシ外ハ以テ各國ノ信憑ヲ得ル是ナリ然ラサレハ決シテ我目的ヲ
達スル能ハサルミナラス遂ニ我ヲ外交ノ和親ヲ破却シ名狀ス
ヘカラサルノ患害ニ陷ルヲナキヲ保タサルナリ

熟ラ、我邦輓近社會ノ情態ヲ觀察スルニ各地方ニ政黨
ヲ團結シ官民漸ク其方向ヲ異ニスルモノアリト雖氏概シテ之ヲ論
スレハ單ニ内治ノ政策ニ止マリ未タ外交上ニ密接ノ關係ヲ有
セサルモノ如シ然ルニ此ニ深ク慮ルヘキモノハ夫ノ政黨外一種ノ社

會ヲ團結シ杞憂會護國會或ハ明教會ト唱ヘ宗教若クハ道學ヲ主張シ外教ヲ痛排激斥スルノ徒アリ今此等黨派ノ實況ヲ諦察スルニ各地ニ蔓延シ其徒無慮十數萬ニ降ラス其勢力漸ク將サニ制スヘカラス至ラントモナリ抑該會タルハ則外教ヲ排斥スルニ在リト雖氏實ハ則攘夷ニ外ナラス論スル所ハ教義ニ在リト雖氏思ハ其人之及サルヲ得ス唱フル所ハ道德ニ在リト雖氏行フ所ハ文化ヲ卻退セシムルニ外ナラス凡ソ其志ニ存スル所ノモノ必ス外形ニ顯ハルハ是人情免ル可カラサル通理ナリ故ニ今政府彼徒ノ所爲ニ委シ其志ス所ヲ達セシメンカ鎖國攘夷ノ政畧ニ出テサル可カラス開國ノ主義ヲ採リ獨立國ノ面目ヲ完全ナラシメント欲スルカ宜シク鎖國攘夷ノ感情ヲ一變シ苟クモ之カ誘原ヲ爲スヘキモノハ一切杜絶スルヲ勉メサルヘカラス此二者決シテ並立スヘカラスモノナリ故ニ我政府ノ其

政畧ヲ一定シ二者ヲ選擇セラルハ實ニ一日モ忽ニスヘカラサルノ
急ナリトス請フ先ツ從來我政府外交談判ノ要領ヲ叙列
シ後來執ラサルヘカラサルノ主義ヲ論スヘシ

抑我政府カ全約改正ニ関シ執ル所ノ主義岩倉大使歐
米巡回以來多少ノ沿革アリト雖氏一昨十五年內閣議決
ヲ經テ

聖上ノ御宸裁ニ依リ決定セシ要旨ハ即チ左ノ如シ

第一外國人若シ全ク我法律ニ服從スル外國人ノ方ニ
我全國ヲ開ク

第二我行政諸規則ニ服從シ警察規則及ヒ輕罪係
ル罪犯并ニ民法上ニ係ル案件ニ皆都ヘテ我裁判ニ服從
スルニ於テ内地通商ヲ許スヘキ

又各國政府カ爾來殆レト二ヶ年間我政府ト數回ノ談判

ヲ經テ今既ニ其使臣ニ訓令ヲ付與シ將ニ提議セントスル要
領ハ即チ左ノ如シ

一豫議會ニ於テ日本委員并ニ外國委員カ同意シタ
ル改定税目ハ他ノ各國ニ於テモ承諾スルヲハ其俟之ヲ
承諾スルハ尤右關稅增加ノヲ承諾スルヲ尤ノ約束ニ
依ルモノトス

日本ニ於テ外國人ニ貿易上并ニ内地交通ノ便利ヲ增加
スルニ同意シ是迄外國商人カ唯四五ノ開港場ニ其貿
易ヲ限ラレタル檢束ヲ寬メラレ今日外國貿易ノ妨害タル
地方聯合ノ弊ヲ防キ以テ外人ヲ保護セラルヲ
一日本政府カ豫メ外國ト協議同意シタル約款ニ依リ
其全國ヲ開キテ外國人ノ通商貿易并ニ居住ヲ許シ
且ツ内地ニ於テ不動產ヲ所有スルノ權ヲモ外國人ニ與ヘ

え、ニ於テハ「日本カ關稅独裁權ノ享有ヲ要求スル」至當
ナルト認識ス故ニ若シ他各國モ同意スルニ於テ此條約
批准ノ日ヨリ算シテ五ノ期限（後令ハ十二年）ノ後ニ於テ諸
約國ノ一方ヨリ十二ヶ月前ニ報知ヲ與ヘハ該條約ヲ終了セ
シムルヲ得ヘシト一々条ヲ新貿易條約中ニ挿入スルヲ肯
諾ス而シテ右ハ何時其報知ヲ為スヲ論セス其報知ノ日ヨリ
算シ十二ヶ月ノ後迄ハ該貿易條約ヲ依然施行スベキヲ勿
論ナリトス但シ日本ニ於テ右貿易條約ノ終了ヲ告知スルヲ
得ルハ先ツ其日迄ニ外國人民ニ對テ裁判權ニ關シ彼我
兩國間ノ承諾シタル取極ニ依リテ既ニ日本全國ヲ外國人
開キタル上ノトス

一外國政府ハ敢テ其領事裁判權ヲ日本ニ永久ニ存スル
意ナリ又外國人民ノ利益ノ正當保護ニ必要ナル年限後ヲ

モ該裁判權ヲ保存セシタルノ意更ニ之レ無キナリ依テハ日
本政府ハ依令貿易條約ノ最短ナル期限ヲ十二年ト
取極ムルニモセヨ之カ为メニ其都合次第何時モ「在日本領
事裁判權ヲ終ニ廢棄スル」ト關スル問題ニ付外國政府
ニ向テ該判ヲ請求スルハ決シテ妨ナカルヘシ併ナカラ日本ニ
於テ民法商法并ニ訴訟法ノ完備シ且其翻譯出来
自迄ハ右談判ノ基礎タルヘキモノ果シテ存スルヤ否ヤラ疑フ
ナリ而シテ外國人保護力ヲ示セル保証果シテ十分ニシ
テ遂ニ外國人ヲ日本裁判權ニ服従セシムルト同意スルヘキ
時到レリヤ否ヲ判断スルノ權ハ英國政府ニ之ヲ有セサルヘカ
ラス

一懇親ノ精神ヲ以テ日本ノ為メニ右等ノ讓與ヲ为スカ
故ニ日本政府ニ於テモ亦此精神ニ感應セラレ其報酬

トシテ速ニ内外人民ノ交際ヲ成ルヘク便利ナラシムルニ着手ス
ヘキト信ス是ニ依リ日本政府ニ望ム所ハ内地通行免狀
ノ權限ヲ一層擴充セラルト且外國人并ニ其船舶ヲ
テ目今未タ外國ノ爲メ開カレサル諸港ニ往來貿易スル
許容セラルト且日本人民ヲシテ沿海貿易ノ爲メ外國船
舶ヲ雇用スルヲ許容セラルト在リ

我政府カ今日迄所執ノ主義ト外國政府ノ將ニ提出
スル論綱ハ際子右ノ如ク彼我ノ間多少ノ差異アリト雖モ之
ヲ約言スル我ニ則テ開國ノ主義ヲ言明シ彼ハ則テ治外法
權ヲ永存スルノ意ナキヲ豫言スルモノナリ蓋シ外國政府此
豫言ヲ爲スノ意ハ我邦ノ諸法律彼ノ國ト大差ナキニ等
ハ其法權モ亦廢撤スヘシト云フニ在リ其是同ヲ判定スル
實ニ容易ナラスト雖モ氏之ヲ從來外國政府カ治外法權ヲ

視テ以テ金城湯池ト爲シ決シテ破毀スヘカラサルモノト固執セ
シ主義我ニ比スレバ既ニ已ニ其幾歩ヲ我ニ譲リ我カ今日迄所
執ノ政策ヲ隱然協賛セシモノト云フベキナリ

抑各國政府カ斯ノ如キ感情ヲ起シ来リシバ但タニ是曩日預
議會ニ於テ開國ノ主義ヲ提出シタルニ職由スルニ非ラス其
誘原ヲ究ムルニ蓋シ維新以來意ヲ外交ニ用テト其方向
ヲ改進ニ取ルトニ由ラサルナレ今又謹テ維新以來政畧ニ関
スル詔勅ノ主要ヲ按スニ維新ノ初御誓文ヲ以テ廣ク會
議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘキト曰来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公
道ニ基クヘキト智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘキ
ト等ヲ神明ニ誓ハセラル以テ我國ノ進路ヲ定メ玉ヒ明治
八年ニ至リ元老大審ノ二院及ヒ地方官會議ヲ開設
セラル其詔ニ曰ク

朕即位ノ初首トシテ群臣ヲ會シ五事ヲ以テ神明誓
ト國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ求ム幸ニ祖宗ノ靈ト
羣臣ノカトニ頼リ以テ今日ノ少康ヲ得タリ願ニ中興
日淺ク内地ノ事將ニ振起スヘキモノ少トセス朕今誓文
ノ意ヲ擴充シ爰ニ元老院ヲ設ケ以テ立法ノ源ヲ擴
メ大審院ヲ置キ以テ審判ノ權ヲ鞏クシ又地方官ヲ
召集シ以テ民情ヲ通シ公益ヲ図リ漸次ニ國家立憲
政体ヲ立テ汝衆庶ト共ニ其慶ニ賴ラント欲ス汝衆庶
或ハ舊ニ泥ミ故ニ慣ルヲ莫ク或ハ進ムニ輕ク為ルニ急ナ
ルヲ莫ク其能ク朕カ旨ヲ体シテ翼賛スル所也

其地方官會議院憲法頒布ノ詔ニ曰ク

朕踐阼ノ初神明ニ誓ヒシ旨意ニ基キ漸次ニ之ヲ擴
充シ全國人民ノ代議人ヲ召集シ公議輿論ヲ以テ律

法ヲ定メ上下協和民情暢達ノ路ヲ開キ全國人民ヲシテ
各其業ニ安シシテ國家ノ重ヲ擔任スヘキ義務アルヲ知ラシ
ムヲ期望ス故ニ先ツ地方長官ヲ召集シ人民ニ代テ協同
公議セシム乃チ議院憲法ヲ頒布ス各員其レ之ヲ遵守
セヨ

又明治十二年ニ於テ府縣會ヲ開カレ遂ニ十四年十月ニ至リ断
シテ國會ヲ開ク期ヲ定メサセラシ將ニ明治二十三年ヲ期シテ議
員ヲ召シ國會ヲ開キ以テ維新更始ノ御初志ヲ成サセラシ
ト其詔ニ曰ク

朕祖宗二千五百有餘年ノ鴻緒ヲ嗣キ中古紐ヲ解クノ
乾綱ヲ振張シ大政ノ統一ヲ總攬シ又夙ニ立憲ノ政体ヲ建
テ後世子孫継クヘキノ業ヲ爲サセトラ期ス嚮キニ明治八年
ニ元老院ヲ設ケ十一年ニ府縣會ヲ開カシ此皆漸次基ヲ

創メ序・循テ歩ラ進ムノ道ニ由ルニ非サルハナシ爾有衆亦
朕カ心ヲ諒トセン

顧ミルニ立國ノ体國各其宜キヲ殊ニス非常ノ事業實ニ
輕挙ニ便ナラス我祖我宗照臨シテ上ニ在リ遺烈ヲ掲ケ
洪模ヲ弘メ古今ヲ變通シ断シテ之ヲ行フ責朕カ身ニ在
リ將ニ明治二十三年ヲ期シ議員ヲ召シ國會ヲ開キ以テ
朕カ初志ヲ成サントス今在廷臣僚ニ命シ假スニ時日ヲ以
テシ經畫ノ責ニ當ラシム其組織權限ニ至リテハ朕親ラ
衷ヲ裁シ時ニ及ンテ公布スル所アラントス

朕惟ニ人心進ムニ偏シテ時會速ナルヲ競フ浮言相動
シ竟ニ大計ヲ遺ル是宜ク今ニ及テ謨訓ヲ明徴シ以テ
朝野臣民ニ公示スヘシ若シ仍ホ故サラニ躁急ヲ爭ヒ事
變ヲ煽シ國安ヲ害スル者アラハ處スルニ國典ヲ以テスヘシ特

茲、言明し爾有衆、詢ス

且又其實際施設スル所ヲ視ル、軍制教育刑法治罪
法其他鐵道電信郵便等ノ設置ニ至ルマテ皆以テ則
ヲ泰西各國、採ラサルハナギナリ

是ニ由テ之ヲ觀シハ泰西各國カ我邦ニ對シ往々治外法權、
廢撤スヘシトノ感情ヲ起セシハ我邦カ維新以來漸次施設
スルノ實據ヲ觀テ我邦カ當初抱ク所ノ攘夷鎖國ノ感
情ヲ一變シ漸ク其位置ヲ泰西ノ文明ニ進化シテ亞西亞
洲中ニ泰西文明同胞ノ一國ヲ進出セントスニ至ルヘシトノ感
覺ヲ起サシメルタルニ外ナラサルナリ事体此ノ如シ我邦独ニノ法
權ヲ完全ナラシメント欲フルカ愈詔令ノ本旨ヲ体認シ其方向
ヲ誤ラス舊來ノ陋習ヲ破リ益文明制度ヲ改良シ我邦
ノ位置ヲシテ彼ノ泰西各國ト大差ナカラシメ始メテ全然独

主ノ國權ヲ輓回スルヲ期スヘキナリ

然ルニ近來我邦社會ノ有様ヲ觀察スニ夫ノ宗教道學ヲ以テ結社スルモノ、如キ帝、其徒ノ民間ニ在ルミナラス在廷ノ顯官或ハ地方長官ミレテ之カ主唱ヲ爲スニ非ラサレハ則之ヲ贊成シ詔令ノ本旨ニ背馳シ其方向ヲ誤リ維新以來將ニ起ラントスル文化ヲレテ漸ク卻退セラルミナラス將ニ外交上不測ノ危害ヲ見ントスニ至レリ彼徒ノ規約書ニ附記スル告文ヲ閱スニ左ノ言アリ

彼ノ耶蘇教匪黨ハ巧發奇中ノ術ヲ運ラシ些ノ財幣ヲ以テ大邦ヲ覬覦ス屢人民ヲ結ハントシテ其所言最簡易ナリ而シテ其期スル所ハ國家ニ在リ其慘害盡惑豈懼レサルヘケンヤ今ヤ天下歐文ヲ學フノ士ロニ洋史ヲ談シ散髮眼鏡ミテ胡服ヲ身ニ纏フ者ニアリテハタタハ彼教

國ニ入ラシムハ開化然タラサルヲ心得自カラ陋劣ニ落キ以テ外
國ニ阿リ邦國ノ大經大法ハ亡滅壞乱スモ猶越人ノ素
人ノ肥瘠ヲ視ルカ如クス實ニ生ヲ瑞穂ノ邦ニ受クル者ニ
之ヲモ忍ブベクハ孰レヲカ忍ブヘカラヤ是我杞憂會
々權飛シテ止ム能ハサル所以ナリ

此論旨ヲ推スハ耶蘇教ヲ奉ルモノ我邦ヲ覬覦スルノ賊ト
シ到底之ヲ我邦外ニ追攘シ其跡ヲ絶ソニ非ラサレハ滿
ルモノナリ且杞憂會員ノ徒ハ既ニ各地ニ於テ耶蘇宣
傳ヲ論ヲ爲シ或其布教ヲ妨ケ或ハ其說教ヲ妨クル
動モスレハ耶蘇教徒ニ乱暴ヲ加ヘ該會ニ関スル探聞節
ヲ紙尾ニ附録ス參觀アルヘシ近來更ニ一層ノ甚シキヲ致
蘇國憲論ト題スル冊子ヲ刊行シ攘夷ニ類スル論說ヲ
輯シテ廣ク之ヲ其同志ニ頒ツルナラス京都ニ於テハ耶

教徒。對し甚しキ乱暴ヲ加フル。至レリ勢此ノ如ク。大義
之ヲ傷殺スルヲナキヲ保ツヘカラス。且ツ頭要ノ地位ニ居リ要職
ヲ奉スルモノニシテ之ヲ主唱シ之ヲ賛成ス。即チ外人視テ以テ
政府ノ贊助誘導スルモノト視做サシモ亦其理ナキニ非ラス。而
一事変テ醸生スルに至ラハ將ニ何ノ術ヲ以テ之ヲ救済ス
ルヤ実ニ警メテ而シテ戒シメサル可ラス

夫レ条約ヲ改正シ我期望スル所ノ權利ヲ回復ス。國ハ
元是當然ノ要求ニ属スト雖凡ソ其權利ヲ得ルニ至ル
理ヲ保有スルニ適宜ノ資格ヲ具有シ應當ノ義務ヲ尽
ヘカラス故ニ今回ノ談判ニ於テ我法權ノ幾分ヲ回復シ得ル
トモ守我國ハ益々開進ヲ勉メ以テ應當ノ義務ヲ尽
ヘカラス然ルモ前陳ノ如ク當ニ其義務ヲ尽スニ意ヲ用
ナラス官民賴テ以テ教徒ヲ敵視シ暴行ヲ加フルヲ

一宣教師ヲ傷ケ又ハ暴殺スル等ノイアラシメハ改正談判ノ自
的ハ烏有、歸シ法權回復ノ望ハ斷絶スルニ至ルモ知ルヘカラス
且耶穌教徒ノ關係ハ頗ル重大ニシテ若シ一度之カ處置
ヲ誤レハ如何ナル困難ヲ來サンモ測ル可カラス殷鑒遠カラ
ス安南ニ在リ安南カ外國ノ為メニ其國土ヲ削ラレ遂ニ今日
亡國ノ辱ヲ招クニ至リタルノ原因ハ早竟妄ニ耶穌教ヲ排
斥セント欲シ教徒ヲ虐殺シ或ハ王族及ヒ官吏等密カニ
下民ヲ煽動シテ該宣教師ヲ暴殺セシメ佛人ニ暴行ヲ
加ヘタルニ在リナリ

蓋シ耶穌教ハ泰西ノ文明ト相密着スルカ故ニ我國益文明ノ
域ニ進ミ泰西諸國ト交際繁密ナルニ從ヒテ益該教ノ我國ニ入
ル勢ノ免ル可カラサル所ナリ夫ノ泰西諸國ハ即耶穌教國ナリ其
國人ハ即チ耶穌教ヲ信奉スルノ民ナリ故ニ我大ニ學校ニ於テ學

生ラ教育ス所ノ外國教師ハ即チ耶蘇教ノ信徒ナリ其他我邦參
酌シ模範トスル制度法律モ耶蘇教ノ行ニ國ニ適當シタル者非
スヤ今日迄既ニ參酌模倣セル法律其他諸技術等ノ如キモ亦皆
該教ヲ信奉スル者ノ手ニ成リテ該教國ニ行ルモノナリ然ルニ今其文
明ミヲ採リテ独リ耶蘇教ヲ擯斥セントス到底言フヘク行フヘカニ議
者或ハ云ヒ泰西文明ハ採ルヘシ耶蘇教ハ防クヘシ泰西ノ學術ヲ修
メ智識ヲ研キ百般文明ハ器具ヲ利用シ制度法律ヲ參酌シテ我
ニ取用スル何ソ耶蘇教ニ関セシヤト之ニ答テ曰ヒ然ラハ仮リニ條約ヲ
改正シ我全國ヲ外國人ノ力ニ開キ治外法權ヲ全廢シテ我國ノ独
立ヲ回復シ完全無缺ノ自主獨立ヲ保全シタリトセ而シテ嚴ニ耶蘇
教ノ我國ニ入ルヲ防クトセシ乎我邦ニ入来ル外國人ヲシテ悉ク
改宗セシメ苟モ改宗スルニ非サレバ我國ニ入ルヲ禁ヤサルヘカラス
然ラサレバ耶蘇教ノ浸染ヲ防クニ足ラサルヘシ然ルニ我ニ於テ

此ノ如クスレハ彼モ亦我國人ノ泰西諸國ニ到ル者悉ク耶蘇
教ニ改宗スルニ非サハ寸歩モ彼國ニ入ルヲ許サルヘシ既ニ
我國人ノ泰西諸國ニ行クモノ皆耶蘇教ニ改宗スルトキハ到
底之カ播傳ヲ防カントスルモ能ハサルナリ是故ニ若シ斷シテ之
ヲ禁絶セント欲スレハ則チ全ク彼我ノ交際ヲ絶チ鎖國攘
夷ヲナスニ非サレハ其目的ヲ達スヘカラス何トナレハ歐米諸國ノ
人民ハ大抵皆耶蘇教ヲ信奉スル人民ナリ此國人ト交
際シテ耶蘇教ノ浸染ヲ防カントスルハ恰カモ虎列刺病患者
ト同室シテ其傳染ヲ防カントスルカ如キモノナレハナリ然ルニ歐米
各國ト全ク交際ヲ絶チ鎖國攘夷ヲナスハ果シテ今日行
ヒ得ヘキナラカ其不可行ノヲタルハ事理ノ最易睹モノナリ
然レハ維新以來開進ノ目的ヲ貫キ我國ヲシテ歐米ノ文
明ニ進化セシムルノ外ナキニ非スヤ

抑耶蘇教ノ件ニ関シ從來外交談判ノ沿革ヲ按スニ
外國公使ノ論難ヲ来シ毎ニ外交上ノ困難ヲ免レサリシ
ト雖モ幸ニ國難ヲ来スカ如キ事變ヲ生出セシナカリキ
然レモ今日、於テ若シ確然之ニ處スルノ主義我政畧ヲ斷
定スル所アルニ非スハ到底國家ノ禍害ヲ免レサントス
我政府ハ今日マテ曾テ該教ノ儀一定ノ主義ナク内
令スル所ト外國ニ對シ明言スル所ト毎ニ相齟齬セルモ
ナリ

明治元年三月太政官ヨリ我邦内諸國ニアル從來ノ
高札ヲ取除ケ更ニ切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御制禁
タリ若シ不審ナルモノ有之ハ其筋ノ役所エ申出ヘシ御褒
美可被下事ト揭示スヘキ旨布令アリタル時各國公使
ヨリ如此ノ布令有之ハ方今ノ時勢ニ合ハル御處置ナル

又暫ク措キ自然文際上ニ差違有可申右御布令ノ御
趣意貫徹シ日本ニ於テ真ニ耶蘇宗ヲ嚴酷ニ處置
セラル、其處置ハ西洋文明國ノ和親ヲ日本政府ヲ
破ラレ、徴証ニ可有之等ノ旨ヲ以テ大ニ論難ヲ來シ
タリ

右ニ東久世中將ヲ同年十一月各國公使ハ返答
先旨意ノ大要ハ左ノ如シ

當春我政府変革致シ新政府ヨリ布令セシ個条
中切支丹邪宗門ト有之候ヲ切支丹ヲ指シテ邪
宗門ト解ス、誤有之候得共切支丹宗ヲ指シテ邪
宗門ト相唱候義ハ無之云々

抑三百年前、切支丹ト唱候者ハ魔術ヲ主張シ人
心ヲ蠱惑シ禍乱ヲ醸シ候旨ハ嚴禁致候誤ニ

其頃ハ萬民モ亦是ヲ耶宗ト相心得来云々其以
後衆民未タ切支丹ノ正ナルヲ不辨若シ今其正
ヲ不辨内儀ニ差許候ハ時勢ニ從テ民ヲ治ムル便
ニ適ヒ不申ニ付公議ヲ尽シテ耶ヲ分明ニ辨レ可申
義ニ候得共兵馬紛擾ノ秋曾テ其事ニ難及右ノ
故ニテ此ニ係レル法律未タ一定不致候付我國各
所ニテ處置スル事一樣ナラサルモ難計然ル處是ヨ
リ交際親密ニ可成立ノ時ニ臨ミ貴國ノ宗旨ヲ奉
スル我宗徒ヲ處置スル慘酷ニ過キ候テハ親睦ノ國
ニ對シテ相濟ニ付以來酷法ヲ廢シ寛大ノ處置ニ
取計候様此節政府ニ於テ衆議ヲ遂ケ決定候
云々

明治二年十二月長壽縣下浦上村ノ耶蘇宗徒ヲ諸

藩ニ移ス際シ外務卿ヲ各國公使ヘ浦上村該教信
仰ノ徒客年中諸藩ヘ引渡シ工役申付候處其頃内
地兵馬事起リ引渡殘ノ人員有之其終ニ差置候テ
ハ他ノ土民ト不和ニシテ徒黨爭論ヲ起シ民政ニ於テ大
ニ差支候ニ付今般諸藩ヘ交付シ藩民ト同様工役申付
候尤決シテ苛酷ノ處置ニ涉リ候義無之旨ヲ通知シ先
ニ各國公使ヲ右ハ昨年中日本政府ニ於テ該宗信仰徒
穩便ノ處置可相成御約束ニ相違致シ又追々開化
相成度御本意ニ相違致候様相見候云々右様事
有之候テ貴國諸條約國々ト御交際上ニ必ス不幸ノ
事相ツ生シ可申云々貴國政府ヲ度々兩國ノ交誼不相
愛愈々厚カラシムヲ希望ス旨御申越相成候得共信
用難致旨照復シ且十二月十六日各國公使ハ橫濱會

議ヲナシ同日英國公使ニ代リテ一等書記官アタル寺島
外務大輔ニ面會シ我政府ノ處置ヲ論シ且曰本ニテ宗
教ノ義ニ背キ酷ノ處置アラハ歐洲各國ニテ決シテ打捨置
カス嚴重ノ事ニ見込居ル等並テ本國政府ヨリ訓令有
之個条ノ大意等ヲ述ヘ近々各國我公使一同右大臣殿初
御一同ヘ談判致シ文際ノ決否トモ取極候答ニ有之候
間甚節迄先ツ急ニ長寄ヘ使テ差遣セシ宗徒引渡ノ
期ヲ寛メ置キ十分ノ御談判有之度明朝八時ヲ期シ決
答ヲ乞フ旨迫リタル以テ翌十七日太政官ニ於テ集議アリ
英國公使代書記官アタル一昨宗徒引移ノ期ヲ寛ムハ
キ旨ヲ面答シ十八日三条右大臣岩倉大納言副島善議
沢外務卿寺島外務大輔吉井彈正少弼土方中辨江
藤中辨柳原准大丞列席ニテ英佛未独公使ニ應接アリ

其節公使ニ對シ誥諭中左ノ趣意陳述アリタリ

先年大抵表ニ於テ各公使ニ御約束申候次第ニ有
之候間宗徒處置振ノ義苛酷ノ扱ハ決シテ致シ不
申云々今回諸藩ニ該宗徒ヲ移シ候ハ耶蘇宗信
仰致候者ト其宗旨ニ入ラサル者トノ間ニ屢爭論ニ差
起リ之ヲ打捨置候義不相成右故宗旨ノ正邪ヲ論
シ候ヨリ出タル訣ニ無之云々

耶蘇教ノ邪曲ナラサルハ疾ク承知致候云々

宗旨ヲ信仰シ別段惡事等無之候ハ強テ構候ニモ
及間敷候得共奸民共右宗旨ニ加リ同ク宗旨ヲ信
スル名トシ種々ノ暴戾ヲ企テ終ニ政府ノ命ヲモ奉セサル
様成行候左アリテハ百般ノ處置モ不行届何令其終
ニ難差置候云々

ヲ述ヘ且我政府ニ於テハ宗徒ヲ移轉セシムルモ決シテ苛虐ノ
取扱ヲ成サル旨ヲ辨明シ爾後移轉残リノ宗徒アル其俟
ニ差置クベキ旨ヲ長崎縣ニ達シ本件ノ談判ヲ結了セリ
明治五年二月岩倉大使ノ米國々務卿ト條約改正ノ件
ニ付應接ノ節宗教ノ事ニ関シ大使ハ國務卿ノ發議ニ
對シ論議中左ノ言語アリ

宗教ノ件ハ頗ル緊要ノ事柄ト兼テ兼知セリ我政府
ニモ何レ自由ト申場合ニ至リ可申總テ今日ノ處置
ニ右ノ場合ニ相運ヒ候様致度事ニ有之乍去國內
ノ情況未タ斯ル大變革ヲ起シ候テ不相成云々我
政府ニ此等ノ事ハ歐洲各國ト同様ニ致度候様諸
事慎ミ尽力致候事ニテ時機至リ候ハ耶蘇教制
禁ノ法ヲモ廢止候様可相成到底各國同様ニ成

行候ハ必然ニ有之候云々

同年四月十三日我外務省ニ於テ副島外務卿カ佛國公使ト應接ノ節ニモ外務卿ノ應答中左ノ言語アリ

政府ハ耶蘇教信徒ヲ嚴酷ニ致シ候義無之云々伊萬里縣ニ於テ召捕糾問候者又別ニ惡事有之故ニテ耶蘇教信仰ノ故ニ無之候

明治六年二月廿四日政府ハ各府縣ニ令シテ切支丹禁制ノ高札ヲ取除カシメ又同年三月諸縣ニ令シ長崎縣下浦上村ノ耶蘇教徒ノ明治二年ヲ以テ九州及中國筋諸藩ヘ分テ預テ懲治セル者ヲ放免歸々籍セシメタリ而シテ此時ニ至ルマテハ始終各國公使ノ論難ヲ来シ毎ニ外交上ノ困難ヲ免レサリキ

斯ノ如ク我大臣及外務卿ハ外國公使ノ論難ニ對シ

チハ毎ニ我政府ハ耶蘇教信徒ヲ嚴酷ニ取扱フノ旨意
ニアラス早竟之ヲ他所ヘ移シ懲治スルハ別ニ罪惡アルニ
因ルモノニテ敢テ該教ヲ邪教トナシ其信仰ヲ罪惡ト爲
スニ非サル者ヲ言明シ而シテ其間(即明治六年二月迄)各
府縣高札場ニ於テ依然左ノ高札ヲ掲ク
一切支丹宗門ノ義ハ是迄御制禁ノ通固ク可相守

事

一邪宗門ノ義ハ固ク禁止候事

且右ノ高札ヲ取除キタルモ早竟人民一般熟知ノ事ニ付
高札ニ掲ケ置クラ要セストノ趣意ニ出タルモノナリ即明
治六年二月廿四日太政官ヲ各府縣ヘ達シタル達
文ハ左ノ如シ

自今諸布告御發令毎ニ人民熟知ノ爲ニ凡三十日

間便宜ノ地ニ於テ揭示セシメ候事

但管下ヘ布達ノ義ハ是迄ノ通可取計從來
高札面ノ義ハ一般熟知ノ事ニ付向後取除可申

事

而シテ當時ノ外務卿(副島)ハ其月廿六日外國公使ハ上
覽書トシテ左ノ書面ヲ交付シタリ

耶蘇教宗門信仰ノ者ノ義ニ付テハ各國人ニ對シ不都
合ト存シ昨年夏捕縛等不致寛宥相心得候様
府縣長官ヘ相達置猶又今般高札上ニ掲グル所
モラ取除候此段御心得ノ為メ御話致置候

然ルニ同年五月外務省ヨリ耶蘇教默許ノ義ニ付政
府ノ趣意伺出對シ正院ハ六月十八日ヲ以テ左ノ如ク指
令シタリ

高札面ハ人民普ク熟知ノ義ニ付取除キ百般ノ布令
揭示致サセ候義ニテ素ヨリ異宗ヲ默許セラルヘキ御主
意ニ無之事

是故明治七年青森ニ於テハ耶蘇教講談ヲ禁止シ
明治八年開拓使管下ニ於テハ耶蘇宗ノ式ヲ以テ埋葬
ヲ執行セシムル者アリシ時墓地ノ義ニ付願出ニ對シ該宗ハ
國禁タルヲ以テ難聞届旨同使判官ヨリ指令セリ爾來
今日ニ至ル迄耶蘇教ヲ解禁シタルノ令アルヲナシ是ヲ以テ
官廳ニ於テハ既往ノ例文ニ據リ尚ホ國禁ナリト思惟シ往々
該教ノ式ヲ以テ埋葬ヲ當ミント欲スルモノアレハ故例ヲ株守シ
彼等ヲシテ葬ルニ地ナク空ク屍ヲ抱テ道塗ニ痛歎セラルニ至
ラシムル如キノ事實ヲシテ外人ノ耳目ニ觸レシメカ忽チ論難ヲ
來ル勿論曾テ我政府カ外國ニ向テ苛虐ノ取扱ヲナサルト

云精神ニ正シク背反セシ行為ト云ハサルベカラス又一方ニ於テ其
宣教信仰ノ有様ヲ觀察スレバ之カ教師タルモノハ外國人居
留地ハ勿論其他ノ市府ニ於テ我邦人ヲ集メテ公然説教
場ヲ設ケ之ニ歸依スルモノ日々多ク加フルモ官吏ノ之ヲ制止
セシモノアルヲ聞カス此行為ニ就テ論スレバ正シク是ニ政府ハ該教
ノ信仰ヲ默許スルモノト云ハサルヘカラス既ニ已ニ之ヲ默許シ又之
ヲ制禁ス所謂教ヘサル民ヲ殺スト云モ蓋シ過評ニ非ラズ
夫レ然リ是ヲ以テ各地方官ノ取扱モ亦自ラ區々ニ流レサルヲ
得ス実ニ政府ノ主意ハ果シテ之ヲ禁スルニ在ルカ將タ許ス
在ルカ俟令禁制ノ趣意ハ存スト雖モ實際ニ於テ之ヲ默
許シ且外國政府ニ對シテハ既ニ之カ禁制ヲ寬免シタルヲ
言明セシメナラス到底歐米諸國ト同様之カ自由ヲ許ス
ヲ明言セルニ非ズヤ實ニ此件ニ就テ政府ノ主義未タ確

然一定セスト謂ハサルヘカラス蓋シ維新草創ノ際ニ於テ其
主義ノ確定スヘカサル亦不得止ノ事情ナキアラズ然レモ今
日ニ至テハ最早斷然其主義ヲ確定セサルヘカラス若シ今
ミテ政府ノ主義確定セサルハ我政府ヲ代表シ外國
ニ向テ談判ヲ為ス者將タ何ノ憑ル所アルカ凡ソ外務卿
カ外國公使ニ向ヒテ發言スル所ハ他ノ省卿カ内國ノ官吏
又ハ人民ニ向ヒテ發言セルモノト其輕重關係相同カラス即
チ内ハ我政府ヲ代表シ外ハ外國政府ニ對シテ發言スル
モノナレハ若シ我政府ノ主義確定セステ其實際ニ施行
スル所外務卿カ曾テ言明セシ所ニ齟齬シ或ハ顯要ノ地
位ニ居ル官吏ノ為ス所ミテ外務卿カ外國政府ニ向ヒテ
言明スル所ニ牴牾スルカ如キ業作アレハ決シテ外國政府ノ
信用ヲ得ルヲ能ハサルナリ蓋シ外國政府ノ信用ヲ得ル能

ハサルミナラス我邦安危ノ機此時ヲ以テ判スヘキナリ故ニ宜ク
國家ノ大計ヲ熟慮セラレ断然之ヲ禁スルカ然ラサルハ之ヲ許
ス主義ヲ取ルカ何レカ速ニ其主義ヲ確定セラルヘシ然レバ
我國ノ独立ヲ回復スルノ道ハ開進ノ目的ヲ貫キ泰西文明
ノ域ニ進化シ東洋ニ於テ一ノ西洋文明國ヲ造出スルニ在リト
セヨ耶穌教ハ決シテ禁止スル能ハス既ニ之ヲ禁止スル能ハ
スルトキハ仮令ヒ之ヲ保護セサルモ明カニ從來宗教上ノ制
限ヲ解キ各人信仰ノ自由ニ放任セサルヘカラス然ルニ從來
本邦宗教ノ組織タル政府特ニ掌管ノ官衙ヲ設ケ其
官階ノ進退黜陟ニ干涉シ或ハ特典特例ヲ付與シ殆ト
是國教ヲ以テ之ヲ遇スルモノ、如シ今若シ耶穌宗ノ自由
信仰ヲ許スモ依然從來宗教ノ制限ヲ存スルハ他ノ神
佛ニ教ニ比スレハ自カラ彼厚ク此薄キイ感ナキ能ハス又耶

蘇宗ヲ以テ國教トセカ他亦之ヲ妬忌スルヘク夫ノ英
國其他ノ各國ニ於テ如何ノ政府カ宗教ノ種類ニ依リ偏頗
區別ノ措置アルカ否ニ遂ニ政治上ノ困難ヲ來スノ例不少
到底一教ヲ保庇セド欲スルハ必ス他教ニ損スル所ナキ能ハス
且夫其始メ之ヲ待ツニ苟モ偏黨厚薄ノ措置アルハ之ニ
繼クニ公平正理ノ取扱ヲ以テスルモ其怨原ヲ杜絶スル能ハス
若クモ政府ハ始メヨリ各宗ニ付スルニ同一ノ自由ヲ以テスル勝
ルニ故ニ今ヤ政府耶蘇教ヲ禁セサルトセハ各宗自由信仰
主義ヲ確定セサルヘカラス其主義確定セハ耶蘇教徒埋
葬ノ取扱ハ如何スルカ又宗門ノ取扱等將來ノ方法ヲ定メ
從來ノ取扱方ヲ變更セサルヘカラス然リト雖モ政府若シ之
ヲ禁制スルヲ以テ國家ノ良策ト爲シ且外國交際ヲ破ラヌ
我國ノ独立ヲ回復スル大計ヲ妨ケスレテ之ヲ禁制スルキ適

當ノ方法アリトセハ本官ノ敢テ知ル所ニ非ラサルナリ切ニ望ム
ラクハ深ク前述ノ利害ヲ察シ固ク維新ノ
聖旨ヲ体シ速ニ本件ヲ處スル政畧ヲ定メ以テ我國
獨立ノ体面ヲ完全ナラシムル大計ヲ定メラレドモ以テ本
件ノ議案ヲ附シ内閣ノ審議ヲ請ヒ謹テ
聖上ノ御宸裁ヲ仰キ候也

明治十七年七月 日 參議兼外務卿井上馨

議目

第一 政府ハ維新以來 御誓文ノ 御旨意ヲ奉
体シ開進ノ主義ヲ取り外交政畧ヲ確定スル
事

第二 政府ハ耶蘇教ヲ禁制セサル趣意ニ依リ外交
政畧ヲ確定スル事

第三 政府ノ外交政畧確定セハ一体ノ官吏ヲシテ能ク
政府ノ趣意ヲ体認セシメ苟モ之ニ背違ノ行爲
ナラシムル事

第四 一般宗教ノ取扱方法ヲ定ムル事

以上

名 称	三條実美文書
標 題	吉田清成 安藤 電報訳 榎本武揚

6.5入

分 類 番 号	34
	14

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

上海ハ靜謐ナレモ難黨事所以東人民蜂起シテ外國人ノ居留地ヲ攻撃セシ
トナルヲ恐テリ世間ノ評說變動定リナク清國ヲ何ノ所爲ニ出ルヤヲ預言スル
ヲ得ル者ナレ。愈々開戦ノ場在リテハ我軍艦二艘ハ當港保護ノ爲メ留メ
置クベシ更ニ一艘ハ派遣スルハ清國海岸ヲ巡航シ佛國海軍ノ舉動ヲ
視察シ緊要ノ事俾テ報セシムルモノナリ故ニ右ハ既派遣スランテテ前助又ス
常艦中立國ノ軍艦十艘アリ

右八月十五日午五時四十分上海發 外務省 海軍省 松村海軍少將

難黨ハ未タ佛國海軍ヲ命令シテ下ニアリ。清國軍艦ハ福州ニ於テ水師提督クルベ
成リテ取國ニ居レリ。佛國公使ハ清國政府ヨリ未タ決定ヲ受領セズ。清國
政府ハ何ノ処置ニ出ルヤ難モ預言シ難シ

右八月十五日午五時上海發 安藤領事

去ル九日曾國望ハ佛國公使ヨリ書翰ヲ托理衙門ハ電送セリ而シテ右電報中ニ佛
國政府カ十ヶ年賦ニテ八千萬フランノ償金ヲ要求シテ止マサルノ及右ハ佛國
人自ラハ抵当トシテ難黨ヲ保持セラル時ストリテ記載セリト見エ、然レモ清國政府ハ
之ヲ拒絶タル回答ヲ送リタルナリ

右八月十五日午五時三十分發 吉田臨時代理公使



在北京吉田代理公使電報譯

采公使ヨシダ氏曰ク愈ヨ開戦ノ場合、至ラハ合衆國ハ純然タル局外中立
ヲ守ルヘシ併シ清佛ノ一方ヨリ公告ノアル迄ハ開戦ト見做サズ。○去ル金曜
日（廿二）英公使曰ク未タ開戦ト云フベカラズ止尤モ同公使ハ亦日京外
ヨリ歸館スキ筈ナハ可成連ニ面會スヘシ。○招逃公使ハ不在ナリ
去ル八月廿六日 前七時 吉田

井上外務卿

在上海安藤領事電報譯

在上海佛國總領事ヨリ迎々々以テ其本国政府ノ意ヲ告ケテ曰ク半
戦ノ場合ニ於テ上海ノ安寧及ヒ貿易ノ上ニ妨礙ヲ加ヘザルニト
曰八月廿七日午後二時三十分 安藤

井上外務卿

在天津接奉公使電報譯

杜者本日李鴻章と長談あり、同氏は於て我國の局外中立を守り、是
特に石炭を以て佛國艦隊に供給せざるを欲する旨、及て復請求せり、因
に杜者は程能く受令と置き、之に彼に深謝詞を述べ、李氏に
請求に依りて八月まで出立を延びせり

八月十五日午後六時四十分 榎本

井上外務卿

在北京より同氏を使節として

佛國公使館より佛義を閣し、總理衙門に一通を送り、白く清く、平
和を破るる希望を更に杜る佛國の所為を問ふ之を觀し、償金一件、為
に兩國の友誼を損ふる云々、杜者は於て右の如く附載し、通知をせし
む

十七年八月十五日午後二時 吉田

井上外務卿

在上海安藤領事電報和譯

フエレ氏カ開戦公告セシニ非スト辨シタリト云フ本月十二日ノハリエール電
報ニ本地ノ仏國總領事ニ於テ之ヲ証明ス

右、十七年九月十五日發

吳淞封鎖ノ件ニ關シ當地ノ人心大ニ騷擾ス是ニ於テ各領事ハ電
信ヲ兩江總督曹國老ニ送り該件ヲ再考セリヲ求メタリ此際封鎖
ノ工業ハ中止ス

右、十七年九月十五日午後五時發

本日當地ニ於テ居留各外國人集會シテ尤、議ヲ提出スルヲ請
盟各國ヲ連合シテ清仏兩國ニ向テ調停ヲ為サント英獨米ノ三
國政府ニ訴求シ而シテ此有テ右三國ノ商法會議所ニ電報シ
其努力ヲ請フヘシ云々

右、十七年九月十六日午後六時二十分發

在北京檀公使電報和譯

形勢依然替ルナシ
檀公使ニ福州事件ノ後當國差ニ向テ重キテ償金ノ
談判、及ヒタレモ其數ナカリキ
檀公使ニ來者前ニ北京ヲ以テ撃ノ為ニ三石
ノ兵ヲ派スルヲ出来（カラサル）ニテ清國ニ於テモ右兵ノ東ルニ先ツテ東京ヲ
再ニ取ルモ亦タ行ハシ難シ當地在留各國公使間ノ説ニ據レ目下ノ處ニ
テ清國ニ於テモ檀公使ニ於テモ將來何等ノ結局ニ至ンベキカ定見ナキモノ、
如レト又孰レノ清盟國モ調停ヲ試ス模様ナシ
檀公使ニ電信ヲ送リタリ其趣意ハ多分海南島ヲ以テ償金ニ代フル
議ニ付テ檀公使ノ意見ヲ探ル為ナリ然モ拙官ノ考ニテハ此議ニ清國ニ
於テ受付ケサルハシ
右十七年九月十五日午後七時五十分發

在香港町田領事電報和譯

檀公使ハトリスシタ号ハカリソニエル艦カ當地ニ於テ修繕シタル間之ニ
為ノ本日東京ヨリ到着シタリ而シテ明日雞籠ニ向テ後錨シカルベシ
督ノ艦隊ニ加ヒ参リ
右十七年九月十五日午後五時二十五分發

在北京吉田臨時代理公使ヨリノ電報譯

總理衙門ヨリ書ヲ以テ外國公使、ニ通ノ廻事ヲ送レリ其
云ク仙兵ハ福州ニ於テ戦争ヲ始タルヲ以テ該港ニ軍艦並ニ
商船ノ入港スルハ目下見合スル方宜シラント又他ノ一通ニ云ク
萬一不幸ニシテ人命財産ホニ損害ヲ来スルハ其訴件
ハ戦争結局ノ後ニ於テ之ヲ判定スルハ英米公使ハ開
戦ヲ認めル前ニ上諭ノ旨ヲ公然領収スルヲ思考セリ英公
使云フ目下ノ景況ハ本國政府、電報セリ露國公使ハ現ニ
開戦ヲ認めルモ尚本國政府、訓令ヲ乞フ筈ナリ戰時禁制品
ニ付テハ總理衙門ヨリハ英米ニ我公使館、ニ照會セリ該衙門、
言ニ因テハ石炭供給イニ付テハ尚他ノ公使館、モ照會ニ及、コトナ
十七年八月廿九日午前七時十分北京發

北京吉田代理公使電報 八月廿八日 午後五時 東京

本日ノ京報ニ長文ノ上諭ヲ載セ、開戦ノ一ヲ清
國人ニ公布セリ其大意ハ佛國ハ条約ニ違背
シ將校ヲ以テ指揮スルトヨリ交戦ヲ始メタリ因
テ何レノ港ヲ論セス佛艦ノ入港スルヲ即チ總
督巡撫ニ於テ其艦ヲ攻撃シテ直チニ要處ニ
出兵スベシ黑旗黨劉永福ヲ提督ニ任シ東
京界内ニ是迄佛國ニ占取セラレタル各處ヲ
恢復スルヲ命ズ凡ヘテ外國人并ニ佛人ハ
均シク地方官及ニ統兵官ニ於テ之ガ保護ヲ
スベシ且ツ清國人ニ於テ決シテ騷擾ノ事ヲ為
セカラサル旨ヲモ嚴諭アリ

上海安蘇領事電報

八月廿六日
午後二時發

廣東駐苗、佛國領事及同國人民、由廣
總督、令達：因、已、該地、立去、リト、説、
リ

同 午後七時發

是迄衝留、得タルコトハ福州、閩江ノ内外、佛
艦十二艘アリ、即チトライアン、フット、ヴィラルス、テステイグ
ホルタ、ジグパイヤ、アスピック、リックス、サオン、ハヤアド、リヤト
レナルド、トライ、テューグ、エート、ロースナリ、而シテ多分、鷄籠
ニカリソニール、ルーデン、二艘、香港、ハチール、ハムリン、二
艘、アルベク、當處、ハバルス、ホル、一艘ナリ、在上海、佛國

總領事、言フコト、依ル水師提督クルー氏ハ
閩江沿岸ノ各砲臺ヲ悉ク毀滅シテ明朝其艦
隊ヲ率ヒテ福州ヲ逃シ何處カニ赴クベシ但シ其
何レニ赴クヤ、至ル同領事ハ秘シテ言ハル者ノ
外尚ホ他、幾艘ノ佛國軍艦アルを以テ同下之ヲ
知ルヲ能ハス

名 称	三條実美文書
標 題	清仏戦争関係書類

分 類 番 号	34
	15

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

大正天皇萬歲

清國佛葛藤

親展第八十一號

三



一條敬之



外孫
張
氏
之
印

大總統令總理各國事務大臣為照會事案照中法一
 戰前巴黎和會所訂巴黎條約附件布告各國請各大
 法詳閱新報各小國查其在案是日並以咸豐八年中國
 將美國訂之條約照錄一載他國有何不公輕視之事
 一經照知必須相助位中善為調處云云若行與他國
 機大臣請為轉請美國政府此事一助調處而兩國
 不致失和仍敦和睦亦在案隨准美國雷復林氏等中
 國政府照會自應或有賠款或法公法可以自取押賠各
 款此理以為誠然其稱按中國情形果實有違約之
 處則無法可以調停等語本署當以此為理由而查在
 邊總理應有押賠各款中國政府不謂然也此一事按中
 法詳校中國政府與美國政府之關係中國政府所
 應認然中國政府於此則均係根據戰前條約與中國所



前曾巡緝山各處大兵聲明無庸贅叙不意忽有熱心
一事致軍兵傷亡者多於法為數雖巨而可恨查法國籍
總兵在津口處刑照例正法以行禁者故自當理現已由
天津當局與已次在院者是此中事中國意無虧辱乃法
官亦當時不知如何謂官左教手三傳已教百幾是
約者實為法國無與於中國此言中國仍以和局為重
持願與法國兵釋結嫌結以兩國法亦無費其詰問其
何以不行開庭之由切欲保全和好大局而外相讓後
擬與法國請美國國主從中評斷想法國亦多和好
意必願美國出為調停在此兩國尚可請辦而法亦誠
惟因有與美國所立條約第一類云以恩誼為重其應
行先請美國今法國於調處評斷二層均行不以其不願
使公之二國於中法曲直情勢一為評斷而中法則不

所有情形不特無遺憾之事且無遺憾之理。其
有據若徑評斷自必定其錯歸於法國即必有賠款
亦必斷為法國所應出不應出之於中國。法亦不
從此和平。其辦之法竟以無數兵船駛往中國海口在
福建地方所為之情狀即按萬國公法所可為之舉使
者中國若非和平局為重自不能不與之即開明使臣陳復
有兵船數隻佔據台灣雞籠地方謂該處官員云彼
八十兆佛郎克方能交回此地。法國有如此辦法使中國
各口及內地人心震動貿易日衰於各國通商大有損
礙於中國餉源亦形日虧。本爵晝夜思維欲將此
情形設法疏通故中國前於數百年來所屬之
於法國前所信任之大臣曾明認其為中國之代表
已於天津簡明條約中說明兩國會議邊界並於

天津約三月之期、明廷亦明降諭旨、將該名防營限
期撤退、是中國、撫本國體制、所可退讓者、讓之
無可再讓也、總之、此事從始至今、中國均係極力欲與
和、同一與各國敦睦之情、無少欠缺、即所擬與法國公
請他國調停、評斷、亦係體法國先後以此辦法為最
善之、因擬之以期將此事善為了結、法國既經不
允、中國再無別法、惟應續將各等情形、再行布告
各國、想各國於天下和局、均係期於共榮、尤期此事
肯本公平、今法國於兩國齟齬之事、不允、請他國
調處、且於未經明行開仗之先、於中國口岸、行開
仗之事、尚望各國、甚以法國各等行為、按西例、作
咄咄、台司特事、在於此、本爵所言、猶係中國應無違約
惟思、設法、致法國、大和、至論及、李中堂、與福總、兵所

主之簡明條約自係有違約之因究其顯有違約情形
則不在中國而在法國查該約第四款內有法國照明
決不插入傷牌中國威望體面字樣云云足見法國嗣
於越南所辦者不應於中國威望體面有傷乃於五月
十三日法國在越南大城使越南王將所受中國冊
寶及中國國是即於中國威望大有傷牌其在越南
約右一也聞五月二十日法國來文內稱限七日內須賠償
在貴志平於五月六日內仍屬照常相和不行開仗云云
乃於五月二十二日竟派兵船進泊閩省馬尾林山等處
以此係於照常相和之時遽行開仗於開仗之時其
為不但有違津約並違現約者一也聞上年西歷十二月
間有粵國詳詢法國於中國有何意見以法國照復以如
欲對開海政與中國通商何必先先行知照該國有和此

名曰今未定前知會處行侵占有違津約者一人也以上
上法國所行一節不惟按一萬國公法實有不合且按
各國均為法債惟我中國辦事均係十分遵約一不為
國公法而計即前與各西國所立各條其中原有中
國未盡出於情願故為大許者諒各國大臣亦所素悉
中國則於明知各約內之有損於國無益於民者初未
嘗或有不符照辦不過期望各西國漸可以久以和
平本爵茲將中法所辦情形詳細照知各國意惟在
何與法國不致失利並各使各國盡知中國與各國能
來總以遵條約為重如中法和好之原素無不咸全目
應係法國極任其責所有各國因法事有受一切損傷
均應向法國索償惟中國自無與法相索各國素以
和睦公平為心是日必有六不難法中國亦願保全

通商口岸人德期我體去無優者為其
亦中國之利也希貴署大臣詳核見覆有
不致誤會此致貴署
欽差大臣
松茂

大清欽命總理各國事務王大臣

照會事所有中法齟齬一事本衙門已將各情節迭經
布告

各國在案嗣於六月二十九七月初一等日准

法國謝署大臣照會離京並請護照本衙門婉詞照
復並照

謝署大臣之意轉給護照

謝署大臣旋於七月初一日出京查此事中國無應

之理並無與

法國失和之意

法國以索償之故竟有與中國失和之跡此不特中國
所深為惋惜想亦

各國所同為惋惜者也茲將來往照會各件再行

刷印成本送

貴署大臣查閱即希轉告

貴國可也為此照會須至照會者
照會

大日
本署理欽差大臣吉田

光緒拾年柒月

初

伍

日



250483

8-3

昭和6年11月6日

十八百八十四年八月廿七日

清曆七月初七日上諭



越南乃我大清封貢之國二百餘年載在典冊中外咸知法人狡焉思逞肆志鯨吞先據南圻各省旋又進據河內等處戮其民人利其土地奪其賦稅越南向來閭閻苟安私與立約並未素聞挽曲無及越亦與有罪也是以姑予包涵不加詰問光緒八年冬間法使寶海在天津與李鴻章議約三條當飭總理各國事務衙門會商妥籌法人又撤使翻覆我存寬大彼益驕貪越之山西北甯等省為我軍駐紮之地清查越匪保護屬藩與法國絕不涉本年二月間法兵竟來撲犯防營當經降

旨宣示正擬派員進取力為鎮撫忽據該國總兵福祿諾先向中國議和

其時該國因埃及之事岌々可危中國明知其勢處迫逼本可峻詞拒

絕而仍示以大度許其行成特命李鴻章與議簡明條約五款互相畫

押諒山保勝等軍應照議於定約三月後調回迭經諭飭各該防軍扼

紮原處不准輕動開衅帶兵各官奉令慎謹乃該國不遵定約忽於

閏五月初一初二等日以巡邊為名在諒山地方直撲防營先行開

砲轟擊我軍始與接仗互有殺傷法人違背條約無端開衅傷我官兵

本應以干戈從事因念訂約通好二十餘年亦不必因此盡棄前盟

仍准總理各國事務衙門奏在京法使往返照會情喻理曉
至再至三月二十四日、復明降諭旨、照約撤兵、以示不信、
以保全和局者、實為仁至義盡、如果法、不稍知悔、我、自、斷、翻
然改圖、一、言、始、終、怕、過、即、詞、以、賴、橫、索、無、名、兵、費、意、要、我、輒
於六月十五日、佑援、台北、基隆、山砲台、經劉銘傳、迎、戰、獲、勝、立
即、擊、退、本、月初三日、何璟等、甫、接、法、領、事、照、會、開、戰、而、法、兵、已
自、馬、尾、先、期、攻、擊、傷、壞、兵、船、各、艘、雖、經、官、軍、焚、燬、法、
船、子、佳、八、擊、壞、雷、船、一、隻、並、陣、斃、法、國、兵、官、尚、未、大、加、懲、罰、該、國、專、

計不獲無常、尤欲其端、若再曲予、含容何以伸、公論而順人
心、用特揭其無理情節、布告天下、心曉然於法人有意廢約、鮮自
彼開各路、統兵大臣、及各該督撫、整軍經武、備禦有年、洋海各口
如有法國兵輪駛入、着即督率防軍、合力攻擊、悉數驅除、其陸
路各軍、有應行進兵之處、亦即着趕速前進、劉永福素抱忠懷、而
越南昧于知人、未加拔擢、該員本係中國之人、即可入為我用、著以
提督記名、簡放、並賞戴花翎、統率所部、出奇制勝、將法人所佔
越南各城、迅圖恢復、凡我將士、奮勇立功者、破格施恩、並特頒

內帑獎賞退縮貽誤者立即軍前正法朝廷於此事審慎權衡統
帝室千金

因動衆興師難免震驚百姓故不輕於舉發此次法人背約失信衆
怒難犯不得已而用兵各省團練衆志成城定能同仇敵愾并着各
省督撫督率戰守共建殊勲同膺懋賞此事係法人背盟肇釁至
此外通商各國與中國訂約已久毫無嫌隙斷不可因法人之事有傷
和好着沿海各督撫嚴飭地方官及各營統領將各國商民一律保護即
法國官商教民等願留內地安分守業者亦飭一律保護倘有干預軍
事等情一經察出即照公例懲治各該督撫即曉諭軍民人等知悉倘有藉

端滋擾情事，則是故違詔旨，妄生事端。我中國兵民，必不出此，或有糾
匪報復，即着嚴拿正法，毋稍寬宥。當體朝廷保全大局至意，將此通
諭知之。欽此。

名称	三條実美文書
標題	花房義實 亜細亜寮頭内話付公法博士 「マルチンス」内話

分類 番号	34
	16

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

機密力四十號

本年十月二日附機密力四十號の以て歐洲方面に形勢を把握するに要するに論他國政
界上利権考供と云ふべき報告書と徴察其の旨を知りて由り貴國の議院に
のキ國事之報耳觸る者方密議に至りて尙更聴取之機會を得難く新
聞紙に他國の形勢上見式之方核對員に迫るを得共所終注意
ハ彼之所考未タ可満足之を察報告書中出さるる但し我甲乙丙三機
ハ其甲乙丙除く外或ハ報告書中出さるる様モ不慮之其偶起等其乙ノ
ニ付他國使詳細之報告を照らし一読を成し其旨を考ふ一事ヲ補
フ者加へル上併考し其旨を教具

明治十七年十一月九日

特命全權に使在日新館人
外務部伯爵井上馨殿



亞細亞密頭内話付心港事士マルチン内話

一台灣諸口封鎖之新併社政府ヨリ其水師提督、孫令アリタル由
ハ使ヨリ閣下、通報有之右日紙之義當國、モ通報アリヤ若シアリタラ
ハ當國政府ハ何変意スヤ可合者十月廿一日以電信街訓布之者ニ
從ヒ即日當國外務省ハ命令ヲ發未タ當國ハ通報無之由ニ其意ヲ重
細亞密長之内話ニ露西亞ハトシキン之事台灣之事ハ清國諸港ニ
在ル中立國人保護ノ軍艦若干差出有之ハ一切關係不改良ニ素
リ利害ハ閣下ハ知ルカミ因ハ此ニ折亦速ニ和局ニ至ラシムラ望メハ如何トモハ
清俄共ニ對シ收マカル夫天津條約ニ於テハ賠償金ニ決シテ引キ渡ハ
安南ニ他ノ保護ヲ許シテ清兵ヲ引揚ル事之メタルニ於テ明クハ此ニ他諒
ハ不滿意ノ聲アリリカガソハ賠償金ヲ要求スルニ至リタルハ不得止行儀ニ十
ハ清國ハ此ハ何故ニ説キテ知ラズハ此モ之ヲ半途ニ止ルヲ得サルヘキ
シテ當時ノめキ利害ハ閣下ハ知ルカミ若ハ此ノ事佛力速ニ決メテ廿六分迄ニ為メハ

者ヲ省ニテ法ヲ速カニ止ム。勝ルヲ知ミテ得ル外ナシ也。台湾封ロ報知
政府未タ之ヲ接シ其終ニ接スル及ハスニ止ムニ至ルヲ知ルカラス且其
時欲テ下旨及之其意ナク西ノ電信申込テ其父曰其甚大
使ハ台湾封ロ事ヲ露西ニ政府ニ通知スルノ簡單ナ文新聞ニお
見イテ且ニ其細血案改ニ面会ニテ其果メ知ルヲ其父曰其甚大
リトテ其父曰故テ其意ヲ知ルニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大
知ルヲ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大
ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
望ム者ニテ其意ナク西ノ電信申込テ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大
同日廿八日申込テ其意ナク西ノ電信申込テ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大
の及ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大
外務省謝意ヲルナシニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大
ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大ニ其父曰其甚大

所定に照して補下改我

「マタニ此に戦時之行ヲ素ト不可ナシ之ヲ平時ニ行フ事其可ク
見ス今や此回未々宣戦ニ他回未々申立ノ令ヲ發セス院ニ宣
戦リ又申立ナレバ回年能戦者ニ回キ行フ故ヲ以テ他回
モ亦幸然申立ニ日中地役ニ之々々ハカキハノ既ナレバ但シ勝テ更ニ
利加ラズル事又「マタ」ニ「マタ」宣戦ナシテ其銀ニ見ナリ又「マタ」
海にカキル例アリ是等数者ナリナリ平時ニモ港立ノリト云フ
此法定ニ見ナリ決シテ之ヲ取スナカキ事著シキニ此事ナリ
明日之ヲ補リ今日海に港立事決断各政府以何ニ之ヲ見キ
ヤ事未々之ヲ知ラス露政府モ亦未々其通ニ知ラズ故ニ海之ヲ
見ル事ナリ未々知レテ之ヲ取スナカキ事著シキニ此事ナリ
此法定ニ見ナリ決シテ之ヲ取スナカキ事著シキニ此事ナリ
後數の如き通知アリルハ官報に指シテ其面會シテ前掲に符セザル

之補ヒナシ且之各因カ佛因ノ此集ヲ許シタル因由ナリ

我露西臣政討ヲおテ利害素ヨリ察スルナキヲ以テ敬テ他ニ先ケテ此州

ニテ欲スル特ニ仏國西ノ界ヲ露西ニ更カ主トシテ如ケリト云ハレシコトヲ思ハル

故他國ト同ノ様ニヤレタム也然リト云ハレタルノ大伴ニおテ改メハキ者ニ

非ラカレハ明ニ爲シテモカサレハ後事ナレハキ者此節ニ限リ此所ニ限リ

行フニ異議ナレト云テ止マリ他國ニ大略ニ此ノ意ヲ伺ナリト思ハル

今依リニ英露ニ紛争生スルアリト見ヨ事ニ宣稱ニ及ハスニテ兩國之

ハルナリ此後多ク紛争シ端由ナリ其年時ト同ニシテ便船ニ供給スル

ヲ得テ思ヒシテ我々易ク此洲ニテ得ハシ之ヲルテ常制例トセハ

海軍強弱ク較リ四ノ核暴強ナリ制スヘキナル者アリテ故ニ予ハ

之ヲ大伴ニ於テ決シテ許スヘカラス事ト爲シ露西臣政討ニ以

限リ此所限リナレシテ思ハレ也

餘談ニ此ノ故説アリ併録出曉

又曰此書漢之印方意見ト全クお及らん者ニ後實甚ク多キヲ知ル
予若シ外務省ニ在リタルニ因テ欲スルニ一書ヲ著スルニ若
水リ岐サント欲スルニ恨ラリハ寧ニ心法場士大學校教授ニ聘シ拜
セサルヲ

予等餘トシテ兩人諸語ニ大畧ヲ集録シ以テ供トスルヲ
也

明治七年十月廿六日 德堡里ニ於テ使館ニ於テ
其ノ時ニ於テ實情

名 称	三條実美文書
標 題	井上全權大使宛訓令案

分 類	34
番 号	17
号	

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

乙

井上太使電訓



足下ヨリ伊藤へノ電信
ヲ接收シ朝鮮ノ獨
立不獨立ニ付内閣ノ

會議ヲ開キ再應細

議ヲ盡セリ足下起

徑來ノ關係に依リ於ニ在テハ招致ヲ拒メサルヲ得ス故ニ

程ニ際シ附与ニ付ル訓

令ニ基キ支那使節

トノ談判ハ善後ノ

手段ヲ盡シ雙方

兵ヲ引拂フヲシテ

彼レ屬國ノ理由ヲ主

張之之ヲ肯セサルに
テハ我ハ其論者ヲ容
レスニテ雙方兵之駐
ムルノ結局ニ至ル外
ナシ此他ノ問題ニ至
テハ隊ヲ測リ知ル可
カラサルノ情アルヲ以テ
實地ニ就キ修補ノ
要否ハ之ヲ足下ニ
委任スベシ
三月三日 三條公使

名 称	三條実美文書
標 題	井上馨 清国交渉心得伺

分 類 番 号	34
	18

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

甲



在東京伊藤參議

朝鮮ノ獨立不獨立ノ兩途ニ関シ一定決着ヲ得サルモ我大使ノ地歩シテ非常ノ困難ニ陷レルモノトス其故ハ

先、今仮シテ清國ノ使臣ハ余カ帶ヒル如キ全權ヲ有シテ朝鮮ノ獨立國ニ非ルノ論題ヲ起スヘト思ハ。余ハ此ノ點ニ関シテ何等訓余ヲ帶ヒト揚言スルノ止ム得ル場合ニ陷ルヘシ而シテ我政府ニ於テハ当初清國政府ニ送リタル發端ノ公文書ニ曰清兩國間ノ和親ノ傷害スルニ足ルキ事變ハ成ルハ韓地ニ於テ之ヲ避クヘキ様清國ト措置スルハト云ヒタル發

制度取調局

議ヲノ貌然ニ付シテ去ラサル得ス此ノ道理散テ視難キニ非ス抑モ我ニ於テハ一定ノ政畧存スルニ非ハ余ニ於テハ何等措置置シ施スヘキ歟シ決スルニ由ナク竟ニ清韓兩國ニ對シテ余ハ使余ヲ果ス能ハシテ失敗シカスニ至ルコトヲナリ

又仮シテ余カ韓地ニ着到ノ日ニ當テ清國ノ氣焰甚ク盛ニシテ之カヲニ韓王韓廷共モ今日ノ事獨リ清國ノ全權ヲ仰クニ違アルモノト揚言スルヘト想ヘ。茲ニ於テ余ハ更ニ一步モ進ム能ハサルニ如何トナハ余ハ此ノ點ニ関シ何等訓余ヲ帶ヒサレハハ此時點ニ於テ余ハ韓廷ニ對スル使余ニ於テ失敗シカタルモノト云フヘシ

才三、朝鮮既ニ無政府ノ有様ニ陥リ時ニ余ハ談判ヲ
開クニ是レキ政府ヲ確立スルヲ欲シ朝鮮ヲ奉テ清國ノ
手中ニ投スルヲ欲スル時ニ於テヤ余ハ訓令ニ違フ
ルヲシテ進退自ラ決ムル能ハス何等高議ノ方便ヲ得スニシテ
ニ由テ傍觀スルニ過スルニ是レヲ余ハ成跡ニシテ失敗シカニ
ルモノナルヲ免レス。

以上ノ場合ニ於テ其孰モラ謂フニ訓令ノ完全ハ余ニシテ何
等措置ヲ施スニ由チカラシメ~~テ~~唯タ空ニ帰シテ孰モ
促スニ此等ノ場合孰レ欤必ス起ルヘシ余ハ豫メ此事ヲ以テ
廟堂ニ告知セリト欲スル此ノ事變ニ臨ニテ余ハ身ノ

制度取調局

举措ハ既ニ前ニ述ハスルヲ豫メ認可セラレリトシテ請フ
依テ速カニ電報ヲ以テ確答アレ余ハ既ニ論シタル今日ノ事
々其根柢ヲ探^ル則チ之ヲ結スルハ朝鮮獨立國タルヲ獨
立スルハカラムト兩頭アヘシト就テハ本日內閣ノ會議ヲ引續キ其
所決シテ速カニ報道アル

名 称	三條実美文書
標 題	局外中立規則案

分 類 番 号	34
	19

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

250483
6
昭和6年11月6日

局外中立規則案



布告

第何号

何年何月何日 付テ以テ仰出サレタル 第何号 局外中立ノ勅令ニ基ツキ

通り規則ヲ制定シ何年何月何日より施行ス後日
段ノ公布ヲ發スル迄ハ効力ヲ失ハサルモノトス

年月日

大政大臣
外務卿

規則

第一條 我臣民及ヒ凡テ我管内ニ在ル人民ハ局外
中立ノ勅令ニ違背シ而シテ戰國ノ陸海軍ニ任職
又ハ使用セララル、フヲ許諾スル_フ若クハ許
諾スルノ約定ヲナス_フ者_ハハ許諾スル_ル目
的ヲ以テ船舶ニ乗組ム_フヲ禁ス

ルヲ又ハ之ヲ取り代ユルヲ又ハ軍用ノ裝具ヲ増加シ
テ前頭都テノ船舶ノ兵力ヲ増シ若クハ他人ヲシテ
之ヲ増サシメ若クハ之ヲ増加スルヲニ關係スルヲ禁ス
第六條 我臣民及ヒ凡テ我管内ニ在ル人民ハ兩交戰國ノ
領地ニ向テ陸海軍ノ進征ヲ備具シ若クハ之ニ加ハリ
其他之ニ關係スルヲ禁ス

第七條 日本政府ハ我カ人民及ヒ其他凡テ我管内ニ在
ル人民カ兩交戰國人ト尋常并ニ正當ノ貿易ヲ為
スヲ妨ケズ併シナガラ日本政府ノ局外義務ヲ破
ル所ノ貿易ヲナスヲ禁ス但我人民及ヒ其他凡テ我
管内ニ在ル人民ガ一方ノ交戰國ノ為メニ當然捕拿セラ
ルヘキ商品ヲ他ノ一方ノ交戰國ニ運送シ又ハ運送セシム
ル者ハ躬ヲ危險ヲ冒スルモノナレハ我政府ニ於テ之

刑法百三十四條
ヲ見合スベシ
尤斯ノ如キ場
合ニ於テハ陪
審官入用ナ
ラン

レカ責任ヲ負擔セサルヘシ

第八條 前題ノ諸條ヲ犯ス者ハ判決ノ上二年ヨリ長カラサル禁錮五千圓ヨリ多カラサル罰金ニ處ス若シ其掛裁判所ニ於テ至當ト思料スル時ハ右罰金若クハ禁錮ヲ單科スルヲアルヘシ又第三條ヲ犯シタル場合ニ於テハ其船舶ハ公判ヲ終ル迄差留ムヘシ然レテ有罪ト決スルニ於テハ該犯罪ニ付テ船長若クハ船主ニ課スル所ノ罰金裁判費用等總テ拂濟シ迄差留メ若クハ裁判所ノ満足スル充分ノ抵當ヲ出ダス迄ハ差留ムヲアルヘシ又第四條第五條及ヒ第六條ヲ犯シタル場合ニ於テハ更ニ其犯罪ニ関スル所ノ船舶并ニ此ニ附屬スル諸品及ヒ軍用器械物品等總テ沒収スヘシ

第九條 總テ日本政府ノ行政官吏ハ其陸軍、海軍税関又ハ警

察署又ハ地方官ニ論ナク其上官ヨリ受クル所ノ指令ニ後ヒ
此規則第一條ノ禁令ヲ犯セル者ヲ捕拿拘留スルノ權アル
ヘシ且此規則第三條ノ禁令ニ違反セル船舶及ヒ此規則ノ
諸禁令ニ背キテ其船舶上ニ在ル所ノ諸人ヲ併セテ之ヲ拘留
スルノ權アルヘシ且此規則ノ第四條或ハ第六條ノ禁例違
犯ニ係ル所ノ一切ノ船舶ヲ捕拿拘留シ第六條ノ場合ニ於テハ
其船舶上ニ在ル所ノ諸人ヲ併セテ之ヲ捕拿拘留スルノ權アル
可シ但其犯罪ヲ成遂ケタルト未タ遂ケザルトヲ問ハス右一切
ノ捕拿拘留ヲ行フヲ得ベシ且前題行政官吏ハ其上官ノ訓
令ニ由リ法ニ合シテ權カヲ授ケラル、片ハ上ノ條々ニ載セタ
ル外一切ノ事ヲ行ヒ得可シ且右行政官吏ハ右等ノ捕拿拘
留及ヒ其他ノ事ヲ執行スル為メニ事情相應ノ勢力ヲ
用ユルヲ得可シ

第十條

現ニ日本政府ノ行政ヲ司レル各省ノ卿又ハ臨時ノ長官及ヒ諸府縣或ハ諸港ノ長官知事令ハ若シ此規則ノ禁令ニ對シテ罪ヲ犯シタル者或ハ現實ニ之ヲ犯ス者或ハ將ニ之ヲ犯サントスル者アリト信ス可キ相當ノ理由アリト認ムル片ハ之ヲ防止スル為メ其船舶、造船場、鑄造場、製造場、工作場及ヒ其他ノ場所ニ對シテ必要或ハ相當ト思料スル所ノ搜查令狀ヲ發シ搜查セシム可シ

第十一條

此規則ノ條款ニ據リ船舶或ハ器具或ハ貨物或ハ人ヲ捕拿若クハ拘留スルトキハ其捕拿拘留ヲ行ヒタル行政官吏ハ直ニ其旨ヲ其筋ヘ届出テ而シテ遅延ナク其事件ヲ相當ノ裁

判所へ引渡ス可シ其裁判所ハ直チニ其事件
ノ審判ニ取掛リ或ハ其場合ノ正當ナル便宜ニ
應ジテ一時ノ處分若クハ適宜ノ命令ヲ為ス
ベシ

第十二條 總テ行政官吏或ハ其他ノ官吏又ハ正當ニ
前顯行政官ヲ代理スル者又ハ此規則ヲ執行
スル所ノ人ヲ助クル者ニシテ真實其職務ヲ
尽ス為メ其職權ヲ踰ヘスシテ行フ所ノ一切ノ
所為ニ對シテハ決シテ訴訟スルヲ得ズ且右ノ
人々ハ相當ノ理由アリテ前顯ノ職務執行
ノ為メニ必要或ハ當然ト自信シテ行フ所ノ
所為ニ就キ刑法上又ハ民法上ノ責ヲ受クル
ヲ無ル可シ

第十三條 兩交戰國人ハ其ノ捕獲シタル所ノ船舶物品ヲ

我管轄ノ貿易港諸港海濱海上若クハ領内ニ送入
スルヲ禁ス但シ右船舶航海ニ堪ユル修復ノ為メ大風
其他總テ海上ノ危難ヲ避ケンカ為メ若クハ其乗組人
ノ生活ニ必要ノ食物等ヲ求ムル為メ來入スルハ此ノ限
ニアラス尤モ其目的ヲ達シタル上ハ直チニ前頭ノ貿易
港諸港海濱海上若クハ領内ヨリ持去ルベシ都テ我管
内ノ貿易港諸港海濱海上若クハ領内ニ於テ前頭ノ
船舶或ハ物品ヲ賣却シ又ハ賣却セントスルヲ禁ス
假令之レヲ賣却シ又ハ賣却セントスルモ凡テ無効タ
ルベシ

若シ日本帝國ノ局外中立ヲ破リ其管轄内ニ於テ戰時
補物トシテ捕獲シタル一切ノ船舶物品或ハ商品若クハ

此規則、第四條、第五條或ハ第六條ノ禁令ニ觸ル所ノ
諸船舶ヲ捕獲シタル一切ノ船舶物品或ハ商品ノ日本管内
ニ於テ發見セラルカ又ハ其捕獲者或ハ其代理人或ハ其不
法ノ捕物タルヲ知リナカラシメテ自己ノ所有ト爲シテ其捕物
ヲ日本管内ニ齎來セル片ハ右捕物ノ原所有者或ハ其代理
人若クハ日本政府或ハ該所有者ノ本國政府ヨリ命スヘ
キ人ハ該事件ニ就キ法權執行ヲ適當ニ有スル所ノ裁判
所ニ出訴シ其捕物ノ差押留置ヲ出願スルヲ當然タル可シ
而シテ此ノ法權執行ヲ適當ニ有スル所ノ裁判所ニ於テハ
其事實^存正當^{ヲ得}證明タル上ハ其捕物ヲ原所有者ニ復與
ス可キ旨ヲ命ス可シ

第十四條 ^{都テ}此ノ規則ニ揭示スル所ノモノハ交戦國ト否ト
ニ拘ハラズ都テ外國兵船ヲ沒收スルヲ得ルノ意ニ非ス又

右等兵船ニ関シ何トシ裁判所ニテモ凡テ此ノ規リヲ施行
スル為メ其人等ハ所ノ裁判權ヲ更ニ持テセシムルノ意
ニ非ザルモノト知テ之

名 称	三條実美文書
標 題	局外中立勅令案

分 類	34
番 号	20
号	

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

250483
5
昭和26年7月1日

局外中立勅令案



勅令

朕爰ニ局外中立ノ勅令ヲ發ス朕ハ諸外國ト平和ノ幸福ヲ有
セリ然ルニ今ヤ支那皇帝ハ佛蘭西共和國ニ對シ開戰ヲ宣告シ
タリ然リト雖モ朕ハ右兩交戰國ニ對シ同盟親和ノ交誼ヲ有セ
ニ付テハ朕カ臣民ヲシテ平和ノ幸福ヲ保持セシメンカ為メニ右兩
交戰國ノ戰爭ニハ直接間接ヲ問ハス断然相關繫セス嚴正不偏ノ
局外中立ヲ取ルニ決定セリ故ニ朕カ臣民タル者ハ此ノ意ヲ体シテ
各自警戒シ右ノ戰爭ニ直接間接ヲ問ハス干與スルヲ禁ス且ツ局外
中立ニ関スル法律規則ハ其既ニ制定スル者ト將來ニ制定スヘキ
モノトニ論ナク凡テ之ヲ遵奉シ又本件ニ関スル萬國公法ノ規例ヲ
恪守スヘシ而シテ朕カ管内ニ在ル人民及朕カ臣民タル者ハ國ノ
内外ニ在ルヲ問ハス^{併ニ朕カ管内ニ在ル人民ハ}前頭ノ法律規則萬國公法及ヒ此ノ勅令ニ
違背スル所業ノナスヘカラス又朕カ陸海軍稅關警察府縣諸

港ニ職ヲ奉スル者及ヒ其他ノ臣僚ハ凡テ前頭ノ法律規則萬國
公法規例及ヒ此ノ勅令ヲ遵奉シ且ツ其職權ニ應シ右ノ法律規則
萬國公法規例及ヒ此ノ勅令ヲ實施スヘシ又朕カ臣民及ヒ朕カ管内
ニ在ル人民ハ前頭ノ兩交戰國并ニ其臣民及ヒ領地ニ對シ局外中
立ノ義務ヲ守リ且ツ前頭ノ兩交戰國ニ於テ萬國公法及ヒ慣例ニ
據リ兩交戰國ノ權利ヲ執行スルヲ妨ケザルヘシ又朕カ臣民タル者
若クハ朕カ管内ニ在ル人民若シ此ノ勅令ヲ遵奉セス其局外ノ
義務ニ違背シ若クハ萬國公法ノ規例ヲ破リ殊ニ前頭兩交戰國
ノ用ニ供セン為メ萬國公法或ハ近世ノ慣例上ヨリ戰時禁制品ト認
定セラルヘキ士官兵卒書信武器彈藥軍用ノ機物及ヒ諸器物ヲ積
ミ前頭兩交戰國ニ於テ相當且有効ニ實行シ或ハ同交戰國ノ為メ
ニ同様設ケアル所ノ封港ヲ破リ或ハ破ラントスル者ハ右船舶器
具共其捕獲スル所トナルハ當然ニシテ尚ホ又萬國公法ノ規例ニ據テ

要請 愛人ギミナリ且ツ朕ガ臣民タル者若クハ朕ガ管内ニ在
ル人民等違抗ノ弊業スルニ於テハ自己一人ノ不正ニレテ躬ヲ危険
ヲ冒スルモノナラズ以テ捕獲懲罰ヲ受クル等ノ場合ニ於テモ決レテ
朕ハ之ヲ保護セシメテ之ヲ救フ如キ朕ノ震怒ニ觸ル者トス凡ソ何等
ノ特權ニ拘ハラス朕ノ旨ニ背ル貿易港其他ノ諸港及ヒ海上ニ於テ右
兩方戦國ノ一方ニ付與スルモノハ又同レク之ヲ他ノ一方ニ付與スヘキ
事ヲ爰ニ宣告ス

御名

玉璽

右奉勅

太政大臣

外務卿

名 称	三 條 実 美 文 書
標 題	局外中立に付太政大臣諭達案

分 類 番 号	34
	21

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

250483
4
昭和24年/月/日

局外中立ニ付太政大臣ヨリ諭達案



清佛兩國交戰中局外中立ヲ保持スル為メ陸軍海軍及ヒ府
縣稅關其他行政官吏ヘ布達ノ草案

本年月日第()号ヲ以テ局外中立ノ勅令宣布相成候ニ付
心得ノ為メ別紙ノ通相達候事

年 月 日

太政大臣

名

外務卿

名

論達

今般清佛兩國交戰中我

皇帝陛下ハ嚴正不偏ノ局外中立ノ義務ヲ被為守且日本帝國
管内ノ貿易港諸港及ヒ海濱^管海上ヲ以テ西交戰國戰爭ヲ
援クル為メノ根據ト為スヲ禁止^{セリ}御決定被為在候付
聖旨ヲ奉行セシカ為メ右西交戰國現實戰鬪ノ間西交戰國ノ
諸軍艦ハ日本帝國ノ管轄ニ属スル一切ノ貿易港諸港其他ノ
海上ヲ以テ戰場若クハ戰用ノ根據ト為シ又ハ軍需ヲ給辦スル
ノ地ト為スヲ被禁候

然レモ右西交戰國ノ船舶ハ日本帝國管内ノ貿易港諸港及ヒ
海上ニ於テ尋常ノ待遇ヲ受ケ繫泊スルヲ得而シテ軍備ニ関
セサル必要ノ修理ヲ加ヘ且戰爭ヲ用フ可ラサル所ノ必要ノ需用
品及ヒ食料ヲ供給スルヲ得ヘシ但右ノ諸船舶ハ決シテ今般

宣布ノ

聖旨及ヒ前頭禁令ノ主意ニ違反シ斯ク許與スル所ノ特典ヲ
濫用スルヲ莫キヲ要ス右需用品ニ関シ前頭禁制ノ趣意ハ而
交戦國ノ兵船我管轄ノ諸港若クハ管海ニ在ルニ方リテハ其衆
組人ノ生活ニ必要ノ食物等及ヒ最近ノ自國管轄ノ港灣ニ達ス
ル迄ノ間ニ充分ナル丈ケノ石炭ヲ除クノ外ハ一切ノ品物ヲ供給
スルヲ許ルサザルモノナリ而シテ我管海ニ在ル交戦國兵船ニ一タヒ
石炭ヲ供給シタルニ於テハ其後三ヶ月ヲ經過セサレハ決シテ同兵
船ハ再ヒ我管轄ノ諸港若クハ管海ニ在テ之レカ供給ヲ得ザル
ヘシ但シ特別ノ許可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限リニアラス

又日本帝國ハ管轄海上ノ局外中立ヲ維持保護スル為メ凡テ兩
交戦國ノ軍艦ニシテ日本帝國管轄ノ貿易港諸港其他ノ
管海ニ入来リ或ハ停泊スルモノハ一方ノ交戦國ノ船舶(軍艦ト商

船トニ拘ハラス）右管轄所若クハ其近傍ヨリ出發シタル後少
クトモ二十四時間ヲ經ルニ非サルハ其港口或ハ海上ヲ出發ス
ルヲ許サル可シ然レモ交戦國ノ一方ノ船舶前頭ノ貿易港
諸港若クハ管海ヲ出發スルニ當リ或ハ一艘出發シ二十四時間
内ニ歸リテ再出發スルヲ或ハ數艘相繼ギ出發スルトモ他ノ
一方ノ交戦國軍艦ノ出發ハ右第一次出發ノ時刻ヨリ起算シ
テ二十四時間以上ノ抑留ヲ為スコラス若シ兩交戦國ノ船舶
同所ニ數艘有ル時ハ其出發ノ順序ヲ定メ交番ニ出發セシメ
タル此規則ノ目的ニ違ハサル為メ後ヲニ留置ヲナカレ但シ此ノ
如キ場合ニ於テハ弱小ナル船舶ヲシテ強大ナルモノニ先チ出
發セシムベシ

一ノ交戦國ヨリ捕獲シタル總テノ戰時捕獲物ハ我管海ヘ持
來ルヲ許サス但シ捕獲ノ船舶修繕ノ為メ或ハ暴風雨ノ節

或ハ乗組人食料需用ノ節來港スルハ此ノ限リニアラス而シテ
其ノ來港ノ時ハ不要ニ滞在スルヲ許サズ其ノ目的ヲ達シタル
後ハ速カニ出發セシムベシ

右ハ各々

聖旨ヲ奉行スル爲メ此諭達ノ旨ニ據リ我帝國管内ノ貿易
港諸港及海上ノ局外中立ヲ維持保護スルニ適切ナル處分ヲ
爲ス其管下ノ諸官吏ニ指令シテ執行爲致且又總テ前述ニ
關スル事件ニ付テハ各々局外中立ノ
指令及局外中立規則及局外中立ニ關スル萬國公法ニ此
諭達ノ格遵ニテ行爲ヲ該ルテ如ク此諭達候事

名 称	三條実美文書
標 題	局外中立に付外務卿より地方官へ訓令案

分 類 番 号	J4
	22

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

250483
2
昭和8年7月 日

局外中立府外務卿ヨリ地方官へ訓令案



我皇帝陛下局外中立ノ勅令ヲ施行方ニ付

外務卿ヨリ府縣ヘ訓令案

今般清佛兩國開戦ニ付我皇帝陛下ヨリ局外中立ノ勅令
アラセラレ而シテ我政府ハ其ノ中立規則ヲ頒布セリ抑我
國ノ地形ニ關係アル理由ニ據リ日本政府暨ヒ臣民トモ
嚴正不偏ノ局外中立ヲ遵守スルヲ緊要ナリ而シテ此
局外中立ヲ保守センカ為メ左ノ条目ヲ訓示ス各府縣
官其旨意ヲ熟知セサル可ラス然ルニ此ノ訓令ハ定
限アリテ且大概ヲ示スモノニ由リ各府縣官ハ局外中立
國及ヒ交戦國ノ諸權理義務ニ通曉スヘキハ必要ニシ
テ職務ノ一部トス其疑ハレキ事件アラハ更ニ伺出ツ可シ
今回ノ如キ近隣ノ國ニ交戦アルニ際シテハ遠國ニテ交戦
アル節必要トセラルルヨリ一層注意ヲ密ニシ一層交

戦國ノ權利ヲ尊敬シ一層局外規則ノ執行ヲ嚴ニシ且
一般ニ交戦国ヨリノ要求ヲ防ガンガ為メ特ニ注意ヲ嚴ニ
セザル可カラズ

我臣民ニ在テハ一人タリモ戦士ト為リ此戦争ニ加ハル者莫
カル可シ雖然苟モ斯ノ如キ者アルカ又ハ我管轄内ニ於
テ他スヲ募リ以テ交戦国ノ陸海軍ニ加入セシメンヲ
企ル者アル時ハ則テ我官吏ハ之ヲ防止スルノ方法ヲ直
ニ取行フヲ本務トス又我管内ニ在ル外国人ニシテ右
戦争ニ加ハリ又ハ他人ヲ募集シ又ハ之ヲ傭入レ以テ交
戦国ノ陸海軍ニ加入セシメンヲ企ル者アラハ我官吏ハ
直ニ之ヲ外務卿ニ報告シ且ツ其外国人ヲ管轄スル領
事官ニ報告シ以テ斯ク我帝国ノ局外中立ヲ犯ス者ヲ防
遏セシムラ最ムヘシ

凡ソ局外中立國ノ領内ニ在ル中立國人又ハ交戦國人ニシテ故意ニ交戦國ノ使用ニ供セシカ為メニ躬カラ船舶ヲ機装ニ着ラハ之ニ兵器ヲ備ヘ又ハ其他此等ノ事件ニ關係スルハ萬國公法ノ許サル所ナリ是ヲ以テ各地方官吏ハ其何人ヲ問フ苟モ我管轄内ノ諸港、海岸或ハ管海ヲ斯ク不法ノ目途ニ使用スル者アルヤヲ視察スルハ其當務トス

政府ノ趣意ハ純然タル商業ヲ禁止スルニ非ス又日本人民ノ兩交戦國人ニ向テ其既ニ軍備機装シタル船舶ヲ除クノ外ハ都テ一般ノ商品船舶又ハ凡テノ兵器等ヲ賣與スルノ權利ヲ否ムノ意ニ非スト蓋シ若シ我帝國管轄外ニ於テ都テ戰時禁制ノ物貨ヲ運搬スルニ於テハ其物貨ハ或ハ交戦國ノ拿捕スル所ト為リ沒收ノ判決ヲ受クルニ至ルベシ其時ニ及ヒ我政府ハ敢テ此ニ干渉シテ其沒收ヲ防止セサルナリ但日本人民及ヒ其他ノ者斯ク

商賣權ヲ有スト雖モ我

皇帝陛下ノ管轄海内ニ在ル交戦国ノ軍艦ニ兵器彈藥其他
軍用ニ供スベキ要具ニシテ該軍艦ノ勢力ヲ増加セシムヘキ
ノヲ賣與スルハ許ス所ニ非サルヲ善クシ會人ベシ凡テ船用ニ供
スル物品ハ固ヨリ必ス我税関ヲ經由スルカ故ニ苟モ法
戦国軍艦ノ勢力ヲ増加スル者アレハ税関官吏ニ於テ之ヲ
防遏スルヲ得ヘク且ツ其船舶ニ供給スル物料及ヒ石炭ノ
量ヲ制限スルヲ得ヘキナリ

局外中立ノ規則第六條ニ就テハ別ニ見解ヲ要セズ據決シテ
我帝國ノ管轄内ヨリ交戦國ニ對シ進征ノ軍ヲ發遣スル
ヲ許サス又交戦國ハ我帝國管内ニ於テ戰ニノ行ハズ顯ハレ
ハ何人タリモ交戦國ノ為メニ戰ノ行為アルヲ許サハ者ナリ
我皇帝陛下ノ裁定アリシ嚴正不偏ノ局外中立ヲ保持執行ス

ニ交戦國ノ一方ニ付與スル所ノ特權ハ亦同シク之ヲ他ノ交戦國ニ付與シ且ツ局外中立ノ義務ヲ破壞セラレザルガ為メ適當ノ注意ヲ為スヲ必要トス

我義務上、苟ク免カレシカ為メ要スル所ノ注意ハ固トヨリ交戦國カ我局外中立ヲ犯サントスル舉動ノ性質且ツ其舉動ニ付我政府ノ得タル所ノ証跡如何ニ由テ大ニ斟酌セサル可ラス若シ一方ノ交戦國官吏ヨリ我ニ申告シ他ノ一方ノ交戦國ヲシテ勅令ノ旨意ヲ犯スヲ防止センカ為メ我國文武諸官ノ力ヲ頼マントスルヲアルモ他ノ交戦國ハ決シテ此ニ苦情ヲ申ル能ハサルナリ然ルニ是ノ如キ場合ニ於テ其利益ノ關係ヲ有スル官吏ノ申告ノニ據テ奉行スルハ至當ナラザルニ由リ地方官タルモノハ常ニ局外中立ヲ犯サントスル舉動ニ注意シ適當ナル嫌疑ノ廣アルニ於テハ直チニ其處分ヲ為スヲ怠ル可カラス但シ或ル場合ニ申リ右

嫌疑ノ虞ハ法律上ノ証明ヲ為ス能ハサルヲモ有ルベシ此目的ヲ達セシカ為メ要スル所ノ處今ハ即チ其人ヲ逮捕シ其船舶貨物、軍器彈藥等ヲ拘拿スルニ在リ然レモ斯ク其人ヲ逮捕シ其財産ヲ拘拿シタル上若シ仍ホ局外中立規則ニ掲ケタル處罰ヲ加ヘント欲スル場合ニ於テハ必ス法律上ノ証明ヲ要スベシ但嫌疑ニ付テノ處今ハ只其人ヲ逮捕シ其財産ヲ拘拿スルニ止ルノミ

蓋シ我締盟諸國ハ其臣民ガ我日本帝國ノ法律ヲ犯ス者アルモ日本帝國裁判所ノ令狀ヲ以テ之ヲ逮捕シ又ハ犯罪人ノ財産ヲ拘拿スルノ權ヲ日本政府ニ付與セサルモノトセリ尤我政府ニ於テハ條約ノ解釈ニ付其ノ所見ヲ異ニスト雖モ我政府ハ其本今以外ノ法權ヲ僭取スルノ嫌ヒナカラシラ欲シ凡ソ我帝國ト締

盟ニサル各國ノ人民ガ我帝國ノ局外中立ヲ犯ス等ノ企
圖アルニ於テハ即時之ヲ其本籍ナル外國官吏ニ報
知シテ至當ノ處置ヲ其又身若クハ其財産ニ對シテ施
サシムルアルニ

然レ其時ニ臨ミ各地方官ハ外國官吏ニ對シテ勅令
及規則ヲ以テ處分スルノ原則ト爲サシムルヲ主張
シ若シ之ヲ施行ヒサルハ或ハ外國官吏ニ對シテ勅令及
規則ニ據リ處分スルヲ拒ミ又ハ怠ルニ於テハ直ニ其
旨ヲ外務卿ニ具狀スルヲ地方官ノ本務トスルハ政
府ニテ至當ノ處置ヲ爲スヘ

日本帝國ノ臣民ニ對シテ兩交戰國ノ使用若クハ使役ノ
爲メ戰時禁制品ト知ラセタル士官、兵卒、書信、武器、彈藥
軍用具又ハ其餘ノ物品ヲ大洋ニ於テ運搬スル者又ハ正

當ニ定設シノ有効ノ封港ヲ破棄スル者ハ其船舶
或諸品等捕拿被ルハ危險ヲ免ルベシ但其ノ捕拿
被ルノ被ルハ現行犯ニシテ即チ其航海ノ目的トスル地ニ到達
スル迄ノ間ニ限ルモス

抑正十八百五十六年ノ巴里議會ノ宣言ニ據ルニ

第一巡洋艦ヲ以テ敵船ヲ捕畧スル事ハ尙後永ク廢棄サ

レカリ

第二局外中立國ノ國旗ハ戰時禁制品ヲ除ク莫ク解テ敵
國ノ諸物貨ヲ保庇ス

第三局外中立國人ノ諸物貨ハ戰時禁制品ヲ除ク外敵
國ノ旗下一在者ハ之ヲ奪掠ス可

第四港市ノ封鎖ヲ遵守スル者ハ其必妥實力有効ナ
ラントラ要ス即チ其ノ海岸ヲ進入スル者ヲ禦ス

ニ足ルヘキ兵力ヲ以テ之ヲ保守スル一是ナリ

此ノ宣告ハ現ニ之ヲ承諾シ或ハ将来之ヲ承諾ス可キ諸國ヲ除クノ外ハ之ヲ遵守シ又ハ遵守スベキノ義務ニシト云フ明文アリト雖モ蓋シ今回ノ交戦兩國亦タ應サニ巴理宣告ヲ遵據スルヲ公告スヘシト信シコソ冀望ス依テ我政府ハ今回ノ役ニ於テ交戦國志意果シテ此宣告ニ遵據スルニ在ルヤ否ヤ速ニ審定シ其ノ事情ニ由リテハ更ニ追加ノ訓令ヲ發スル一アルヘシ故ニ右訓令未タ發セサル迄ノ間我帝國ノ臣民ハ其物貨ヲ交戦國ノ旗下ニ委托スルハ得策ニアラス

所謂戦時禁制ノ物貨ト稱スルモノハ如左

第一 武器、彈藥、兵船其他都テ直接ニ軍用ニ供ス

ベキ諸物品即チ小銃、大砲、包彈、火藥、水雷火器、銃彈、砲彈、爆彈、等及ヒ專ラ武器彈藥ノ製造ニ使用スベキ物はナリ

第二 都テ武器、機械、彈藥并ニ兵艦ノ製造ノ為メニ使用ヒント欲スル各物料及商品即チ諸金屬、船用蒸氣機、硝石、硫黃、布帆、帆桅、材木、鐵錨、錨鎖ノ類是ナリ

第三 馬ハ之ヲ交戰國ノ軍用ニ充テントスル寸、食物ハ之ヲ運送シテ鎖港圍城ニ致ス寸、又食物、石炭、物品及ヒ供給物等直チニ交戰國ノ陸軍海軍ノ用ニ供セントスル寸ハ則チ禁制品ト成ルナリ

此外都テノ戰時禁制品又ハ或ル事情ニ因テ禁制品ト為ルヘキモノヲ今マ茲ニ逐一枚擧スルヲ得ス然レ

氏若シ日本帝國ノ臣民カ其貨物没収ノ爲メニ損害ヲ蒙
ムルコトアルモ是レ躬カラ好テ禁制品ノ商業ニ從事スル
ノ致ス所ニシテ決シテ其禁制品タルヲ知ラサルモノト見
做サス

日本帝國ノ臣民ハ兩交戰國ノ路港ニ於テ其權利ニ有
効ノ封鎖ヲ受ケサル間ハ未ダ開港ニ至ル權利ニ有テ而
ハ正當ニ封鎖セラレタル後其港ノ近傍ニ到着スル諸船
舶ハ没収セララルヲ無ル可シ但右船舶ハ彼ノ封鎖ニ就テ
其時未ダ現實ノ報知ヲ受ケサルカ或ハ未ダ推測ノ報
知ヲ有セサル寸ニノミ限ルヘシ然レモ一旦封鎖ノ警
告ヲ受ケタル後ハ其無報知ナルノ故ヲ以テ強テ此圍
線ヲ通行セントスルハ恕スヘキニ非ズ所謂推測ノ報
知トハ凡ソ封鎖ニタル港津ニ入リテトスル船舶ヲ

ラシニ綴令其封鎖ニ就テハ未タ現實ノ報知ヲ受ケ
サルニ其四邊ノ情勢ヨリシテ其鎖港ニ有ルヲ知レ
ル者ト推測セラルベキ場合ヲ云フヤリ例ヘハ交戦國
ノ一方設シ他交戦國ノ某港ヲ封鎖シ其事ヲ世ニ宣告
シタル後チ相當ノ時日ヲ經過スルニ於テハ則チ日本
帝國ノ臣民ニ於テ該港封鎖ノ存立ヲ知了セサルモノ
ト推測セラル可シ

又封鎖シタル港ノ入り口ヲ徘徊スル船舶ハ其拘會ヲ
免カレサル可ク而シ其意若シ此圍線ヲ衝斷セト
欲スルニ在ルノ事實判然タルニ於テハ其船舶沒収
セラルヘシ

日本船舶ニシテ交戦國ノ某港ニ滯在中若シ該港ノ封
鎖ヲ受ルニ會セハ其ノ時迄ニ積載シタル諸荷物ヲ

以テ右港ヲ出帆シ去ルノ權利アル可シ然レ凡此ノ場合ニ會スル船舶右港ノ封鎖後ニ積載シタル荷物ヲ遷ヒ去ラントスルニ於テハ其拘拿沒收ヲ免レ難カル可シ

日本政府ハ今回ノ戦争中大ニ各地方官ノ注意ト勉励トニ賴ルニ非レハ我責任ヲ全フスルヲ得ザルベシ

蓋シ交戰國カ我帝國ノ各港・灣・濱岸・島嶼及ヒ管海ヲ以テ戰鬪用意ノ根據ト做シ交戰國ノ利用ニ供セント謀ルヲアルハ自然ノ勢ナリ故ニ此等ノ行為ヲ防止シ我局外中立ノ大義ヲ維持スルハ我帝國臣民ノ目的ト為ス可キ所ナリ是ノ目的ヲ達セント欲セハ嚴正ニ局外中立勅令及規則及ヒ本帝訓令ニ掲クル所ノ主旨ヲ奉シ能ク之ヲ執行スルニ在ルノ

而交戰國ノ軍艦ヲ日本管海ニ於テ修繕ヲ加ユルヲ許ス

ハ軍ニ本艦ヲシテ航海ニ堪ヘシムルカ為メニ必要ナル令ニ
以テ限リト為ス決シテ此修繕ヲ其武器軍装ニ及ホス
ヲ許サス又其軍艦ニ供給スル物料ハ其ノ自國管轄ノ最近
港ニ到達スルニ足ルヲ度トス決シテ此量ヲ超過ス可ニス
局外中立規則及ヒ本紙訓令中ニ所謂「其ノ自國ノ最近港
トハ凡ソ我港濱ニ於テ石炭或ハ食料ヲ給與スル交戰國ノ軍
艦ガ右港濱ヲ發シ通常ノ航路ニ由リ進行スルニ於テ最モ
近接ナル其本國ノ港津ヲ云フナリ

彼ノ交戰國軍艦ニ許ルニアル所ノ定量ヲ超過セザル石炭
或ハ食料ヲ得サシメンガ為メ且ツ諭達内ニ定メタル期限
内ニ於テ我カ諸方ノ港濱ニ轉移シ再三其ノ需用品ヲ得ル
ヲ無ラシメンガ為メ地方官ハ其管轄内ニ交戰國軍艦ノ到着ス
ル毎ニ直チニ電信ヲ以テ其艦名艦長ノ姓名又ハ事實ヲ

外務卿ニ申報スルヲ必要トス而シテ外務卿許可ノ指令
ヲ得タル後該軍艦ニ石炭及ヒ食料ノ積入ヲ聽ルスベシ又
諸開港場ニ在ル日本陸海軍司令官ハ局外中立規則ノ條
款ニ據リ交戰國ノ船舶及ヒ軍艦ノ出帆順序ヲ整理シ且ツ
規則中凡テ交戰國軍艦ニ關スル諸條款ハ果シテ其遵奉
スル所タルヤ否ヤヲ監視スベキモノトス

又諭達ノ内ニ特別ノ許可トアルハ交戰國ノ兵船ニシテ一タニ
石炭ノ供給ヲ得タルモノ暴風雨ノ爲メ其ノ供給ヲ得タル日
ヨリ未タ三ヶ月ヲ經過セサル前日本ノ諸港管海ニ吹き入レ
ラレ再ヒ其ノ自國管轄ノ最近港ニ達スル迄ノ石炭ノ供給
要スルニ方リテハ地方官ハ直チニ其旨ヲ外務卿ニ報告シ若シ
事實至當ト認めルニ於テハ再ヒ該兵船ハ石炭ヲ供給ス
ヘキ特別ノ許可ヲ與スルヲアルヲ云ナリ

日本帝國臣民の所有スル船舶若し交戰國軍艦ノ警衛ヲ
以テ航行スルカ或ハ簿籍ヲ破棄セント企テ若クハ詐偽ノ簿籍
ヲ携帶シ又ハ交戰國軍艦ヨリ其船中ニ來リ搜查スルヲ拒
ミ或ハ之ヲ逃避セシムル企ル中ハ則チ其船舶ヲ拘拿ヲ免ザル
可ク或ハ沒收ヲ蒙ルルヲアルベシ此旨宜シク預シ我帝國臣
民ニ為心得告諭スベキ者トス

大海ニ於テ局外中立國ノ商船ニ來リ戰時禁制品ノ有無ヲ
搜查スルハ交戰國ノ權利タル固ヨリ萬國公法ノ認可スル所
ナリ而シテ其來リ搜查スルヲ避ケンヲ試ミル所ノ船ハ自カ
ラ嫌疑ヲ免ルヲ得ス故ニ我日本ノ諸船舶ハ我皇帝陛下ノ旨
轄外ニ航海スルニ當リ穩便ニ右交戰國ノ權利ヲ承認スベシ
我政府ハ能ク局外義務ヲ盡シ過テ無カラシムルガ為メ横濱
神戸及ヒ長崎ノ三港ニ於テ陸海軍ノ官吏及ヒ縣令税関長

警部長ヨリ成立ツ所ノ事務局ヲ設ケ以テ此ノ局外中立ニ
関スル事務ヲ處辨セシムルニ決セリ且ツ又右各局ニハ其ノ
補員トシテ外國人二名ツ、ヲ置キ其一人ニハ該局職務施行上
ニ付兵船商船ニ關係スルヲニ付キ其ノ意見ヲ述ヘシメ且ツ同
事件ニ付施行セシメ他ノ一人ニハ凡テ法律上ノ事件ニ付同様ノ
職務ヲ盡サシムベシ故ニ各局ニ於テハ右外國人ノ意見ヲ聽カ
ズシテ果斷ノ處置ヲ為スヲナキヲ要ス都テ緊要ノ事件及ヒ
該局員右補員ノ外國人ト意見ヲ異ニスル時及殊更ニ我政
府ノ施行スル局外中立義務ニ係リ諸外國人ノ利益并ニ責務
ニ関スル事ハ該局ニ於テ總テ外務卿ヘ伺出許可ヲ得テ之ヲ
處置スベシ然ラサレハ我政府ノ許可セサル處置アリテ我政府
ニ其責ヲ負擔セシムルヲアルモ料リ難シ

凡テ交戰國軍艦及ヒ軍艦同様ニ取り扱フベキ船舶ニシテ食

斗及石炭ヲ需要スルモノハ税関長ニ願出ツベキニヨリ税関長
交戦國軍艦等ノ司令官ヨリ右請求ヲ受ケ取りタルハ遅
延ナク（休暇昼夜ヲ論セズ）事務局ノ會議ヲ関キ本帝訓令ノ主
意ニ依リ處分スベシ

局外中立ノ勅令ニ属スル所ノ規則ニ於テハ必ス避ク可カラザル
場合ヲ除ク外ハ戦時ノ捕物ヲ我管轄ノ諸港ニ送入スルヲ禁ス
故ニ我諸官吏ハ此ノ箇條ヲ破ラル・事ヲ防止スル為メニ深ク留心注
意ス可シ而シテ若シ之ヲ犯シタル者アル場合ニ於テハ直ニ總テ
其事ヲ取糾シ之ヲ外務卿ニ報告スヘシ

若シ又兩交戦國ノ軍艦我管轄ノ海上即チ其貿易港諸港灣海濱
又ハ我國ノ本陸若クハ諸島ノ海岸ヨリ海上凡三海里ノ距離以内ニ
於テ捕物トシテ捕獲シ以テ我國ノ局外中立ヲ破ルモノアラハ我諸官
吏ニ於テ務メテ其ノ事實ヲ詳細ニ取糾シ而シテ直ニ其ノ成果ヲ外務卿ニ報告ス

清佛戰爭付局外中立勅訓

及規則

名 称	三條実美文書
標 題	甲申事変関係電報字並書類

分 類	34
番 号	23
号	

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

250484

1~9

昭和6年1月1日

朝乾

年十七

國元
電板
取

八五

昭和六年一月一日

昭和六年一月一日

秘

朝鮮事件関係書類目録

竹添公使機密信

特別第一号

附録一枚

第二号

第三号 英文

外務省所蔵

第四号

小林欽事機密信

第五号

第六号

清國公使生復

第一号

光緒十四年十月二十七日附来翰

第二号

明治十七年十月附来田太輔信翰

第三号

光緒十四年十月附来翰



第四号 前日来翰

第五号 昨日下午十吉附吉田大輔来翰

第六号 光緒十四年正月来翰

援府公使来電

第七号 昨日下午十吉附来電

第八号 昨日下午十吉附来電

第九号 昨日下午十吉附来電

保領事来電

第十号 昨日下午十吉附来電

第十一号 昨日下午十吉附来電

安藤領事来電

第十二号 昨日下午十吉附来電

第十三号 昨日下午十吉附来電

秘

特別機密第一号

本月四日夜當政府邦使局前業會付キ該局總辦
 洪英植ヨリ本使及島村書記官并各國使節及關派
 等ノ於鮮官負映餐ヲ供之為本使ハサレ風邪ノ氣味
 テお好吟村西罷越為安食事中九時比至リ邦使局
 背後出火有之關派即立庭前於テ刺客ノ為メ後口ヨリ
 熱ラレ頭部一ヲ首ニ掛ケ長サ一尺深サ二寸位ノ傷ヲ
 受ケ未タ死ハ至ラスハ一共重傷ト多シ右ノ變動至
 お望み由リ國王陛下ヨリ内友ヲ被差之速ニ入關訪員ヲ
 申来ハ委恰モ好シ我陸軍ノ兵隊公使館近傍出立ヲ
 視テ馳付間右ノ兵隊ヲ率テ前迄出馳ハ委又々内友ヨリ
 國王陛下ノ直書ヲ日使来衛ノ四字ヲ以認メ本局ヨリ
 書ヲ持チ息ヲ切テ馳セ来リ一刻モ速ニ入關訪員ノ標旗



促波、付早足ニ馳ケ出シ去。又々内官馳セ来リ國王
 々皆々様景佑宮王宮在傍、朝鮮王付使遣一系リ吳
 申在付直、景佑宮王宮在傍、朝鮮王付使遣一系リ吳
 王夫妃及王ノ兄妃皆、以遷移其混雜、言談、休
 我ル、若系佑宮ハ朝鮮、兵七念辰ハ居間ノ家ハ
 本兵ニ護衛、故ハ其前方ハ朝鮮兵ヲ守辰ハ付
 加ナク、お本雜人出入ノ所、掃届、故ハ其前方ハ朝鮮兵ヲ守辰ハ付
 若ハ居間ハ西方丈ヲ引受、朝鮮兵ハ其外ヲ守リ又門ハ
 我兵ヲ以テ守衛、故ハ出門ノ者ハ其姓名ヲ記シ入内ヲ乞フ者
 一、其姓名ヲ傳奏シテ許可ヲ得タル上通行、其外ハ
 隊長ヲ此宮ノ全部土地廣ク且門ハ屈曲多ク右ノ道ハ
 所柄故ハ居間ハ内部丈ハ勿論嚴重ノ護衛ヲ面ハ付
 監督何カモ属當、旨申出、其旨其趣傳奏、臨

翌五日、至リ大正殿下リ此家ニ入寒氣モ難防付(大正)妃ヲ
奉テ李載元ノ宅ニ移移ル本後修中時お成君系極
宮ニ接近シ李載元ノ家ニ移移ル其夕刻又之王妃ノ御心儀
ニ因リ王宮ニ少帰被其夜モ終夜懸々南院テ高台鶴起寧
夏韓圭櫻李祖淵平泰駿閣沈秋等ノ切害ニ及ルル事
知ル其即三日月午後三時比支那ノ將友より朝鮮軍号宣通
ノ布共事ヲ奔使ニ向テ送來未名開站及ハル内支那兵王
宮ニ乱入焚砲放、同早逃防御手ノ配イタル本使ハ直王
ノ御心儀ニ相迫テ要京畿監司、國王少安唯トカ少爲王地
等ノ少同坐ヲ惜リ少居間ノお、立テ急ニ後政務内朝鮮
守兵共リ支那兵ニ應ニ材兵ニ裏切跡有付王宮ノ後
花ノ草中場所ヲ占據シ國王ヲ守護スル旨ニ家ニ少居
ハル、又王ハ何方ニ少逃出スルお成君ノ處々ヲ尋

変遙、隔^リ後苑ノ谷底ニ亭ノ中ニ御入^ル御本居^ル付直
様驅ケ付^テ警^メ護^ル政^ニ何^レ分^ノ地形不便^ニテ防禦難^シ出^ル果^シ存
亡^ハ近^ク生^キ申^ス出^ル又^ハ近^ク從^フ而^テ國^ヲ守^ル有^リ後^ニ不^レ高^ク
キ所^ヲ弱^ク同^シ谷^ノ底^ニ屋^宇、驅^ケ込^メお^シ來^ル爲^ス智^ク復^ル
シ^テ上^ニ更^ニ地形不便^ニ申^ス上^ニケ^テ稍^シ其^ノ後^ノ不^レ高^ク場^所、變^ル物
ヲ發^スキ^ハ生^キ設^ケ所^ニ砲^ヲ打^ツノ^ハ直^ニ之^ニ、^ハ是^ノ者^ハ慮^ス
國^ヲ守^ル背^負上^ニ雲^ノ所^ノ際^ニ逃^ル出^ルサ^レニ
ル^ニ義^ノ門^ノお^シ此^ニ朝鮮兵^ハ是^ハ又^ハ支^那兵^トお^シ通^スル者^ハ廢^ク王
大^ニ此^ヲ棄^テ茲^ニ陣^ヲ列^セリ^ハ國^ノ王^ノ殿^下ハ是^ヲ招^ルる^ハや^アヘキ^ヲ
お^シ増^シ從^フ令^ヘ犯^シテモ王^ノ大^ニ妃^ノ傍^ニ侍^リ度^ハ右^ニ頼^ト永^ニ仰^出付^ル
終^ニ義^ノ門^ヲ攻^メキ^ハ國^ノ王^ヲ守^護シ^テ出^シトセ^シニ朝鮮兵^ハ日^々
兵^ヲ退^ク直^ニ發^ル砲^イ々^シ近^ク從^フ朝鮮人^手ヲ破^ル勢^ハ小^シ義^ノ門^ノお^シ極^メテ地^ニニ^テ兩^側ノ山^ヲ帶^ヒ防禦^ヲ出^ル來^ル地

勢：多し且科日帝兵ヨリ守衛跡ありを得たり揚強祀シ
テ却テ國王殿下御身ヲ過ラるる事ハ付不レ已ル勢ニテ
相おなり此時ニ科公使館ヲ入リ王宮ハ支那兵大砲ヲ放テ焼ケテ
且處々火光お見ヘ科公使館モ亦ハ焼ケ過ニタルト存
一其是誰一且ハ之度リ其其況ヲ検索政ハ遺憾ニテ義門
後山陽ヲ踰ヘ公使館ヲ多シテ一上市衛ハ大道ニ相
接リ密取テ火ヲ焼シ有ニ其側ヲ圍ル時路傍ノ家カ
頻ニ瓦石ヲ抛テ火ヲ密ニテ有ニ其友一名死力為メテ射傷
ヲ負ヒ終ニ使館ヲ焼着リ使館員亦傷亡シテ散亡ニ
テ守リ居る守中ハ逃匿ニ向テ開キル守門ト義門ニ
テ四重砲ヲテ敵ガ世に祀シ又義多ノ方ニテ四重砲ヲ撃
散シタルト有ニ此科兵ノ内馳著曹長一名一守率
二名負傷者一名兵卒一名清兵ノ死者凡ソ三十人

位ト見受中務院ヲ以テ乙号ノ通一書面ヲ明白支那當
、其以當る尤モ前陳支那兵ノ不埒ハ極奉公使へ至
急ニ電令其成總理衙門、向テ詰責、上何系ノ即要
買取、後ハ小皮ノ考、テハ今度ノ支那ノ義不
始、其解人ハ其其為メ動カセル事、付是共支那政府
政府ヲ以テ隊長馬、其兵ヲ引上テ謝罪セシム外、牧馬ノ方法ハ有
之ヲ要、其トハ將又京城ハ米穀共一併欽之ヲ先テ人民困窮
在、其方自、我軍中備衛隊本營守衛者此公使館ニ駐テ
付、其方在本營、當り火ノ手ノ上ニテ是受、其付多分陸軍
ノ兵糧モ燒失、故ニ其ト存シ、其慮ニ至ル
右急報也

在朝鮮

明治三十四年 夜三時迄

辦理公使竹添進二郎

外務部代理

外務大輔吉田清成殿

甲

秘

我明治十七年十二月六日到

竹添大人閣下、敝軍與
貴部駐此、同係保護
國王、日昨、亂民內變、殺害朝鮮諸大臣八人、現、聞、王城
內外不服、將有攻
貴部之謠、弟等既悲
國王、又驚、又恐
貴部受困、只得派隊進宮、一以保護
國王、一以援護
貴部、別無他意、務望
放心、專此布告、敬請
勉安、不宣

愚弟

袁世凱
吳兆有
張光有

敬復者弟奉朝鮮國

大君主之諭率護衛兵守護

王廟會接平翰味及拆封

貴國兵隊闖入宮門亂發小槍弟恐禍及

大君主不得止亦應發小槍以盡保護之誼來文云兩國駐

兵同係保護

國王抑敵國之駐兵于此者據日韓條約為護衛公使館

也非保衛

大君主也其率之而入守廟者因

大君主之請也非自求為之也又云悲

國王復驚派隊進宮果悲

大君主復驚何故不意闖入宮門亂發銃槍此無乃尤驚

大君主乎、又云、恐敵部受困、以援護敵部、
貴軍果有此好意、何故贈書、未及拆封、乃發、
槍以攻擊、矢來文所云、弟都所不解、但弟齋使臣之職、至政戰之
事、則非其任也、因稟諸我政府、以有待命而已、
併頌、日祉、

弟竹添進一郎頓首

明治十七年十二月七日

袁 吳 張

大人



十二月四日夜朝鮮國王ヨリ内官ヲ以テ竹添公
使ヘ達セラルルノ直書寫

日使來衛

報之且糧食之川に求るに糧々苦辛を以て城門を封鎖して日
中人に見えしを以て之を康毅するを以て通報を過るに道す之因を思
つて困り突て城を出る時に從て百人内幾名歿し生ずる還る者
あるべしとて猶々餓死を以て之を戦没するに勝り因て破る
攻撃するも不用意を以て之を城を出るに決心せり而又其
事之在淺城各四公使領事、通報を以て企てしに其道すき
か何にん能く持て金先集む公使館に保護を依頼する事
(即ち)之を以て之を二時十分極密に欺瞞する字后及緊要
ノ事も欺瞞を以て之を燒棄し即ち其を壽に國旗を齎し其他物ハ
一モ携るフルナリ各身輕に之を婦女子中を包み一背に押出り
途上銃砲攻撃する交々を以て度れり四ヶ所を以て交付するに所九
三ヶ所を以て欺瞞するを以て度れり二ヶ所其先險なりとて大膽
ノ前を過るに時尤當より我過るに待てり大砲二發を連發

一ノ銃其数知ラズ或ハ頭上ヲ過キ或ハ地ヲ磨リタルを銃鉤ヲ
 ハタシ未タ守兵ノ聚ラザル前ニテ以テ我ノ機工木割刀ヲ以テ
 之ヲ切斷シ之ヲ開キ突出スルヲ得タルハリ之ヲ城内ヲ敵ミシハ思
 煙天ヲ突テ外ニ見ル我ノ使銃ノ燒カレタル察知セリ公使館
 ヲ出テ麻浦ニ至ル迄敵ハ絶テ追撃ヲ試ミシモ皆之
 ヲ打退ケリ麻浦ノ家毎ニテ銃ミテ一人モ家ニ在ルヲ見ス果
 シテ夜間追撃ノ詭計ヲ設ケテ我ノ兵ヲ誘ハシメリ舟ヲ渡シテ渡ル時
 河下ニ繋ぎル舟ヲヨリ立六発我ノ舟ニ向テ放銃セリ我直ニ之ヲ
 撃ヒテ一人ハ舟ヲ出テ陸ニ逃上レリ猶二三人舟中ニ居ルヲ見
 受ケタル我ハ只無事ニ渡ル追自的ニハ射ヲ好マズシテ渡リ終
 ル後我銃ヲ止メタル夜九時比ヨリ大雨ヲ下シ曉ニ近ク此變シテ
 雨止ム時追兵使館ノ火火猶未タ滅セズ翌日朝八時に川
 内事服ニ安着セリ

回、自增辦金廣德、別紙亦辦、通申、辦、向、辦、通

回、自增辦金廣德、別紙亦辦、通申、辦、向、辦、通

明、治、正、年、正、月、九、日

在朝鮮

辦理心使、竹、添、進、一、部

外務卿代

外務卿代、輔吉、田、清、成、殿

照會

大朝鮮督辦交涉通商事務金

照會事照得本月十七日戌刻內協辦閔泳翊偶為盜傷

並未至死亦尋常事也而不料

貴大臣率兵深入宮禁斷止出入信息阻隔先移

大君主于景祐宮繼又移于李判書載元宅連戮大臣六人

均不解其故無知小民亦無憾于

貴大臣將聚眾攻戰本國轉託中國駐防之保護兵

入內保護深恐居民加害于

貴兵而相見之時

貴兵阻攔先發槍砲竟至互有所傷宮闈之內作為戰

場雖

貴國亦一時錯誤意在保護必無他意而各國均有
保護之約已經照會
各國公使會商酌理亦希
貴大臣酌核見覆可也為此備文照會請煩查照
至照會者

右

照

會

大日本欽差辦理大臣竹添

大朝鮮開國四百九十三年十月十九日夜照會

明治十七年十二月
七日接



大日本欽差大臣竹添

照覆東本大臣率我護衛隊入

貴國

王闕者係奉

貴國

大君主派使諭以日使來衛等因謹遵

上諭即時馳赴

王闕詎意昨日清國兵不意闖入

闕門與

貴國兵相合先行發槍遂至四面攻擊本大臣因奉有來

衛之

諭故不得已而應發小槍始終陪隨

大君主以竭テ獲衛之誼其後

大君主切慕ニ

大君毋至有雖死必往侍之

諭竟由後門

幸於

貴國兵陣之中本大臣帥兵欲陪從即為

貴國兵被槍斃テ因怨萬一誤有震驚

大君主之事則却失護衛之誼在後門拜別遂率我護衛

隊歸館茲接

貴督辭照會載有先移

大君主於景祐宮云々之語特所不解本大臣於

移幸之事一無所聞奉諭入宮祇隨

鑒駕所

幸進陪護衛而已。至拉連戰大人六人。詰者不情。驍奉春

在宮中常須更離

大君主之傳。亦未見者。戰後。臣等則書官備

大君主所在之四面。臣等則僅置官備。有出入者。則二冬

間。其姓名而傳。今臣等則僅置官備。有出入者。則非所

與知也。而

貴皆辨。有。臣等則僅置官備。有出入者。則非所

大請。其。臣等則僅置官備。有出入者。則非所

貴國人民聚眾攻。臣等則僅置官備。有出入者。則非所

發槍砲。試思。臣等則僅置官備。有出入者。則非所

貴國。失。我。兵。止。守。衛。

大君主所在之處。槍聲之。臣等則僅置官備。有出入者。則非所

大君主驚極。有。以。何。事。之。

論事畢而檄九至于王所故我亦不得已而應之耳此眾所共
見更望

貴督詳查當時情由無錯誤事實顛倒曲直可也
為此照復須至照復者

右 照 覆

大朝鮮督辦交涉通商事務金

明治十七年十二月七日

八辨

啓復者弟奉朝鮮國

大君主之諭率護衛兵守護

王殿會接于翰末及抵封

貴國兵隊聞入宮門亂發小槍弟恐禍及

大君主不得止而應發小槍以盡保護之誼來文云西國駐兵

同係保護

國王抑敝國之駐兵于此者據日韓條約為護衛公使館也非

保衛

大君主也其率之而入守衛者曰

大君主之請也非自求為之也又云悲

國王復驚武隊進官果悲

大君主復驚何故不意闖入宮門亂發銃槍此無乃大驚

大君主乎又云恐敵部受困以援護敵部

貴軍果有此好意何故贈著慧及林村乃余極以攻
擊乎來又所云弟都所不解但身雖使臣之職至設戰
之事則非其任也因謂諸我政府以有結解而自專涉
復併顧

來
吳
張
大人

弟竹派進郎顧首

明治廿九年九月

拜

秘

二號
大日本欽差大臣竹添

照會事、日來

貴國亂民漸迫我

公使館、放槍放火、投擊石塊、岌々乎危殆而

貴政府坐視不制、故本大臣暫移仁川、欲稟商於本

國政府、以取進止、為此照會

貴政府、應請本大臣暫移之間、保護我公使館可也、併

祈即刻照覆、為盼、須至照會者

右照會

大朝鮮國督辦交涉通商事務金

為



木号

逕啓者、今朝由本署送有照會一通、尚未見覆、未知浮沈於何處、殊為
紆鬱、前所奉公文、謹述奉起、深望並要會商

各國公使、務欲言明、于好、邀福兩國、今聞、

貴大臣、逕出城外、將向仁川、愕然失圖、誠味曉旨、意之所在也、應請、

貴大臣、暫回高軒、從公安商、實所區々企望者也、前送公文、更抄錄一紙、

附呈、庶鑑此衷、諸惟、

台照、不備、

甲申十月二十日

我明治十七年五月七日

督辦交涉通商事務金宏集

大日本國欽差辦理公使竹添進一郎閣下



一號

逕復者茲接
來文藉悉由
貴衙門送來照會未知浮沈於何處其公文述事
起源委務欲言歸于好應本大臣暫回等因查欲
言歸于好素本大臣之所願也第
貴國亂民日來迫我公使館放槍投石以逞其毒而
貴政府坐視不制至有亂民殺我團人民三千余名之
多而亦不制之不拿之抑何放耶且值本大臣出使
避難之際堅閉城門強砲攻我槍亂投石必欲
致本大臣于死而今勸本大臣暫回安有
臣之所未能解也本大臣假設使署于此有
稟我

政府未可輕舉動也。此奉西復、不宜
明治十七年十二月八日

大日本欽差大臣竹添進一郎
大朝鮮督辦交涉通商事務金宏集閣下

另附一封信件 昂上号ナ、同号中、八只二三号、
公文寫ヲ封入也リ



卜号

敬啓者、日昨午前十一時、雇典洞住金成一者、將照會二件、送致貴衙門、刻候照覆、而一去無消息、為此將前送照會抄錄各一分、更送貴衙門查照、而此順頌、

日昨、

明治十七年十二月八日

竹添進一郎

金和目辨閣下

再本大臣回覆、清國吳軍門表營務處之信函、亦昨經封入照會、以請貴衙門轉送、而本照會無從知達、恐故、茲更將抄錄原文、送請轉致、為祈

昭和26年11月6日

秘

特別機密第四号

別紙に通十二月九日高松大官督辦交涉函後より物越々新創の監視
仁川港通商事務洪淳孝一兩氏が所有一命ヲ奉ニ供長ト云々新創
其後新創筆記左如己

明治十七年十一月十日

外務代理

外務大臣 榎本 武揚 謹啟

在理學家所撰一部

秘

二月九日午後三時當國大官督辦交涉通商事務總理洪瀛學大礼服三不

竹添公使

小林副事

通商事務總理

道曰今日我國王殿下勅書下政府主事王殿下中使

館

公使曰遠如雲山苦勞所謝

道曰今無事得三貴公使三不中使來訪以事

國王殿下主事王殿下主事王殿下主事

公使曰王殿下主事王殿下主事王殿下主事

道曰王殿下主事王殿下主事王殿下主事

10

謹承什水
 大君
 謹接

此等知諸將の代を無理ナラ又事トナキ振分を
 八丈洲奥ト貴國近衛兵ト合シテ國に殿下に保衛
 アリタル戦兵隊に暴撃シタル事トナキ市街並門
 山奥等將十人ヲ殺シ古ノ制ニ我公仙鶴ニ暴入
 兵隊在リ振分ヲ振舞暴撃云々方トク然レモ
 等、保護モアリ、自前美属官等、危険難
 退兵、此等、有リ、咎ニ事、政府ニ於テ
 早ニ心靜謐ニ降シタルヲ以テ上京有
 輕視ガレタル振分ニ在リ

17

時心機動、業平三郎の世に於て、

公使曰其新造之土略新ヲ承リタシ

越曰其新ハ所々新造ヲ承モテ其後長ノ命アリテハ其細ノ事情ハ承知トス

此ハ新所ヲ設ルニ由リナリ

公使曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

越曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

越曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

越曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

越曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

越曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

越曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

越曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

越曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

越曰其新造ハ所々新造トモ不ト申シ其後何々事情タリテ其細ハ承知トス

公使臣等奉命大君王命命臣等奉命大君王命命臣等奉命大君王命

臣等又考大臣之職

多分、トモ、即、板、紙、十、八、片、下、刻、二、千、八、百、年、

下

10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

卷之五

命令行

心靜境清

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

山子坡坊外寺又進二八粉布二條

卷之八

250484

8

昭和6年/月/日

秘

事件機密第一号

本月四日夜京城當政大臣等暴殺事件、
 引續キ清韓兵ヲ護衛兵對シ暴殺スル付竹
 添公使始メ書記官并屬官等毛彈丸如雨場合
 ヲ切抜ケ今日未明仁川港へ護衛兵引率屬官
 一同無恙領事館へ到着相成似砲撃負傷者陸
 軍少尉一名兵卒五名陸軍語學生徒上野茂一
 郎即死其他京城に罷在似我商民凡百餘名内
 聞所ヨリハ京城市内ニ男女合シテ道路死云致
 害者二十人程モ有之未夕十分ノ取調不行届似
 ハ共行衛不相知者五十人程有之其ハ多ク害ヲ
 蒙リタ事ト相知ルハ幸ニ今度ハ公使館内ニ於テ
 ハ家族ニ至リ一各ニ輕傷タニ負ヒテ者無之ハ使倅

之至也昨日ハ曉際ヨリ黑雲ヲ鎮シ風雪烈カキ為

一屬ノ困苦ヲ有之事候

一今般事付ハ重テ支那黨之名凡大臣等ニテ関
台鎬韓圭稷李祖淵尹泰駿段泳穆岡泳頌其他
内官數名有之ヲ左モ右黨派ノ名凡為メ支那人ニテ
ハ此殺害人即チ日本人ナリト相唱居テ得共察スルモ
ハ茲計ニテ其實今般ハ日本黨ヲ廢却セト見込
ニ有之候ト想像致シテ故ニ日本語ヲ解スル者ハ貴
賤ノ別ナシ殺害致シテ程ノ有之候金玉均朴永孝徐
光範其他數名皆切髮日本服ヲ着シ仁川ニ逃ケ来
ル者アリ此等ニヨリ候テモ黨派論ヨリ原起セ義ニ可
有之候去支那兵ヲ找メ先テ發砲モ平常ノ振舞ヲ
今般官闕之防禦ヲ我兵ニ御依頼有之清兵ヲ度



事件秘密アリ

今因事起、我人民、通、幸、俄、在、者、大、約、百、餘、名、十、二、三、等、被、檢、引、揚、
之、際、十、餘、名、隨、從、歸、仁、又、刻、日、悔、仁、七、二、十、名、三、生、死、未、詳、者、人、名、ハ
我、之、通、云、十、八、名、三、者、不、詳、故、姓、名、ヲ、列、記、シ、テ、此、ノ、一、係、在、云、十、八、名、ハ、生
死、未、詳、者、ト、リ、十、二、名、ヲ、知、ル、也、悔、仁、七、二、十、名、ハ、三、生、死、未、詳、者、ト、リ、何、レ
及、生、死、確、定、シ、上、ノ、中、接、接、市、詳、細、ハ、後、述、ス、ル、ト、シ、テ、此、ノ、一、ヲ、モ、ル、也、

明治十七年十一月廿六日 錦平、小村、端、ハ

外務省、相、老、田、中、成、政、殿



生死未詳者

松本龜吉 賀川岩吉 山田伸造 吉野辰吉 如摩口力 井上ヨシ 松本孝三 山口辰吉 杉原常範 田中鶴吉

黒田幸助 吉澤増作 久保田強一 奥川義一 田邊正光 井上イ 山口平太郎 惣山和作 上野茂一郎 本岡收三

江見治和 佐永辰安 金色良忍 岡岡健象 松岡惣五郎 小笠原一 井本田金三 吉原望三郎 神近治平

東尾定吉 浦瀬由太郎 岡岡健象 奥川和吉 田中直次郎 諫山卯三郎 福井利雄 友田急治郎 同妻

合計 三十八名

秘

洛者本日見新報知我兩國兵勇在朝鮮爭鬧是
 實但因何事啟衅俱不得其詳亦未知
 竹添公使現在何處此事無論其爭鬧情形如何
 然決可信其非我

兩國

政府之意務望

閣下函致

外務卿調停息爭是為至幸用此代言即頌

日祺

光緒十年十月廿七日

制

黎庶昌

吉田清成閣下



光緒二十一年十月二十七日附貴國教披見侯處本日見新報我西國兵船在朝鮮
鮮軍前是實云々所中越之題致承知候右ハ昨三日以來拙者收閱致候
朝鮮國ノ報告ニ巡ルハ本月四日頃朝鮮京城ニ變動ヲ生シ大臣ノ内訌中
ニ多ク者有リ該國王殿下ノ請求ニ依リ竹添公使ハ其後發出シテ之ヲ入朝
殿下ヲ保護致候所因國駐在ノ貴國將官ニ亦多ク其ヲ導入セシメ
ニ場ノ終ニテ生シ候ハ口公使ハ其餘勢カノ殿下ニ渡セシメ之ヲ王宮ニ歸
シ隨兵ヲ總シ但館致候趣ニ并ニ口月七日ニ至リ我公使館ヲ設ケ警ルル者ナリ
口公使ハ其福記ノ益大ニシテ一應リ一時仁川ハシ揚子江ニ由ニ候猶此致候
詳細ニ報告ヲ接収可致候トモ要之此亦ノ爭鬭ニシテ我兩國ノ好誼ヲ失ハ
ニ望ミシメル義者ナリ故テ諒々企望スル所ニ候尤モ出来不ク趣ハ速ニ外務省
ハ通知可致候右因答返如此候也教員大

十一月十五日

務外庶日閣下

吉田清成



啓者昨夜接展

華函藉悉朝事梗概深感厚意但既有此弊端當及早解釋
依弟愚見莫如面國各派大員前往察勘商辦了結未知閣下
務卿之意見如何若以為可弟當速達我
總理衙門或

北洋大臣核覆後敬頌台祺

光緒十年十月二十八日

制

黎庶昌

吉田清成 閣下

再弟李應心至

貴署與

閣下面談近因梁儲譯
三為快也
弟又啓



啓者頃間接到

李中堂電稱我

政府實無與日本開衅意防營口用互爭應查明妥辦昨與津
領事論及彼此不宜與兵結怨京電如此特錄奉

閱乞轉致

外務卿為盼頌夕祺

光緒十年十月二十八日

制

黎庶昌

吉田清成 閣下

即復者本日接准
費大臣兩次來信并已閱悉當因外務卿即欲於
今夜由東京彼時商議詳為具復可也先併四
復順信
十二月十九日

吉田清成

黎庶昌閣下



啓者昨夜接我

總理衙門電報內開朝鮮事批華將面示日兵放鎗批

複本公使徐華兵先放鎗比事倉卒互鬪實兩國初起所不及料現欽

派吳大澂往查此時彼此宜先飭駐朝將領不得妄動靜候查辦以全

睦誼餘

李中堂已函致

楊本公使外屬本大臣再向

貴外務部言之等語特錄奉

閱者此次兵勇生鮮孰先孰後衆目昭彰決非二人所可掩飾無難

貴朝廷早派大員前往查辦為望此致代言即頌

日祉

十一月初二日

制

黎庶昌

井上馨閣下

カ
一
マ

秘

250184
6
昭和4年11月16日

十二月十三日北京發電報

昨午後總理衙門大臣朱啟鈐公使余之先テ本月十日
迄多ノ電報、依ル本月五日朝鮮ノ賊徒國王ヲ奪
ヒ去リ、其他五名、大臣ヲ殺害シ日本兵數名ヲ獲
リ而テ清國司令官〇〇(人名)ハ前以テ王宮ヲ保護
スル旨ヲ日本公使、通知シ置キタルヲ料ラスモ兵ヲ率テ
王宮ニ進ミタルハ日本人ヲ殺害スラ受ケタリ又ハ王妃
沒シ國王ノ安否詳ナラストノ說アリ總理衙門大臣汪
精衛日本兵トノ行違ヒヲ懸ケ此事件ヲ平和ニ結局
セシムヲ希望スル旨陳述シタリ

在清 板本



十二月廿四日午後六時二十分北京發抵奉天使

來電伏

總理衙門大臣、清日兩國兵士間ノ争鬪ハ互ニ國五條
護ヲ其手ニ執ラセトスノ事ニヨリ起因ニタルモノトセリ
侯爵門大臣ハ拙意カ昨日ヨリ電報ニ及ヒタル事柄外
ハ何事モ承知ニ居ラヌ歐洲人ヨリ聞知ニタル所ニテハ
日本人ハ清物浦ニ退去シ公使館ハ燒拂ハタリテ
氏ヨリ英公使ニ送リタル電報中ニ云フ本月六日朝鮮
人王宮ヲ攻殺セシタリ其時清人屠人セタルヲ以テ日本人
トノ争鬪起リ國王諸人ノ手ニ陷カリ日本人ハ王宮ヲ獲テ去
リ同七日午後日本人ハ清物浦ニ退去ス又ハ市中死者ナシ
朝鮮政府ハ最初日本人ヲ避難シタル所ニ或ハ朝鮮人清物
浦ニ來リテ國王ヲ殺シタルヲ日本公使ニ報告セリ

秘

十七年五月十七日午前九時三十分北京發

據本公使來電譯

總理衙門大臣三名本日拙寓ヲ來訪シ日本ニ就ニ廣島鎮台
ヨリ七百人之兵ヲ考ニ技藝比較ニ兩艘ヲ仁川灣ニ派遣セリ
トノ事鴻章ヨリ一報告ヲ持來リ且懇々説テ曰ク清國政府ハ
日本ト容易ナラザル葛藤ヲ起ラセテヲ避ケテヲ希望セリ歟
吳大澂ヲ朝鮮ニ派遣ス爲メ事件取調大臣ニ任シ調和
ヲ爲ス可キ全權ヲ負セリト因テ拙寓ニ内ニ貴電ノ趣旨ヲ
復等ニ通知シタルニ居留日本人三十名清國人爲メ救済ニ
タリトノ一ハ復等ニ未タ報知ヲ得サリト一ハ持テ驚愕シ
右ノ如キ事件ハ何トカ手段ヲ以テ之ヲ結局ニ兩國間葛藤
ヲ避ケテ一ヲ整頓望ムル者ニ陳述セリ所ハ歟米諾ニカク然ル事
ハルト見ル間ノ電線ハ既ニ設置スル

250484

昭和26年11月6日

秘

十二月十日午初九刻卒。年八十八。

东平孙氏

原

今新李修をト面會せしに彼云ふ故に素一原面
 不同、據り以後兩國兵士一相、亦多敵對、一所有を此
 馬、雷理せし、ナカ平理云、且又素友ト據り不可成達
 之平利、結構ヲ為サント、同一、望ヲ圖知る、マテ據り望セリ
 去ナカ、ナカ、素一、是、交リ、所、因、レ、日、知、人、ハ、開化黨ト共謀、是
 所、レ、レ、ヨリ、此、節、乱、ヲ、怒、起、シ、ナ、ト、一、胡、解、素、被、レ、信、レ、辰、リ
 且、素、那、兵、ヲ、ア、ス、シ、ナ、國、王、ヲ、侮、政、を、為、リ、日、知、兵、一、王、素、之、逃、レ、
 今、レ、ハ、面、會、レ、所、知、レ、思、考、ス、ル、趣、ヲ、陳、ス、ナ、リ



京師事來電

七月二十日午後八時天津發

昨夜李鴻章與大臣三總介心密地官ヲ支即ニ招キリ李鴻章等以前
云フ如ク午後、結局ヲ集ルに至リテ陳述シ且日本ハ朝鮮ハ兵士増進
セザルヲ望ムス吳大澂曰氏ハ朝鮮ハ何ヤセムハ後事ハ原因ヲ探シ
暴徒ヲ所付シ改メテ改善スルニ旨●ア苟クモ清兵ハ北テ退去スル之ヲ
嚴固ハシメシム曰氏ハ兵隊ハ引キ去ス且向後ハ朝鮮ハ我ハ力ヲ增加セ
拙者石ハ長次後ニ因テ推テス清國ハ日本ノ果斷ニ出ルヲ必スモく如し
彼ホノ意ハ清兵及至者ヲ暴徒ヲ所付スルヲ以テ損害ニ及ル云フ謝罪ト
ナリ目下ノ所ニハ清國ハ必ク要求ニ應ジシムク抵抗セザル而テ日本ヨリ政令
處理ハ代ニ於テ大利益ヲ得ト云フ又假令ハ清國之ヲ以テ然ル所ナラバ
云々即ニ李鴻章等及他ハ日本ノ數キ易シト改メ目下云々我ハ國駐清國使ハ速
ニ出發シ即チ支リ吳大澂ハ三四日中当地ヲ出發ス

ノ二

秘

250484

9

昭和6年11月6日

在上海女藤欽事来電訳

仙國公使余ニ告テ曰ク仙國內閣ハ元々ノ熱心ヲ以テ戦争ヲ為スニ決
定セリ又曰ク使ヘノ私信ニ仙國ハ更ニ二萬六千ノ兵兵三艘甲鉄艦ヲ
東洋ニ送ルベシトナ●アリト云ヘリ又曰ク君シ日本ニ於テ此般ノ朝鮮事件ニ
出兵スルニハ仙國ハ其ハニ傷ヲ受ケシヲ望メリト
右ニ付テハ拙者モ元々ノ注意ヲ以テ送答シ置ケリ

委細郵便ニテ

十七年十一月十六日午後八時キテ上海發



秘

在上海安設領事官電譯文

佛國公使才德著之我國之於清國之對峙
然亦不可不察也凡心也者其茂密之西國聯
所為也其意之深遠也且其由之佛國
之勢也似無多異也然其國之要求之於
此其間之關係之於法之關係之於德之
關係之於俄之關係之於英之關係之於
一向之知也其大之於法之於德之於英
向之知也其大之於法之於德之於英
指令之知也其大之於法之於德之於英

十七年五月十八日午後三時三十分
村下武吉伊敏

乾十七号

朝鮮事變之關係及
書報



名 称	三條実美文書
標 題	清国新任特命全权公使 謁見に付宮内卿上申 写

分 類 番 号	34
	24

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

法蘭西特命全權公使福西上憲
 字內須ヨリ申出候旨可紙
 寫出候旨下上候口

昭和八年一月一日内閣書記官

右大臣之條實美公卿



清國新任特命主權公使伯見之義之所別
低之通外務者有照會友之依而遂
奏聞候處明言多則十此渴見秋
所候古被所出候其代申進候
十一年百下
寫新伯爵伊藤博文

太政大臣上奏三條實美殿

大清國

大皇帝問

大日本國

大皇帝好朕誕膺

天命寅紹丕基眷念友邦言歸於好茲特簡道

員用二品頂戴徐承祖接任出使為駐劄

貴國都城欽差大臣並親蒞

國書以表真心和好之據朕念該大臣忠信明達

辦理交涉事體必能悉臻妥協惟願推誠相信

俾盡厥職以與

貴國益敦友睦長享昇平朕有厚望焉

大清光緒十年九月初十日

譯文

大清國大皇帝大日本國大皇帝ノ好ヲ聞フ
朕誕美命、膺り寅ニ不基ヲ紹キ友邦ノ言、好ヲ歸
セニテ眷念ヲ茲ニ特ト道賓用、品頒戴、保承祖簡
ビテ出使ヲ接任セシメ貴國都城ニ駐劄スル欽差大臣
ト爲シ並ニ親ラ國書齎齎ラセシテ真心和好ヲ懷
朕念ヒテテ、深大匠ハ忠信朋達ニメ交渉事件
ヲ辦理スル、必ス能ク急ニク妥協ニ臻ラン
惟カ親クハ誠ヲ損メ相信ス所ノ機ヲ盡サ俾メ以テ
貴國ト益々友睦ヲ敦ウシ長ヘテ昇平ヲ享ケニ
朕厚望アリ

大清光緒十九年九月初十日

(宣統十七年十月廿八日)

大清國使臣徐永祖謹奉

國書呈遞

大日本國

大皇帝我國

大皇帝念中日兩國同在亞東文字相同疆圉相望理當

分外親睦以固邦交伏惟

貴皇帝道宏四域治洽八洲四海友邦均歸和好使臣

自顧菲材遠肩重任本具敦睦之素志適當使

節之老舊惟當謹遵修好條約於兩國利益之事

此外務有大臣所誠布公悉心經理深願

貴皇帝體我國

大皇帝真意和好之意推誠相與解嫌釋疑使兩國交

詔蓋隆使臣早勝欣幸之至

譯文

大清國使臣徐承祖謹于國書ヲ奉ケ 大日本國
大皇帝ニ呈進ス我國大皇帝急^矣中日兩國同^モ
亞東ニ在テ文字相同ク疆圉相望ニ理當サニ分外ニ親
睦シ以テ邦交ヲ固クスベシト伏テ惟レハ貴皇帝道
ハ四域ニ容^クヲ治ハ八洲ニ治^クヲ四海ノ友邦ヲ均ク和
好ニ歸サセ玉ヘリ使臣自ラ顧ル^ル菲材ニ遠カニ重任ヲ肩
ナ^ルモ本ヨリ敦睦ノ素志ヲ具シ適サニ使命ノ忝膺ニ
當^ル惟^タタ當サニ謹テ修好條約ニ遵ヒ兩國ニ利益凡
事ニ於テハ外務方大臣ニ誠ヲ伺キ今ヲ布ヘ^ル心ヲ悉ク
ノ經理スヘシ深ク頼^ムハ貴皇命我國大皇帝莫^ク和好
之意ヲ體シ玉^セ誠ヲ推^シ相共シ^シ嫌ヲ解キ疑ヲ釋キ
兩國ノ交誼ヲ益ス^ル隆ナラシメ玉^フ使臣依事ニ奉

勝へス

文庫

名 称	三條実美文書
標 題	井上特派全权大使 復命書

分 類 番 号	34
	25

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

259484
10
昭和26年1月6日

井上特派全權大使

復命書



復命書

客歲十二月朝鮮國京城ニ於テ變亂驟カニ起リタル趣同國駐在辨理公使竹添進一郎ヨリノ電報同月十三日初テ政府ニ達シ越テ數日同公使カ遣ハス所ノ外務一等屬木下眞弘同公使ノ公文ヲ賚シ至リ並ニ其事狀ヲ面稟シ顛末頗ル明晰ナルヲ得廟議遂ニ使ヲ該國ニ派シテ之ヲ辦理スルニ決シ乃チ臣ヲ以テ特派全權大使ト爲シ便宜事ヲ行フヘキヲ命セラル臣不肖ト雖モ綸命ノ重キ且ツ臣カ職掌ノ在ル所ナレハ謹テ其命ヲ奉セリ先是我國在留清國公使黎庶昌ヨリ此事變ニ關シ清國ヨリ大員ヲ派スルニ付我國ヨリモ大員ヲ派シ該國ニ在テ商辨センコトヲ請求セリ因テ我ヨリハ全權ヲ委任シタル大員ヲ派遣スルニ付清國ヨリモ同様ノ權ヲ有スル使節ヲ派スベキ趣ヲ照復セリ其後清國政府ニ

於テハ使臣ニ護衛兵ヲ付帶セシメサル旨在清國全權公使榎本武揚ヨ
リ電報アリタルヲ以テ臣モ護衛兵ヲ率ヒズ僅カニ僚屬權大書記官近
藤眞鋤權大書記官齋藤修一郎以下數名并ニ陸軍中將高島柄之助海軍
大輔樺山資紀及其僚屬數名ヲ以テ同月廿二日東京ヲ發シ橫濱ニ至リ
即日汽船薩摩丸號ニ坐シテ駛開シ同廿四日下ノ關ニ抵ル適マ外務大
輔吉田清成ヨリ在清國天津領事原敬ノ電報ヲ轉傳スルヲ接ス曰ク清
國使臣吳大澂ハ兵五百ヲ率テ朝鮮ニ赴クト清政府旣ニ前說ヲ變シテ
其使臣ニ護衛兵ヲ付シ又栗野書記官朝鮮ヨリ歸リ稟稱スル所ニ據レ
ハ清國ノ威力十分ニ朝鮮政府ヲ左右スルノ情況ニテ參事院議官井上
毅ニ命シ朝鮮政府ヨリ竹添公使ニ送リタル詰問書ニ類スル文牘ヲ同
政府ヲシテ收回セシムルノ事未タ遂ケ能ハザルノミナラス京城ノ人

心猶靜謐ニ至ラス等ノ事情アルニ因リ二大隊ノ兵ヲ以テ護衛トシテ
帶往センコトヲ電請シ往復數回ニ至テ之ヲ許可セラレ又太政大臣三條
實美ヨリ電信ヲ以テ朝鮮ヲハ從前廟議ノ通り獨立國ヲ以テ之ヲ待ツ
ノ廟謨ナルヲ傳フ臣謹テ之ヲ領シ護衛兵ノ至ルヲ待チ同廿八日下ノ
關ヲ發シ同三十日朝鮮國仁川港ニ達シ我領事署ニ入ル此時竹添公使
ハ朝鮮政府ノ大臣ト面タリ談判スヘキ爲メ井上議官ト俱ニ隨員數名
及ヒ護衛兵一小隊ヲ率ヒテ已ニ二十八日ニ於テ京城ニ赴キ城外ニ就
テ仮ニ公館ヲ定メ談判ニ及ヘル趣ヲ聞知シ更ニ其現況ヲ悉サンコトヲ
欲シ直チニ書ヲ馳セテ同議官ヲ召シ翌三十一日午后仁川ニ來ル其面
述スル所ニ據テ考フレハ朝鮮政府ハ故サヲニ臆測ノ說ヲ逞フシ亂黨
ノ勢ヲ挾ミタルハ同公使ノ兵ナリト羅織シ國王ヨリ倚賴ノ璽書ヲ以

テ亂黨ノ偷押ニ出テタル者ト爲シ幾分ノ罪ヲ竹添公使ニ負ハシメ而シテ彼我對等ノ論辨ヲ以テ開談セント欲スル者ニ似タリ若シ仍ホ同公使カ往復セル文牘ヲ基礎トシテ開談ニ及ハ、徒ニ瑣末之紛議ニ涉リ妥結ノ期ヲ知ル可ラスト思考シ同議官ヲシテ其翌即本年一月一日拂曉直チニ京城ニ歸ヘシ同公使ニ朝鮮政府ト議論ノ往復ヲ停メ一ニ臣カ京城ニ入ルヲ待タシメ又近藤書記官ヲシテ同議官ト共ニ京城ニ至リ京畿監營ヲ以テ臣カ旅館ト爲サンコトヲ該政府ニ請求セシメ臣ハ其報ヲ待テ仁川ヲ發セント擬ス翌日即チ本月二日薄晚同議官俄カニ京城ヨリ來リ曰ク本日午前竹添公使ヨリ警部巡查各一名ヲ派シ我舊公使館焚毀ノ狀況ヲ驗視セシメントセシニ敦義門ニ至テ清國兵五六名其行ヲ阻攔シ漸ク集テ十五六名ニ至リ各銃ヲ以テ之ニ擬シ其内發

銃スルモノ一回又銃劍ヲ以テ衝撞スルモノ數回然レモ幸ニ其身ニ中
ラス該警部等勢如是ナルヲ以テ門ヲ入ルヲ能ハス已ムヲ得スシテ館
ニ回リ其由ヲ報セリ於是同館ノ諸衛隊兵從來抑忍セシ憤懣ノ氣一時
ニ發作シ同公使ニ迫マリ直チニ該門ニ至リ之ヲ擊タンヲ請フテ已
マス同公使同議官ト切ニ之ニ諭スニ大使方ニ仁川ニ在リ進退大使ノ
命ヲ待テ妄動ス可ラサルヲ以テシ僅ニ之ヲ抑止セリ然レモ其激憤甚
シク等閑ニ付シ難キヲ以テ其由ヲ告ケン爲メ自ラ來レリト又曰昨日
近藤書記官京ニ入ルノ途中麻浦ニ於テ韓兵之ヲ阻ミ若シ京ニ入ラン
ト欲セハ京中ニ報知シ命令アルヲ俟ツベシト云ヘリ然モ同書記官ハ
之ヲ說破シテ前往セリ是等ノ亡狀都テ大使ノ指揮ヲ乞ハサルヘカラ
スト臣之ヲ聞キ即時飛翰ヲ同公使ニ傳ヘ兵士ヲ戒シメテ私憤ニ乘シ

妄動スル無カラシメ一面ニハ清兵ノ無禮ヲ以テ痛ク清官ヲ責メシメ
又麻浦ノ事ヲ以テ朝鮮政府ニ照會セシメテ曰ク若大使ノ入京ニ方テ
沿途或ハ諸門ニ於テ阻攔等ノ失敬アラハ大使ハ當サニ臨機不得已ノ
處分ニ出ツベシト此夜近藤書記官ヨリ旅館ノ準備粗整フヨシ報シ來
ル即其翌三日午前九時ヲ以テ該衛兵ノ全隊ヲ率テ仁川ヲ發シ同日午
後八時京畿警營ノ旅館ニ達シ直チニ竹添公使ヨリ其由ヲ彼政府ニ通
セシム同四日午前十時統理衙門督辦趙秉鎬臣ヲ訪伺シ臣カ入京過急
ナルニ因リ旅館ノ設ケ整備ナラサルヲ謝ス臣告クルニ如此火速ニ來
ルモノハ此次ノ事件兩國交誼存滅ノ係ル所ナレハ我 聖上ニモ深ク
宸襟ヲ惱マサレ余カ職掌ノ繁劇ナルニモ拘ハラス辨理ノ任ニ當ラシ
ム因テ一日モ猶豫セス進京セシ旨ヲ以テシ速ニ國王ニ謁見センヲ

望メリ秉鎬問フ我政府ト竹添公使ト往復セシ公文ヲ貴大使ハ一見セシヤト臣之ニ答テ曰ク然リ抑モ同公使ト貴政府ト往復セシ公文ハ余カ談判ノ基礎ト爲スヘキモノニ非ス何トナレハ貴政府ハ專ラ想像ト疑惑ヲ以テ事實ヲ構造シタルモノナレハ政府ト政府トノ間ニ於テ往復スヘキ性質ノモノニ非スト說破セリ隨テ竹添公使ヲシテ臣カ謁見ノ事ヲ以テ彼政府ニ商議セシメシニ來ル六日午後一時謁見アルベシト通知アリ同五日午前伴接官來リ近藤書記官ニ面シ辭ヲ設ケテ隱ニ竹添公使ノ臣ト俱ニ謁見スルヲ難シスルノ意アリ同晚趙秉鎬穆麟德穆ハ即チ獨逸ノ人「モルレンドルフ」ナリ朝鮮政府ニ雇ス兩人齋藤書記官用セラレ現ニ統理衙門協辦交渉通商事宜ノ官ニ任スヲ訪ヒ又隨員衛兵ヲ減セシヲ乞ヘリ因テ大使謁見ノ事ヲ商議スルハ都テ公使ノ職分ニ屬スルモノナレハ公使ト之ヲ商量スヘシト答ヘ

タルヲ以テ兩人ハ直チニ公使館ニ赴キ同公使ト前事ヲ商議シ更ニ又
外務三等屬淺山顯藏ヲ以テ變亂ノ時賊ニ通同シタリト稱シ以テ大使
謁見ノ時通辨官ニ充テサルヲ内願セリ公使ハ此事能ク自ラ決スル所
ニ非ス臣カ處ニ於テ議スベシト云ヒ相伴フテ旅館ニ來ル臣ハ近藤書
記官ニ命シテ使用スル所ノ者ハ余カ自ラ撰ムニ任カス固ヨリ他人ノ
喙ヲ容ル、ヲ用ヒス若シ淺山賊ニ通スルノ實アラハ其證據ヲ示セ直
ニ罰スル所アルベシ証據ナクンバ是レ疑惑ヲ以テ人ヲ誣ルモノナリ
余カ使用スル通辨官ヲ拒マハ亦余カ謁見ヲモ拒ムニ至ラン果シテ然
ラハ余ハ謁見ヲ請ハスト痛ク之ヲ論破セシム彼レ抗論スルヲ能ハス
唯ヤシテ去ル同六日期ニ至テ高島陸軍中將樺山海軍大輔其他數名ノ
文武官員ヲ隨同シ闕ニ至リ臣ハ大使タルヲ以テ君主ノ出入スル中央

ノ門ヨリ入リ隨員ハ皆側門ヨリ入リ樂善堂ニ於テ臣ハ正階ヨリ昇リ
大君主ニ謁ス竹添公使右階ヨリ昇リ先ツ臣ヲ引接スルノ意ヲ奏シ臣
進テ國書ヲ呈ス大君主自ラ之ヲ受ケ侍臣ヲシテ開緘セシメ親ヲ披閱
ノ後承旨官ニ命シ附スル所ノ譯漢文ヲ朗讀セシメ欣然トシテ之ヲ受
ケラル臣又御委任狀ノ抄本ヲ呈シ次テ左ノ辭ヲ奏ス

我

大皇帝深ク大朝鮮國京城ニ於テ生シタル事變ヲ哀ミ切ニ軫念アラセ
ラレ即チ言好ニ歸シ暨ヒ後來ノ事端ヲ防止センコヲ欲シ臣ヲ簡
シテ特派全權大使ト爲シ委スルニ便宜行事ノ全權ヲ以テセラレ
タリ謹テ

大皇帝ノ親書及ヒ使臣カ奉帶スル所ノ全權委任狀ノ抄本ヲ奉呈ス

大皇帝ハ使臣カ

大皇帝ニ代リテ

大君主ニ白ス所ノ者ハ事理妥當ニシテ

大君主ノ認メラ、所タルコヲ深ク信セラレ併セテ使臣ヲシテ

大君主ノ壽康萬福ニシテ寶祚長久ニ在ラセラレ

大君主ノ臣民ノ永ク其慶ニ賴ランコヲ祝スルノ至意ヲ表明セシム敬

テ奏ス

大君主立テ之ヲ聽了シ更ニ聖上ノ御安寧ヲ祝セラレ又臣カ安着ヲ賀
セラル臣一々答謝シ次テ高島中將以下ノ隨員交ル々々接見ヲ賜フノ
後大君主ヨリ特ニ臣ト語ル所アルヲ以テ盡ク隨員ヲ屏ケンコヲ望マ
レタリ臣モ亦タ特ニ奏スル所アルヲ以テ盡ク侍臣ヲ屏ケラレンコヲ

請求セリ大君主ハ只三大臣及通辨ヲ留メンコトヲ切ニ望マル、ニ因テ臣モ然ラハ高島中將樺山大輔竹添公使及通辨ヲ留メタシト請求シ其餘ハ皆屏ケ去ル此時大君主ヨリ特ニ臣ニ坐ヲ賜ヒ臣カ奏スル所ヲ聞カント望マレタリ臣因テ奏シテ曰使臣本國ニ在テ要劇ノ職ニ居リ寸晷ノ暇ナシ唯タ今回ノ事ハ兩國ノ間ニ於テ最モ重大ノ關係アルヲ以テ我聖上ハ深ク宸厪ヲ惱マサレ使臣ニ命シ暫ク多忙ヲ排シテ專ラ此事ヲ辨理セシメラル使臣謹テ旨ヲ奉シ貴國ニ來リ議ヲ開クニ付テハ大君主親ラ使臣ニ對シテ應答ヲ賜ハルカ又ハ大臣ニ全權ヲ委任セラレ大君主ノ面前ニ在テ會議スルカ此二者ノ中ニ就テ願クハ取捨ヲ給ヘト大君主乃チ大臣ニ全權ヲ委シ談判セシムヘケレハ其レト協議シテ妥結ニ至ランコトヲ庶フ旨ヲ諭サル臣又奏テ曰今使臣カ大君主ノ面

前ニ在テ會議センコトヲ請ヒシ所以ハ貴國ニ於テ事變ヲ生スル已ニ三
回而シテ使臣ハ前ニ江華島ニ來リテ商辨セシ時貴國ノ全權大臣ト談判
ノ間空シク時日ヲ費シタルニ懲リ今回モ亦或ハ然ランコトヲ恐ル、カ
故ナリ果テ大臣ニ委任アラハ其言フ所ノモノハ都テ大君主ニ代リ十
分ノ効力ヲ有スルコトヲ望ムナリ其委任セラル、大臣ハ誰ナルヤ願フ
ハ明日ニモ開談スルヲ得ント大君主之ヲ容レ且ツ委任ノ大臣ハ熟考
シテ之ヲ任シ速ニ通知スヘキ旨ヲ諭サル臣又奏シテ曰使臣是ニ一言
ノ奏スヘキアリ今回ノ事件ニ付テ貴政府ト我辦理公使ト往復セシ公
文既ニ具サニ之ヲ閱セリ殿下モ亦此公文ヲ基礎トシテ談判センコトヲ
望マレ此旨ヲ以テ大臣ニ委任アラハ使臣ハ實ニ之ニ應スル能ハス故
ニ預メ奏聞スト右ハ臣カ事變以來彼政府ハ幾分カ罪ヲ竹添公使ニ歸

シ此ニ據テ其責ヲ輕クシ以テ對等ノ論場ヲ占メント欲スルノ深意ナルヲ察知シタルヲ以テ臣ハ終始彼カ公文ノ主意ヲ以テ談判ノ基礎ト爲サントスルノ心計ヲ消滅セシメント欲シ已ニ趙秉鎬ニ對シテ此ヲ說キ今又大君主ニモ面奏ニ及ヒタリ

同七日午前左議政金宏集全權大臣ニ任セラレタルヲ以テ本日午後一時議政府ニ於テ會議スヘキ旨竹添公使ヲ經テ通知シ來ル臣期ニ及テ井上議官齋藤書記官一等屬松延珪御用掛武田邦太郎ヲ隨帶シ議政府ニ至リ金宏集ニ會シ先ツ其委任狀ノ抄本ヲ閱看スルニ中ニ京城不幸有逆黨之亂以致日本公使誤聽其謀進退失據館焚民戕事起倉猝均非逆料トノ語アリ臣因テ云フ委任狀中此等ノ文字アレハ必其事由ヲ論セサル可ラス互ニ疑惑ト想像ノ說ヲ以テ論セハ徒ラニ紛議瑣末ニ涉

リ竟ニ妥結ニ至ラサルハ必然ナルヲ以テ預メ趙督辦ニ告ケ又大君主
ニモ面奏シタル所以ナリ宜ク此等ノ語ヲ削ルヘシト金宏集謂フ此文
字ハ我ニ於テ頗ル貴政府ニ對シ意ヲ用ヒタルモノナリ誤聽其謀ノ四
字ハ竹添公使逆黨ニ誤マラルトノ意ニシテ進退失據ハ同公使京城ヲ
去リ仁川ニ赴キタルヲ言フト解説シ其實同公使ハ逆徒ヲ助ケタル者
ナレト誤聽ノ二字ヲ用ヒシハ即チ同公使ヲ回護シ我政府ヲ敬シタルモ
ノナリト云フ者ノ如シ臣又更ニ前說ヲ申チテ此文字アレハ先ツ其瑣
末ニ涉リテ推究セサル可ラス然レト之ヲ推究セントスレハ其証ナシ
其証ナクシテ徒ラニ貴政府ノ疑惑ト想像トヲ以テ論端ヲ開クニ於テ
ハ我レモ亦疑惑ト想像ト少ナカラス彼此之ヲ以テ爭ハ、何日カ了結
ヲ致サン到底其局ヲ結フハ腕力ニ委スルノ一法アルノミ我聖上ハ事ノ

此ニ至ルヲ欲セラレス故ニ本使ヲ派出セラレタルナリ貴政府ニシテ
終ニ悟ラレスンハ本使モ貴政府ノ提出スル論旨ニ基キテ開談スルヲ
辭セサルヘシ然レモ架空ノ紛議ヲ事トスルハ寧ロ事實ノ明ヲカナル
モノニ就テ辦法ヲ議センニ如カスト然ルニ彼レ尙ホ事變ノ顛末ヲ審
カニシテ而後ニ辦法ヲ議セント主張シ頗ル固執セリ而ソ臣ハ此レ其
手段ノ在ル所ナルヲ知ルカ故ニカメテ之ヲ破ンコヲ欲シ反覆辨論數
時ニ亘リ彼竟ニ大君主ニ奏シ其文ヲ改メ明後日ニ於テ再議センコヲ
請フ臣又徒ラニ曠日スルヲ得サルヲ説キ明日午前九時ニ於テスヘキ
コヲ約定シテ歸レリ

同八日午前九時昨日ノ約ヲ趁ヒ復タ井上議官齋藤書記官等ヲ帶同シ
テ議政府ニ赴キ金宏集ニ會ス彼レ委任狀ノ本書ヲ示ス臣之ヲ見ルニ

昨所論ノ語意已ニ盡ク削除シ他ニ議スヘキ文字ナキヲ以テ之ヲ可ナ
リトシ我ヨリ要求スヘキ約款ノ草案ヲ示シ且謂テ曰ク本使心ヲ貴國
ノ爲メニ費ヤスコ茲ニ年有リ近頃填補金還付ノ事ニ關シテモ亦大ニ
盡ス所アリ此要求ノ如キモ最貴國ノ情勢ヲ斟酌シ敢テ貴政府ノ負擔
ニ苦シムカ如キ難題ヲ提出スルニ非ス專ラ公平ヲ旨トシタルハ明瞭
ナリト雖モ尙貴官カ虚心ニシテ之ヲ査閱スルヲ望ムト彼レ之ヲ領シ
條ヲ逐テ議シテ公使館再建ノ項ニ至リ彼レハ其人民ノ燒クニ非スト
謂ヒ公使館ノ雇僕宋尙吉カ口供ニ館員自ラ書類ヲ燒クノ火延テ本館
ニ及ヒタルナラントアルヲ以テ證トス臣モ亦我自燒ニ非ル証跡ヲ舉
ゲ之ヲ駁スルノ際穆麟德告ケテ曰ク清國欽差大臣吳大澂來リ臣ニ見
エシコヲ請フト臣未タ此談判ノ席ニ入ルヲ許サルニ吳已ニ入來ル

臣其突爾ナルヲ訝リ其本意ヲ知ラサレトモ立テ握手シ且告ルニ本日ハ是朝鮮大臣ト案件ヲ議辨スルノ時ナルカ故ニ晤談ニ便ナラサルヲ以テス彼乃チ自ラ筆ヲ援テ書スル左ノ如シ

吳使者奉

命來朝、查辦事件、與政府有應議之事

貴大使來朝數日、渴欲一晤以遂仰慕之懷、即

貴大使與朝鮮政府商議之事、使者亦可叩其大略、所言公、公言之、此非貴大使、與金相國兩人之事也、

井使臣辦理事件、是據條約遵全權字樣、不宜草々了事、本使奉

命、一面查辦朝鮮事、一面與

貴國辦理兵營葛藤事、及善後事宜、但本日是據日韓條約、與朝鮮大

員晤商大事、俄與

貴使交涉、恐非事宜、又非本使所受

國命之旨、理合期他日相晤、

吳

貴大使向有公正之名、此次與朝鮮議辦要案、諒必秉公談議、本大臣極所欣幸、至本大臣所查各條、係朝鮮亂黨起事之由、本與貴國無干涉之事、凡兩國交涉議約、各派全權大臣、畫押蓋印、中國與

貴國和好已久、現無可議、故無全權字樣、如果

貴大使別有與中國商辦之事、即請畧示端倪、本大臣自當早日入奏請旨、另加全權字樣、方可商議、惟在此候

旨、非十日八日之事、所以本大臣不能不與

貴大使一見也、

於是臣吳ニ向テ曰ク已ニ全權ノ委任ヲ受ケ居ラサル以上ハ彼此權限
同シカラサレハ事件ヲ商議スル能ハス又其奏請シテ委任ヲ受ルノ間
日ヲ曠シテ之ヲ待ツヲ能ハス但シ私晤ヲ欲スルノコアラハ之ヲ他日
二期スヘシト吳復韓事ヲ問及ハントスルノ色アリ臣即チ左ノ意ヲ示
ス

本日喜與

貴使相晤、但至日韓事宜、本使與朝鮮大員辨議、

貴使偶來于此、語及韓事、本大臣不願互相干涉、

吳之ヲ閱シ筆ヲ援テ一書ヲ作り金宏集ニ與ヘ又兩國紛議ノ際間ニ居
テ調處スルハ各國ニ其例アレハ已レモ韓事ニ與リ聞カント欲スレモ
之ヲ許サレサレハ復タ強ヒサルナリ只朝員ト議セラル、ノコ公平ニ

妥結アルヘキヲ拭目シテ俟ツトノ意ヲ書シテ臣ニ示シ即チ回リ去ル
吳大澂カ第一書ヲ閱スレハ頗ル我ト朝鮮政府トノ議事ニ干預セン
ヲ望メリ然ラハ則チ何ソ其來ルノ唐突ナル何ソ相見ノ順序ニ因ラサ
ル外交ノ道ヲ知ラサル亦殊ニ甚シ臣實ニ憤懣ニ堪ヘサリシカ眼前朝
鮮政府ト談判ノ際更ニ枝節ヲ生センヲ慮リ一ニハ彼レカ日清之間
現無^レ可^レ議故ニ全權ノ字樣ナシト云フヲ以テ之ヲ察スレハ單ニ朝鮮
國王ニ係ルノ使節ト看做サ、ルヲ得ス全權ヲ有シタル使臣ニシテ權
利ナキ一個人ト議論ヲ開クハ反テ事体ヲ辱シメンヲ恐レ程ヨク
接遇ヲ爲シタリ吳大澂既ニ去ルノ後金宏集ニ請フテ吳大澂ノ書ヲ見
ルニ語意頗ル命令スル所アルカ如シ臣因テ彼レカ或ハ之カ爲ニ牽掣
セラレテ速ニ決定スル能ハス議事紛紜ニ至ルヲ察シ故サラニ疑問ヲ起

シテ曰ク吳カ書ニ就キテ推考スレハ朝鮮ハ獨立國ニ非スシテ清國ノ
屬邦ノ實アルカ如シ果シテ然ラハ我國ヲ首トシテ其他諸國ノ條約均
シク奇恠ナル性質ニ歸ス現ニ本使カ議スル所モ自カラ局面ヲ改メテ
先ツ貴國ハ果シテ諸國ニ屬スルヤ否ヤ此點ヨリシテ問起サ、ル可カ
ラスト云ヲ以テ飽マテ之ヲ詰リ彼レ再三再四議スル所決テ他國ノ干
渉ヲ受ケス且ツ直チニ今日ニ於テ決定スヘキコヲ辨解ス臣又詰テ曰
ク假令ヒ今條款ヲ議定スルモ貴政府ハ清使ニ乞フテ其允可ヲ得ルニ
非サレハ決定ニ至ラサルハ必然ナランサスレハ今日ノ議定ハ無効ニ
屬スヘシト金宏集決シテ左様ノ事ナキヲ誓フ於是始メテ前議ヲ續キ
テ公使館再建ノ項ヲ論ス彼レ其費額ヲ半減シ貳萬圓ト爲サンコヲ請
フ臣細カニ費途ヲ算シ尙其輕少ナルヲ說クニ彼亦其理ニ服シテ之ヲ

肯シセリ此時臣思フ新設ノ公館モ其實京城ニ於テ甚タ宏壯ナルヲ要スヘキニモ非ス彼レ已ニ折服セシ以上ハ我ヨリ彼内情ヲ酌察シ寛優ヲ加フルモ事ニ於テ妨ケナシト因テ該額ノ半ヲハ公使領事館ト爲スニ足ルノ家屋ヲ以テ之ニ充テ更ニ修築ノ費用トシテ半額ヲ出スヘシトノ便法ヲ與ヘシニ彼レ實ニ欣幸ノ情ヲ露ハシテ之ヲ謝シ即時我官吏ト其地ヲ擇定スヘキヲ以テ答ヘリ繼テ其餘ノ條欸聽ルスヘキハ之ヲ聽ルシ駁スヘキハ之ヲ駁シ午後一時ニ至テ大略決定ス臣因テ彼ヨリ送ルヘキ謝狀ノ草案ヲ示スニ彼ハ我稿ニ據ラス自カラ修メテ呈セント欲シ且必ス不妥ノ字句ナキヲ誓フ然ル一タヒ國璽ヲ鈐スレハ改ムルニ難キヲ以テ其草稿ヲ一見センコトヲ望ミ彼之ヲ諾ス後金宏集ヨリ其國ノ犯罪者金玉均等四名難ヲ逃レテ若シ我國ニ潜マハ捕拿交付ア

ヲシテ請ヒ且ツ其照會ヲ送ルヘキヲ述フ臣ハ本使本國ヲ出ル時尚
該犯等ノ來レルヲ聞カス然レモ照會ヲ送ルハ元ヨリ隨意ナリ但タ犯
罪者ヲ交附スルコハ尋常ノ犯罪者ヲ交付スルニ於テモ各國互ニ特別
ノ條約アツテ之ヲ爲スコヲ得假令ヒ該名等我國ニ在リトスルモ彼等
犯罪ノ性質ヲ明瞭ニ詳知シタル後萬國公法ニ照スニ非サレハ未タ明
答シ能ハサルナリト答ヘタリ於是臣ト朝鮮政府トノ談判全ク議定ス
ルヲ以テ明日午後一時議政府ニ於テ互ニ調印スヘキヲ約シ大君主ヘ
謁見ノ期ヲ訂シ歸ル同日島村書記官ニ命シ此日ニ至ルマテノ事情ヲ
報告ノ爲メ歸朝セシメ近藤書記官ヲ假ニ外務書記官ニ任シ京城ニ在
留セシム

同九日午後一時井上議官近藤齋藤兩書記官以下ヲ帶同シ議政府ニ到

リ約書ニ調印シテ互相交換シ謝狀ノ草案ヲ閲シ之ヲ議定シ又彼政府
ト竹添公使ト往復シタル照會及啓文ノ此事件ヲ論辨スルニ係レルモ
ノハ彼此互ニ徼回スヘキヲ約シテ歸ル同日高島陸軍中將ト商議シ護
衛兵二大隊ノ内一大隊ヲ京城ニ留メ我公使館ノ護衛ヲ命シ又竹添公
使ニ歸朝ヲ命シ同公使ハ近藤書記官ヲ臨時代理公使タラシム

同十日午後一時竹添公使及隨員ヲ帶同シ復タ樂善堂ニ於テ大君主ニ
謁ス臣先ツ會議ノ平穩ニ完結セシヲ賀シ又辭別ノ意ヲ奏ス大君主懇
ロニ慰問アリ更ニ臣カ歸國ノ日我聖上ノ御安寧ヲ祝シ奉ルヘキヲ囑
セラル而後隨同ノ諸員亦皆次ヲ追テ謁見シ畢テ拜別ス此夜金宏集ヨ
リ罪人交附ノ照會ヲ送ル因テ其照復ヲ作り近藤臨時代理公使ヲシテ
明朝ヲ以テ之ヲ彼政府ニ致サシム

同十一日午前七時臣一行ヲ率ヒテ京城ヲ發シ仁川ニ回ル大君主及政府ヨリ送行ノ禮頗ル懇懃ナリ此日井上議官ヲシテ吳大澂ノ處ニ到リ同人カ臣ト談判スヘキノ權ヲ有セス又臣カ歸朝ヲ急クヲ以テ面會セスシテ去ルノ意ヲ通シ而後京城ヲ出テシム

同十二日午前十一時濟物浦ニ於テ磯林陸軍大尉及京城遭害者ノ靈ヲ祭り同日午後四時汽船近江丸號ニ坐シテ仁川ヲ發シ同十四日午前九時下ノ關ニ抵リ同十六日第十四聯隊ノ護衛ヲ解キ小倉ニ歸ラシム日清ノ關係ニ於テハ臣素ヨリ委任狀ニ遵ヒ清國派遣ノ大臣ト商議シテ葛藤ヲ妥結シ并ニ善後ノ事宜ヲ辨理シ永遠ニ事端ヲ防止センコトヲ望ミシニ不幸ニシテ清國派遣ノ大臣ハ我國ト商議スルノ全權字樣據ヲ有セズ而シテ其筆談スル所ニ據ルトキハ兩國ノ間現無可議故無

全權字樣ト云臣其日清關係ノ大事ヲ商議スルノ資格ヲ備ヘザルヲ知
 リ彼ト談判ヲ開キ往復延留スルモ結局ヲ得ヘカラザルノミナラス却
 テ事機ヲ漏シ時日ヲ失ヒ以テ使命ヲ辱ムルニ至ルノ必然ナランコト
 ヲ察シ即チ意ヲ決シテ歸途ニ就キ彼レト相交渉セズ又隨員ヲシテ略
 ヲ我カ意ヲ致サシメ彼レト相絶タザルノ意ヲ示シ以テ後日ノ爲ニ寬
 猛自由ナルノ餘地ヲ爲スノ針路ヲ取リタリ
 右謹テ復命候也

明治十八年一月十九日

特派全權大使伯爵井上馨

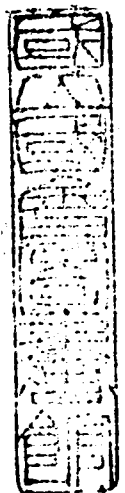
259484

//

昭和26年11月6日

井上特派全權大使

復命書附屬書類



逕啓者現因我

特派全權大使晉京、其所帶護衛兵及隨員、如遇有京城諸門及沿路各處看守巡捕兵員等、阻攔以致惹起重大事端亦難料、即希

貴大臣預先嚴飭京城諸門及沿路各處看守巡捕兵員等、勿得有阻攔爲要、肅此順頌

日祉

明治十八年一月初三日

竹添進一郎

趙督辦閣下

十八年一月三日接

逕覆者、敝處沿江駐紮之兵、昨日午時已行撤回、業經函明于

貴國近藤書記、尙未入

聞、而又有此

示耶、此復順頌

日祉

甲申十一月十八日

趙秉鎬

竹添公使閣下

逕啓者、據聞、麻浦哨兵往々有阻瀾日本人通行、甚屬不合、現因我
全權大使晉京、其隨員及兵員、如遇有此等事、即當臨機處之、即請
貴政府速飭沿路各該管、領悉此意爲要、端此順頌

時祉

明治十八年一月三日

竹添進一郎

趙督辦閣下

逕啓者、昨由本大臣派穿日本制服之警部岡田箕之助、巡查手塚良太郎、命其帶同朝鮮通事一人、旗手一人、役夫三人前往我公使館、查勘焚燒景像、并查驗死屍、不料該員等、甫入敦義門、有 貴國兵丁五、六人、當門攔阻、內二人拔刀叱咤、時有若武弁者出來、以言語不通、掌上指寫教通詞來四字、該員等無奈、令通事歸我館、告以此事情、其時 貴國兵丁五、六人、以鎗劍插鎗漸集、加至十三、四、人、先者舉刀相向、後者裝鎗丸、各々前來、將鎗劍撞岡田及手塚之身體、二人閃身避之、則一兵丁已向岡田發鎗、幸而不得、岡田亦不得已拔刀自衛、然鎗口蠟集向身、萬難前進、遂歸館稟情、本大臣不知 貴國兵丁向我警部巡查所爲抗拒如此、是據何等事理而致然乎、請

貴軍門、速行查覆可也、肅此順頌

日祉

明治十八年一月三日

弟竹添進一郎頓首

哀 吳 張

大人閣下

明治十八年一月四日接

兩奉

來書、俱已誦悉、所說吉松豐作、爲南陽巡丁所縛、當即飾查、茲據該丁金稱、沿途土民、爭欲戕殺、恐其自逸、反受其害、繫以小繩、所以欺土民之耳目、不至加害、而使其歸伍也、因事冗忙、故未布答、至巡查勇丁駐守小西門、亦恐土民滋事、隨時彈壓、並非有所阻攔、來示各節、殊爲詫異、已將該勇撤回、查訊懲辦矣、此復即頌

台祉

竹添公使大人閣下

袁世凱

弟吳兆有頓首

張光前

子月十九日

明治十八年一月四日接

逕復者、頃接

來函、攀悉壹是京城諸門、及沿路各處、看守巡捕等處、業經節知、似無阻攔
滋事之理、須勿

致慮可也、端此復頌

日 祉

甲 申 十一月十八日

趙 秉 鎬

竹添公使閣下

一月四日午前十時過統理衙門督辦趙秉鎬來訪大使ト談話アリ左ノ通

淺山顯藏通辨筆記

大使曰當度本使渡來致候ニ付テハ貴政府ノ御厄害不尠且旅館ノ御設
ケモ十分ニテ何不自由ナク安着罷在候段鳴謝ノ至ニ候

趙曰當監營ヲ御旅館ト相定候義實ハ我政府モ特別ノ欸待ヲ以テ監
司ヲ他ニ移シ候義ニ付此邊ハ御承知被下度乍併何分急ナル事ニ
テ修理等モ行届兼予房屋ノ不潔ナル等甚タ不安存候

大使曰本使モ濟物浦ニ在テ四五日ノ猶豫ヲ爲シ進京致ベキ義ニ候得
共此度本使之渡來致タルハ實ニ兩國ノ交誼ヲ存スルト否トニ關ル一
大事ノ時ニシテ我

皇上ニモ深ク御念慮アラセラレ本使モ内國ニ在テハ隨分繁務ニ與カリ居候得共其内務ハ捨置キ此度事件ノ結局ヲ速ニ取纏ヨトノ命ニ依テ渡溟致タル義ナレバ一日モ猶豫ナク進京致タル義ニ候就テハ此度事件ノ好局ヲ結ブコハ只ニ貴政府ノ御考ニ據ル事ニ候

趙曰素ヨリ貴政府ト我政府ノ間ニ於テハ何モ事アル義ニ無之隨テ兩國ノ交際ニモ決シテ關係アル義ニ無之ト存候

大使曰貴督辦モ御承知ノ事ナガラ假令久敷キ交際國ト雖モ一旦事有ルキハ忽チ兩間釁端ヲ惹起スコハ古例不鈔コニシテ強チ貴國ト我國ノミニ限ルコニ無之候

趙曰兼テ御威名ハ我國迄モ轟キタル義ニテ此度貴大使ノ御渡着ヲ承ルヤ我政府ノミナラズ一般安堵ノ思ヒヲ爲シ必ス公平ナル御

處置アルトト歡喜ニ堪ザル義ニ候

此時政府ノミナラズト云語ノ内ニハ國王ト云ヲ大ニ含ミタ

ル云ヒ
振リ也

又曰貴大使ニハ是迄御往復致シタル公文ハ逐一御覽被成候哉

大使曰素ヨリ委細閱了セリ然ルニ本使ニ於テハ是迄往復アリタル公文ノ意ヲ引續ヒテ御談判可申義ニ無之候抑是迄ノ公文ヲ見ルニ總テ貴政府ハ自己ノ疑惑ヲ以テ自己ノ勝手計ヲ申越サレタルモノニシテ決シテ政府ト政府ノ往復スベキ公文ニ無之候若シ貴政府ガ右公文ニ據テ事ヲ談ゼラル、トナラバ我使事ハ夫ニテ事濟タル義ニテ他ニ一言スルコトモ無之候

趙曰何レ追々ト我政府へ御談判可相成義ト存候乍去今日兩國間ニ於テハ決シテ事無キ義ト存ラレ候

大使曰貴國ニ於テハ決シテ事無トセラル、モ我國ニ於テハ之ヲ事無
シト認メザルモハ則チ兩國事有ルナリ故ニ貴政府ニ在テ我請求ニ應
ゼラレザルモハ後來如何ナル結局ヲ見ルモ豫メ期シ難キヲニシテ則
和好ノ成否ハ貴政府ガ我求ニ應セラルハト否トニ據ル事ニ候免角本
使ニ於テハ何卒兩間ノ和好ニ至ルヲ偏ニ企望致ス義ニ候

趙曰誠ニ願フ處ニ候

右ニテ一段畢

大使曰本使大王殿下へ謁見ノ義ニ付テハ本日竹添公使ヨリ御照會致ス
筈ニ候得ハ貴督辦ニ於テモ可成速カニ謁見被仰付候様御周旋有之度候
趙曰御照會相成候上ハ可成速ニ謁見相成候様奏上可仕候

右

一月六日樂善堂ニ於テ謁見禮式相濟タル後井上大使朝鮮國王ト應答
左ノ如シ

淺山顯藏通辨筆記

大使曰日本使我國ニ在テハ國事ノ緊要ニ關シ候身分ニテ實ニ繁忙ノ内
ニ奔走致候者ニ御座候然ルニ我カ

大皇帝ハ此度ノ事件ヲ聞召サレ御憂慮ノ餘リ國事ノ多端ヲ打置キ朝
鮮國ニ到テ事件ノ結局ヲ速ニ取纏ヨトノ命ヲ奉シ來着致候就テハ
此度ノ談判ヲ開クニ當テハ

大君主御直ニ本使ニ對シ御應答被下候カ又ハ大臣ニ全權ヲ御委任ア
リテ

大君主ノ御目前ニ於テ會談仕ルカ右兩様ノ間 聖意ノ在ル所ニ任セ
度奉存候

國王曰此度事件ノ談判ニ付テハ自カラ余カ信用スル處ノ大臣ニ全權
ヲ委子談判セシムベキ筈ナレバ貴使ニモ該大臣ト協議アリテ速ニ好
局ヲ取結バレンコヲ望ム

大使曰本使ガ 大君主ノ御目前ニ於テ開談致サンコヲ奏請致セシ譯
ハ貴國ニテ生シタル變亂此度ニテ三度ニ及候本使モ既ニ前年江華島
迄派遣サレタル大臣ノ一人ニシテ當時貴國全權大臣ニ談判致タルキ
大ニ時日ヲ空過致セシ事有之候ガ爲メ今般ノ談判モ空シク此地ニ滯
在致サンコヲ恐レテ請奉リシ次第ニ候依テ明日ヨリハ是非開談致サ
ンコヲ企望仕候大臣ハ誰ニ御委任相成候ヤ

國王曰素ヨリ明日ニテモ開談ノ手筈ニ取計フベシ全權大臣ハ篤ト勘考ノ上人ヲ撰ミ通知スヘキナリ

大使曰今茲ニ一言奏上致置度事柄ハ此度事件ニ付貴政府ト我カ公使ト往復ニ及タル公文ハ詳細閱見致候然ルニ若シ右公文ノ主意ニ基キ談判スヘシトノ旨意ヲ以テ御委任相成候時ハ本使ハ其御談判ニ應シ難ク候是等ハ御委任在セラルベキ前ニ先チテ其大旨ヲ奏上仕候義ニ候

國王曰夫等ノ事柄ハ談判ニ及バ、自カラ判然致スヘキ義ナリ

金宏集 委任狀寫

大朝鮮國

大君主、爲勅諭事、本國於本月十七日、不幸有逆黨之亂、以致日本公使館焚民戕、事起倉猝、均非逆料、乃承

大日本國

大皇帝惠顧邦交、簡派全權大使伯爵井上馨前來商辨茲舉、朕所信重倚毗之議政府左議政金宏集、特派爲全權大臣、會同日本國全權大使辨理一切事宜、乃委任以便宜行事全權也、故於此事、與朕親臨面商無異、此爲憑據、

開國四百九十三年朕即位二十一年十一月二十二日於漢城昌德

宮親書押鈐國寶

大君主

奉

敕 議政府領議政沈舜澤

十八年一月七日午後一時ヨリ於朝鮮國京城議政井上大使ト朝鮮國全權委任大臣金宏集ト對話大意

通辨武田御用掛

筆記松延外務一等屬

井上參事院議官

齋藤外務秘書官

統理衙門督辦趙秉鎬
交渉通商事務

統理衙門協辦穆麟德
交渉通商事務

一應寒暄套話畢
外ニ朝鮮政府ノ爲筆記者二名アリ
談判ノ顛末ヲ筆記ス

大使 御委任狀ヲ出示シ彼ノ委任狀ヲ見シヲ求ム

金 拙者委任狀ノ寫ハ趙督辦ヨリ差上タルヲ御覽相成リシヤ

大使 未タ一覽セス公使ヲ經テ御廻致相成リシヤ

金 然リ

大使 若外ニ其寫等アラハ拜見致シタシ

金 多分差上タル抄本ヲ御覽被成候事ト存シ此處ヘハ持參致サス

公使館ヘ取りニ遣シタリ即時來ルヘキナレハ御談判ノコアラハ御

申聞アルモ妨ケナシ

大使 此等ノ事變ヲ談判致スニハ必其初メニ於テ御互ニ委任狀ヲ閱

シ而後開談スルヲ萬國ノ常例トスレハ左様致シタシ

金 御尤ナリ拙者ハ先般モ條約取結ノコヲ取扱タレ其節ハ互ニ

寫ヲ閲看シ捺印ノ日ニ本書ヲ出シ示タル故ニ今日其積ニテ持參セ

サリシ直ニ御目ニ懸ケヘシ

大使 諸

金 委任狀ハ是非御目ニ掛ケ申スベケレ共拙者大君主ヨリ全權ノ命
ヲ受クルコトハ相違ナケレハ御話ハ有之ヲモ差支ナカラシ

大使 委任ノ權限相ヒ當ルヤ否ヲ確カメサル間ハ御話致スマジ

金 拙者ヨリ一言申上タシ

大使 此事件ニ付貴下ヨリ開談セント云ル、ヤ

金 然リ

大使 然ラハ暫ク待タルヘシ御互ニ先ツ爲スヘキノ定式アレハ其ノ
事ヲ濟マシテ後御談判ニ及フヘシ

金 然ラハ其間御閑話可致

大使 支那兵ハ何程居ルヤ

金 城内ニハ千四百人程ナリ

大使 城外ニハ幾千ナルヤ

金 従前ハ居ラサリシカ此比來リシモノ少々馬山浦ニ駐在セリ
此時彼レノ委任狀ノ寫ヲ持來ル

大使 取テ之ヲ閱ス中ニ京城不幸有逆黨之亂、以
致^ス日本公使誤^テ聽^キ其^ノ謀進退失^シ據^ヲ館焚^{カレ}民^{ハム}戕^{コラ}事^ニ起^リ
倉^ニ猝^ク均^ク非^ス逆^{シメ}料^{リシニ}ノ語アリ

大使 前日趙督弁ニ委シク御話イタシ又大君主ニモ畧申上置タル通
互ニ想像ノ說ヲ逞クスレハ事ヲ理シ難キナリ此委任狀中此等ノ文
字アリテハ是非其事ヲ論セサルヘカラス然ル^ルハ論端紛起シテ談
判ヲ纏メ難シ故ニ此等ノ字面ハ削除セラレタシ

金

此文字ハ貴政府ニ對シ頗ル心ヲ用ヒタルモノナリ何トナレハ
此誤聽其謀ノ四字ハ竹添公使逆黨ニ誤マラレタリトノ意（實ハ其謀ヲ助クト
カ何トカ云フヘキ所ナレモ日本政府ニ對シテ如此回護セリト云フ意ノ如シ）進退失據トハ同公使京城ヲ去
リ仁川ニ赴キタルヲ云フナリ同公使ノ事ハ追々御談話ノ内ニ段
々ニ分ルヘシ

大使 誤聽云々ノ字ヲ存シ置ケハ果テ其事實如何ヲ取調ヘサルヘカ
ラス是ハ詰リ貴政府ノ想像ニ據ルモノナレハ其想像說ヲ以テ主張
セラレハ我モ亦想像說ヲ出スヘシ如此互ニ相論セハ事ノ治ルヲナ
ク其極點ハ腕力ニ委スルノ一法アルノミナリ我政府ハ事ノ此極ニ
至ルヲ欲セサル故ニ拙者ヲ派出セラレタリ然レモ御望ミナレハ敢
テ避ルニアラス

金　誠ニ大使ノ全權ニテ來ル、ハ貴皇帝ノ和好ヲ主トセラル、ニ
因ルナルヘシ然レ其顛末タケハ御話致サ子ハ大使モ御承知ナキ所
アルヘシ故ニ御談判ノ前ニ於テ先其事ヲ御話致シ其後眞ノ御談判
ヲ致スモ晩カルマシト存ス但此事ハ一場ノ坐話ト御聞キ相成テモ
苦シカラス

大使　先能ク場合ヲ考ラレヨ變亂中ノ手續ヲ貴官等ノ想像疑惑ヲ以
テ説話ストナラハ拙者ニモ疑惑ノ點數多アリ然レ想像疑惑ヲ以テ
談判ヲ爲サント欲スレハ決テ妥議ニ至ルノ道ナシ遂ニ此禍ハ日韓
兩國ノミニ止マラスシテ清國ニマテ推及フヘシ故ニ先ツ大体ノ談
判ヲ結了シテ後其等ノ御話ヲセラレントナラハ私席ニ於テ承ルヘ
シ強テ此事ヲ先キニ言ハレントセハ拙者ハ必ス其纏リノ付カサル

ヲ保証スルナリ何トナレハ今モ申ス通り互ニ想像説ヲ以テスレハ徒ラニ多端ニナリテ限りナキコナレハナリ

金 御尤ノコナリ拙者モ決テ事ヲ多端ニナシタキニハ非ス只双方ニ疑ノ在ル所ヲ吐露シ渙然氷釋シタル上ニテ御談判致サハ一層好キコト存スレハナリ

大使 御好ミナラハ御話致スモ可ナリ然レモ如此ナレハ到底結局シ難カルヘシ相互ニ想像説ヲ以テスレハ際限ナシ然ルモハ貴國大君主ニモ此處ニ御出ヲ願フニモ至ルヘシ左様ニテハ到底妥議ノ時ナカルヘシ

金 大使公平ノ御論ハ篤ト承知致シ居ルナリ然レモ今モ申ス如ク御互ノ腹中ニ釋ケサルコトノ有ル限りハ譬ヘハ腫物ニウミノ有ルカ

如ク其ウミヲ出シ盡シテ後御話ヲマトメナハ双方ノ情思爽快ニシ
テ永ク和誼ヲ保ツノ道ナラン故ニ拙者ト大使トノ胸中ヲ打開キタ
ルニ致ス方然ルヘキナリ

大使 度々申スモ同シナレト貴政府ニ疑アレハ我ニモ疑アリ之
ヲ互ニ打出シテ纏マラヌ様ニスレハウミヲ出シテ腫物ヲ癒ヤスニ
非スシテ却テ其腫物ヲ大キクスルナリ疑惑ト疑惑トヲ主張シテ事
ヲ纏メ損シタル例ハ各國ニモ至テ多シソレニモ拘ハラヌ破裂ニ至
ルヲモ測ラスシテ強テ望マル、ナラハ拙者モ其積ニテ御談話致ス
ヘシ

金 大使ノ其説ハ疾ヨリ分リ居レリ但拙者ノ未タ解セサルハ腫物ヲ
治スルハ名醫ノ術ヲ藉ラサルヘカラス拙者ハ互ノ疑ヲ解クニ非サ

レハ談判纏マルヘカラスト思考スル故ニ互ニ之ヲ氷釋スルヲ得タル後妥當ノ御商議ニ及ヒタシト存スルナリ我ヨリハ已ニ大使ヲ派シ貴國ニ赴カシメントスル際貴大使ノ來ラル、ニ付大ニ悦喜シタリ大使已ニ此ニ來ラルレハ必ス辨理セラル、事アルヘシ然レハ双方談話ヲ盡クシテ後之ヲ議スル方尤モ可ナラスヤ

大使 拙者ハ反對ナリ先ツ談判ヲ適當ニ結ヒタル後ニ只一場ノ話ニナストナレハ不可ナケレモ先ツ想像ノ話ヲナセハ事六ヶ敷ナルノミナリ即チ貴政府ヨリ大使ヲ我ニ派セラル、トニ付テモ拙者ハ大ニ疑惑スル所ナリ然モ言多岐ニ涉レハ姑ク言ハス此事スラ拙者ハ疑アル程ナレハ御互ノ想像說ヲ出サス先ツ談結ヲ望ムナリ談結シタル後ニ至リテ何事ナリ笑ヒ話シニセラル、トノトナレハ少モ差

支ナキナリ

金 拙者ハ始終ノ御話ヲ致シ御互ニ心ヲサツバリトシテ御談判ニ
及ヒタシト存スルナリ

大使 拙者ハ之ニ反對ナリソレハ前ニ申ス所ノ如シ

金 拙者ハ順序ニ隨テ御談話致サンコトヲ望メリ始メヲ捨テ、終ヲ
ノミ理メントセハ却テ事ヲ纏メ難カルヘシ願ハクハ順序ヲ追ヒタ
シ

大使 御望ミトアレハ左様致スヘシ然レ纏マラサルハ請合ナリ只其
積リナレハ其用意ヲ取カカラシ故ニ此談判ハ是マテニ止メ更ニ
日ヲ改メテ開談スヘシ

金 只拙者ハ順序ヲ追フ方可然ト存スルノミ

大使　モハヤ多言スルニハ及ハス強テ其説ヲ主張シ是非順序ヲ貴官
ノ云ハル、通ニセヨトカ又否ラサルカ其決答ヲ承ルヘシ

金　左様ニ御話下タサル處ニアラストニカク今日ハ遅クモ相成タ
レハ尙御再考ノ上明日カ明後日ニ於テ御都合次第御來臨下タサレ
タシ

大使　拙者ハ左様ナル不決斷ノモノニ非ス別ニ再考スル所ナシ只貴
官ノ御決答ヲ承リタシ

金　拙者大君主ノ命ヲ承ケタルモ其處マテニハ至ラス一應大君主
ニ申立タル上御談判仕ルヘシ

大使　然ラハ何ソ全權ナリト申サル、ヤ

金　只始メハ異論アリトモ終ニハ妥結ニ歸セシムルヲ委任セテ

レタリ

大使 如此自ラ決スルヲ能ハサレハ何ゾ全權ナラン拙者ハ只談判ヲ
貴官ノ云ハル、通ニセ予ハナラヌトカ成ルトカ云フ決答ヲ承ハレ
ハ夫ニテ足レリ

金 拙者全權ノ委任アレモ未タソコマテニハ至ラスタトヘ大君主
此ニ在ルモ一々親裁スルヲ難カルヘシ免ニ角明後日マテ御待下サ
レタシ

大使 拙者ハ如此空シク日ヲ費スヲ能ハス拙者ハ甚タ繁忙ノ身ナレ
ハ今日其決否ヲ承ハルヲ望ムノミ

金 御繁忙ノコハ昨日以來十分ニ承リ居ル所ナレハ強テ曠日ヲ好
マス然ラハ明日御出ヲ願ヒタシ

大使 明日何時ナリヤ

金 毎日御足勞モ恐縮ナレト明日又此時刻ニ願ヒタシ

大使 拙者ハ種々ノ用向アリテ實ニ一刻モ惜キ所ナレハ明早九時マ
テ待ツヘシ其時ニ又此ニ來ルヘシ

金 九時ニテハ甚困却ナリ何トソ十二時マテニ願ヒタシ

大使 此談判ノ結末ニ因リテハ兩國干戈ニモ及フヘキモ測リ難キ程
ノコヲ辨スルニ此位ノコハ出來ヌコナカルヘシ御承知ハアルマシ
キナレト我邦ノ人心ハ甚憤激シ居レハ此處ニテ一步ヲ誤マテハ直
チニ決裂ニ至ルヘキ勢ナレト拙者ハ何卒平和ニ致シタクト望ム故
ニ談結ヲ先ニシ其他ノ御話ヲハ後ニ致シ度ト申セト御決シナサラ
ヌナレハナサラヌトシテ御暇ニ致スヘシ

金 兩國ノ大事ナレハ三時ノ間位ハ如何トモ致シ明朝九時ニ御出

ヲ願フヘシ

大使 然ラハ承知致セリ

疑似ヲ以テ人ニ及ホスハ甚タ不好御互ニ不愉快ノ事ナリ拙者ハ平和ヲ望ミ居ルモ事ニ因リテハ此精神ト反對スルニ至ルヘシ先年花房公使ノ御談判致タルキハ同シ使臣ナレモ拙者外務卿ニテ其後ニ居テ萬事指令致シタレハタトヘ決裂セントスルモ拙者向彌縫ノ道アリタレモ今般拙者ハ此全權ヲ委任セラレテ來リタレハ此ニテ破裂スレハモハヤ綢繆ノ道ナキナリ此處ヲヨク／＼思ハルヘシ

金 和平ノ御精神ハ詳細承知致シ居レリ拙者モソレハ御同様ノ

ナリ

右ニテ談判一應畢リ尙一二說話ノ間彼大臣等委任狀ノ字面ヲ削除ス
ルノ商議ヲナシ居ルヲ以テ大使ヨリ齋藤秘書官ヲシテモルレンドル
フニ言ハシメテ云彼此共ニ想像ノ說ヲ以テ押張ラハ誰レカ之ヲ裁判
セシ先ツ試ニ互ノ位地ヲ以テ考ヘヨ我ハ客ニシテ韓庭ハ主ニアラス
ヤ我此ニ來ツテ主ニ請フ所アラントス主ハ客ノ請求ニ付テ論駁スル
所アラハ宜ク論駁スヘシ未タ其本文ニ至ラサルニ其前ノ瑣事ヲ以テ
如此論辨スルハ亦愚ナラスヤト金之ニ因テ大ニ大使ノ主意ヲ領解シ
不都合ナル字面ハ削除スルニ決シ今夜中ニ國王ニ奏上シ改メ置ヘシ
ト對ヘタリ

右ニテ此日ノ該判畢リシヤンパン杯ヲ舉クルハ大使韓官ニ向テ曰試

ニ思へ今日此一事スラ論判スレハ如此時間ヲ費スナリ況ヤ前ヤノ事
ヨリ論シ起シ來リ互ニ想像疑惑ヲ以テ論駁シ居ヲハ此談判何ノ時ニ
カ結局ニ至ルヘキ然レハ明日ハスヘテ小事ノ談論ヲハ打捨テ肝要ノ
點ヲ議シ速ニ結了ヲ致シ而シテ互ノ異心ヲ去リテ快ヨク我ヨリ望ミ
テ此ノシヤンピンヲ飲マンコヲ希望スルナリ

金曰 拙者亦然リ故ニ此杯ハ明日ノ喜杯ヲ豫メ祝シテ此ヲ飲ムヘキ
ナリ

一月八日午前九時ヨリ

井上大使於議政府與金宏集談判大意（彼）陪坐如昨（通辨筆記如昨）

一應寒暖畢彼委任狀本書ヲ示ス

金曰 是ニテハ如何ニ有之ヤ

大使 一讀昨日所議ノ字面ヲ削除シアルヲ以テ可然ヨシヲ答ヘ更ニ

我約欸ヲ出シ彼ニ示シ

大使 事實ニ付テ貴政府ニ御談判可致件々ハ此通ニ候

金以下瀏覽

大使 拙者ハ此事ニ關シテ貴官ノ最虚心ニテ御勘考アルヲ希望セ
リ拙者ハ從來貴國ノ義ニ付テハ盡力致居詳細ハ姑ク置キ彼ノ四十
萬圓ノ事ニ付テモ相應ニ心ヲ盡シタリ然レハ此條欸ノ如キモ他ノ

費用等ハ算セス全ク已ムコヲ得サルモノ、ミヲ數ヘ專ラ公平ヲ旨ト致シタリ御熟覽ノ上ハ自然御分リ相成義ト存スレモ尙御注意有之タシ貴政府ニ對シテ難題ト申スワケニハ決テ無之御承諾難相成トハ存セサルコナリ

金 敝國ノコニ付テ大使ノ兼々御盡力相成居事ハ委曲詳悉罷在レリ事件三回ノ内一度ハ花房ナリシカ二度ハ大使ノ御辨理相成リシコニテ又彼填補金ノ義ニ付テハ別テ御費神ヲ以テ御返却相成タルコナレハ此度ノコニモ償金等ノ御話ハ有之間敷カト存シ居レリ

大使 填補金返還ノ事ハ彼レ此レト情實ヲ斟酌シテ左様相成シカ此度ハ別ニ事件ノ生シタルニ付テナレハ又格別ノ相違アルコナリ且先年ハ死亡者モ十三人程ニテ此度ハ商人ノミニテモ廿九名ノ死亡

ナリ人民政府ハ保護ノ責アルコナレハ人民ニ對シテモ此事ヲ空シク
致シ難シ元來人民ヨリハ十分ノ高ヲ申立タレト拙者ハ飽マテ精査
ヲ加ヘ聊モ証據不明了ナルモノハ之ヲ除キ然ル上ニテ商民ノ損害
ヲ約ソ五萬圓ト積リ其他ハ賑恤金等ヲ算セシノミ是ヲ前年ト比較
スレハ其實際ノ處御明瞭ナルコト存ス決シテ難題ニハ非サルナリ
金 決シテ十一萬ノ高ヲ多シナソト申スワケニ非ス今申セシ所ハ
大使ノ曾テ御盡力アリシ處ヲ謝シタルマテノ意ナリ拙者モ此條款
ニ對シ夫々御話致スヘシ

大使 諾

金 茲ニ一ツノ願アリ大使ニモ前ノコハ言ハスト仰セラレタリ此
第二條ノ兵民ノ文字ハ人民ト改メシコヲ乞フ

大使 文字ノコ何レトモ致スヘシ 即人民ト改ム

金 又償補ノ償ノ字ハ填ノ字ニ先年モ改メタリ是モ願ヒタシ

大使 夫等モ容易ノ事ナリ 即填補ト改ム

金 磯林ノコニ付テハ敝國ニテ貴國ニ對シ御氣ノ毒ハ申スマテモ

ナク大君主初メ我々ニ至ルマテ誠ニ遺憾ノ至リナリ同氏ハ大君主

ニモ大ニ信用アリシ人ナリ變亂ノ時ハ尙ホ無事ニテ外出中ナリシ

因テ他ノ道ヨリセヨト通知セシニ運命ノ拙キ所カ南ノ道ヲ經タル

故ニ竟ニ殺害セラレタリ

大使 同人ノコヲ大君主ニモ夫程ニ思召サル、トノ趣ヲハ我聖上ニ

モ申上ヘシ彼レハ武官ナレハ自然其榮譽ヲ保タンコニノミ傾キタ

ルモノナルヘシ

公使館ノ事ハ何レノ國モ同様ニテ大ニ其國ノ体面ニ關スルヲナレハ是ハ最モ御承諾アルヘシ

金 磯林ノ事ハ貴方ノ憤リモ我國ノ憤リモ同様ナレハ必相當ノヲ爲スヘシ

公館ノヲハ少シク御話アリ敝國人民ノ焼タルヲ証跡アレハ敝國ニテ償フハ元ヨリノヲナレモ反テ我國人ノ焼カヌト云証跡コレアレハ夫ニテ御承知下タサレ何分此條ハ御免アリタシ

大使 其証據ト申スハ何ナリヤ拜聽致タシタシ

金 即チ是ナリト一紙ノ書付ヲ出ス

大使 取テ之ヲ閱ス即チ我公使館ニテ使用セシ宋尙吉ノ口供ニテ始メニ朴泳孝金玉均等ノ服ヲ變シテ公使ト共ニ仁川ニ赴キタルヲ云

ヒ中ニ公使館ノ文書ヲ石油ヲ灌イテ之ヲ燒ケリ其火或ハ延テ公館
ヲ燒シナラント云ヒ終ニ復タ朴金等ノ仁川ヨリ日本ニ赴キタルコ
等ヲ云ヘルモノナリ

大使 是ハ小使位ノ申事ニテ據ルニ足ルモノナラス此前後ノコ等即朴金

ハ我國人ヲ遍ク取調フルニ誰モ知リタルナシ又書類ヲ燒タルハ前
日ノ事ニテ公使以下ノ館ヲ去リタルヨリ其時刻ヨホト隔タリタリ
又後ニ聞ケハ館内ヲ焚草ヲ堆フセシトノコモアリ又公使以下麻浦
ニ至リテ黑煙ノ上リシヲ回顧シテ公館ノ焚カレタルヲ察シタル等
貴國人ノ燒タルニ相違ナキナリ然レモ互ニ証據ダテシテ論スル所
ハ際限ナキニ至ルヘケレハ最初ヨリ種ヤノコハ取除ケント申セシ
ハ此ヲ云フナリ

此時清國使臣吳大澂來リテ大使ニ見エシヨヲ請フニ因リ暫ク談判ヲ
停メ之ヲ接見シ約ソ 時許ニシテ回リ去ル

大使 吳ノ來ルハ何ノ意ナルヲ知ラス我レ往カス彼レ來ラス中間ノ
地ヲ擇ヒ此處ニ於テ我ニ面スルカト思ヘリ然ルニ其容ヲ見ルニ只
貴官ニ對シテ云フ所アルカ如シ貴國ハ皆清國ノ指令ヲ受テ而後談
話セラル、ヤ然ラハ兩國ノ條約ハ可笑キモノニ非スヤトノ感ヲ起
セリ

金 彼レ此事ニ關シ何ノ故ニ來ルト云フ處ナキナリ

大使 明ラカニ見タリト云ニハ非サレモ吳カ書キテ差出シタル者ハ
貴官ノ受ケ居ラル、所ノ全權ノ上ニ命令スルモノアルカ如ク思ハ
ル然ラハ段々御談判申ス處モ亦可笑キモノナリ

金 彼レ何ト思フテ言ヘルカ拙者モ其事トハ知ラス彼レノ來リシ

ハ此處ニテ貴大使ト談判中ナルコハ知ラサルカ全ク私事ニテ來レ
ルコヲ説明シテ歸ヘレリ

大使 吳ノ書キテ差上タルモノヲ一見ヲ願ヒタシ

金 何モ別段ノコナキナリ

大使 別ニ面倒ヲ起スニ非サレハ見セラレタシ

金、吳ノ書ヲ出ス曰

本大臣來此數日、爲查辨亂黨一事、最關緊要、
閣下身任政府、並不議查拏亂黨、避重就輕、即使

與

井大使草々立約而竟置亂黨於不問、不但本大

臣^カ有^ル詰^ミ責^{スル}

閣下^ヲ恐^{クハ}朝鮮萬民之心、憤懣不平、大^ニ不利^{ントス}於^{アラ}
閣下^ニ、此^レ非^{サル}了^{スル}事^ニ也、恐^{クハ}了^{シテ}事^ヲ而^テ適^マ以^テ生^{スル}事^ヲ也、惟^タ
執事圖^レ之、

大使 此書ニ付テ本使ハ種々ノ疑ヲ起セリ此文氣ヲ見レハ直接ニハ
云ハ子ト朝鮮ハ支那ノ屬國ナリト云意ヲ婉曲ニ示シタルモノ、如
シ果シテ貴國ハ清國ノ屬國ナラハ貴政府ト談判ハ出來サルナリ若
シ貴官等カ清官カ何ト云フモソレニ構ハス此ニ於テ決スヘシト云
ナラハ談判スヘキモ後ニテ清官ニ相談セシ上彼是ト說ノアル様ナ
ラハ談判セサルヘシ

金 是レハ貴大使ノ御話トモ存セス貴大使ハ御承知ナキカ此ニ決

シタルコトヲ誰が何ト申スヘキヤ其証ハ前ニ屢々條約等ヲ結ビシモ
清國ヨリ干涉セシコトナシ拙者カ不都合ニテ御相談及ヒシナラハ知
ラス拙者ヨリ未タ言ハサルニ先ツ其邊ノ御疑アルハ却テ如何ト存
スルナリ

大使 現ニ今マ命令スルモノアリタルハ如何兩國辨論ノ席上ニ他人
來リテ言ヲ容ル、即チ其証ナラスヤ因テ此疑ヲ生スルモ其理ナシ
トハ思ハレサルヘシ

金 ソレハ決シテ左様ノコトナシ拙者ノ思フ所ニテハ今日ノ談判ハ
早ク致ス方雙方ノ爲メナリ

大使 試ニ位置ヲ考ヘラレヨ若シ貴官カ他人ト公事ヲ辨スルニ當リ
拙者其席ニ突入シ干涉ノ言ヲ容レハ何ノ感シヲ起スヤ

金 誠ニ然リ然モ今日彼レノ此席ニ入來リシハ全ク拙者ト貴使ト
ニテ事件ノ御談判致シ居ルコヲ知ラス御同様ニ私晤ノ席ナリト思
ヘル故ニ來リシモノナルヘシ

大使 彼レ全ク不知シテ私晤ノ爲メニ來リシナラハ御互ノ談判ニ
説ヲ入ル、所ニハアラサルニ非スヤ

金 誠ニ然ナリ拙者ニ於テモ彼レ決テ此事ニ干涉スル爲ニ來ルコ
ハナキ筈ト存ス又拙者ナリ貴大使ナリヘ談話スルコアラハ其レハ
ソレニテ決テ此事ニ口ヲ容ル、筈ナシ

大使 現ニ最初ハ己レモ此事ニ關係アルモノナレハ御同前ニテ議シ
居ル事公ナラハ公ニ之ヲ言ヘ是レハ拙者ト貴官ト兩人ノ私事ニ非
スト云ヒ後ニ權利上ノ事ニ至リテハ反テ己レハ貴國ノ事ヲ查辨ス

ルタメニ此地ニ派遣セラレタルナレハ拙者ニハ關係ナキヨシヲ言
ヒタリ

金 何卒貴大使ハ御承知ナキヲニ致シタシ最初ニハ何ト申シテ來
リシヤハ知ラサレトモ後ニハ貴大使ニハ關係スト云ヒタレハ即チ
貴大使ニハ關係セサルモノト御覽被下タシ此議事ニ付テ敝國政府ハ
吳く干涉セシメサリシヲハ他日同人ニ御面會相成タル節貴大使ヨ
リ御問及アラハ明瞭ニ御分り相成コト存ス

大使 何ニ致セ困ツタ問題カ一個起リタリ

金 今日彼レカ此ニ來ラサレハ無事ナルニ此ニ來リタル故ニ餘計
ナル時間ヲモ費セリシカシ拙者ニ關係セサルナリ

大使 貴官ニハ關係アルマシキモ我ニハ感スル所アリ此ニ於テハ談

判ノ局面ヲ一ツ改メテ貴國ハ清國ノ屬國ナルヤ否ト云フ點ヨリシ
テシテハサルヘカラス

金 貴國モ萬々明知相成リ居ルコニテ國內萬般ノ事何一ツ他國ノ
干涉ナク我國ノ勝手ナリ此ニテ決シタル事ヲ後ニ至リ何ナリ他國
ニ關スルヨリ取消ヲ乞フカ如キ事アラハ如何様ニ仰セラル、モ苦
シカラスソレハ萬々ナキコナリ

大使 凡ソ國ト國トニテ權利ヲ爭フコハ容易ナルコニ非ス如此勢ニ
テハ遂ニ國王ニモ大ナル迷惑アルヘキコナリタトヘ屬國ナラスト
云テモ若シ一時ノ說ナレハ憑ミ難シ

金 拙者ハ大君主ヨリ全權ヲ委子ラレ居レハ拙者ニ於テ此談判ヲ
決スレハ外ニ關セスト思フナリ且ツ彼レ初メハ何カ關シソーナリ

シカ終ニハアノ通申シタレハ即チ干涉セサル明證ナラン

大使 拙者ハ甚不愉快ナル感觸ヲ起シ居ルカ乍去何トカ結局ヲツケ

スハナルマシ但シ此事ニ付テハ清國ニ關セス又カゲニテモ清官ニ

ハ謀ラヌト云フヲ飽マテ保證セラル、ヤ然ラハ御談判ニ及フヘシ

金 此事ニ付テハ先ヨリ申ス通り外人ニハ關セシメス又關セラル

、フナシ是マテ各國ト條約セシニ外ノ關係ナキニ獨リ此事ニノミ

關係アル理ナシ

大使 然ラハ果テ清官ニハ相談セラル、カ如キフナキカ

金 若シ此事ニ關係ヲ受クル處アラハ今日談判ヲ決セスシテ又相

談スルフモアルヘケレト拙者カ今日此處ニテ決スヘシト云フ以テ

其關係ナキヲ承知アリタシ

大使 今日談判纏マラスハ又如何ナル關係ヲ生スルヤモ計ラレス因
テ速ニ談結シ今日此場ニテ調印アルヘキヲ望ムナリ

金 今日事ヲ決シテ清書ノ上明日調印スヘシ決テ言ヲ易ヘス

大使 能ク考ヘラレヨ今日此場ニテ申ス所ハ拙者十分ニ考ヘタルコ
ナレハ此談判マトマラ子ハ是ヨリシテ實ニ貴國ノ大迷惑ヲ生スヘ
シ我ハ元ヨリ止ムヲ得サルニ因テ始ムルナレハ夫レハ覺悟ノ上ノ
コナリ

金 倭國ノ事ヲ左程ニ御考ヘ下タサルハ誠ニ難有コナリ拙者モ談
判ハ速ニ決シタシ條款ニ付テ細カニ御話致セハ言長ケレハ其ヲ畧
シ要ヲ摘テ申スヘシ御承知ナルヘキコハ速ニ御承知アリタシ

大使 出來ルコハ承知セサルコナシ

金 放火公館ノ文字ハ除カレタシ今口供モ御覽アリタルヘシ敝國
人ニテ燒キタルトナシ罪ナキ敝國人ニ罪ヲ負ハスレハ人民不服
ニテ困却致スナリ

大使 貴國人民ニ罪ナシト申サル、ハ公館ハ貴國人ノ燒タルニ非ス
ト云フ意カ

金 口供モ御覽下タサルヘシ誰ガ焚ケリト云フト丈ヲ御取消下サ
レタシ

大使 文字丈ハ削ルモ不可ナキカ如クナレト然ラハ次ノ條ニ關シテ
ハ如何爲サル、ヤ

金 要點タケ申上ヘシ敝國ノ窮困ハ素ヨリ御熟知ニテ填補金モ御
返還下タサル程ナリ然レ公館ヲ焚ケリト申セハ大君主ニモ氣ノ毒

ニ思ハル、ナリ只此額ヲ半分ニ願ヒタシ

大使 能々事情ヲ考ヘラレヨ四萬圓ト言ハ過多ナリト思ハル、カ知
ラサレ氏建築用ノ材木等ヲ日本ヨリ運ヒ來リテ造レハスヘテ一倍
ノ費用アルナリ先キニ公館ヲ建タル時ノ入費ヲ計算セシメシニ五
萬圓計ナリ然ルヲ拙者貴政府ヲ察シ公館ニ在ル所ノ燒殘リノ煉瓦
等ヲモ指引セヨト命セシニ皆用ニ足ラスト云ヘリ然氏更ニ以前ノ
額ヨリ一層少ナク計算ヲ爲サシメ此數ニ取極メタルナレハ決シテ
難題ト申スヘキニ非ラス十分斟酌ヲ加ヘタル上ノコナリ能々御承
知アリタシ

金 成程大使ノ公平ナル御心ヲ承知致シタル以上ハ此事ハ御拒ミ
申スマシ

大使 貴國ノ御困難ハ元ヨリ御察シ申シ居ル處ナリ。今貴官ノ半額ニマケヨト申サレタルニ付テ一ノ便法ヲ考ヘタリ。高ミノ場處ニ就テ幾分ノ修繕ヲ加ヘレハ住マル、丈ノ家屋ヲ土地ト共ニ交付アリテ其上ノ修繕料トシテ外ニ二萬圓ヲ御渡シ相成ルコトニ致シテモヨロシ。此二萬圓ハ一度ハ此方ニ御渡シアルモ矢張貴國ニ於テ使用シテ仕舞ナレハ政府ヲ出テ、人民ニ入ルノミ到底貴國ノ外ニ出ツルモノニ非サルナリ。

金 誠ニ公平ノ御說ニテ感服ノ外ナシ

大使 若此事ヲ御喜ヒ成サラハ至急ニスヘシ。我隨員ヲシテ之ヲ擇ハシムルモ可ナリ。尤兵隊ヲ置ク場所ハ公館ト甚タ懸絶シテハ不都合ナリ。必ス近ミニ在ルヘシ。

金 一々御尤ナリ何レ家屋ノ適否等御相談ノ上取極メヘシ貴方ニ

ヨキハ此方ニ差支ヘ此方ニヨキハ貴方ニ御不都合ト申ス様ナルヲ
アルヘシ

大使 然リ但シ家屋ハ幾宇ヲ合スルモ構ナシ相應ノ修繕ヲ加ヘテ渡
サルレハヨロシ

金 承知致セリ筆ヲ援テ焚館ノ數字ヲ削リ又第四條ノ文ヲ此意ニ
改ム

金 第五條ニ付テ御願アリ前回ノ約面ニハ駐在ノ兵ハ幾千トノミ
書テ其數ヲ言ハス此後ハ決テ如此變亂ナキ筈ナレハ公使一人ニテ
足ルヘシ兵アリテハ却テ爭鬭ノ基トモ爲ルヘキナレモ目下ハ強テ
夫レヲ申シ難キヲナレハ只前ヲ照シテ幾千トノミ願ヒタシ

大使 ソレハ改ムルモ難カラサレモ實際今マ率フル所ノ二大隊ヲ容
ル、所ノモノハ必要ナリ

金 此條ノ末文モ花房公使ノ時ノ末文ヲ照シタシ

大使 ソレモ苦シカラス此一條ハ花房ノ約面ヲ照シ只兵營ヲ公館ノ
近傍ニ置クト云フヲ加フヘシ

金 其稿ヲ作り閲ヲ乞フ

大使 可ナリ

金 另單ノ兇徒處分ノ期限ハ廿日間ニ致シタシ

大使 諾

金 兵隊ハ一大隊御差置ノコニ致シタシ

大使 ソレハ此處ニテハ暫ク御相談致スマシ

金 第一條ノ國書ハ貴方ニテ御立稿ノ分ハ拙者拜見致置マデニ止

メ此方ヨリハ別ニ貴國ノ好意ヲ謝スルノ意ヲ以テ國書ヲ修メ差出
サハ可ナルヘシ

大使 大君主ニテ國書ヲ御贈リ相成ル思召アラハ其稿本ヲ以テ御相
談アリタシ然ラサレハ國璽ノ捺シアルモノヲ俄カニ改ムル如キ
ハ大ニ不都合ナルヲナリ

金 何レヨリ見ルモ体面アシカラス不都合ナキ様ニスルヲハ保証
致スナリ然レ其草稿ヲ以テ御相談致スト云ハ困却ナリ

大使 然レ其果シテ不都合ナキヲハ一方ニテノミハ保証シ難キヲ
ナレハ各國共ニ草稿ヲ以テ相談スルカ常例ナリ難題ト思ハル、ナ
レハ穆氏ニモ相談致サレヨ是ハ各國ノ同シキ所ナリ

於是齋藤書記官ヲシテモルレントルフニ此意ヲ通セシムモルレントルフ亦云其例ニ遵ハサル可ラスト因テ自ラ金氏ニ向テ其意ヲ述フ

金 誠ニ然リ明日調印濟ノ上其事ヲ御相談致スヘシ

敝國ノ罪人未タ緝捕ニ就カス或ハ貴國ニ往クトモ云フ者アリ若シ然ラハ貴政府ニ於テ捕獲ノ上御交付下タサレタキナリ

大使 其者ノ敝國ニ來リシト云ハ拙者出發前ニハ曾テ聞及ハサルナリ然レ此等ノ件ハ多ク先例アルナレハ穆氏ニモ相談アリタシ尤モ是レハ萬國公法ニ據リテ云ヘハ頗ル解シ難キモノナレハ先ツ穆氏トモ御熟商アルニ致シタシ

此時又齋藤書記官ヲシテモルランドルフニ此意ヲ傳ヘシム

金 拙者ハ萬國公法ニハ熟セサレモ敝國ハ貴國トノ間ニ於テ敦好

ノ情ヲ以テ公法ニ拘ハラス希望致ス所アルヤモシラス此六名ハ兇徒ノ渠魁ニテ捕縛致サ、レハ人民ニ對シ大ニ困却スルヲナレハ追テ別ニ御照會致スヘキヤモ知レス何卒特別ノ御勘考ヲ願ヒタキナリ

大使 照會セラル、ナレハ照會アリテモ苦シカラス只今モ申ス通此等ノ事ハ都テ公法ニ基クヲナレハ敝國ニ於テハ萬一此者等敝國ニ居ルモノト仮定スルモ公法ニ從テ其論ヲ究メタル上ナラテハ何トモ處置致シ難キナリ

此意又齋藤書記官ヲシテモルレンドルフニ細カニ傳ヘ置シム

金 約書冒頭ノ文字ノ内宸念ノ二字ヲハ睦誼ト致シタシ是兩國相

互ニスル意ヲ以テスレハ後ノ悵惻ノ字ニ對セサレハナリ

大使 是ハ全ク敝國ニノミ關スル處ニテ宸念ヨリ拙者ヲ派出セラル意味ニ止マレハ此儘ニ存シ置ヘシ

金 然ラハ宸念ノ字ハ据ヘオキ均切悵惻ノ四字ヲ均願敦好ト改メ將來禍端萌生ノ六字ハ將來事端ノ四字ニ改メタシ

大使 可ナリ

是ニテ談判全ク整ヒ明日〔九〕午后一時仍ホ議政府ニ於テ調印スヘキ旨ヲ約スルノ後餘談中ニ約書冒頭ノ文ナル京城事變ノ上ニ此次ノ二字ヲ加ヘ又大君主均願敦好ノ處ニ宸念ノ二字ヲ加フル等ノ事ヲ商定シ同日午后四時議政府ヲ出ツ

此次京城ノ變係ル所小ニ非ス

大日本國

大皇帝深ク

宸念ヲ軫セラレ茲ニ特派全權大使伯爵井上馨ヲ

簡ヒ

大朝鮮國ニ至リ便宜辨理セシメラル

大朝鮮國

大君主

宸念均シク敦好ニ切ニ乃チ金宏集ニ

委ヌルニ全權議處ノ任ヲ以テシ

命スルニ懲前毖後ノ意ヲ以テセラル兩國ノ大臣和衷商辦シ左ノ約
 款ヲ作り以テ好誼ノ完全ヲ昭カニシ又以テ將來ノ事端ヲ防ク茲
 ニ全權ノ文憑ニ據リ各々名ヲ簽シ印ヲ鈐スル左ノ如シ

約款

第一

朝鮮國

國書ヲ修メテ

日本國ニ致シ謝意ヲ表明スル事

第二

此次

日本國遭害人民ノ遺族並ニ負傷者ヲ恤給シ暨ヒ商民ノ貨物ヲ毀

損掠奪セラル、者ヲ填補シテ

朝鮮國ヨリ拾壹萬圓ヲ撥支スル事

第三

磯林大尉ヲ殺害シタル兇徒ハ査問捕拿シ重キニ從テ刑ヲ正ス

事

第四

日本公館ハ新基ニ移シ建築スルヲ要ス當ニ

朝鮮國ヨリ地基房屋ヲ交附シ公館暨ヒ領事館ヲ容ルニ足ラシム

ヘシ其修築増建ノ處ニ至テハ

朝鮮國更ニ二萬圓ヲ撥交シ以テ工費ニ充ツル事

第五

日本護衛兵弁ノ營舎ハ公館ノ附地ヲ以テ擇定シ壬午續約第五款
ヲ照シ施行スル事

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵

大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十三日

特派全權大臣左議政

另單

一約款第二第四條ノ金圓ハ日本銀貨ヲ以テ算ス須ラク三個月ヲ期シ
テ仁川ニ於テ撥完スヘシ

一第三條兇徒ヲ處辦スルハ立約後二十日ヲ以テ期ト爲ス

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵

大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十三日

特派全權大臣左議政

約書 原稿

此次京城之變、所係非小、

大日本國

大皇帝深軫

宸念、茲

簡特派全權大使伯爵井上馨、至

大朝鮮國、便宜辦理、

大朝鮮國

大君主、宸念均願敦好、乃

委金宏集以全權議處之任、

命以懲前毖後之意、兩國大臣、和衷商辦、作左約款、以昭好誼完全、又以防將來作事端萌生、茲據全權文憑、各簽名鈐印如左、

約款

第一 朝鮮國、修國書、致

日本、表明謝意事

第二 恤給此次

日本國遭害人民遺族、並負傷者、暨填補商民貨物、毀損掠奪者、由朝鮮國撥支拾壹萬圓事、

第三 殺害磯林大尉之兇徒、查問捕拿、從重正刑事、

第四 日本公館、要移新基建築、當由朝鮮國交付地基房屋、足容公館暨領事館、至其修築增建之處、朝鮮國更撥交貳萬圓、以充工費事、

第五 日本護衛兵弁營舍、以公館附地擇定、照壬午續約第五款施行事、
另單

一約款第二第四條金圓、以日本銀貨算、須期三箇月於仁川撥完、
一第三條 處辨兇徒、以立約後旬日爲期、

兩國 月日

兩國 大臣

朝鮮國ヨリ差送ルヘキ謝狀草案 一月九日於議政府議定

大朝鮮國

大君主、敬白朕之良友

大日本國

大皇帝、朕深惜朝有逆臣、致有十月十七日之事、一時變亂延及于隣國官商、幾使兩國失和、乃承

大皇帝惠顧邦交、不忘素好、簡派全權大使伯爵井上馨前來會議、現已

一切妥協、朕以藐躬涼德、化導無方、重貽友邦之戚、曷勝惋惜、茲遣

禮曹參判徐相雨、兵曹參判穆德麟、充出使正副大臣前往東京、覲見

大皇帝、親呈國書、以展懲毖之意、恭稔

大皇帝政治綦隆、

純嘏無疆、深願後此兩國官商相安無事、庶萬民無不平之心、以後兩國上下和洽、不致再啓紛爭、此我兩國朝廷之福、士民之幸也、

大朝鮮國開國四百九十三年癸卯即位二十一年十二月 日於漢城昌德

宮親署名鈐國寶

御名

奉

勅 議政府領議政沈舜澤

大朝鮮國特派全權大臣左議政金

爲

照會事、照得此次本國變亂之由、係亂臣金玉均朴泳孝洪英植徐光
範徐載弼等、作亂宮闈、殺害大臣之罪、舉國民人所共憤、義當聲明與
衆戮之、洪英植已死、惟金玉均等四賊及其徒黨、尙稽顯戮、後患非
細、若該犯等逃難、寄跡於

貴國地方、應請

貴大使遍飭各地方、無得憐其窮投之情、查拿交出、以昭公允、以敦友
誼、俾我兩國之間、妖氛廓淨、禍萌永絕、是所切望、相應備文照會
貴大使、請煩查照施行、須至照會者、

右

照

會

大日本國特派全權大使伯爵井上

大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十五日

大日本特派全權大使伯爵井上

照覆事、准

爲

貴曆十一月二十五日照會、內開金玉均朴泳孝洪英植徐載弼等、作亂宮闈、若該犯等逃難、寄跡於貴國地方、應請貴大使遍飭各地方、查拏交出、等因前來、查

貴大臣所稱之事、所係非細、非見詳示其求于我之理由、本大使未知所以答焉、貴我兩國、現未有互交罪犯之約、

貴大臣素所熟知、雖然至在各國所據其互交罪犯之約捕拿交付者、若萬國公法之認爲合交付者、我國亦無爲其逋藪之意也、本大使又有欲一言者、

貴大臣所稱數犯、若係國事犯者、我政府恐不易副

貴大臣之望也、相應照復

貴大臣查照、須至照復者、

右 照 復

大朝鮮國特派全權大臣左議政金

明治十八年一月十一日

井上議官於吳大徵處筆談扣

井吳大人閣下、我全權大使井上、敎弟致意、閣下、前

日我大使在議政府、偶然得閣下臨晤、初接、清

丰、不堪欣幸、把臂一堂、固所渴望、但使臣出派、一依

訓命、々々之外、不得步趨、閣下於日清交涉事宜

不帶辨埋全權字據、與我訓命所飾不符、事屬公義

情切傾蓋、遺憾曷極、我大使在本國職居要劇、不能

曠日延留、既與朝鮮員辨結兩國事宜、即以本日從

速就途矣、幸勿勞思、

吳使者前日在議政府、得晤貴大使、忽々握晤、未

獲畧通欸曲、知貴大使與朝員議約事畢、竊

擬盤桓數日、彼此往還、作樽酒之報、不圖貴
 大使返旆期速、望塵不及、實深悵惘、乞閣下
 歸國時、代致拳拳、是所企幸、

前日貴國駐在日本、欽差黎幽致我外署、稱兩國兵
 營口角、莫如兩國各派大員、商辦了結、等語、我政府
 想貴使於日清交涉事、受辦理之任、乃據貴使
 所稱、云兩國現無可議、故無全權字樣、我大使於漢
 城之變、深抱惋惜、素願商議善後事宜、使命齟齬、不
 得相俱吐露、促期就途、茲使弟聊致雅意、惟閣下
 諒之、

吳黎大臣所稱、兩國兵營口角、未指何國、或不知朝

鮮亂黨起事情由之故本大臣現已查明朝鮮政
府有公牘請我兵入宮保護朝兵與我兵同至普
通門外有亂黨數人前來放槍我兵死五人受傷
九人始各發槍應之倉猝之間尙不知貴國有兵
在內否本大臣思我兵傷亡亦應議恤既係亂黨
先行放槍只可查辨亂黨所以前在政府所書筆
談謂中國使臣與貴國現無可議也
井弟職在記室無專對之任不欲多言生枝節既致我
大使之意當匆々拜別久渴泰斗之名得接溫容是
爲欣幸

吳此論作爲使者與閣下間談並無枝節可生如

貴大使間及鄙意現無可議一節、即以此次筆談、
 呈閱、當可渙然冰釋矣、此兩國和好之意、本大臣
 力顧大局、不欲別生枝節、實與貴大使所見、若
 合符節也、

井大人所稱、弟當復命于我大使、不知我大使意何如、
 未便專對諒焉、

名 称	三條実美文書
標 題	日韓新條約可否回答書

分 類 番 号	34
	26

国立国会図書館

登録番号	
------	--

書中并トヤ
ル・年ノ誤寫

日韓新條約可否問答書

或曰 今回井上特派全權大使カ朝鮮全權大臣
金宏集ト京城ニ於テ本年一月九日ニ高麗簽
印シ相互ニ交換セシ條約五條ノ全体ハ懲前
毖後ノ意ヲ含ミ甚タ完全ナリト信ス子以テ
如何トナス

予答曰 予カ見ヲ以テスシハ此新條約五條
ハ余ク今回京城ノ變亂ニ際シ我國カ蒙リ
タル無前ノ汚辱ト商民兵弁等非命ノ死ヲ
遂ケタルモノト思慮セラルレハ是ニテ我
政府ハ今回日支韓三國ニ連帶セル事實ヲ
終局セシモノ、如シ是レ予カ決シテ服セ
サル所ナリ

或曰 子ノ考察甚タ謬レリ抑モ今固京城ノ事
變ハ支那朝鮮ノ二國カ我日本國ヲ辱メ我商
民兵難ヲ殺戮シタルニ起ル而レテ其實朝鮮
ハ支那ノ教唆ヲ受ケ共謀共働シテ我ヲ害シ
タルモノナレハ其重罪ハ支那ニアリテ朝鮮
ニアラス果レテ然ラハ我政府ハ獨リ其共謀
者共働者中其罪ノサナル朝鮮國ヲ責テ損害
ノ全部ヲ要償レ却テ支那國ヲ黙止スルノ理
アラシヤ早晚支那ニ向フテ激談ヲ開キ朝鮮
國ヨリ拂ハレシタル要償ノ数十倍ヲ要求レ
以テ國辱ヲ雪メ被害者ヲ撫卹スルヤ必セリ
予答曰 世ノ輕躁者ハ一二ノ論者ニ雷同シ
テ皆君カ如キ論ヲ妄信ス然レハ靜慮沈考

細カニ新條約五條ノ旨趣ヲ通讀スルギハ
今回ノ致害ハ朝鮮國独リ之ヲ負擔シ独リ
之ヲ辨償セリ再後此変ニ関シテ我國力支
那國ニ向テ朝鮮ニ数十倍スル損害ノ要償
ヲ為サント欲スルモ固トニ其辭柄ナレ諸
ノ其大意ヲ陳セン

抑モ國際法ニ於テ世界ニ併列スル獨立國
ハ之ナ一社界ニ併居スル獨立人ト見做ス
者ナリ故ニ今回ノ事變ハ之ヲ甲乙丙ノ三
人カ供ニ一社會ニ併居シ乙丙ノ二人共謀
シテ害ヲ甲ニ加ヘタルモノト見做シ性法
ニ照ラシテ之ヲ論究スル（但通常性法ナレハ諸國
ハ通リス）ニ現ニ乙丙二人相謀リ
際モノナレ者ハ通リスニ現ニ乙丙二人相謀リ

テ甲ノ名譽ヲ損シ甲ノ身体ヲ傷ケ甲ノ物
件ヲ毀ナタリ故ニ甲此損害ヲ要求セント
スルニハ同時ニ乙丙ノ二人ニ談判セサル
可カラス然ルニ独リ其共謀者中致害ノ稍
輕キ丙ニ向ツテ先ツ其談判ヲ開キ其損害
ヲ要償シ然ル後乙ニ向ツテ談判ヲ開キ重
ネテ數十倍ノ要償ヲ得ント欲ス乙ハ之ヲ
承諾スルノ義務アルヤ。之ヲ拒絶スヘキノ
權理アルヤ。又損害要償ハ如何ナル言分ヲ
以テ乙ニ申シ込マントスルヤ。是日重大ノ
疑問ナリ（通常一定ノ個人ノ資格ヲ以テ論スルハテ若シ
甲ノ談判ヲ拒絶スルハ甲ハ之ヲ法庭ニ訴
ヘテ至當ノ裁判ヲ得ヘケレバ國際ニ訴
テ此法庭ハ則チ兩國ノ干戈勝敗ヲ爭フ
一軍ノミ然レバ未タ法庭ヲ煩ハサハル談

判論ノ間ハ相互ニ性法ニ根據シテ其勝否ヲ
スル所モレテ一個ノ人モ國際(爰ニ一場ノ論
モ其事相同シト知ルヘシ)壇ヲ開キテ試ニ其理非ヲ斷論セシ

甲曰去月六日汝ハ丙某ト竊カニ相謀リ我
家屋ヲ襲燒シ我身体ヲ傷ツケ後ツテ我名
譽ヲ毀ツケタリ我汝等二人ノ所為實ニ無
礼慘忍ヲ極メタルヲ怒リ直チニ之ヲ法庭
ニ訴ヘテ汝等ヲ強罰セント欲スレト汝等
ト從來ノ交際モアレハ其前一應平和ノ談
判ニ及フヘシ我過日丙ニ向ツテ其意ヲ談
シ其無礼ヲ責メシニ丙ハ只管我ニ謝シテ
五條ノ要求ヲ許シ其罪ヲ謝シ其損害ヲ要
償シ我家屋ヲ再築セリ思フニ今回ノ事汝

ハ竊カニ丙ヲ教唆シテ害ヲ我ニ加ヘタル
モノナリ且リ汝ノ財産ハ丙ニ數十倍ス故
ニ汝ハ丙ニ數十倍セル損害ノ補償ヲ我ニ
ナシ以テ其罪ヲ謝スベシトヒ答テ曰然ラ
ス元來今回ノ事ハ丙某深ク汝ヲ怨ミ汝ヲ
害シテ其怨ヲ晴サント欲ス然レモ其力足
ラサルヲ以テ助力ヲ我ニ乞ヘリ我平常丙
ト交ルヤ兄弟モ嚮ナラス其請求ヲ受ルニ
當リ一旦ハ其非ヲ諭シタルモ丙ハ一心之
ヲ思ヒ込ミ到底黙止スルノ勢ナケレハ止
ムヲ得ス之ヲ助ケシ迄ニテ其實働ヲソ丙
ト共ニ之ヲナシタルモ我ニ於テ教唆共謀
ノ責ヲ受クルノ覺ナシ且又今回ノ被害ニ

付テハ汝ハ既ニ其主謀者タル丙ヨリ十分ノ損害ヲ要償シ五條ノ條約中既ニ有形無形ノ要償ヲ果セリ同一ノ被害ニ付テ其要償ヲ重ネントスルハ條理ニ於テ許サレリ所ナリ如何トナレハ汝ノ家屋ハ既ニ再築シ汝ノ身体ハ既ニ癒ヘ汝ノ名譽ハ既ニ回復セリ其他何ニ據テ我ニ重償ヲ要求スルヤ況ンヤ我財産ハ假令丙ニ数十倍スルニモセヨ財産ノ多サヲ以テ罪責ノ多サヲ判ツノ謂シナシ我ハ我良心ニ訴ヘ實ニ快然タラサル者アラハ丙ト示談ヲナシ其辨償ヲ分擔スヘシ汝ヨリ更ニ辨償ヲ要セラルハノ覺ヘナシ然レモ共働ノ一点ニ於テハ

其責ヲ辭シ難シ一條ノ謝文ヲ以テ之ヲ謝
スヘシト是ハ此レ世ノ論者ノ思考スル我
國カ支那ニ對ステ談判スルノ要旨ニシテ
支那カ百方逸辭ヲ布セシ上止ムヲ得ス京
城ノ乱ヲ分擔セシ時ノ言分ナリ我國ハ此
言分ニ向ヒ如何ナル實論ヲ示シテ其目的
ヲ遂ントスルカ之ヲ干戈ニ訴ヘテ其目的
ヲ果サハ止ム苟モ之ヲ俎豆ノ間ニ承服セ
シメント欲スレハ日韓今固ノ條約ハ日支
ノ間ニ介シテ我前途ヲ遮斷スルヲ如何セ
ン

或曰 六日ノ變ハ國王ノ命ニヨリテ王宮ヲ守
護スル我兵ニ向ツテ支那兵カ卒然發砲敵對

シタルハ元ヨリ非ナリト虽凡我公使ノ公務
ヲ捨テ王宮ヲ守護シタルハ亦非ナリ元來今
固ノ変ハ独立党一名日本党ト唱フル朝鮮ノ
士民力事大党一名支那党ト唱フル者ト互ニ
政權ヲ爭ヒタル者ナレハナリ然レ凡我公使
ハ堂々タル朝鮮國王ノ請求ニヨリテ王宮ヲ
守護シ支那兵ハ國王ノ命ヲ拒ンテ強テ王宮
ニ闖入シ我兵ヲ襲ヒ國王ヲ奪ヒ轉シテ我公
使館ヲ燒キ我高民ヲ殺シ我官吏ヲ戮シタル
ハ實地隠レナキトナレ凡若シ國王力宸翰ヲ
裁シテ守護ヲ我公使館ニ乞ヒタルノ丁明瞭
ナラサルキハ支那ニ向ツテ責ムヘキノ根據
ナキヲ以テ我全權大使ハ其事ニ尽力セラレ

タリ但し償金ノ如キハ支那ニ向ツテ十分之
ヲ要求スルノ意アルヲ以テ朝鮮ニハ只斯ル
小額ヲ要求セザラシナラン果シテ然ラハ新
條約ニヨリテ一モ支那ノ談判ヲ妨クノ謂レ
ナシ予ノ言何ソ暴ナル

予答曰 斯ル証據ハ無用ナリ如何トナレハ
我國朝鮮國王ノ宸翰ヲ持セリト言ハ支那
モ亦之アリト言ン目下朝鮮ノ國王ハ支那
ノ囚人ト相同シ支那國若シ其証據ヲ要ス
ルト言ハ如何ナル宸翰ト虽モ容易ク之ヲ
認メ能フヘシ同一ノ親翰ニ箇アラハ其議
論ハ水掛け論トナル是レ斯ル証據ノ無用ナ
ル所以ナリ。予カ希望スル所ハ之ニ異レリ

今回ノ事変ニ関シ乙丙ノ致害者ニ向フテ
万国普通ノ損害要償ヲ爲シ。一ハ彼等將來
ノ暴行ヲ警シムルノ必用ヲ感セシメ。一ハ
我官吏商民ノ遭難者及ヒ其遺族ニ十二分
ノ満足ヲ與ヘ其死者傷者及ヒ遺族ヲ體卹
シテ將來益々我官吏商民等カ我國ノ爲メ
ニ其身命ヲ抛テテ各其職務ヲ外國ニ尽ス
ノ氣ヲ振起セシムルニアリ之ヲ爲スハ如
何曰支韓兩國ヨリ十分ノ償金ヲ要取シ之
ヲ以テ我國辱ヲ雪キ之ヲ以テ我被害者ヲ
體卹スルニアルナリ然ルニ予カ論ノ如ク
尔後今回ノ事変ニ付支那ヨリ多額ノ償金
ヲ得ルニ道ナシトスレハ遭難者及ヒ其遺

族ノ遺憾ハ如何ソヤ抑モ人ノ難ニ外國ニ
遭フテ其死ヲ潔クスルハ我カ為ニ國家ヲ
辱シメサルト國家ノ我カ為ニ報讎為ルヲ
思フテナリ國家豈此忠勇ナル死者ニ對シ
テ十二分ノ報讎ヲ為シ死者ノ灵ヲ慰メ遺
族ノ怨ヲ解クノ義務ナカラシヤ然レモ死
者ハ再ニ還ヘスヘカラス故ニ之ヲ償フニ
金銀若クハ土地ヲ以テスルハ萬國ノ通規
ニシテ又止ムヲ得サルナリ而シテ死者ヲ
償フニ前例アリ近ク之ヲ求ムレハ我國維
新ノ前後歐米各國ヨリ要求セラレシモノ
則テ其適例ナリ今其著明ナルモノハ一二

ヲ舉ンニ

文久二年八月英人「リナヤドソン」等ノ數騎
横ヨリ嶋津三郎ノ前隊ヲ突ク後士力ヲ援
テ之斬リ一人ヲ殺シ三人ヲ傷ツク此時ニ
當リ英政府ハ幕府ニ迫リテ曰速ニ嶋津三
郎ヲ縛シテ之ヲ我ニ附シ兩國參檢然ル後
之ヲ誅セン否ラスンハ則テ幕府ヨリ贖罪
金貳百五十万弗ヲ拂ヒ嶋津ヨリ別ニ三万
弗ヲ拂ヒ之ヲ以テ死者ノ妻孥ヲ存卹スヘ
シ但シ三月九日ヲ期スト遂ニ之ヲ實行セ
リ此場合ニ當リテハ英ノ死者一人傷者三
人ノ體卹ニ三万弗ヲ與ヘタレハ死傷者ニ
當分スルモ一人七千八百弗宛ニテ傷者ハ
死者ノ半額トスシハ死者ハ一万五千八百

弗ナリ而シテ其他二百五十万弗ノ贖罪金
ハ英人ノ死傷セシ為ニ拂ヒシ者ナレハ同
政府カサクヒ其三分ノ一ヲ割テ其死傷者
ノ妻孥ニ救卹セシヤ必セリ然ルキハ死傷
者ノ家族タル者ハ一戸ニ付別ニ二十万ハ
千円ヲ得タルヲニテ二者ヲ合スレハ傷者
ハ二十一万五千八百円死者ハ二十二万三
千八百円ヲ得タルナリ
又元治元年下関ノ役ニハ償金三百万元ヲ
拂ヒテ其罪ヲ謝シタリ

又明治元年二月土州ノ人塚ニ於テ佛國ノ
夫率十六人ヲ銃撃シ或ハ死シ或ハ傷ツク
此時佛國ノ要求ハ五ヶ條ニシテ其中致害

者ヲ刑シ及ヒ償金十五萬元ヲ拂ハシムル
ノヲアリ此ニ於テ其致害者二十人ヲ佛公
使ノ目前ニテ自殺セシメ山内家ヨリ十五
萬元ノ償金ヲ拂ハシメタリ此場合ニ當リ
テ佛國ノ一夫卒ハ死傷者毎ニ八千七百五
十元宛ニテ死者ヲ傷者ノ一倍トスシハ死
者ノ生金ハ一万七千五百元トナルナリ。前
ノ二例ニ於テ英佛二國要求ノ殊ナリシハ
他ナシ一ハ嶋津三郎ヲ刑セサルカ爲メ其
贖罪金ヲ拂ヒシハ其致害者ヲ自刃セシメ
シカ爲メ其贖罪金ヲ拂ハサルカ故ナリ然
レモ之ヲ折中算當スル時ハ英佛國人ノ生
金ハ一人ニテ大畧一万五千弗以上ナリ政

府ノ死者ニ尽ス所厚シト云フヘシ然ルニ
我國ノ人民ハ前後二回ノ朝鮮事変ニ於テ
死スル者五十二人(前後合計十二人)而シテ其償
金ハ十六万円ナリ然ルギハ我國ノ人民ハ
官吏ト商民トニ論ナク每一人ノ生命三千
零七十六圓餘ニシテ其全額内ヨリ傷者ノ
治療金商民ノ家屋財産ノ回復トシテ全額
ノ三分ノ一即チ五万三千三百三十四圓ヲ
扣除スルギハ残り僅カニ十万六千六百六
十六圓トナルヘシ是ヲ五十二人ノ死者ニ
配当スルギハ一人ニ付二千零廿一圓トナ
ル死者尙且ツ然リ況ンヤ其傷者ヲヤ其財
産ヲヤ之ニ因テ是ヲ觀シハ我國ノ人民ハ

官吏商民ト虽凡生命財産ヲ合シテ三千百
四ニ足ラス英佛國人ハ夫卒ト虽凡一身ニ
シテ一万五千元以上ノ價アリ同一ノ人間
ニシテ其生命ノ輕重此ノ如シ必竟各國政
府ノ其人民ヲ愛護スルノ輕重ニ基クモノ
ニシテ虚心平意ニ之ヲ考フレハ我日本ト
英佛トノ國家ノ價格ヲ表シ從テ人民ノ品
位ヲ貴賤シ從テ國家ノ勢力ヲ消長シ從テ
外交ノ伸縮ヲ生シ從テ貿易ノ盛衰ヲ生シ
從テ國家ノ興亡ニ及ホス思フテ斯ニ至レ
ハ予ハ忠勇ナル死者ノ為ニ我國ノ政府ヲ
怨ミ寧ロ其配下ニ在ルヲ潔シトセサルナ
リ

或曰 論シテ此ニ至シハ誠ニ子カ論ノ如シ政
府若シ支那ノ談判ヲ誤リ國民子ノ論ニ雷同
セハ國家ノ存亡心元ナレ更ニ是ヲ再考セン
ト欲ス故ニ此向答書ヲ編シテ予ニ與ヘヨト
予諾シテ之ヲ書ス紙ニ臨ンテ憤淚淋漓京城
遭難者ノ鮮血ニ化シテ九泉ノ下為メニ沸カ
ント欲ス

名 称	三條実美文書
標 題	近藤真鋤 袁世凱辭職件報告

分 類 番 号	34
	27

国立国会図書館

登録番号	
------	--

寫

袁世凱辭職并朝鮮ヨリ賁咨官差送るる
袁世凱潛カニ帰國致はるる過般機密信ヲ寄
るる報道仕るる要項日人ヲ律ヨリ帝國王
家書翰ヲ越ス内々大意ハ母病ニ由テ國ヲ
俄カニ出立函國一省間ニ後速カニ身戻ス可キ組
織冠ニ心ヲ生シ盡極辭職并御致はるる付
最中在任海航一難クも一々恩休カ
方ハ内右ニ分清律ニ武官及朝鮮當此諸
大臣モ一日會談ヲ開キ國情ヲ家ト文ニ趣テ
國王ヨリ清廷及李鴻章ニ申送ラレタリ清廷
遂ニ一使ヲ差スルルル成リタル由國王カ清廷ニ

外務省

送り書簡ノ趣意モ先番ハ意就ハルル朝鮮
國危急ノ場合ニカゝル要幸ニ袁世凱モ外
清將ノ救済ニ依リ全ク國家ヲ再建シ得ルニ
至シリ袁世凱及將官ノ功勞ハ實ニ本國ノ永シ
忘レサル所ナリ也若シ書翰ニ添ヘ遺書絶る
先般申談ホリ休添ハ使ハ差出
同云使ヨリ續却モラレタルモノナリ
若シ使モ賁咨官ニテハ張江衛門ノミヨリ李鴻章
ナレ者モ申付一兩日中各地出立リ清船ニテ
お越ス趣カハ一應了ルルハ教ハ報是仕ル也

明治三十八年三月十二日

臨時代理公使と爲る

外務卿 内閣外務省 署名 敬

名 称	三條実美文書
標 題	查明事實書 甲申事變

分 類 番 号	34
	28

国立国会図書館

登録番号	
------	--

250434

13

昭和26年11月6日

查明事實書



查明事實書

第一

余カ全權大使トシテ朝鮮へ派遣ノ命ヲ受ケシ時ニ於テ京城事變ヲ辨理スルタメ查明判斷スルニ必要ナリシ事實ハ左ノ如クナリシ

甲 若シ竹添ニシテ朝鮮政府ノ稱道スル所ノ如ク眞ニ洪英植金玉均等ノ亂黨ト事實若シクハ間接ニ干連セシヲアラシメバ是レ日本公使ハ隱謀并ニ違法ノ罪アルモノナリ

乙 若シ竹添ニシテ始メヨリ亂黨ニ關係ナク又亂黨ノ隱謀アルヲ知ラスシテ單純ニ國王ノ依頼ニ因リ國王ヲ保護スル爲ニ入關シタルモノナラシメハ是レ兩國ノ友誼上ニ出ル所行ニシテ萬國公法ノ原則ニ違背スルモノニ非ス此時ニ方リテ他ノ外兵ノ竹添ヲ

侵撃シ更ニ波及シテ我公使館ヲ焚キ我兵民ヲ襲撃殺害シタル者アリタルハ我國ハ其侵害ヲ回復セザルコトヲ得ス

余カ全權大使ノ命ヲ受ケタルハ竹添ガ所爲ヲ辯護スルガ爲ニ非スシテ公法ニ據リ情義ニ基キ公正ナル查辨ヲ爲シ理ノ在ル所ニ從テ此事件ヲ處分シ上ハ以テ我天皇陛下ノ一視同仁ノ盛德ヲ輔賛シ下ハ以テ兩國ノ和好ヲ回復シ兩國人民ノ幸福ヲ増進セント欲スルニ在リ此重大ナル使命ヲ荷フガ爲ニ余ハ朝鮮官吏ト談判スルコトノ前ニ於テ先ツ第一ニ竹添ガ果シテ朝鮮ノ亂黨ト通謀セシヤ否ヲ查明スル爲ニ左ノ方法ヲ執リタリ

一十二月十四日即チ京城事變ノ電報ヲ接スルノ第二日ニ於テ栗野書記官ヲ相摸丸ニ載セ仁川ニ到ラシメ當時ノ事情ヲ探問セシメ

タリ

二余ハ旅行中ニ變報ヲ接收シ十二月十六日横濱ニ歸リ即時井上議
官ヲ蓬萊丸ニ載セ仁川ニ至リ面タリ竹添ヲ訊問セシメ其後余ガ
三十日ニ仁川ニ着スルト否ヤ井上ヲ京城ヨリ召還シ其探知スル
所ヲ充分ニ面陳セシメタリ

三余ハ仁川ニ入ルト否ヤ直チニ島村ヲ召シ竹添ガ手ニ成ル所ノ事
變始末書ニ據リ逐項對比シテ面タリ島村ニ訊問シ之カ爲ニ仁川
ニ於テ一日ヲ滯留スルコトノ猶豫ヲ取りタリ又京城ニ入ルト否ヤ
竹添ヲ召シ當時ノ事情ヲ面陳セシメ其夜鷄鳴ニ達シタリ

余カ最初ニ命ヲ受テ東京ヲ出ルノ日ニ方リテ實ニ未タ竹添ガ所爲ノ
曲直ヲ判然スルコト能ハサリキ下ノ關ニ於テ栗野書記官ガ仁川ヨリ歸

ルニ遇ヒ初テ京城ノ事變ノ詳細ヲ知悉スルヲ得テ余カ辨理ノ目的ハ始メテ確定シタリ繼テ仁川ニ至リ京城ニ至リ益々事情ノ瞭然タルヲ得テ竹添ハ毫モ朝鮮ノ亂黨ニ連累セザリシヲ明白ニシテ又疑フ可カラサルカ故ニ余ハ計畫シタル目的ヲ一直ニ施行シテ變スルヲ無カリシナリ

朝鮮人支那人ハ竹添カ亂黨ニ與シタリト唱ヘ此事ヲ中外ニ公告シ並ニ我國ニ向テモ亦之ヲ聲明シタリ是レ蓋シ自ラ信セサル所ノ報告ヲ傳播シ以テ其責ヲ免レントスルノ意ニ出ルニ非ズシテ其心ニ於テ實ニ竹添カ所爲ヲ疑ヒタルナリ此疑念ハ定メテ左ノ三點ニ起由シタルヘシ

一 洪英植金玉均等日本人ト親好ナル交際アリ及ヒ亂黨中少壯ナル

士官生徒ハ即チ日本ノ兵學校ニ於テ演習セル生徒ナル事

二竹添カ護衛兵ヲ引テ景佑宮ニ入ルノ夜王命ニ依リ諸門ヲ守衛セ

シメタリ故ニ亂黨ヲシテ中ニ在リ勢ヲ挾マシメタルノ疑アル事

三竹添ガ入衛ノ後三日ヲ經ルモ王宮ヲ去ラザリシ事

朝鮮人支那人カ竹添ニ向テ疑念ヲ抱キタルハ蓋シ右ノ原由ヨリ生シ

且ツ其竹添ヲ論シタルモ亦此ニ起因シタルモノニシテ強チニ詐僞ノ

證據ヲ捏造スルノ意ニ出テタルニ非ザルベシ實ニ余ト雖モ盡ク事變

ノ詳報ヲ接收スルノ前迄ハ疑惑ノ中ニ在ルヲ免カレザリシモ其後

詳細ナル查明ヲ經ルニ至テ始メテ事情ヲ明確ニ了解スルヲ得タリ此

查明ヨリシテ余ハ上ニ述ヘタル竹添ノ所爲ヲ疑フノ原由ニ付左ノ如

ク斷案ヲ下シタリ

一金玉均等ハ東京ノ學士書生ト親密ナル交際アリテ互ニ密友ト稱スルノ有様ナリシヲモアリタレト却テ竹添トハ明治十五年以來互ニ相敬重スルノ意薄クシテ其交情ハ甚タ冷淡ニシテ且修飾ニ止マリシ今度ノ事變ノ前一月ヲ隔ツル頃金玉均等竹添ニ到リ朝鮮政事ノ意見ヲ談セシニ竹添ハ色ヲ改メテ之ヲ叱責シタルヲアリ是ヨリ後ハ金玉均等ハ益々竹添ニ向テ親密ナル情話ヲ爲スヲ憚カリ遂ニ竹添ヲシテ朝鮮内部ノ事情ニ通スルヲ從前ノ如クナラザラシムルニ至レリ

二竹添ガ兵ヲ引テ入衛シ王命ニ依リ諸門ヲ看守セシメシ故ニ金玉均等ガ實ニ其勢力ヲ挾ミタルヲハ蓋シコレアリシナルベシ併シナガラ是當時ノ事情ノ然ラシムル所ニシテ竹添ノ企圖ニ出テタ

ルニ非サリシナリ竹添カ諸門ヲ護衛スルノ設備ヲ爲シタルハ國王ノ身体ヲ保護スヘシトノ王命ヲ施行スルニ必要ナル區域ノ内ニ止マレリ若シ此事ニシテ亂黨ノ勢力ヲ助ケシコアリシナラハ是レ偶然ノ事ニシテ竹添ノ豫期セサル所仍ホ竹添ノ過失ニアラス故ニ竹添ヲ誣フルニ金玉均及ヒ其黨ヲ助ケタルコヲ以テス可カラサルナリ且各國公使モ亦同時ニ國王ヨリ入闕ノ命ヲ得タリシモ竹添ハ護衛兵ヲ隨帶セルヲ以テ特ニ入衛ノ命ヲ得而シテ其護衛兵ノ助アリ且日本公使館ノ宮闕ニ接近セルヲ以テ竹添ヲシテ最モ速ニ召ニ應シテ入衛スルコヲ得セシメタリ此事ハ一ハ幸ニシテ竹添ヲシテ依頼ニ應シテ幫助ヲ爲スコヲ得セシメ併シナガラ又不幸ニシテ竹添ハ亂黨ヲ加勢シタリトノ嫌疑ヲ起サシメ

タリ

竹添ノ意旨ノ誠實ナルヲ示スヘキ一ノ事情アリ乃チ米ノ公使館屬員ベルナド―氏ハ四日ノ夜入觀シ米公使及ヒ英總領事ハ五日ノ朝召命ニ應シ景佑宮ニ赴キ國王ニ謁見シタリ米公使ノ余ニ告クル所ニテハ國王ハ毫モ幽囚ノ狀アルコトナク其接晤ノ懇篤ナルヲハ平生ニ倍シタリト云ヘリ

三竹添ガ^三日間王宮ヲ去ラザリシモ亦タ其王命ニ順ヘルニ因ルモノナリ竹添ハ入衛ノ翌日即チ五日ニ於テ王ヲ辭シ去ランヲ試ミタレドモ國王ノ更ニ倚賴アリシニ由リ竹添ハ去ラント欲シテ復タ止マレリ其後國王竹添ヲ引見シテ面タリ王大妃ノ疾病ヲ告ケ李載元ノ宅ヨリ王宮ニ還幸スルノ護衛ヲ懇囑アリシニ由リ竹

添ハ又已ムヲ得ズシテ護衛スルヲ勉メタリ終リニ（六日ノ朝）
竹添ガ拜辭ヲ請フニ臨ミテ國王ハ三宮各々安全ニ其宮ニ還ルヲ
俟テ後ニ辭シ去ルベシトノ命ヲ傳ヘラレタリ此時ニ於テ竹添ハ
仍ホ王命ヲ恭ミ強テ辭シ去ルニ忍ビザリシ其後竹添ガ退テ仁川
ニ在リシ時國王ハ仍ホ米英獨ノ交際官ニ托シテ竹添ニ懇切ナル
好意アルヲ傳ヘシメラレタリ

之ヲ要スルニ其情ヲ原ツケズシテ其形ヲ論ゼシメバ竹添ガ亂黨ノ欺
罔ヲ被ムリタリト云ヒ又竹添ハ亂黨ト共謀シタリト云フ者アルハ強
チニ惡意ヲ挾ミタルニ非ズ又詐偽ノ証據ヲ構造スルノ目的ニハ非ザ
ルベシ余ハ細カニ其情ヲ推原シ之ヲ事實ニ參考シテ竹添ガ單ニ國王
ノ召命ヲ恭ミ其所行ノ公法ニ悖ラザルヲ確信スルヲ得タリ是レ

ヲ余ガ日韓事件ヲ辨理スルノ根理トス

第二

余ハ既ニ陳述シタル如ク余カ京城變亂ニ關シ查明シタル問題中第一ノ要點ハ竹添公使カ亂黨ニ連累シタルヤ否ヤノ點是ナリ然レトモ公使ノ亂黨ト通同ノ事ニ至テハ反復根究シテ其証跡ナキヲ知悉セシハ已ニ前ニ述ル所ノ如シ

此ニ次クノ第二ノ要點ハ即チ我護衛兵ト清國兵ト王闕ノ内ニ於テ爭鬪セシ事實ヲ查明シテ其責ノ何レニ歸スルヤヲ斷定スルニ在リキ我兵召命ニ應シテ王ノ躬ヲ護衛ス清兵猝ニ前來シ槍ヲ發チ我兵ヲシテ已ムヲ得ズ之ニ應シ防守ノ位地ニ立タシメタリ然ルニ清國武弁ノ稱スル所ニ曰

甫メテ宮門ニ入レハ燐ノ下ル雨ノ如ク地雷火炮一時並ヒ發シ清官ハ以爲ラク邪臣亂ヲ作シ清兵ヲ拒クト初メヨリ竹添公使カ之ヲ爲サシムルヲ知ラサリキト

此異常ナル陳述ニ對スル答辭ハ簡易ナリ乃チ我護衛兵ノ京城ニ在ルモノハ步兵一中隊仙臺鎮臺步兵第四聯隊第一大隊第一中隊ナリ我國ノ兵制ニ於テ大砲ハ步兵中隊ノ有スル所ニ非ス故ニ京城駐在ノ隊ニハ素ヨリ大砲アルヲナキナリ我兵ニ地雷火炮ノ設備アルヲナキハ此事ヲ查明スル爲ノ第一ノ證據タリ

平心ニ觀察スルニ當時外ニ在ルノ朝鮮人ハ浮說洵々トシテ竹添公使カ兵ヲ引テ入衛スルヲ以テ亂黨ノ凶燄ヲ助クル者ト爲シ國王ヲ取テ奇貨ニ居ク者トシタリ清官ハ卒然朝鮮官吏ノ請ニ應シ而シテ未タ竹

添ノ王命ニ依リ護衛スルヲ詳ニスルニ暇アラズ寧ロ兵力ヲ以テ國王ヲ日本兵ノ手ヨリ救ヒ出スノ急ナルヲ以テ我公使ヲ攻撃スルノ責ノ重大ナルヲ忘レタル者ノ如シ

我護衛兵ハ竹添公使ニ隨テ國王ノ所ニ在リ國王ヲ警護シ以テ非常ニ備フ是ヲ守地ニ居ル者トス清國兵ハ我護衛兵ノ内ニ在ルヲ知リツ、進テ外ヨリ來ル者ナリ是ヲ攻地ニ居ル者トス攻守ノ勢已ニ判然見ル可キトキハ砲發ノ先後ハ必シモ問フ所ニアラサルナリ況ンヤ我公使一行ノ王宮ニ於テ國王ト共ニ銃聲ヲ聞キ激烈ナル騷擾ノ聲ニ驚キタル時ハ支那兵ハ已ニ間近ク我カ對面ニ迫マリ左右ノ墻壁ニ占據シテ我兵ヲ中ニ取り込メ一舉ニシテ鑿殺セントシタルノ形狀ナリシハ隱晦スヘカラサルノ事實ナリトスルヲヤ

且清國ハ三營ノ兵員ニシテ更ニ朝鮮兵ヲ合セタリ而シテ我護衛兵ハ僅カニ百二十名ニ過キス況ンヤ之ヲ率ル者ハ竹添公使ニシテ武事ハ其職ニアラサルヲヤ此ノ寡少ノ兵ヲ以テ十倍ノ敵ニ向テ我レヨリ戰ヲ挑ムハ事理ニ照シ事實ニ徴シテ有ルヲ容サマル所ナリ

清國武弁ハ又函文ヲ我カ公使ニ送り其ノ好意ヲ通セシモ公使ヨリ回信ナキヲ以テ辭トナセリ然ルニ公使ノ函文ヲ受取リタルハ其ノ銃聲ヲ聞クト同時ナリシ惜哉清國武弁ハ此ノ如キ危疑ノ際ニ方テ相當ナル手順ヲ經テ以テ竹添ニ通信セス又竹添ニ回答ヲナス爲ノ充分ナル時間ヲ與ヘサリシヲ此ノ時ニ於テ若シ清國武弁ヲシテ僅カニ平和ノ注意ヲ有タシメハ此ノ不幸ナル兩國兵隊ノ衝突ヲ避クルニ餘アリシナルヘシ

更ニ又說ヲナス者アリテ曰京城ノ變ハ清兵ヨリ先發セシニモアラズ
又日本兵ヨリ先發セシニモアラズ其ノ間ニ介在セシ亂黨ノ所爲ニシ
テ彼此共ニ亂黨ノ爲ニ誤マラレタルナリト此ノ說ハ一種巧ニ構造セ
ル摸稜ノ言ニシテ事實ノアルヘキ所ニアラズ更ニ辯スルヲ借ラザ
ルナリ

我護衛兵ト清國兵トノ位置ニ據リ及當時ノ實際ヲ核察スルハ此ノ
事ノ責ヲ負フ者彼レニ在テ此レニ在ラザルハ復タ掩フ可ラザル者ナ
リ

以上ノ情景ハ清國兵カ朝鮮京城ニ在テ我公使ノ護衛兵ニ向ヒ侵凌ヲ
ナシ以テ清國政府ヲシテ其責ニ任セザルヲ得ザラシムルノ事實ヲ
定ムルモノナリ

名 称	三條実美文書
標 題	朝鮮京城事変始末書

分 類 番 号	34
	29

国立国会図書館

登録番号	
------	--

250484

12

昭和6年1月6日

朝鮮京城事變始末書



明治十七年十二月四日朝鮮國京城ニ於テ郵政局開業ノ宴會アリタリ
談會ノ會主ハ郵政局ノ總辦洪英植ニシテ當日來會セシ賓客ニハ米公
使フー・ト同書記官スカッダー英總領事アストン清國總辦陳樹棠同帮
辦譚賡堯朝鮮貫紳ハ閔泳翊金宏集韓主稷李祖淵朴泳孝金玉均徐光範
尹致昊等ニテ朝鮮雇穆麟德モ加リ居タリ招聘ヲ受ケテ來會セサリシ
賓客ハ獨逸國總領事シヤムブツシ氏ト我辦理公使竹添氏トナリシガ
竹添公使ハ前日米公使獨總領事其他朝鮮ノ貴紳數名ヲ尋問シ其力爲
メニ寒氣ニ中ラレ牀ニ在テ加養ナシ居タリシ故ニ當日ハ其招宴ニ會
セズ島郵書記官ノミ赴キタリ偕郵政局ニテハ賓客皆食堂ニ會シ食桌
ニ就キテ開會ノ祝宴ヲ催シ居タリシガ午後九時晚食方ニ終ルノ際ニ

至テ俄然物音騒ガシク火事ナリト叫ブ聲ノ聞ヘケレバ座客ハ皆驚キ
起チテ表裏ノ屋外ニ出タリ島郵書記官モ此時米公使フ―ト韓人洪英
植等ノ四五名ト與ニ屋後ノ椽側ニ立出デ見タルニ出火ハ局ノ後口ニ
當レル距離甚タ近キ家ナリシが見ル間ニ火勢衰ヘテ鎮火ナスベキ様
子ナリシカバ安堵シテ人人ト共ニ屋内ニ入り座ニ復シタリ然ルニ島
郵ハ小用ノ爲メニ再ビ屋外ニ出デ座ニ復セント食堂ニ來リシニ豈圖
ランヤ堂内ハ韓人ヲ以テ充滿シ上ヘ下ヘト混雜ナシ足ヲ容ルベキ地
モアラズ島郵モ最初ハ矢張火事ノ騒ギナルヨト思ヒ居タリシガ餘リ
ノ事ニ怪ミテ何事ニヤト尋問セシニ喧嘩雜沓ノ際ニテ確トハ知レザ
レ氏誰カハ知ラズ重創ヲ負ヒタル者アルガ如ク聞キタリシガ混雜ニ
シテ爲ス可キ方モ無ク米公使ヲ初メ賓客モ散亂シテ思ヒ思ヒニ避ケ

去ル景況ト爲リシニゾ今ハ詮方ナシトテ郵征局ヲ去リ我公使館ニ回
リ公使ニ其景況ヲ報ゼシガ其言葉モ未ダ畢ラザルニ英國總領事アス
トン公館ニ來リテ島邨ニ面シ郵政局ニテ刺客ノ爲メニ重創ヲ蒙リタ
ルハ閔泳翊ナリシヲ語り且ツ物情騷然トシテ何様事變ノ起ル可キ
形勢ナレバ日本兵ニ護衛シテ自己ノ館ニ送り來ルヲ請ヒシカバ島
邨ハ諾シテ公使ニ稟シ我兵二人ニ護衛サセ英公館迄無事ニ送り届ケ
タリ我公館ニテ閔泳翊ノ刺殺ニ遭ヒタルヲ確乎ト了知セシハ此時ヲ
始メナリトス島邨ハアストンヲ送テ玄關ニ出タルニ早クモ此時我護
衛兵ハ泥岨ノ兵營ヨリ馳付居リタリ島邨ハ中隊長村上ニ向ヒ何故ニ
來リタルヤト問ヒシニ公館ノ近火ト認メタルガ故ニ例ニ仍テ馳セ付
ケタリト曰ヘリ因テ島邨ハ内ニ入り此由ヲ公使ニ報ズル時シモ淺山

顯藏入來リテ惟今朝鮮王宮ヨリ中使邊燧ト云フ者參リタリト告ルニ
ジ島邨ハ何事ナルカト應接所ニ出デ邊燧ニ面シテ其來意ヲ問フニ邊
燧ハ周章シタル面色ニテ島邨ニ向ヒ物情安カナラズ國王モ安泰ナラ
ザレバ公使ニ闕ニ入り保護致シ吳レヨト懇ロニ救ヒヲ乞ヘリ因テ島
邨ハ内ニ入り公使ニ其趣キヲ報ゼシニ公使ハ斯クト聞キテ偕ハ王宮
内ニモ何カ異變ノ起リタリト覺ヘタリ何事カ尋問スベシトテ牀ヲ起
キテ衣服ヲ整ヘ應接所ニ至リ邊燧ニ其事情ヲ尋問セラレシニ惟速ニ
入衛アリタシト述ベタリ此時又モ内官柳在賢外一人ノ者息ヲ切テ馳
セ來リ國王ヨリ王宮護衛ノ事ヲ依托セラルル所ノ親書ヲ齎ラシ來リ
テ公使ニ付シ一刻モ早ク入闕アル可キ由ヲ催促ナシケレバ公使モ今
ハ片時モ打チ捨テ難シトテ護衛兵ヲ引率シテ歩ヲ早メテ王宮ニ向ハ

レシハ午後ノ十時比ナリ其半途ニテ又モヤ一人ノ内官馳セ至リテ大
王殿下ハ景佑宮ニ移坐アラセラレタリ因テ速ニ該宮サシテ參ラレヨ
ト白フスニゾ然ラバトテ其内官ニ先導セシメ景佑宮ニ至リタリ此時
ハ國王王妃世子宮世子妃ニハ旣ニ該宮ニ臨幸アリ頃クニシテ大王妃
モ着駕アリタリ國王ハ竹添公使ノ至レルヲ見テ喜色面ニ滿チサモ待
チコガレタル面色ニテ殿外ノ庭ニ立出デ公使ヲ迎ヘテ其手ヲ執リ速
ニ來テ護衛セシヲヲ謝シ玉ヒタリ此夜宿直ノ大將ハ尹泰駿ニシテ兵
ヲ引キ陪從ス其他縉紳内官雜役女官等紛至雜沓シテ殿ノ内外殆ド雖
ヲ立ツベキ地モアラズ竹添公使ハ島邨書記官淺山顯藏ヲ從ヘテ殿ノ
椽板上ニ立テリ京畿監司沈相薰等ハ庭上ニ立チ劍ヲ揮テ雜役賤人ノ
殿内ニ闌入スルヲ制止ナシ居タリシガ一時殿内ニ燭盡キテ闇黒トナ

リケレバ氣遣ハシキヲ謂フ可ラズ我提灯ヲ分テ内官ニ與ヘ僅ニ一點
ノ燭光微カニ輝キ照スヲ見タリ斯ル有様ナレバ人人モ周章ノ外ナカ
リシニ村上中隊長ハ早クモ心付キテ公使ニ向ヒ斯ク雜沓ノ有様ニテ
ハ奸凶ヲ譏察シテ國王ヲ安泰ニ護衛申サンヲ中々ニ思ヒモ寄ラズ且
此宮ハ全部ノ區域廣大ニシテ門門相隔タリ又樹木叢列ノ所アリ我此
小勢ニテ全部ヲ看衛スルヲ甚ダ難シ宜シク雜人ノ雜沓ヲ制シテ守禦
ノ規律ヲ設ケシメラル可シト申スニ公使モ實ニモトテ國王ニ其旨傳
奏ナシタリ因テ命アリ雜人ヲ殿門外ニ出シ女官ハ宮ノ北隅ニ當レル
一房ニ居リ韓兵ハ殿ノ東面ヲ守リ我兵ハ殿ノ北面ヲ守テ其東北隅ノ
小門ヲ固ム南面ハ韓兵之ヲ守リ我兵其小門ヲ看守シ西北隅ノ第二門
ハ韓兵之ヲ守リ又其西ヲ環衛シ西南隅ノ第二門ハ韓兵之ヲ守リ我兵

二人看守シ正南ノ外門ト西南隅ノ外門及ビ東北隅ノ内外二門ハ我兵
之ヲ守ル等一一部署ヲ定メ了リタリ是ニ於テ外ヨリ來テ宮ニ入ルコ
ヲ請フ者アレバ門兵其姓名ヲ問ヒ一一之ヲ傳奏シ許可ヲ經テ通行ヲ
許ルシ内ヨリ出ル者モ王ノ左右ヨリ名刺ヲ付與スルコトナリシカバ
夜半ヲ過グル比ニ至テ喧嘩漸ク定マリタリ國王ハ殿ノ西室ニ坐シ竹
添公使ヲ召シ席ヲ賜テ安坐ヲ命ジ懇ロニ談話セラレヌ此夜一時過ギ
米公使英獨總領事ノ許ニモ國王ノ使參リテ入闕ノ旨ヲ申入ラレシ由
ナリシガ深更ニ及ビケレバ公使領事ハ參ラレズ只米國公使館附同國
海軍信號士官ベルナドン通辨尹致昊ヲ伴ヒ入内シテ國王ノ安危ヲ慰
問ナシケリ又此夜三時頃内官柳在賢ノ誅殺セラレタルヲ見タリ其
故ヲ問ヒシニ徐載弼答ヘテ曰フ彼レ硝藥ヲ以テ王宮ヲ焼シコトヲ企テ

タルガ事發露シテ捕殺セラレタルナリト翌五日早天國王ハ承旨院ニ
旨ヲ下シ内閣ヲ改革セラル其改正内閣ノ職員ハ左ノ如キ由ニ聞及ベ
リ（但此職員ノ改正ヲ聞キタルハ下文ニ記スル米公使等同席ノ時ナ
リ）

右 議 政

李 載 元

前後兩營監督
兼捕盜大將

朴 泳 孝

左右兩營監督兼捕盜大
將軍國事務衙門協辦

洪 英 植

戶曹參判兼
惠商局堂上

金 玉 均

外衙門協辦
署理督辦

徐 光 範

刑曹判書

尹 雄 烈

後營正領官

徐 載 弼

漢城判尹

金 宏 集

外衙門參議

尹 致 昊

外衙門參議

邊 燧

承 旨

朴 泳 孝

承 旨

金 玉 均

承 旨

申 箕 喜

同日午前十時頃ニ至テ米國公使フー下英國總領事アストン入内シテ
國王ニ謁見セリ國王ハ兩氏ノ入内ヲ聞カルルヤ直ニ謁見ヲ許サレ滿
面喜悅ノ色ヲ現ハシテ兩氏ノ無事ヲ祝セラレタリ此時竹添公使モ同
席シテ國王ヲ始メ同席ノ人皆坐シテ懇ロニ對話アリ國王ノ御意ニハ
偕今回ノ變ニ付キテハ日本公使ニハ早速來衛セリ實ニ此等ノ場合ニ
於テハ同國人ノ如キ懷ヒヲ爲シ日本公使ト差向キ同居致居ルサヘ滿
足ニ思フ程ナルニ今各使ニ面接スルヲ得テ益四海一家ノ懷ヒヲ増
シタリ各氏ノ厚誼ハ感激ニ堪ヘズ各使等ト徐ニ有益ナル談話モ聞キ
度思ヒ居ルヲナリト仰セラレ又仰スル言ニハ凡ソ國トシテ舊來ノ陋
習ヲ破リ開明ノ域ニ進マントスルニ未ダ嘗テ多少ノ變亂ヲ經ザルハ
アラズト聞ケリ即チ現在此處ニ居ラルル日本公使ハ數度ノ變亂ヲモ

經タルコニテ其邊ノ義ハ能ク熟知ナセル人ナリ米英等ノ諸國ニテモ其例シハ少ナカラザルベシトアリシニ米國公使ハ答テサレバニテ候國ノ開ケントスル際ニハ斯ル類例モ尠ナカラズ敝邦ニ於テモ屢經驗致シタルコニテ候ト曰ハレタリ斯クテ頃クシテ國王ヨリ大王妃防寒ノ用意乏キニ由リ李載元ノ邸ニ行幸ノ命アリ米公使英總領事ニモ同行アリタシトノコニテ兩氏モ竹添公使ト俱ニ隨行ナシタリ李載元ノ邸ハ景佑宮ト相接シ僅ニ一門ヲ隔ルノミナリ韓兵邸ノ外圍ヲ環衛シ我兵ハ韓兵ト共ニ邸内ヲ守衛セリ同日二時過ギニ至テ獨逸國總領事セムブツシユ氏入内謁見セリ此時米國公使ハ英獨兩國總領事ニ向ヒ今回ノ事變ノ如キ場合ニ際シテハ外國ノ使臣タル我我ハ宜ク協議シテ安危ヲ俱ニスル處置ヲ謀ル可キコナリト申出シ獨逸總領事ハ答ヘ

テ只今ノ景況ニテハ左シタルコモアルマシ萬一變亂ノ大ニシテ免レ
難キニ至ラバ安危ヲ一ニスルコ固ヨリ勿論ノ事ナリト曰ヒタリ又各
國使臣互ニ談話ノ間ニ此度ノ事變ハ何如ナル事ニテアルベキヤトノ
談ニ及ビタル時米公使ノ答ニハ此ハ改革ノ一舉ナリト申シタリ斯ク
テ三時ヲ過グル迄外國使臣ハ國王ノ許ニ詰メタリシガ竟ニ皆相伴フ
テ辭シ去リタリ此時竹添公使モ亦各國使臣ニ次ギテ辭シ去ランコヲ
金玉均ニ傳奏ヲ請ヒシニ國王尙暫ラク留衛アリタシトノ懇命アリケ
レバ辭スルコ能ハズ因テ島邨書記官等ヲシテ此事變ヲ本國ニ報ズル
ノ電信草案ヲ綴ラシメ島邨ニ公館ニ齎チ歸リテ本國ニ送ルノ手續ヲ
爲サシメタリ午後四時ニ至テ國王ハ竹添公使ヲ召シテ大王妃ノ寢食
不安ノ爲メニ大闕ニ還幸ス可キ旨ヲ傳ヘラレケリ薄暮ノ遷幸ハ不虞

ノ恐レアリ何如之レアル可キカト掛念アリタレモ國王ノ命ノ懇到ニシテ辭セン様ナケレバ止ムコヲ得ズシテ陪從ナシタリ島邨書記官ハ一度公館ニ回り再ビ李載元ノ邸ニ至リ見タルニ最早國王モ公使モ在ラズ僅ニ留リ居レル韓人ニ聞キテ其王闕ニ還幸ナリシヲ知リ追テ中途ニ及ビ公使ト俱ニ王闕ニ至リタリ斯クテ王闕ニ至リタル比ヒニハ日方サニ没セリ國王王妃世子宮世子妃及ビ大王妃ハ皆大王妃ノ寢殿ニ御同居アリテ我兵ハ其周圍ヲ護衛シ第一ノ諸門ハ韓ノ左右營兵之ヲ守ル第二第三ノ諸門ハ韓ノ前後營兵之ヲ守リ東西ノ門モ亦韓兵守リ固メタリ昨夜大臣數名が景佑宮ノ内外ニ於テ刺殺セラレタルコト此夜ニ及ビテ確知セリ何故ニ昨夜我公使ハ景佑宮ニ在テ此事變ヲ見聞セザリシカト云フニ前記ノ如ク我公使ハ昨夜國王ニ咫尺シテ殿外

ニ出デズ國王ノ左右ハ此事ヲ談ズル者ナク内外隔絶シテ通ズルコナ
カリシガ此日ニ至テ此風說隱レナク夜ニ及ビテ衆人一口其言フ所符
節ヲ合シタルガ如シ因テ其實ノ確タルヲ知り得タリ翌六日トナリ
別ニ異狀モ無リシカバ公使ハ再ビ護衛ヲ辭シ去ラントテ其由洪英植
ヲ以テ稟請シカト國王ハ甚ダ便リナク思召サレテ國王王妃世子宮等
ノ各殿ニ御歸座アリテ無事平穩ノ御有様ヲ見奉ルマデ非常ヲ警メヲ
レタシト慇懃ニ賴マセ玉フヲ以テ強テモ辭シカ子テ午後ニ至ルマデ
尙王宮ニ止リ居タリ此日早天大臣ノ除目アリ李載元左議政ニ進ミ洪
英植ハ右議政ニ進ミ徐光範ハ左右兩營監督兼捕盜大將ヲ兼任シ軍國
事務衙門及ビ惠商局ヲ廢シタリト聞キタリシガ午後三時比ニ至リテ
國王ハ大政一新ノ勅ヲ國內ニ下サントテ左右議政ヲ召シ令ヲ傳ヘ居

玉フ時シモ忽チ爆然トシテ地ニ轟ケル響アリ是第一ノ銃聲ナリ人人此ハト驚ク其中ニモ國王ハ最モ驚キ訝リ遽シク起テ左右ヲ顧ミ此レハ何ノ音ナルゾ何ノ響キナルゾト幾度モ繰リ返シテ問ハレタリ此時内官某ハ何者ヨリ受取シカ竹添公使ニ宛タル一封ノ書翰ヲ島邨書記官ニ交付ナシ島邨ヨリ公使ノ手ニ渡セシガ恰モ此時又第二ノ銃聲轟キ渡リタレバ國王ハ驚キ恐レ寢室サシテ逃入リ玉フ間モ無ク第三ノ銃聲響キテ彈丸ハ雨ノ如ク注ギ來リケレバ公使ハ彼書翰ヲ拆キテ讀ン遑モナク其儘洋服ノ落シニ收ムル時シモ村上中隊長馳セ來テ公使ニ向ヒ見ラルル如ク清兵ハ第二ノ諸門内ニ亂入シテ發銃シ守衛ノ韓兵言甲斐ナクモ逃走リ或ハ清兵ト合シ發銃セリ何如致ス可キ哉ト申スニ公使ハ答テ最早斯ク相成リテハ致方ナシ國王ヲ保護スル爲メニ

參リタルナレバ國王ヲ保護スル丈ケノ防禦之レアル可シト曰ハレケ
レバ村上ハ承リヌトテ大喝一聲打テヨノ號令ヲ發セシニ清兵ノ闖入
無禮ヲ怒リ耐ヘ兼テ號令遲シト待受ゲタル我兵ハ得タリト敵ニ打チ
向ヒ烈シク應銃ヲ發セシカバ其勢猛ニシテ清韓兵ハ須臾ノ間ニ擊退
ケラレテ逃散セリ竹添公使ハ國王ノ安否ハ如何ト王ノ寢室サシテ進
ミ入ント爲シタリシニ京畿監司沈相薰ハ室前ニ在テ之ヲ止メ殿下ハ
御安全ニ候フヲ御配慮アルナト申セシニゾ公使ハ王妃及大王妃ノ御
座ナランヲ無下ニ進ミ入ルハ心無キ事ナリト思ヒ返シテ敢テ進マズ
島邨淺山等ヲ率テ寢室ノ前面ニ立居タリシニ銃丸ノ飛來ルヲ雨ノ如
ク已ニ寢室ニ及ビケレバ急ギ王ヲ安全ノ地ニ御供仕フマツレトテ寢
室ニ立入タルニ國王ハ何時ノ間ニカ逃レ玉ヒテ其影ダモ見ヘザレバ

此ハ如何ト驚キテ寢殿ノ背後ニ至リ手ヲ分チテ王ノ踪跡ヲ搜索セリ
抑モ大闕内ノ形勢ハ第三門内ノ兩側ニ一房アリ東ニ正殿アリ大王妃
ノ寢室ハ房ノ後ニ在テ稍東ノ方ニ倚リタル場處ナリシガ清兵不意ニ
來テ第三門及ビ其兩邊ノ屋宇ト土手ヲ占メ韓兵ト合シテ三面ヨリ緊
シク銃撃ヲ爲シケルカ小谷中尉ハ之ニ當リテ防戦ナシ竟ニ之ヲ撃退
ケタリ竹添公使ハ國王ノ踪跡ヲ尋テ寢殿ノ背後ニ出タリシニ清兵ハ
早クモ東方ヨリ突出シテ銃撃セシガ大西少尉ハ馳セ向ヒ防ギ戦テ撃
チ走ラス此時村上中隊長ハ公使ニ向ヒ策ヲ獻スルニハ此大王妃ノ殿
タルヤ形勝ノ地ニシテ守ルニ可ナリ願クハ國王ヲ茲ニ復シテ護衛ノ
功ヲ全タカラシメ玉ヘ我兵ハ已ニ整ヒ居レバ敵兵ノ千百來ルコアル
モ恐ルルニハ足ラズト申スニ公使ハ答ヘテ君ノ言フ所甚ダ宜シ故ニ

余ハ國王ヲ踪跡スルヲニ盡力致ス可シト因テ俱ニ後苑中ノ丘上ニ至
リ四方ヲ探望スレモ王ノ行方更ニ知レザリシカバ村上中隊長ハ再ビ
公使ニ打向ヒ此地ハ王宮後苑中ノ最上ノ形勝ヲ占メテ攻守共ニ兵ヲ
用フルニ適ス眞ニ是レ吾ノ死處ナリ請フ此地ヲ以テ中堅ト爲シ戰線
ヲ四面ニ張り寄セ來ル敵兵ヲ一撃ノ下ニ鑿ニセント勢ヒ込テ申シケ
レバ公使ハ甚ダ善シト稱シ村上中隊長ノ意ノ儘ニ兵ヲ指揮シテ備ヘ
守ント爲セシニ忽チ遙カ後ニ方リ一人ノ侍臣現レ出デ此方ニ向テ手
招キナシ大音上ゲ殿下ハ是ニ渡ラセ玉ヒ候フゾヤト叫ブニ公使ハ聞
クヨリ偕ハ國王ハ彼處ニ潛ミ玉フト覺ヘタリ國王ノ在所知レタル上
ハ片時モ猶豫ス可キニ非ズト彼方ニ向テ馳セ行キタリ因テ村上ハ急
ニ傳令兵ヲシテ隊兵ニ令シテ曰ク死スモ守線ヲ去ルコ勿レト遂ニ公

使ノ後ニ從ヒ俱ニ其内官ノ指ス所ニ至リ見ルニ國王ハ後苑ノ中ノ小丘ノ間ナル凹キ處ニ建テタル小亭ノ中ニ潛ミ玉ヲ公使ハ村上中隊長ト半小隊ノ兵ヲ帥ヒテ其護衛ヲ爲シ居タリ此時清韓兵ハ右翼ヨリ大ニ來リ迫リシガ面高中尉安藤少尉ハ之ヲ防デ悉ク撃テ走ラス然ルニ王ノ在處ハ地勢甚ダ惡シク敵兵ヲ受ケテ防戦スルニハ頗ル不利ナル場處ナリシカバ之ヲ奉シテ稍小高キ丘ノ上ニ移シ樹下ニ氈ヲ敷キ王ヲ安座サセ參ラセタリ此時ニ至テ竹添公使ニモ稍閑ヲ得タレバ彼ノ前ニ匆卒ノ際領收ナセシ書ヲ披キ見タリシニ此ハ是レ清國ノ武官等ガ贈リタル信書ニゾアリケル之ヲ讀ミ居タル其傍ヨリ村上中隊長ハ又モ公使ニ向テ斯ク殿下ノ騷騷シク立騷ガレテハ甚ダ困却致スヲニテ箇様ノ場合ニ臨ミテハ詳ニ銃聲ヲ聞キ敵ノ勢ヲ察シテ進退致サズ

ハ成ヲヌナリ暫ク御靜座アリテ然ル可シト述ベタリ然ルニ銃聲ノ
激烈ナルヲ怯レテ國王ハ又モ侍臣ニ負ハレ其處ヲ走り去リ後苑ノ最
後ノ低地ニ建テタル亭中ニ入テ潛ミ玉ハントセシニゾ其處ハ地勢惡
シク反ツテ危道ニ陷ルモノナリト稍クニ說キ諭シテ後門ニ接近ナセ
ル小丘ノ上ニ移シ居ラシメタリ後門ノ外ニハ數十歩ヲ隔テテ韓兵雲
霞ノ如ク屯居リ大王妃ハ其背ニ當レル山ノ中腹ニオハスト申スニゾ
國王ハ大王妃ニ隨從センコトヲノミ絶間モナク仰セラルルニ由リ更ニ
村上中隊長ヨリ審カニ彼我ノ銃聲ヲ察スルニ非ザレバ進退ニ便ナラ
ザル旨ヲ懇ニ侍臣等ニ說聞カセ侍臣等ヨリ切ニ靜マリ玉ハントヲ言
上セシニ其時國王ハ日本人ヲ顧ミテ曰ク皆皆母親ニ逢ヒ度ク思ハザ
ルヤ朕モ亦是母親ニ一刻モ速ニ逢ハンコトノ望ムナリト兩手ヲ以テ

脊負タル侍臣ノ肩ヲ叩キテ急ギ立テ中々靜マリ玉ハズ侍臣ハ切ニ之ヲ諫メテ止マザリシニ再ビ曰ク然ラバ暫時ノ間靜マリ居ル可キニ由リ何卒早く母親ニ逢ハセ吳レヨトノ玉ヒタリ此時マデハ三面ノ銃聲雷ノ如ク耳ヲ貫キシガ頃クシテ轟然大炮ノ音響キテ樹木ノ間ヨリ黒烟立上リ火光天ヲ焦シ從テ銃聲始テ止ミケレバ偕ハ清兵が大砲ヲ放チ宮殿ヲ燒キテ戰ヲ止メタルヲ察知セリ然レモ大王妃ノ許ニ行カントセバ韓兵ヲ打破テ後ナラデハ達シガタク且ツ後門外ハ韓兵形勝ノ高地ニ據リ俯シテ我ヲ射撃スルヲ得我兵ハ低地ヨリ仰イデ彼ニ向ハザルヲ得ザルヲニテ小勢ニテハ容易ニ目的ヲ達シ難ケレモ國王ノ懇命默止シ難ケレバ竟ニ王ヲ奉シテ後門ヲ立出ントシタルニ韓兵ハ早クモ之ヲ見テ日本人ノ出ルゾ討チ取レト罵リ叫ビテ發銃ナシケル

ニゾ先ニ立タル一人ノ侍臣忽チ手ヲ擊レテ鮮血淋漓國王ノ御衣ニ洒
グ可キ程ナリシカバ斯克テハ前途甚ダ危シトテ門内ニ立戻リ王ヲ松
樹ノ陰ニ伴ヒ御座ヲ設ケシニ國王ハ公使ニ向ヒ朕ハ縱令死スルモ恨
ミナシ國王ハ天性至孝ノ資ニシテ平生ノ御事ヘ方行届タルハ申スマ
デモナク今回ノ事變ニ際シテモ傍ヲ離レズ起居ヲ伺ヒ居ラレ
リタ大王妃ニ侍スルヲ懇望スルナリト繰返ヘシテ仰出サレ護衛ヲ辭
シテ一人ニテモ馳セ行玉ハン様ノ御意ナリシカバ竹添公使以爲ラク
門外ノ地勢敵ヲ防グニ便ナラザルノミナラズ今我兵ヲ以テ國王ニ陪
從スル時ハ却テ國王ノ身ニ危險ヲ招クノ恐レアリ目今ノ處ニテハ清
兵ハ已ニ退キタリ殘ル、韓兵ノミ韓兵如何ニ暴ナリモ國王ノ身體ニ
危害ヲ加フルヲハヨモアルマシ此上ハ國王ヲ韓兵ノ護衛ニ任ズルコ
ソ安全ノ策ナレト因テ其旨國王ニ申上タルニ國王ハ之ヲ聞キ善ト呼

ビ玉ヒテ侍臣ニ脊負ハレタルマ、後門ノ外ニ走り出玉ヒタリ是ニ於
テ我公使ノ國王ヲ護衛スルノ任ハ全ク畢リタルモソト謂フ可シ此時
昏黑復タ人面ヲ辨ゼズ村上中隊長各所ニ配布シタル兵ヲ召集シテ一
一其名ヲ呼ビ之ヲ點檢シ了ルノ後公使村上中隊長ニ謂テ曰ク既ニ國
王ニ拜別シタル上ハ公使館ニ歸リ諸員ト其存亡ヲ共ニセザル可ラズ
村上中隊長請テ曰ク清兵ト快ク一戦スルヲ許サレヨ公使曰ク使臣ノ
職ハ戦ノ勝敗ヲ競フニ在ズシテ事ノ曲直ヲ爭フニ在リ護衛ノ兵ハ攻
撃ヲ求ムル所以ノ性質ニ非ラズ況ヤ今日ノ戦一ヲ以テ十二當リ防戦
三時間ニシテ遂ニ敵ヲ退却ス豈遺憾アラシヤ但速ニ公使館ニ歸ル可
シ何ノ門ヨリ出ル便ナルヤ村上曰ク何ノ門ヨリスルモ敵兵猶充塞ス
只命ニ從フベシトアルニゾ公使ハ然ラバ公館ノ消息ヲ速ニ知ル可キ

方ニ從シトテ隊ヲ前後ニ分チ公使ヲ護衛シテ後門ヨリ立出タリ此時
城中各處ニ火光天ヲ焦セリ遂ニ山背ニ沿ヒ翠雲亭ノ傍ニ出レバ火光
ノ間ニ隱クトシテ我公館ノ旗竿ヲ見始メテ公館ノ尙存在スルヲ知
ル進行シテ市街ニ入リシニ十字街及ビ横斜ノ道路アルノ處ニ至ル毎
ニ篝火ヲ燒キ我兵ノ過ルヲ待チ路傍又屋內ヨリ頻ニ銃ヲ發シ或ハ瓦
石ヲ投擲シ面高中尉爲メニ微傷シタリ公館ニ近クニ及デ敵兵路ニ當
テ放銃セシガ我兵ハ擊テ之ヲ走セツツ漸クニシテ公館ニ歸リタルハ
午後ノ八時ナリ公使ノ王宮ニ赴カレタル後我公館ニハ屬僚及ビ館員
職工等并八名ノ門兵アリ合シテ百余人留守ナシケルガ王闕ニ銃聲ノ
起シヨリ清裝ノ兵ハ一回來テ襲撃セシガ館內留守ノ者與ニ奮テ之ヲ
防ギタレハ敵兵忽チ逃ケ退キタリ程ナク韓兵襲ヒ來レルヲ二回ニ及

ビ石ヲ投ゲ矢ヲ飛シテ攻メ來リシカ所之ヲモ速ニ擊退ケタリ此際我
 邦人ニ死傷モアリ又我邦人ノ京城ニ滞在ナセル商人等ノ中ニテ無慘
 ノ死ヲ遂ゲシ者尠ナカラズ此ハ稿尾ニ於テ一一之ヲ列記ス可シ偕公
 使ノ公館ニ歸リテ後ハ嚴重ニ守備ヲ整ヘ敵兵ノ來襲ニ備ヘ居リタリ
 其夜二時過南山ノ我警衛本營ニ火ノ起リタルト見ヘテ烟焰天ニ漲リ
 タリ乃チ敵兵ガ我糧食ヲ掠メ且ツ之ヲ燒キタルヲ知リタリ公使ノ一
 行ハ皆飯ヲ喫シ疲ヲ憩ヒ婦女ハ皆公使ノ寢室ニ集メテ之ヲ安慰ナシ
 タリ公使ハ是ニ至テ國王ニ奏シ且ツ清國官吏ニ談判スル所アラント
 セシガ道塞テ通ゼザリシカバ遺憾ナガラ之ヲ止メ因テ本日ノ事情ヲ
 我政府ニ具稟スル爲メ機密信ヲ草シ又電信文ヲ草シタリ翌七日早天
 ヨリ公館ノ前後ノ門ニ向テ銃擊絶ヘズ又數十人ノ暴徒群ヲ爲シテ突

哄シ瓦石ヲ擲テ大門ニ攻入セントセシ凡ソ三回ナリシガ我門兵ハ
毎ニ發銃シテ之ヲ退ケタリ午前八時頃一韓人一封ノ信書ヲ門外ニ置
キ直ニ逃ケ去リシニゾ門兵之ヲ取テ公使ニ呈ス拆キ見タリシニ其信
書ハ金宏集送ル所ノ照會ナリ公使ハ直ニ其返書ヲ作り又闕内ニテ受
取リタル清武官ノ來書ニ答フルノ書ヲモ封入シテ金宏集ヨリ清營へ
轉致アルベキ様ニ囑托ヲ爲スノ信書ヲ爲リ之ヲ贈ラントセシニ使者
ニ充ル者ナシ日本人ヲ遣ラシカ途ニ暴徒ノ充塞シテ忽チ打殺サルル
ノ恐アリ多數ノ隊兵ヲ遣シカ公館ノ守備ニ欠ク所アルヲ以テ之ヲ遣
ルヲ能ハズ館内曾テ雇ヒ置キタル韓人ハ此事變ノ生ズル前ニ多ク逃
レ去テ復タ來ラズ僅ニ三人ノ始終留リ居リタル者アリシガ是レ亦恐
レテ門外ニ出ルヲ能ハザリシガ故ニ頗ル其人ヲ得ルニ苦ミタリシガ

強テ其三人ノ韓人ノ内一人ヲ諭シテ使夫ニ充テ其信書ヲ贈リタリ又
此日公使ハ米公使英獨總領事等ニ照會シテ俱ニ謀ル所アラント欲セ
ラレタリシガ館外一面ニ暴徒充滿シテ火ヲ放チ石ヲ飛バシ何時大舉
シテ推シ寄せ來ンモ知ル可ラズ其守備疎ニス可ラズ且ツ道路ハ梗テ
通ズ可キニ非レバ遺憾ナガラ其場合ニ至ラザリシ偕我公館中ノ諸員
男女僕婢ヲ合シテ三十余人木匠職工七十余人兵員百四十余人其他京
城ニ寓在スル我人民ノ難ヲ避ケテ來リ集ル者三十余人アリテ一日ノ
食米一石ニ上レリ此日午時ニ至テ公使ハ粥ヲ啜リナガラ會計員ハ糧
米ノ蓄積ハ幾何アリヤト問ヒシニ會計員答フルニハ已ニ昨日ヨリ城
内ノ市街ハ每家戸ヲ鎖サシ城外ヨリ米ヲ齎シ來テ露店ニ販賣スル者
モ其跡ヲ絶チ之ヲ買入ルルノ路ナキヲ以テ糧食甚ダ乏シ故ニ今朝ヨ

リ文官婦女其他ノ人民ハ皆粥ヲ啜リ獨リ兵士ニ粒食ヲ供スルコト爲
シタルガ最早現在ノ糧米ニテハ今日ノ晩食モ覺束ナク相成リタリト
申シタリ公使ハ因テ思フ様ハ斯クシテ敵圍ノ中ニ在テ徒ラニ餓死ス
ルハ策ナキノ甚シキナリ然ラバ婦女ヲ刺殺シ撃テ出テ快ク戰死セシ
ガ亦使臣ノ職ニ非ズ姑ク仁川ニ退キ我政府ノ指揮ヲ待ツニ如カズト
此時京城ノ各門ハ封鎖シテ專ラ攻戰ノ備ヲ爲シ市街ニハ瓦石ヲ集メ
薪木ヲ積ミ暮ルルヲ待チテ我公館ヲ襲撃シ若シ圍ヲ突テ出ルアレバ
木ヲ焚テ路ヲ照ラシ瓦石ヲ亂投シテ之ヲ鑿殺セント企テ居レル由秘
密ノ注進聞ヘケレハ公使ハ愈々意ヲ決シ村上中隊長及ビ館員ヲ集メ
糧食ノ竭キタルコトヲ告ケ且ツ仁川ニ退クノ意ヲ傳ヘシニ村上中隊長
ハ公使ニ向ヒ曰ク死ハ本ト吾職ナレバ何處ニテモ死スベシ其死處ニ

至テハ唯公使ノ命ニ從フソミト館員ハ皆口ヲ揃ヘテ公使ノ意見ニ固
ヨリ異論ナシ只南大門ノ守備殊ニ嚴ナリト聞ケバコレヨリ出シテ容
易カラズ西門ヨリ突出セバ猶一條ノ血路ヲ開キ十中ノ一ハ生キテ仁
川ニ達シ我政府ニ稟報スルコトヲ得ベシ若シ今ヨリ二時間ヲ遲フシテ
昏暮ニ至リナバ彼ノ謀已ニ熟シテ此事萬一モ成ルコトヲ期ス可ラズ
速ニ決行アル可キ由ヲ申スニゾ是ニ於テ金宏集ニ書ヲ贈リ公館ノ保
護ヲ依頼ス然シテ公使ハ館中ニ令ヲ傳ヘテ曰ク昨日清兵闕ヲ犯シテ
銃撃ス余已ヲ得ズ應銃シテ以テ國王ヲ保護シタルニ今ヤ韓ノ兵民ハ
却テ我ニ向テ攻撃シ韓政府之ガ制止ヲ爲サズ余ガ一行ハ仇敵ノ中ニ
在リト謂フベシ使命殆ト盡スニ道ナシ仍テ仁川ニ退キ之ヲ我政府ニ
稟報シ以テ進退ヲ決ス可シト乃チ機密書信類ヲ燒キ皆單身輕裝ニシ

テ公館ヲ立出タリ此時午後二時頃ナリ安藤少尉先鋒タリ大西少尉之
ニ次グ面高小谷ニ中尉之ヲ殿シ村上中隊長ハ竹添公使ヲ護シテ前後
ヲ指揮シ書記官及屬員皆刀ヲ佩ビ銃ヲ携ヘテ相從ヘリ職工數十人傷
者ヲ舁キ彈藥ヲ擔ヒ或ハ斧ヲ携ヘ婦女童幼ノ前後左右ヲ護シテ大道
ヲ取り西門ニ向テ發行ス韓ノ兵民或ハ銃ヲ放チ或ハ矢ヲ飛バシ或ハ
瓦石ヲ投ジテ左右前後ヨリ屢迫リ來シカド我兵ハ盡ク撃テ之ヲ走ラ
ス舊大關ノ前ヲ過ルニ當テ左營ノ韓兵凡ソ一中隊營前ニ整列シ大砲
小銃ヲ亂發シ我側面ヲ撃チ大小ノ彈丸頭上十尺以上ニ飛行シ或ハ地
ヲ捺リ幸ニシテ三四人ノ微傷者アルノミ我後隊ハ大路ニ伏シ或ハ小
溝ニ潛ミ應戰尤力メ韓兵ヲ營内ニ追ヒ退ケタリ斯クテ進行シテ西門
ニ至レバ門ハ鎖鑰ヲ嚴ニシテ容易ク之ヲ開カズ守門ノ旗手銃ヲ手ニ

シ我ハ刀ヲ把リテ守リ固メ居リタリ我先隊ハ突哄シテ其旗手ヲ走ラ
シ我職工ハ斧ヲ揮テ鎖鑰ヲ切斷シ扉ヲ開ヒテ門外ニ出タリ敵兵ノ尾
撃ハ絶ヘズ迫リ來リシガ我後隊ハ毎ニ撃テ之ヲ退ケ漸クシテ麻浦ニ
至ル後ヘヲ顧ミレバ京城ノ内ニ黑煙天ヲ衝キ火光空ヲ焦ス所アリ其
方角ヲ案シテ我公館ノ焼ルヲ察知セリ是ニ於テ舟ヲ要メテ漢江ヲ
渡ラントセリ我後隊ハ要地ヲ占守シ前後順次ヲ正シテ公使ヲ護シ漢
江ヲ渡リシニ韓兵及ビ土人ノ銃ヲ携ヘタル者數十人尾撃シテ公使ノ
渡ルヲ妨ゲントシタルガ我兵ハ撃テ數名ヲ斃シ忽チ之ヲ追退ケタリ
船ノ中流ニ至ルキ江ノ下流ニ繫ク所ノ舟中ヨリ小銃ヲ發スルヲ五六
丸ニ及ビシガ我ハ又撃テ之ヲ走ラシタリ漢江ヲ渡リ了レバ日ハ暮レ
ヌ此ヨリ尾撃ノ者モアラザリケレバ戒嚴ヲ解キテ徐ヤトシテ行キタ

リ斯クテ此夜ハ寒ヲ忍ビ雪ヲ冒シ終夜道ヲ歩シ翌八日午前第七時濟物浦ニ抵リ領事館ニ到着シタリ

同月十日ニ至リ日本人十六名支那兵ト朝鮮兵ニ護送セラレテ濟物浦ニ來レリ此ハ米公使フートガ變亂ノ際米公館ニ逃込ミタル日本人又ハ米英ノ兩公館ニ護衛ニ遣リタル日本兵四名ト其他支那兵營ニ虜ニセラレ居リタル我婦人等ヲ掛合シテ自分ノ手ニ引取り厚ク之ヲ扶助ナシテ清韓ノ官吏ニ照會シ此十六名ノ日本人ヲ傷害セシメザル様ニ證明セシメ然ル後ニ海軍信號士官ベルナドンニ清兵三十人ト韓兵二十人トヲ率ヒテ之ヲ護衛セシメ此日ニ至テ濟物浦ニ來リ送ラレシナリ右等ノ人人其餘命ヲ全クシタルハ全ク米公使ノ仁意ニヨリタルモノナリ

今回京城ノ變ニ遭ヒテ清韓兩國ノ兵民ノ兇暴ノ爲メニ慘死ヲ爲セシ者ハ左ノ如シ

山口縣長門國大津郡

橋本 龜吉

大阪府下北區菅原町平民

黒田 幸助

岡山縣美作國津山勝間田町

江見 治助

滋賀縣近江國甲賀郡中野鄉村

東屋 貞吉

島根縣石見國濱田枇杷町

賀川 岩吉

長崎縣對馬國今屋敷町

吉澤 増作

同 久田道町

住永 辰安

同 國分町

浦瀬由太郎

大阪府西區北堀江三番町

山田 修造

大分縣下毛郡豐後町

同豐前國下毛郡西田口村

福岡縣箱崎村平民

同

大分縣下毛郡合馬村

長崎縣肥前國杵島郡小恩思村

同上

東京麴町平川町

福岡縣筑前國下坐郡

長崎縣長崎區魚町

兵庫縣神戸區兵庫切戸

久保田孫一郎

金色 良忍

國岡 健藏

同人妻 三丰

古野 辰藏

奥川嘉太郎

奥川 義一

田邊 正光

諫山卯三郎

井奈田金三

福井 利助

長崎縣對馬國大手橋町

古屋堅四郎

同 長崎區船大工町

友田龜次郎

兵庫縣但馬國出石郡出石

杉原 常範

長崎縣對馬國

田中 鶴次

橫濱住吉町三丁目

本多收之輔

大分縣豐前國下毛郡

山口 辰藏

長崎縣對馬國大手橋町

總島 和作

大阪府東區谷町四丁目

田中直次郎

福岡縣筑前國粕屋郡名子村

黑木國三郎

歩兵大尉

參謀本部語學生

同

歩兵曹長

一等卒

同

私費生徒

銃工

縫工

從者

常用夫

磯林 眞三

上野茂一郎 戰死

赤羽平太郎

飯島碩太郎 戰死

藤代市十郎 同

目黒多利吉 同

幾度 久太

國友 直治

山本 兼吉

松岡 幸喜知

北川 駒吉

以上四十名

名 称	三條実美文書
標 題	清仏戦争関係電報訳文

分 類 番 号	34
	30

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

250483

23-11

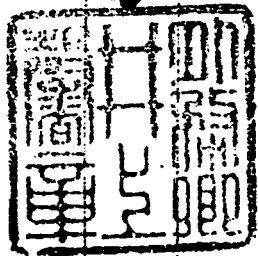
昭和6年11月6日

親展第百八號

霞不垂高所、洞教宇差起、後在在處
花片、後在在著所、後在在著所、後在在著所
佛法以爲、後在在著所、後在在著所、後在在著所
洞文、後在在著所、後在在著所、後在在著所
也

明治三十八年四月廿四日

多摩郡仙臺井上啓



多摩郡仙臺井上啓



明治十二年四月十日

左衛門右衛門 佐々木 實雄

露國陸軍中將コマロー氏ハアフカシ人ノ不遜ナル
行為アルヲ以テ三月十日ニコウスク河
傍アフカシ人ノ堡壘ヲ攻撃シ而シテ付寄ラ陸走
セシメタリ然レモ露兵多ク捕虜セラルル者尠ク
ハ此事件ニ付テ目下高麗中ニ兩國兵船間
ノ衝突ニハサレモ形勢ナクナリルベシトノ望
ヲ懷クモハハシ

明治三十八年四月十日

在英河船中及東電海

露西亞アアカニスルニ、向ニ我々起シリ、常地ニ
テハ、以テ露英兩國間、戦争ヲ起スナラント
ノ輿論ナリ

明治三十二年四月十九日午後二時三十七分

安藤領事ヨリ電報本文

申報、左、上論ヲ掲載セリ

今般佛國政府、某、約束、因テ平和ヲ爲サセ
リ、然レトモ、他、之、ナキ、故、其、情、狀、ヲ、聴、納
ス、之、同、意、之、宣、光、緒、以、來、之、於、テ、ハ、四、月、十、五、日、不
休、然、同、日、五、日、ヨリ、撤、兵、之、宣、光、緒、以、西、ニ、於、テ、ハ、四、月、
廿、五、日、ヨリ、休、兵、五、月、五、日、ヨリ、撤、兵、之、宣、光、緒、以、西、ニ、於、テ、ハ、
四、月、十、五、日、不、休、然、同、日、五、日、ヨリ、撤、兵、之、宣、光、緒、以、西、ニ、於、テ、ハ、
解、之、心、シ、本、條、約、意、ハ、若、ク、休、兵、之、條、約、守、ノ、爲、ノ、凡、テ、沿、
海、ノ、諸、島、ニ、布、告、シ、且、停、火、ノ、確、定、ス、之、也、ハ、神、兵、
ノ、争、執、ニ、因、之、ニ、其、野、曲、ノ、實、情、ニ、對、シ、所、望、ス、

急ハバカラガル者達ニヘキハ訓令ヲ受ケル

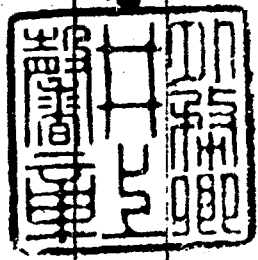
如
發
キ

親展第百拾四號

伊原金權大使に別紙附文を通電致す

昭和六年四月十七日

外務卿 岡田 晴 閣下



大政大臣 岡田 晴 閣下



伊藤大使より電報譯文

四月十六日午前十時發

昨日、會議に於て双方左の通り同意せり

第一、兩國撤兵、條約案ヲ承認シ本月十八日
ヲ以テ記名シ其日より四ヶ月内に施行スヘシ但シ
非常の場合に於テ兵ヲ朝鮮ニ送ル權ハ兩國各
之ヲ保持スルモ出兵ノ節ハ各豫メ之ヲ通告ス
ベシ

第二、李鴻章ハ暴行(清兵)ノ件ヲ吟味シ若シ
清兵於テ果シテ有罪ナルヲ發見セハ之ヲ處罰
スヘキ者公修ヲ以テ保証スルヲ約セリ

第三、李鴻章ハ又該公修中過般ノ事件に際
シ清國將官ノ不注意ノ行為ニ付之ヲ譴責
スヘキ旨ノ保証ヲモ批者へ申送ルベシ

凡テ必要ノ手續ヲ済ム迄ハ完結トシ全ク修
任ヲ成難トト成氏批者、於テ右ノ約ヲ得ニ迄モ
至リタルハ

聖上并ニ内閣ニ於テ成満足ト承認アリコトヲ
希望ス

親展第百貳拾號

本月二日付閣下院ニ於テ上院議實、概率法
 ニ係ル政府ノ議案ヲ否決セシニ翌三月内閣
 會議ニ於テ内閣員一員辭職スベキガ若クハ
 今更ニ忘ラ招キタル内閣員一名辭職スル方
 可然ル之旨討議ス末遂ニ如議案ノ其他直
 ニ上院ニ提出シ若シ上院ニ於テ政府ノ議案ヲ可
 決セハ再々之ヲ下院ニ提出スベシト雖モ萬一上院ニ
 於テモ如議案ヲ否決セハ内閣員一員辭職スル
 事方議決スル事大然ルニ本月九日上院ニ於テ
 多數ヲ賛成スル如議案ヲ可決シ同十日下午
 院ニ於テ五十三名ノ多數ヲ得テ同之ヲ可決スル
 事自今更ニ内閣ノ困難モ内閣員中キ名ニ更

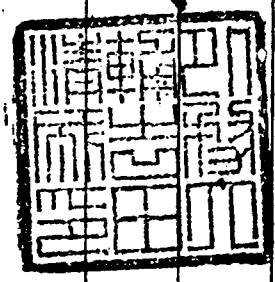


送無_レシ_テ未_レ滿_テ者_ハ在_レ佛_ハ心_ハ暢_ハ順_ハ有_レ人_ハ使_{ヨリ}
電_ハ板_ハ之_ハ板_ハ告_ハ有_レし_テ有_レ年_ハ有_レ年_ハ有_レ也

明治十七年十二月十二日

外務省代印

外務省補佐田清成



大正大臣公署之印

何處士仙翁

井之口

[illegible]

車馬費、食料費、娯楽費、
 衣料費、住居費、
 教育費、医療費、
 葬儀費、
 税金、
 その他

新ニおラフーリハ、自由の地カ、神老ク中出スヘ
 キララウん、タリ田ヲ買ハル、折葉ニキク百上
 ナニ対スル二百ナセ、校書ニテ者減ニ由セハ、
 フレモ子ハ、内家外長并由務セ、他ニ取ル
 ヲリ、四氏ハ、其れ受継各派、人ニハ、由ル、
 乙、シ

而ソおれ、一任、多分目、之、東、新、宣、創、心、國、大
便、リル、セ、ハ、キ、ヤ、ン、ヤ、シ、又、秋、内、死、以、爲、之、ハ、我、何、シ、
以、ス、ル、福、也、ス、建、二、知、其、子、付、ノ、爲、ヲ、待、ニ、ト、ス、ル、ニ、在
リ、或、ハ、新、カ、ヲ、考、ノ、悔、ス、ル、事、ニ、テ、ハ、納、收、後、亦、

ノミナツフリリキヲ也孫セとん。と平。前。ラ。スト。云。し
平。初。ハ。は。ら。に。受。し。時。は。も。四。以。討。る。而。な。る。ん
ラ。後。者。ミ。ラ。當。シ。天。將。修。約。ノ。條。ヲ。其。建。ト。シ。ス。件
四。以。討。る。ノ。機。案。ハ。も。四。以。討。る。お。テ。之。ニ。承。知。セ。ン
に。次。元。ち。り。又。返。し。り。又。フリリキ。ハ。孫。ヲ。始。ス。ん。と。し。に。こ
レ。後。修。約。ノ。條。セ。ラ。シ。タ。キ。ト。云。ハ。大。統。欽。ケ。レ。ウ。井。田。ハ
付。修。約。ノ。初。ノ。つ。し。と。子。一。件。ハ。事。カ。コ。ソ。修。約。ノ。事。ハ
ト。云。フ。リ。右。ハ。子。實。大。カ。メ。ト。知。氏。向。す。ハ。以。修。約。ハ
之。ヲ。知。ル。ニ。由。ナ。シ。式。ハ。日。田。名。氏。ハ。修。約。ノ。事。ハ
法。ニ。テ。修。約。ノ。事。ハ。修。約。ノ。事。ハ。修。約。ノ。事。ハ。修。約。ノ。事。ハ
直。チ。ハ。少。不。修。約。ノ。事。ハ。修。約。ノ。事。ハ。修。約。ノ。事。ハ
フ。リ。リ。ハ。少。不。修。約。ノ。事。ハ。修。約。ノ。事。ハ。修。約。ノ。事。ハ
背。ミ。ツ。ツ。チ。リ。修。約。ノ。事。ハ。修。約。ノ。事。ハ。修。約。ノ。事。ハ

明治十年正月二日

夕

月

日

在上海安孫領事來電譯

北支那デイリーヘラルド新聞ハ左ノ電報ヲ掲載セリ

本月廿三日佛ノ大軍鎮南関ニ進入シ大戦ノ後烈シク支那陣營ヲ攻撃シ支那人ハ初メ三砲思出シ失ヘリト云氏後ニ援兵ノ到着セシヲ以テ遂ニ右ノ場所ヲ回復セリ佛人ハ再び攻撃ヲ始メタル氏其ノ効ナカリシ此等ノ戦争中佛人一百ノ首級ヲ奪去ラレタリ負傷者ノ数二千人と上レリ右付佛公使ニ副合セタルニ同公使ハ左ノ電報ヲ拙官ヘ見セラレタリ

本月二十三日子グリエー將軍ハ廣西省ヲ攻撃



之激戦ニ及ビタリ而シテ將軍ハ負傷セリ支那
人ハ數タノ援兵ヲ得タルヲ以テ佛人ハ諒山鎮
ノ方ニ退キタリ又左公使ノ最後ニ受取りタル電
報ニ猶戦争中ト云ヘリ
佛將子グリエー負傷ノ件ハ暫ク内密ニ付エラ
カレタシ

右明治十八年三月二十一日午後六時十分上海電

在佛屋才覺淨心

今子ケリえん
夏月し
仲事い
山シ
子子
楊

件改訂 神田海堂 三向 五子集

三、フランク（凡そ千五百）ラ

要事
之

井田海院好山園瑞軒

[illegible]

明正，年三十一歲，卒。

二 卷 之 三

今、伊予、海、松葉、馬車、多、山、

文惠王依三諸侯共租大

鏡
頤
：
辭
表
ヲ
寫
す
。

四十二号

河津社奉還文

最上之件、常しは細大を以て受けたり

第一、徳精及アメン（James）ハ、しノ間、親密な

交りあり、其ニ拘りたる重兵、アメンニ送るハス

又、其ノ被シ受よりし松子より又、該國下電に

ハ、及ニ、故口受、ハ、

第二、該國由、事ハ、ホルチツリ、あ、わテ、家、も、対シ

有効ノ持、持、ハ、あ、ハ、期、ス、可、カ、サ、ル、ナ、リ

第三、該國由、事ハ、土、事、モ、向、ハ、着、ヒ、ナ、ル、ハ、本

之、ツ、守、ん、ハ、キ、タ、勸、告、ニ、タ、ル、ハ、ナ、リ、也、ニ、重、固、也

第四、王、王、由、入、ル、信、用、ス、可、ラス、歟、海、大、固

第五、戦、争、ラ、フ、地、方、ニ、限、ラ、シ、タ、ル、ナ、リ、亦、中、下、知

第六、此、土、自、其、ト、ハ、ル、ガ、リ、ヤ、ト、ノ、局、ニ、未、タ、改、定、ス、ル



[illegible]

在天津所記之電報

在天津所記之電報
在下事之國名老電報局より
買前当地に到りて修む
会に推測せし二公に全
三事を以て故則下一
以原十ノ斗百古天津

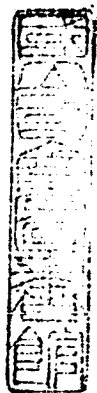


榎本公使來電譯文

在北京我公使館ヨリ左ノ電報ヲ接手セリ
 昨日總理衙門ヨリ外國公使ニ一廻文ヲ送付シ
 其返答ヲ請求セリ要領左ノ如シ

佛國ハ清國ヨリ申立テタル平和ノ提案即チ米
 國ノ仲裁等ノ事ヲ悉皆拒絕シタリ付テハ若シ
 戦争ノ場合ニ至ラハ中立國ハ為メニ受クル所ノ
 損害ニ付佛國ノミヲシテ其責ニ當ラシメサル可ク
 ス清國ノ政略ハ元ヨリ平和ニアリト云凡佛國ニ
 於テ其軍艦ヲ撤回セザレハ清國ハ已ムヲ得ス彼ニ
 抗スル外手段ナキナリ

八月十七日午後第五時十分上海発



井上外務卿殿

夕

署

名

後奉公使來電譯文

佛國公使曰、同使、其最後、照會、對、法國
政府、照覆、得、難、龍、舉、動、之、先、例、
之、レ、キ、モ、コ、シ、テ、法、國、政、府、大、怪、シ、ム、所、ナ、レ、ハ、同、政、
府、ハ、此、舉、動、ヲ、以、テ、各、中、立、國、ニ、告、訴、セ、ル、ヲ、得、ル、
ル、旨、陳、述、セ、ル、

同使又曰、此照覆、ヨリ、同使、更、法、政、府、ノ、事、ヲ、議、
ス、ル、ニ、盡、ナ、キ、ヲ、確、知、ス、ル、故、ニ、在、リ、越、テ、本、國、ニ、電、報、セ、ル、
而、シ、テ、今、後、ノ、進、退、ニ、関、シ、テ、ハ、今、ニ、モ、新、令、ノ、下、ル、ヲ、待、テ、居、
ル、ナ、リ、

又曰、佛國、ニ、テ、ハ、上、海、ヲ、ハ、外、國、貿、易、ノ、為、メ、局、外、地、ト、看、
做、ス、可、シ、然、レ、氏、福、州、其、他、ハ、然、ラ、ズ、ト

八月十七日

上海

井上外務卿宛

名 称	三條実美文書
標 題	井上特派全權大使 復命書附屬書類

分 類 番 号	34
	31
	止

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

267116

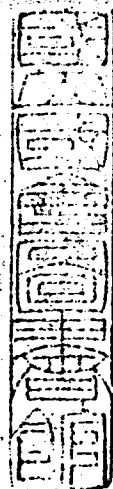
昭和 年 月 日

秘

井上特派全權大使

復命書附屬書類

第五十七号



逕啓者、現因我

特派全權大使、晉京其所帶護衛兵及隨員、如遇有

京城諸門及沿路各處、看守巡捕兵員等阻攔、以致

惹起重大事端、亦難料即希

貴大臣預先嚴飭京城諸門及沿路各處、看守巡捕

兵員等勿得有阻攔爲要、此順頌

日祉

明治十八年一月初三日 竹添進一郎

趙督辦閣下

十八年一月三日接

逕覈者、敝處沿江駐紮之兵、昨日午時已行撤回業

經函明于

貴國近藤書記尙未入

聞而又有此

示耶、此復順頌

日祉

甲申十一月十八日

趙秉鎬

竹添公使閣下

逕啓者、據聞麻浦哨兵、往々有阻攔日本人通行、甚
屬不合、現因我特派全權大使晉京、其隨員及兵
員、如遇有此等事、即當臨機處之、即請
貴政府速飭沿路各該管、領悉此意、爲要、此順頌
時祉、

明治十八年一月三日

竹添進一郎

趙督辦閣下

逕啓者、昨由本大臣派穿日本制服之警部岡田箕
之助、巡查手塚良太郎、命其帶同朝鮮通事一人、旗
手一人、役夫三人、前往我公使館、查勘焚燒景像、并
查驗死屍、不料該員等、甫入敦義門、有貴國兵丁
五、六人、當門攔阻、內二人拔刀叱咤、時有若武弁者
出來、以言語不通、掌上指寫、教通詞來四字、該員等
無奈、令通事歸我館、告以此事情、其時貴國兵丁
五、六人、以燐劍插燐、漸集、加至十三、四人、先者舉刀
相向、後者裝燐丸、各々前來、將燐劍撞岡田及手塚
之身體、二人閃身避之、則一兵丁已向岡田發燐、幸

而不中岡田亦不得已拔刀自衛然槍口蟬集向身
 萬難前進遂歸館稟情本大臣不知貴國兵丁向
 我警部巡查所爲抗阻如此是據何等事理而致然
 乎請

貴軍門速行查覆可也、端此順頌

日社

明治十八年一月三日

弟竹添進一郎頓首

袁

吳

張

大人閣下

明治十八年一月四日接

兩^{タヒ}奉^シ來^ニ書^ヲ俱^ニ已^ニ誦^ニ悉^キ所^ヲ說^ク吉松豐作^カ爲^リ南陽巡^ニ丁^ノ所^ト縛^ス當
即^ニ節^セ查^シ茲^ニ據^{レハ}該^ニ丁^ノ金^カ稱^ス沿途^ニ土民^ノ爭^テ欲^ス戕^{セント}殺^{グハ}恐^ニ其^ノ自^ラ
逸^{セハ}反^テ受^{ケン}其^ヲ害^ヲ繫^{ルニ}以^テ小^ハ繩^ヲ所^ニ以^ン欺^キ土民^ノ之^ノ耳^ヲ目^ヲ不^レ至^ラ加^{フルニ}
害^ヲ而^テ使^{ムルニ}其^ヲ歸^ラ伍^ニ也^ヲ因^ニ事^ノ冗^{ナルニ}忙^ニ故^ニ未^ダ布^セ答^{テハ}至^ニ巡^ニ查^ニ勇^ニ丁^カ
駐^{スルニ}守^{スルニ}小^ニ西^ニ門^ヲ亦^ダ恐^レ土民^カ滋^{スルヲ}事^ヲ隨^テ時^ニ彈^{スルヲ}壓^{スルヲ}並^ニ非^{スルニ}有^{ルニ}所^ニ阻^{ルニ}
攔^{スルニ}來^ニ示^ス各^ニ節^ノ殊^ニ爲^ス詫^ヲ異^ヲ已^ニ將^テ該^ニ勇^ノ撤^シ回^シ查^シ訊^{シテ}懲^{セリ}辦^ニ矣^ニ
此^ヲ復^シ即^チ頌^ス
台^ニ社^ヲ

竹添公使大人閣下

袁世凱

弟吳兆有頓首

張光前

子月十九日

明治十八年一月四日接

逕復者頃接

來函、攀悉壹是、京城諸門、及沿路各處、看守巡捕等、

處業、經節知、似無阻攔滋事之理、須勿、

致慮可也、端此復頌、

日祉、

甲申十一月十八日

趙秉鎬

竹添公使閣下

一月四日午前十時過統理衙門督辦趙秉鎬來訪大使ト談話アリ左ノ通

淺山顯藏通辦筆記

大使曰當度本使渡來致候ニ付テハ貴政府ノ御厄害不尠且旅館ノ御設
ケモ十分ニテ何不自由ナク安着罷在候段鳴謝ノ至ニ候

趙曰當監營ヲ御旅館ト相定候義實ハ我政府モ特別ノ欸待ヲ以テ監
司ヲ他ニ移シ候義ニ付此邊ハ御承知被下度乍併何分急ナル事ニ
テ修理等モ行届兼子房屋ノ不潔ナル等甚タ不安存候

大使曰本使モ濟物浦ニ在テ四五日ノ猶豫ヲ爲シ進京致ベキ義ニ候得
共此度本使ノ渡來致タルハ實ニ兩國ノ交誼ヲ存スルト否トニ關ル一
大事ノ時ニシテ我皇上ニモ深ク御念慮アラセラレ本使モ內國ニ在テ

ハ隨分繁務ニ與カリ居候得共其内務ハ捨置キ此度ノ事件ノ結局ヲ速ニ取纏メヨトノ命ニ依テ渡航致タルナレバ一日モ猶豫ナク進京致タル義ニ候就テハ此度ノ事件ノ好局ヲ結ブコハ只ニ貴政府ノ御考ニ因ル事ニ候

趙曰素ヨリ貴政府ト我政府ノ間ニ於テハ何モ事アル義ニ無之隨テ兩國ノ交際ニモ決シテ關係アル義ニ無之ト存候

大使曰貴督辨モ御承知ノ事ナガラ假令久敷キ交際國ト雖モ一旦事有ルモハ忽チ兩間釁端ヲ惹起スコハ古例不勘コニシテ強チ貴國ト我國ノミニ限ルコニ無之候

趙曰兼テ御威名ハ我國迄モ轟キタル義ニテ此度貴大使ノ御渡着ヲ承ルヤ我政府ノミナラズ一般安堵ノ思ヒヲ爲シ必ス公平ナル御

處置アルコト歡喜ニ堪ザル義ニ候

此時政府ノミナラズト云語ノ内ニハ國王ト云意ヲ大ニ含ミ

タル云ヒ
振リ也

又曰貴大使ニハ是迄御往復致シタル公文ハ逐一御覽被成候哉

大使曰固ヨリ委細閱了セリ然ルニ本使ニ於テハ是迄往復アリタル公文ノ意ヲ引續ヒテ御談判可申義ニ無之候抑是迄ノ公文ヲ見ルニ總テ貴政府ハ自己ノ疑惑ヲ以テ自己ノ勝手計ヲ申越サレタルモノニシテ決シテ政府ト政府ノ往復スベキ公文ニ無之候若シ貴政府ガ右公文ニ據テ事ヲ談ゼラル、トナラバ我使事ハ夫ニテ事濟タル義ニテ他ニ一言スルコトモ無之候

趙曰何レ追々ト我政府へ御談判可相成義ト存候乍去今日兩國間ニ於テハ決シテ事無キ義ト存セラレ候

大使曰貴國ニ於テハ決シテ事無シトセラル、モ我國ニ於テハ之ヲ事無シト認メザルキハ則チ兩國事有ルナリ故ニ貴政府ニ在テ我請求ニ應ゼラレザルキハ後來如何ナル結局ヲ見ルモ豫メ期シ難キコニシテ則和好ノ成否ハ貴政府ガ我求ニ應セラル、ト否トニ據ル事ニ候免角本使ニ於テハ何卒兩間ノ和好ニ至ルコヲ偏ニ企望致ス義ニ候

趙曰誠ニ願フ處ニ候

大使曰本使大王殿下ハ謁見ノ義ニ付テハ本日竹添公使ヨリ御照會致ス筈ニ候得ハ貴督辨ニ於テモ可成速カニ謁見被仰付候様御周旋有之度候趙曰御照會相成候上ハ可成速ニ謁見相成候様奏上可仕候

右ニテ畢ル

一月六日樂善堂ニ於テ謁見禮式相濟タル後井上大使朝鮮國王ト應答
左ノ如シ

淺山顯藏通辨筆記

大使曰日本使我國ニ在テハ國事ノ緊要ニ關シ候身分ニテ實ニ繁忙ノ内
ニ奔走致候者ニ御座候然ルニ我カ大皇帝ハ此度ノ事件ヲ聞召サレ御
憂慮ノ餘リ國事ノ多端ヲ打置キ貴國ニ到テ事件ノ結局ヲ速ニ取纏メ
ヨトノ命ヲ奉シ來着致候就テハ此度ノ談判ヲ開クニ當テハ大君主御
直ニ本使ニ對シ御應答被下候カ又ハ大臣ニ全權ヲ御委任アリテ大君
主ノ御目前ニ於テ會談仕ルカ右兩様ノ間聖意ノ在ル所ニ任セ度奉存
候

國王曰此度事件ノ談判ニ付テハ自カラ余カ信用スル處ノ大臣ニ全權ヲ委子談判セシムベキ筈ナレバ貴使ニモ該大臣ト協議アリテ速ニ好局ヲ取結バレシコヲ望ム

大使曰日本使ガ大君主ノ御目前ニ於テ開談致サンコヲ奏請致セシ譯ハ貴國ニテ生シタル變亂此度ニテ三度ニ及候本使モ既ニ前年江華島迄派遣サレタル大臣ノ一人ニシテ當時貴國全權大臣ニ談判致タルキ大ニ時日ヲ空過致セシ事有之候ガ爲メ今般ノ談判モ空シク此地ニ滞在致サンコヲ恐レテ請奉リシ次第ニ候依テ明日ヨリハ是非開談致サンコヲ企望仕候大臣ハ誰ニ御委任相成候ヤ

國王曰素ヨリ明日ニテモ開談ノ手筈ニ取計フベシ全權大臣ハ篤ト勘考ノ上人ヲ撰ミ通知スヘキナリ

大使曰今茲ニ一言奏上致置度事柄ハ此度事件ニ付貴政府ト我カ公使
ト往復ニ及タル公文ハ詳細閱見致候然ルニ若シ右公文ノ主意ニ基キ
談判スヘシトノ旨意ヲ以テ御委任相成候時ハ本使ハ其御談判ニ應シ
難ク候是等ハ御委任在セラルベキ前ニ先チテ其大旨ヲ奏上仕候義ニ
候

國王曰夫等ノ事柄ハ談判ニ及バ、自カラ判然致スヘキ義ナリ

金宏集 委任狀寫

大朝鮮國

大君主爲勅諭事、本國於本月十七日、不幸有逆黨之亂、以致日本公使館焚民戕事起倉猝均非逆料乃承

大日本國

大皇帝惠顧邦交、簡派全權大使伯爵井上馨前來商辦茲舉朕所信重倚毗之議政府左議政金宏集特派爲全權大臣會同日本國全權大使辦理一切事宜乃委任以便宜行事

全權也。故於此事與朕親臨面商無異。此爲憑據。

開國四百九十三年朕即位二十二年十一月二十二日於漢城昌德宮親畫押鈐國寶。

大君主

奉

敕 議政府領議政沈舜澤

十八年一月七日午後一時ヨリ於朝鮮國京城議政井上大使ト朝鮮國全權委任大臣金宏集ト對話大意

通辨武田御用掛

筆記松延外務一等屬

井上參事院議官

齋藤外務秘書官

統理衙門督辦趙秉鎬
交涉通商事務

統理衙門協辦穆麟德
交涉通商事務

外朝鮮筆記者二名

一應寒暄套話畢

大使 御委任狀ヲ出示シ彼ノ委任狀ヲ見シコヲ求ム

金 拙者委任狀ノ寫ハ趙督辨ヨリ差上タルヲ御覽相成リシヤ

大使 未タ一覽セス公使ヲ經テ御廻致相成リシヤ

金 然リ

大使 若外ニ其寫等アラハ拜見致シタシ

金 多分差上タル抄本ヲ御覽被成候事ト存シ此處ヘハ持參致サス

公使館ヘ取リニ遣シタリ即時來ルヘキナレハ御談判ノコアラハ御
申聞アルモ妨ケナシ

大使 此等ノ事變ヲ談判致スニハ必其初メニ於テ御互ニ委任狀ヲ閱
シ而後開談スルヲ萬國ノ常例トスレハ左様致シタシ

金 御尤ナリ拙者ハ先般モ條約取結ノコヲ取扱タレモ其節ハ互ニ

寫ヲ閱看シ捺印ノ日ニ本書ヲ出シ示タル故ニ今日モ其積ニテ持參
セサリシ直ニ御目ニ懸ケヘシ

大使 諾

金 委任狀ハ是非御目ニ掛ケ申スベケレ共拙者大君主ヨリ全權ノ命
ヲ受クルコトハ相違ナケレハ御話ハ有之テモ差支ナカラシ

大使 委任ノ權限相ヒ當ルヤ否ヲ確カメサル間ハ御話致スマジ

金 拙者ヨリ一言申上タシ

大使 此事件ニ付貴下ヨリ開談セント云ル、ヤ

金 然リ

大使 然ラハ暫ク待タルヘシ御互ニ先ツ爲スヘキノ定式アレハ其ノ
事ヲ濟マシテ後御談判ニ及フヘシ

金 然ラハ其間御閑談可致

大使 支那兵ハ何程居ルヤ

金 城内ニハ千四百人程ナリ

大使 城外ニハ幾千ナルヤ

金 從前ハ居ラサリシカ此比來リシモノ少々馬山浦ニ駐在セリ

此時彼レノ委任狀ノ寫ヲ持來ル

大使取テ之ヲ閱ス中ニ京城不幸有^リ逆黨之亂、以^テ

致^ス日本公使誤^テ聽^キ其謀進退失^レ據、館焚^{カレ}民^ハ戕^ハ事^ヲ起^リ

倉^下粹^ニ均^ク非^ス逆^シ料^シノ語アリ

大使 前日趙督弁ニ委シク御話イタシ又大君主ニモ畧申上置タル通

互ニ想像ノ說ヲ逞クスレハ事ヲ理シ難キナリ此委任狀中此等ノ文

字アリテハ是非其事ヲ論セサルヘカラス然ル^ニハ論端紛起シテ談

判ヲ纏メ難シ故ニ此等ノ字面ハ削除セラレタシ

金 此文字ハ貴政府ニ對シ頗ル心ヲ用ヒタルモノナリ何トナレハ

此誤聽其謀ノ四字ハ竹添公使逆黨ニ誤マラレタリトノ意（實ハ其謀ヲ助クト

カ何トカ云フヘキ所ナレモ日本政府ニ）進退失據トハ同公使京城ヲ

去リ仁川ニ赴キタルコト云フナリ同公使ノ事ハ追々御談話ノ内ニ

段々ニ分ルヘシ

大使 誤聽云々ノ字ヲ存シ置ケハ果テ其事實如何ヲ取調ハサルヘカ

ラス是ハ詰リ貴政府ノ想像ニ據ルモノナレハ其想像說ヲ以テ主張

セラレハ我モ亦想像說ヲ出スヘシ如此互ニ相論セハ事ノ治ルコナ

ク其極點ハ腕力ニ委スルノ一法アルノミナリ我政府ハ事ノ此極ニ

至ルヲ欲セサル故ニ拙者ヲ派出セラレタリ然レモ御望ミナレハ敢

テ避ルニアラス

金　誠ニ大使ノ全權ニテ來ラル、ハ貴皇帝ノ和好ヲ主トセラル、
ニ因ルナルヘシ然レ其顛末タケハ御話致サ子ハ大使モ御承知ナキ
所アルヘシ故ニ御談判ノ前ニ於テ先其事ヲ御話致シ其後眞ノ御談
判ヲ致スモ晩カルマシト存ス但此事ハ一場ノ坐話ト御聞キ相成テ
モ苦シカラス

大使　先ツ能ク場合ヲ考ラレヨ變亂中ノ手續ヲ貴官等ノ想像疑惑ヲ
以テ說話ストナラハ拙者ニモ疑惑ノ點數多アリ然レ想像疑惑ヲ以
テ談判ヲ爲サント欲スレハ決テ妥議ニ至ルノ道ナシ遂ニ此禍ハ日
韓兩國ノミニ止マラスシテ清國ニマテ推及フヘシ故ニ先ツ大体ノ
談判ヲ結了シテ後其等ノ御話ヲセラレシトナラハ私席ニ於テ承ル

ヘシ強テ此事ヲ先キニ言ハレントセハ拙者ハ必ス其纏リノ付カサルヲ保証スルナリ何トナレハ今モ申ス通り互ニ想像說ヲ以テスレハ徒ラニ多端ニナリテ限リナキヲナレハナリ

金 御尤ノヲナリ拙者モ決テ事ヲ多端ニナシタキニハ非ス只双方ニ疑ノ在ル所ヲ吐露シ渙然氷釋シタル上ニテ御談判致サハ一層好キヲト存スレハナリ

大使 御好ミナラハ御話致スモ可ナリ然レモ如此ナレハ到底結局シ難カルヘシ相互ニ想像說ヲ以テスレハ際限ナシ然ルモハ貴國大君主ニモ此處ニ御出ヲ願フニモ至ルヘシ左様ニテハ到底妥議ノ時ナカルヘシ

金 大使公平ノ御論ハ篤ト承知致シ居ルナリ然レモ今モ申ス如ク

御互ノ腹中ニ釋ケサルコノ有ル限りハ譬ヘハ腫物ニウミノ有ルカ
如ク其ウミヲ出シ盡シテ後御話ヲマトメナハ双方ノ情思爽快ニシ
テ永ク和誼ヲ保ツノ道ナラン故ニ拙者ト大使トノ胸中ヲ打開キタ
ル後ニ致ス方然ルヘキナリ

大使 度々申スモ同シコナレト貴政府ニ疑アレハ我ニモ疑アリ之ヲ
互ニ打出シテ纏マラヌ様ニスレハウミヲ出シテ腫物ヲ癒ヤスニ非
スシテ却テ其腫物ヲ大キクスルナリ疑惑ト疑惑トヲ主張シテ事ヲ
纏メ損シタル例ハ各國ニモ至テ多シソレニモ拘ハラヌ破裂ニ至ル
ヲモ測ラスシテ強テ望マル、ナラハ拙者モ其積ニテ御談話致スヘ
シ

金 大使ノ其說ハ疾ヨリ分リ居レリ但拙者ノ未タ解セサルハ腫物

ヲ治スルハ名醫ノ術ヲ藉ラサルヘカラス拙者ハ互ノ疑ヲ解クニ非
サレハ談判纏マルヘカラスト思考スル故ニ互ニ之ヲ氷釋スルヲ得
タル後妥當ノ御商議ニ及ヒタシト存スルナリ我ヨリハ已ニ大使ヲ
派シ貴國ニ赴カシメントスル際貴大使ノ來ラル、ニ付大ニ悦喜シ
タリ大使已ニ此ニ來ラルレハ必ス辨理セラル、事アルヘシ然レハ
双方談話ヲ盡クシテ後之ヲ議スル方尤モ可ナラスヤ

大使 拙者ハ反對ナリ先ツ談判ヲ適當ニ結ヒタル後ニ只一場ノ話ニ
ナストナレハ不可ナケレモ先ツ想像ノ話ヲナセハ事六ヶ敷ナルノ
ミナリ即チ貴政府ヨリ大使ヲ我ニ派セラル、コニ付テモ拙者ハ大
ニ疑惑スル所ナリ然モ言多岐ニ涉レハ姑ク言ハス此事スラ拙者ハ
疑アル程ナレハ御互ノ想像說ヲ出サスシテ先ツ談結スルヲ望ムナ

リ談結シタル後ニ至リテ何事ナリ笑ヒ話シニセラル、トノヲナレハ少シモ差支ナキナリ

金 拙者ハ始終ノ御話ヲ致シ御互ニ心ヲサツパリトシテ御談判ニ及ヒタシト存スルナリ

大使 拙者ハ之ニ反對ナリソレハ前ニ申ス所ノ如シ

金 拙者ハ順序ニ隨テ御談話致サンヲ望メリ始メヲ捨テ、終ヲノミ理メントセハ却テ事ヲ纏メ難カルヘシ願ハクハ順序ヲ追ヒタシ

大使 御望ミトアレハ左様致スヘシ然レ纏マラサルハ請合ナリ只其積リナレハ其用意ヲ取カカラシ故ニ此談判ハ是マテニ止メ更ニ日ヲ改メテ開談スヘシ

金 只拙者ハ順序ヲ追フ方可然ト存スルノミ

大使 モハヤ多言スルニハ及ハス強テ其說ヲ主張シ是非順序ヲ貴官
ノ云ハル、通ニセヨトカ又否ラサルカ其決答ヲ承ルヘシ

金 左様ニ御話下タサル處ニアラストニカク今日ハ遅クモ相成タ
レハ尙御再考ノ上明日カ明後日ニ於テ御都合次第御來臨下タサレ
タシ

大使 拙者ハ左様ナル不決斷ノモノニ非ス別ニ再考スル所ナシ只貴
官ノ御決答ヲ承リタシ

金 拙者大君主ノ命ヲ承ケタルモ其處マデニハ至ラス一應大君主
ニ申立タル上御談判仕ルヘシ

大使 然ラハ何ソ全權ナリト申サル、ヤ

金 只始メハ異論アリトモ終ニハ妥結ニ歸セシムルヲ委任セラ

レタリ

大使 如此自ラ決スルヲ能ハサレハ何ソ全權ナラン拙者ハ只談判ヲ
貴官ノ云ハル、通ニセ予ハナラヌトカ成ルトカ云フ決答ヲ承ハレ
ハ夫ニテ足レリ

金 拙者全權ノ委任アレモ未タソコマテニハ至ラスタトヘ大君主
此ニ在ルモ一々親裁スルヲ難カルヘシ免ニ角明後日マテ御待下サ
レタシ

大使 拙者ハ如此空シク日ヲ費スヲ能ハス拙者ハ甚タ繁忙ノ身ナレ
ハ今日其決否ヲ承ハルヲ望ムノミ

金 御繁忙ノコハ昨日以來十分ニ承リ居ル所ナレハ強テ曠日ヲ好

マス然ラハ明日御出ヲ願ヒタシ

大使 明日何時ナリヤ

金 毎日御足勞モ恐縮ナレト明日又此時刻ニ願ヒタシ

大使 拙者ハ種ヤノ用向アリテ實ニ一刻モ惜キ所ナレハ明早九時マ
テ待ツヘシ其時ニ又此ニ來ルヘシ

金 九時ニテハ甚困却ナリ何トツ十二時マテニ願ヒタシ

大使 此談判ノ結末ニ因リテハ兩國干戈ニモ及フヘキモ測リ難キ程

ノコヲ辨スルニ此位ノコハ出來ヌコナカルヘシ御承知ハアルマシ

キナレト我邦ノ人心ハ甚憤激シ居レハ此處ニテ一步ヲ誤マテハ直

チニ決裂ニ至ルヘキ勢ナレト拙者ハ何卒平和ニ致シタクト望ム故

ニ談結ヲ先ニシ其他ノ御話ヲハ後ニ致シ度ト申セト御決シナサラ

ヌナレハナサヲヌトシテ御暇ニ致スヘシ

金 兩國ノ大事ナレハ三時ノ間位ハ如何トモ致シ明朝九時ニ御出

ヲ願フヘシ

大使 然ラハ承知致セリ

疑似ヲ以テ人ニ及ホスハ甚タ好マス御互ニ不愉快ノ事ナリ拙者ハ
平和ヲ望ミ居ルモ事ニ因リテハ此精神ト反對スルニ至ルヘシ先年
花房公使ノ御談判致タル中ハ同シ使臣ナレモ拙者外務卿ニテ其後
ニ居テ萬事指令致シタレハタトヘ決裂セントスルモ拙者尙ホ彌縫
ノ道アリタレモ今般拙者ハ此全權ヲ委任セラレテ來リタレハ此ニ
テ破裂スレハモハヤ綢繆ノ道ナキナリ此處ヲヨク／＼思ハルヘシ
金 和平ノ御精神ハ詳細承知致シ居レリ拙者モソレハ御同様ノ

ナリ

右ニテ談判一應畢リ尙一二說話ノ間彼大臣等委任狀ノ字面ヲ削除ス
ルノ商議ヲナシ居ルヲ以テ大使ヨリ齋藤秘書官ヲシテモルレンドル
フニ言ハシメテ云彼此共ニ想像ノ說ヲ以テ押張ラハ誰レカ之ヲ裁判
セシ先ツ試ニ互ノ位地ヲ以テ考ヘヨ我ハ客ニシテ韓廷ハ主ニアラス
ヤ我此ニ來ツテ主ニ請フ所アラントス主ハ客ノ請求ニ付テ論駁スル
所アラハ宜ク論駁スヘシ未タ其本文ニ至ラサルニ其前ノ瑣事ヲ以テ
如此論辨スルハ亦愚ナラスヤト金之ニ因テ大ニ大使ノ主意ヲ領解シ
不都合ナル字面ハ削除スルニ決シ今夜中ニ國王ニ奏上シ改メ置ヘシ
ト對ヘタリ

右ニテ此日ノ談判畢リシヤンパン杯ヲ舉クルキ大使金宏集ニ向テ曰
試ニ思ヘ今日此一事スラ論判スレハ如此時間ヲ費スナリ況ヤ前ヤノ
事ヨリ論シ起シ來リ互ニ想像疑惑ヲ以テ論駁シ居ラハ此談判何ノ時
ニカ結局ニ至ルヘキ然レハ明日ハスヘテ小事ノ談論ヲハ打捨テ肝要
ノ點ヲ議シ速ニ結了ヲ致シ而シテ互ノ異心ヲ去リテ快ヨク我ヨリ望
ミテ此ノシヤンパンヲ飲マンコヲ希望スルナリ

金曰 拙者亦然リ故ニ此杯ハ明日ノ喜杯ヲ豫メ祝シテ此ヲ飲ムヘキ
ナリ

一月八日午前九時ヨリ井上大使於議政府與金宏集談判大意此彼陪坐
通辨筆記如昨

一應寒暖畢彼委任狀本書ヲ示ス

金曰 是ニテハ如何ニ有之ヤ

大使 一讀昨日所議ノ字面ヲ削除シアルヲ以テ然ル可キヨシヲ答ヘ
更ニ我約欸ヲ出シ彼ニ示ス

大使 事實ニ付テ貴政府ニ御談判可致件々ハ此通ニ候
金以下瀏覽

大使 拙者ハ此事ニ關シテ貴官ノ最虚心ニテ御勘考アルヲ希望セ
リ拙者ハ從來貴國ノ義ニ付テハ盡力致居詳細ハ姑ク置キ彼ノ四十
萬圓ノ事ニ付テモ相應ニ心ヲ盡シタリ然レハ此條欸ノ如キモ他ノ

費用等ハ算セス全ク已ムコヲ得サルモノ、ミヲ數ヘ專ラ公平ヲ旨ト致シタリ御熟覽ノ上ハ自然御分リ相成義ト存スレモ尙御注意有之タシ貴政府ニ對シテ難題ト申スワケニハ決テ無之御承諾難相成トハ存セサルコナリ

金　　倣國ノコニ付テ大使ノ兼々御盡力相成居事ハ委曲詳悉罷在レリ事件三回ノ内一度ハ花房公使ナリシカ二度ハ大使ノ御辦理相成リシコニテ又彼填補金ノ義ニ付テハ別テ御費神ヲ以テ御返却相成タルコナレハ此度ノコニモ償金等ノ御話ハ有之間敷カト存シ居レリ大使　填補金返還ノ事ハ彼レ此レト情實ヲ斟酌シテ左様相成シカ此度ハ別ニ事件ノ生シタルニ付テナレハ又格別ノ相違アルコナリ且先年ハ死亡者モ十三人程ニテ此度ハ商人ノミニテモ廿九名ノ死亡

ナリ政府ハ人民保護ノ責アルコナレハ人民ニ對シテモ此事ヲ空シク
致シ難シ元來人民ヨリハ十分ノ高ヲ申立タレモ拙者ハ飽マテ精査
ヲ加ヘ聊モ証據不明了ナルモノハ之ヲ除キ然ル上ニテ商民ノ損害
ヲ約ソ五萬圓ト積リ其他ハ賑恤金等ヲ算セシノミ是ヲ前年ト比較
スレハ其實際ノ處御明瞭ナルコト存ス決シテ難題ニハ非サルナリ
金 決シテ十一萬ノ高ヲ多シナソト申スワケニ非ス今申セシ所ハ
大使ノ曾テ御盡力アリシ處ヲ謝シタルマテノ意ナリ拙者モ此條欸
ニ對シ夫々御話致スヘシ

大使 諾

金 茲ニ一ツノ願アリ大使ニモ前ノコトハ言ハスト仰セラレタリ此
第二條ノ兵民ノ文字ハ人民ト改メンコトヲ乞フ

大使 文字ノコハ何レトモ致スヘシ、即人民ト改ム

金 又償補ノ償ノ字ハ填ノ字ニ先年モ改メタリ是モ願ヒタシ

大使 夫等モ容易ノ事ナリ 即填補ト改ム

金 磯林ノコニ付テハ倣國ニテ貴國ニ對シ御氣ノ毒ハ申スマテモ

ナク大君主初メ我々ニ至ルマテ誠ニ遺憾ノ至リナリ同氏ハ大君主

ニモ大ニ信用アリシ人ナリ變亂ノ時ハ尙ホ無事ニテ外出中ナリシ

因テ他ノ道ヨリセヨト通知セシニ運命ノ拙キ所カ南ノ道ヲ經タル

故ニ竟ニ殺害セラレタリ

大使 同人ノコヲ大君主ニモ夫程ニ思召サル、トノ趣ヲハ我聖上ニ

モ申上ヘシ彼レハ武官ナレハ自然其榮譽ヲ保タシコニノミ傾キタ

ルモソナルヘシ

公使館ノ事ハ何レノ國モ同様ニテ大ニ其國ノ体面ニ關スルコナレハ是ハ最モ御承諾アルヘシ

金 磯林ノ事ハ貴方ノ憤リモ我國ノ憤リモ同様ナレハ必相當ノコヲ爲スヘシ

公館ノコハ少シク御話アリ敝國人民ノ焼タルコ証跡アレハ敝國ヨテ償フハ元ヨリノコナレモ反テ我國人ノ焼カヌト云証跡コレアレハ夫ニテ御承知下タサレ何分此條ハ御免アリタシ

大使 其證據ト申スハ何ナリヤ拜聽致タシタシ

金 即チ是ナリト一紙ノ書付ヲ出ス

大使 取テ之ヲ閱ス即チ我公使館ニテ使用セシ宋尙吉ノ口供ニテ始メニ朴泳孝金玉均等ノ服ヲ變シテ公使ト共ニ仁川ニ赴キタルヲ云

ヒ中ニ公使館ノ文書ヲ石油ヲ灌イテ之ヲ燒ケリ其火或ハ延テ公館
ヲ燒シナラント云ヒ終ニ復タ朴金等ノ仁川ヨリ日本ニ赴キタルコ
等ヲ云ヘルモノナリ

大使 是ハ小使位ノ申事ニテ據ルニ足ルモノナラス此前後ノコ即朴金等

ハ我國人ヲ遍ク取調フルニ誰モ知リタルナシ又書類ヲ燒タルハ
前日ノ事ニテ公使以下ノ館ヲ去リタルトハ其時刻ヨホト隔タリタ
リ又後ニ聞ケハ館内ニ焚草ヲ堆フセシトノコモアリ又公使以下麻
浦ニ至リテ黑煙ノ上リシヲ回顧シテ公館ノ焚カレタルヲ察シタル
等貴國人ノ燒タルニ相違ナキナリ然レモ互ニ証據ダテシテ論スル
中ハ際限ナキニ至ルヘケレハ最初ヨリ種ヤノコハ取除ケント申セ
シハ此ヲ云フナリ

此時清國使臣吳大澂來リテ大使ニ見エシヲ請フニ因リ暫ク談判ヲ
停メ之ヲ接見シ約ソ一時許ニシテ回リ去ル

大使 吳ノ來ルハ何ノ意ナルヲ知ラス我レ往カス彼レ來ラス中間ノ
地ヲ擇ヒ此處ニ於テ我ニ面スルカト思ヘリ然ルニ其容ヲ見ルニ只
貴官ニ對シテ云フ所アルカ如シ貴國ハ皆清國ノ指令ヲ受テ而後談
話セラル、ヤ然ラハ兩國ノ條約ハ可笑キモノニ非スヤトノ感ヲ起
セリ

金 彼レ此事ニ關シ何ノ故ニ來ルト云フ處ナキナリ

大使 明ラカニ見タリト云ニハ非サレト吳カ書キテ差出シタル者ハ
貴官ノ受ケ居ラル、所ノ全權ノ上ニ命令スルモノアルカ如ク思ハ
ル然ラハ段々御談判申ス處モ亦可笑キモノナリ

金 彼レ何ト思フテ言ヘルカ拙者モ其事トハ知ラス彼レノ來リシ

ハ此處ニテ大使ト談判中ナルコトハ知ラサルカ全ク私事ニテ來レル

コトヲ説明シテ歸ヘレリ

大使 吳ノ書キテ差上タルモノヲ一見ヲ願ヒタシ

金 何モ別段ノコトナキナリ

大使 別ニ面倒ヲ起スニ非サレハ見セラレタシ

金 吳ノ書ヲ出ス曰

本大臣來此數日、爲查辦亂黨一事、最關緊要、

閣下身任政府、並不議查拏亂黨、避重就輕、即使

與

井大使草々立約、而竟置亂黨於不問、不但本大

臣^カ有^ル詰^ミ責^{スル}

閣下^ニ恐^{クハ}朝鮮萬民之心憤懣不平^ニ大^ニ不利^{ントス}於^{アラ}
閣下^ニ此^レ非^{サル}了^{スル}事^ニ也^リ恐^{クハ}了^{シテ}事^ヲ而^テ適^ニ以^テ生^{スル}事^ヲ也^リ惟^タ
執事圖^レ之^レ

大使 此書ニ付テ本使ハ種々ノ疑ヲ起セリ此文氣ヲ見レハ直接ニハ
云ハ子ト朝鮮ハ支那ノ屬國ナリト云意ヲ婉曲ニ示シタルモノハ如
シ果シテ貴國ハ清國ノ屬國ナラハ貴政府ト談判ハ出來サルナリ若
シ貴官等カ清官カ何ト云フ所^レニ構ハス此ニ於テ決スヘシト云
ナラハ談判スヘキモ後ニテ清官ニ相談セシ上彼是ト說ノアル様ナ
ラハ談判セサルヘシ

金 是レハ大使ノ御話トモ存セス大使ハ御承知ナキカ此ニ決シタ

ルコヲ誰が何ト申スヘキヤ其証ハ前ニ屢々條約等ヲ結ヒシモ清國ヨリ干涉セシコナシ拙者カ不都合ニテ御相談及ヒシナラハ知ラス拙者ヨリ未タ言ハサルニ先ツ其邊ノ御疑アルハ却テ如何ト存スルナリ

大使 現ニ今マ命令スルモノアリタルハ如何兩國辨論ノ席上ニ他人來リテ言ヲ容ル、即チ其証ナラスヤ因テ此疑ヲ生スルモ其理ナシトハ思ハレサルヘシ

金 ソレハ決シテ左様ノコナシ拙者ノ思フ所ニテハ今日ノ談判ハ早ク致ス方雙方ノ爲メナリ

大使 試ニ位置ヲ考ヘラレヨ若シ貴官カ他人ト公事ヲ辨スルニ當リ拙者其席ニ突入シ干涉ノ言ヲ容レハ何ノ感シヲ起スヤ

金 誠ニ然リ然モ今日彼レノ此席ニ入來リシハ全ク拙者ト大使ト
ニテ事件ノ御談判致シ居ルヲ知ラス御同様ニ私晤ノ席ナリト思
ヘル故ニ來リシモノナルヘシ

大使 彼レ全ク不知シテ私晤ノ爲メニ來リシナラハ御互ノ談判ニ
説ヲ入ル、所ニハアヲサルニ非スヤ

金 誠ニ然ナリ拙者ニ於テモ彼レ決テ此事ニ干涉スル爲ニ來ルヲ
ハナキ筈ト存ス又拙者ナリ大使ナリヘ談話スルヲアラハ其レハソ
レニテ決シテ此事ニ口ヲ容ル、筈ナシ

大使 現ニ最初ハ已レモ此事ニ關係アルモノナレハ御同前ニテ議シ
居ル事公ナラハ公ニ之ヲ言ヘ是レハ拙者ト貴官ト兩人ノ私事ニ非
ラスト云ヒ後ニ權利上ノ事ニ至リテハ反テ己レハ貴國ノ事ヲ查辨

スルタメニ此地ニ派遣セラレタルナレハ拙者ニハ關係ナキヨシヲ
言ヒタリ

金 何卒大使ハ御承知ナキコトニ致シタシ最初ニハ何ト申シテ來リ
シヤハ知ラサレトモ後ニハ大使ニハ關セスト云ヒタレハ即チ大使
ニハ關セサルモノト御覽被下タシ此議事ニ付テ敝國政府ハ吳ニ干
渉セシメサリシコトハ他日同人ニ御面會相成タル節大使ヨリ御問及
アラハ明瞭ニ御分リ相成コト存ス

大使 何ニ致セ困ツタ問題カ一個起リタリ

金 今日彼レカ此ニ來ラサレハ無事ナルニ此ニ來リタル故ニ餘計
ナル時間ヲモ費セリシカシ拙者ニ關係セサルナリ

大使 貴官ニハ關係アルマシキモ我ニハ感スル所アリ此ニ於テハ談

判ノ局面ヲ一ツ改メテ貴國ハ清國ノ屬國ナルヤ否ト云フ點ヨリシ
テシラヘサルヘカラス

金 貴國モ萬々明知相成リ居ルコナラン國內萬般ノ事何一ツ他國
ノ干渉ナク我國ノ勝手ナリ此ニテ決シタル事ヲ後ニ至リ何ナリ他
國ニ關スル爲ニ取消ヲ乞フカ如キ事アラハ如何様ニ仰セラル、モ
苦シカラスソレハ萬々ナキコナリ

大使 凡ソ國ト國トニテ權利ヲ爭フコハ容易ナルコニ非ス如此勢ニ
テハ遂ニ國王ニモ大ナル御迷惑アルヘキコナリタトヘ屬國ナラス
ト云テモ若シ一時ノ說ナレハ憑ミ難シ

金 拙者ハ大君主ヨリ全權ヲ委テラレ居レハ拙者ニ於テ此談判ヲ
決スレハ外ニ關セスト思フナリ且ツ彼レ初メハ何カ關シソーナリ

シカ終ニハアノ通申シタレハ即チ干涉セサル明證ナラン

大使 拙者ハ甚不愉快ナル感觸ヲ起シ居ルカ乍去何トカ結局ヲツケ

スハナルマシ但シ此事ニ付テハ清國ニ關セス又カゲニテモ清官ニ

ハ謀ラヌト云フヲ飽マテ保證セラルハヤ然ラハ御談判ニ及フヘシ

金 此事ニ付テハ先ヨリ申ス通り外人ニハ關セシメス又關セラル

ハコナシ是マテ各國ト條約セシニ外ノ關係ナキニ獨リ此事ニノミ

關係アル理ナシ

大使 然ラハ果テ清官ニハ相談セラルハカ如キコナキカ

金 若シ此事ニ關係ヲ受クル處アラハ今日談判ヲ決セスシテ又相

談スルコモアルヘケレト拙者カ今日此處ニテ決スヘシト云ヲ以テ

其關係ナキヲ御承知アリタシ

大使 今日談判纏マラスハ又如何ナル關係ヲ生スルヤモ計ラレス因
テ速ニ談結シ今日此場ニテ調印アルヘキヲ望ムナリ

金 今日事ヲ決シテ清書ノ上明日調印スヘシ決テ言ヲ易ヘス

大使 能ク考ヘラレヨ今日此場ニテ申ス所ハ拙者十分ニ考ヘタルコ
ナレハ此談判マトマラ予ハ是ヨリシテ實ニ貴國ノ大迷惑ヲ生スヘ
シ我ハ元ヨリ止ムヲ得サルニ因テ始ムルナレハ夫レハ覺悟ノ上ノ
コナリ

金 敝國ノ事ヲ左程ニ御考ヘ下タサルハ誠ニ難有コナリ拙者モ談
判ハ速ニ決シタシ條款ニ付テ細カニ御話致セハ言長ケレハ其ヲ畧
シ要ヲ摘テ申スヘシ御承知ナルヘキコハ速ニ御承知アリタシ

大使 出來ルコハ承知セサルコナシ

金 放火公館ノ文字ハ除カレタシ今口供モ御覽アリタルヘシ敝國
人ニテ燒キタルトナシ罪ナキ敝國人ニ罪ヲ負ハスレハ人民不服
ニテ困却致スナリ

大使 貴國人民ニ罪ナシト申サル、ハ公館ハ貴國人ノ燒タルニ非ス
ト云フ意カ

金 口供モ御覽下タサルヘシ誰ガ焚ケリト云フト丈ヲ御取消下サ
レタシ

大使 文字丈ハ削ルモ不可ナキカ如クナレモ然ラハ次ノ條ニ關シテ
ハ如何爲サル、ヤ

金 要點タケ申上ヘシ敝國ノ窮困ハ素ヨリ御熟知ニテ填補金モ御
返還下タサル程ナリ然モ公館ヲ焚ケリト申セハ大君主ニモ氣ノ毒

ニ思ハル、ナリ只此額ヲ半分ニ願ヒタシ

大使 能々事情ヲ考ヘラレヨ四萬圓ト言フハ過多ナリト思ハル、カ
知ラサレモ建築用ノ材木等ヲ日本ヨリ運ヒ來リテ造レハスヘテ一
倍ノ費用アルナリ先キニ公館ヲ建タル時ノ入費ヲ計算セシメシニ
五萬圓計ナリ然ルヲ拙者貴政府ヲ察シ公館ニ在ル所ノ燒殘リノ煉
瓦等ヲモ指引セヨト命セシニ皆用ニ足ラスト云ヘリ然モ更ニ以前
ノ額ヨリ一層少ナク計算ヲ爲サシメ此數ニ取極メタルナレハ決シ
テ難題ト申スヘキニ非ラス十分斟酌ヲ加ヘタル上ノコナリ能々御
承知アリタシ

金 成程大使ノ公平ナル御心ヲ承知致シタル以上ハ此事ハ御拒ミ
申スマシ

大使 貴國ノ御困難ハ元ヨリ御察シ申シ居ル處ナリ今貴官ノ半額ニ
マケヨト申サレタルニ付テ一ノ便法ヲ考ヘタリ高ミノ場處ニ就テ
幾分ノ修繕ヲ加フレハ住マル、丈ノ家屋ヲ土地ト共ニ交付アリテ
其上ノ修繕料トシテ外ニ二萬圓ヲ御渡シ相成ルコトニ致シテモヨロ
シ此二萬圓ハ一度ハ此方ニ御渡シアルモ矢張貴國ニ於テ使用シテ
仕舞フナレハ政府ヲ出テ、人民ニ入ルノミ到底貴國ノ外ニ出ツル
モノニ非サルナリ

金 誠ニ公平ノ御說ニテ感服ノ外ナシ

大使 若此事ヲ御喜ヒ成サラハ至急ニスヘシ我隨員ヲシテ之ヲ擇ハ
シムルモ可ナリ尤兵隊ヲ置ク場所ハ公館ト甚タ懸絶シテハ不都合
ナリ必ス近ミニ在ルヘシ

金 一々御尤ナリ何レ家屋ノ適否等御相談ノ上取極メヘシ貴方ニ

ヨキハ此方ニ差支ヘ此方ニヨキハ貴方ニ御不都合ト申ス様ナルコ
アルヘシ

大使 然リ但シ家屋ハ幾宇ヲ合スルモ構ナシ相應ノ修繕ヲ加ヘテ渡
サルレハヨロシ

金 承知致セリ筆ヲ援テ焚館ノ數字ヲ削リ又第四條ノ文ヲ此意ニ
改ム

金 第五條ニ付テ御願アリ前回ノ約面ニハ駐在ノ兵ハ若干トノミ
書テ其數ヲ言ハス此後ハ決テ如此變亂ナキ筈ナレハ公使一人ニテ
足ルヘシ兵アリテハ却テ爭鬭ノ基トモ爲ルヘキナレモ目下ハ強テ
夫レヲ申シ難キコナレハ只前ヲ照シテ若干トノミ願ヒタシ

大使 ソレハ改ムルモ難カラサレモ實際今マ率フル所ノ二大隊ヲ容
ル、所ノモノハ必要ナリ

金 此條ノ末文モ花房公使ノ時ノ末文ヲ照シタシ

大使 ソレモ苦シカラス此一條ハ花房ノ約面ヲ照シ只兵營ヲ公館ノ
近傍ニ置クト云フヲ加フヘシ

金 其稿ヲ作り閱ヲ乞フ

大使 可ナリ

金 另單ノ兇徒處分ノ期限ハ廿日間ニ致シタシ

大使 諾

金 兵隊ハ一大隊御差置ノコニ致シタシ

大使 ソレハ此處ニテハ暫ク御相談致スマシ

金 第一條ノ國書ハ貴方ニテ御立稿ノ分ハ拙者拜見致置マテニ止

メ此方ヨリハ別ニ貴國ノ好意ヲ謝スルノ意ヲ以テ國書ヲ修メ差出
サハ可ナルヘシ

大使 大君主ニテ國書ヲ御贈リ相成ル思召アラハ其稿本ヲ以テ御相
談アリタシ然ラサレハ國璽ノ捺シアルモノヲ俄カニ改ムル如キ
ハ大ニ不都合ナルヲナリ

金 何レヨリ見ルモ体面アシカラス不都合ナキ様ニスルヲハ保証
致スナリ然レ其草稿ヲ以テ御相談致スト云ハ困却ナリ

大使 然レ其果シテ不都合ナキヲハ一方ニテノミハ保証シ難キヲ
ナレハ各國共ニ草稿ヲ以テ相談スルカ常例ナリ難題ト思ハル、ナ
レハ穆氏ニモ相談致サレヨ是ハ各國ノ同シキ所ナリ

於是齋藤書記官ヲシテモルレントルフニ此意ヲ通セシムモルレントルフ亦云其例ニ遵ハサル可ラスト因テ自ラ金氏ニ向テ其意ヲ述フ

金 誠ニ然リ明日調印濟ノ上其事ヲ御相談致スヘシ

敝國ノ罪人未タ緝捕ニ就カス或ハ貴國ニ往クトモ云フ者アリ若シ然ラハ貴政府ニ於テ捕獲ノ上御交付下タサレタキナリ

大使 其者ノ敝國ニ來リシト云ハ拙者出發前ニハ曾テ聞及ハサルナリ然レ此等ノ件ハ多ク先例アルナレハ穆氏ニモ相談アリタシ尤モ是レハ萬國公法ニ據リテ云ヘハ頗ル解シ難キモノナレハ先ツ穆氏トモ御熟商アルニ致シタシ

此時又齋藤書記官ヲシテモルランドルフニ此意ヲ傳ヘシム

金 拙者ハ萬國公法ニハ熟セサレ臣敝國ハ貴國トノ間ニ於テ敦好

ノ情ヲ以テ公法ニ拘ハラス希望致ス所アルヤモシラス此六名ハ兇徒ノ渠魁ニテ捕縛致サ、レハ人民ニ對シ大ニ困却スルコナレハ追テ別ニ御照會致スヘキヤモ知レス何卒特別ノ御勘考ヲ願ヒタキナリ

大使 照會セラル、ナレハ照會アリテモ苦シカラス只今モ申ス通此等ノ事ハ都テ公法ニ基クコナレハ敝國ニ於テハ萬一此者等敝國ニ居ルモノト仮定スルモ公法ニ從テ其論ヲ究メタル上ナラテハ何トモ處置致シ難キナリ

此意又齋藤書記官ヲシテモルレンドルフニ細カニ傳ヘ置シム

金 約書冒頭ノ文字ノ内宸念ノ二字ヲハ睦誼ト致シタシ是兩國相

互ニスル意ヲ以テスレハ後ノ悵惻ノ字ニ對セサレハナリ

大使 是ハ全ク敝國ニノミ關スル處ニテ宸念ヨリ拙者ヲ派出セラル意味ニ止マレハ此儘ニ存シ置ヘシ

金 然ラハ宸念ノ字ハ据ヘオキ均切悵惻ノ四字ヲ均願敦好ト改メ將來禍端萌生ノ六字ハ將來事端ノ四字ニ改メタシ

大使 可ナリ

是ニテ談判全ク整ヒ明日〔九〕午后一時仍ホ議政府ニ於テ調印スヘキ旨ヲ約スルノ後餘談中ニ約書冒頭ノ文ナル京城事變ノ上ニ此次ノ二字ヲ加ヘ又大君主均願敦好ノ處ニ宸念ノ二字ヲ加フル等ノ事ヲ商定シ同日午后四時議政府ヲ出ツ

條約書(和文)一月八日於^テ議政府^ニ議定、同九日於^テ同處^ニ調印互換、

此次京城ノ變係ル所小ニ非ス

大日本國

大皇帝深ク

宸念ヲ軫セラレ茲ニ特派全權大使伯爵井上馨ヲ

簡ヒ

大朝鮮國ニ至リ便宜辨理セシメラル

大朝鮮國

大君主

宸念均シク敦好ニ切ニ乃チ金宏集ニ

委ヌルニ全權議處ノ任ヲ以テシ

命スルニ懲前毖後ノ意ヲ以テセラル兩國ノ大臣和衷商辦シ左ノ約
 款ヲ作り以テ好誼ノ完全ヲ昭カニシ又以テ將來ノ事端ヲ防ク茲
 ニ全權ノ文憑ニ據リ各々名ヲ簽シ印ヲ鈐スル左ノ如シ

約款

第一

朝鮮國

國書ヲ修メテ

日本國ニ致シ謝意ヲ表明スル事

第二

此次

日本國遭害人民ノ遺族並ニ負傷者ヲ恤給シ暨ヒ商民ノ貨物ヲ毀

損掠奪セラル、者ヲ填補シテ

朝鮮國ヨリ拾壹萬圓ヲ撥支スル事

第三

磯林大尉ヲ殺害シタル兇徒ハ査問捕拿シ重キニ從テ刑ヲ正ス
事

第四

日本公館ハ新基ニ移シ建築スルヲ要ス當ニ

朝鮮國ヨリ地基房屋ヲ交附シ公館暨ヒ領事館ヲ容ルニ足ラシム
ヘシ其修築増建ノ處ニ至テハ

朝鮮國更ニ二萬圓ヲ撥交シ以テ工費ニ充ツル事

第五

日本護衛兵弁ノ營舎ハ公館ノ附地ヲ以テ擇定シ壬午續約第五款
ヲ照シ施行スル事

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵 井上馨

大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十四日

特派全權大臣 左 議 政 金 宏 集

另單

一約款第二第四條ノ金圓ハ日本銀貨ヲ以テ算ス須ラク三箇月ヲ期シ
テ仁川ニ於テ撥完スヘシ

一第三條兇徒ヲ處辨スルハ立約後二十日ヲ以テ期ト爲ス

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵 井上馨

大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十四日

特派全權大臣左議政 金宏集

條約書（漢文）一月八日於議政府議定、同九日於同處調印互換、

此次京城之變、所係非小、

大日本國

大皇帝深軫、

宸念、茲、

簡特派全權大使伯爵井上馨、至、

大朝鮮國便宜辨理、

大朝鮮國

大君主

宸念、均願敦好、乃、

委金宏集、以全權議處之任、

命^{スルニ}以^テ懲^ル前^ニ愆^{ムル}後^ヲ之意^ヲ兩國大臣和衷^{シテ}商辦^シ作^リ左約款^ヲ
以^テ昭^{カニシ}好誼^ヲ完全^{ナルヲ}又以^テ防^グ將來事端^ヲ茲^ニ據^ニ全權^ヲ交^ス
憑^ニ各簽名^シ鈐印^{スルヲ}如左^シ

第一

朝鮮國修^{メテ}國書致^シ日本國表明^{スル}謝意^ヲ事^ヲ第二 恤給^シ此次^ニ日本國遭^{ヘル}害^ニ人民遺族並^ニ負傷者^ヲ暨^ヒ填補^{スル}商民貨物毀損掠奪者^ヲ由^リ朝鮮國撥^{スル}支^{スル}拾壹萬圓事^ヲ

第三 殺害磯林大尉之兇徒、查問捕拿、從重

正刑事

第四

日本公館、要移新基、建築當由

朝鮮國、交付地基房屋、足容公館暨領事館、至

其修築增建之處

朝鮮國更撥二萬圓、以充工費事

第五

日本護衛兵弁、營舍、以公館附地擇定、照壬午

續約第五款施行事

大朝鮮開國四百九十三年十一月二十四日

特派全權大臣左議政 金宏集

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵 井上馨

另單

一約款第二第四條、金圓、以日本銀貨算、須期三

個月於仁川撥完

一第三條處辨兇徒、以立約後二十日爲期、

大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十四日

特派全權大臣左議政 金宏集

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵 井上馨

約書 原案

京城之變所係非小

大日本國

大皇帝深軫

宸念茲

簡特派全權大使伯爵井上馨至

大朝鮮國便宜辦理

大朝鮮國

大君主均切悵惻乃

委金宏集以全權議處之任

命^{スルニ}以^テ懲^リ前^ニ愆^ム後^ヲ之意^ヲ兩國大臣和衷^{シテ}商辦^シ作^シ左約款、
 以^テ昭^ニ好^シ誼^ヲ完^{ナルヲ}全^ニ又^テ以^テ防^ヲ將來禍端萌生^{スルヲ}茲^ニ據^ニ、
 全權文憑各簽名^シ鈴印^{スルヲ}如^シ左、

約款

第一 朝鮮國修國書致^シ

日本表明謝意^{スルヲ}事、

第二 賑給此次

日本國遭害兵民遺族並負傷者暨填補商民貨
 物、毀損掠奪者^{セラルヲ}由^ニ

朝鮮國撥支拾壹萬圓事、

第三 殺害^{スルニ}磯林大尉及放火公館等兇徒查問捕

拿、從_レ重_{キニ}正_ス刑事、

第四 日本公館、再建之費、計四萬圓、由_二朝鮮國_一照_{シテ}數_ヲ償_{スル}補_{スル}事、

第五 日本護衛公館_{スル}兵弁_ヲ營舍_ハ須_ス要_ス足_{ルヲ}置_{クニ}一千員_ヲ朝鮮國_ニ任_{スル}其_ヲ建設修繕_ニ事、

另單

一 約款第二第四條金圓_ハ以_テ日本銀貨_ヲ算_シ須_ク期_ニ三箇

月_ヲ於_テ仁川_ニ撥_上完_ス

一 第三條 處_ニ辨_{スルハ}兇徒_ヲ以_テ立_{ルヲ}約_ニ後旬日_ヲ爲_ス期_ト

一 第五條 兵營屯舍_ハ須_ス要_ス在_{ルヲ}于公館_ニ近地_ニ但公館_ニ未_{サルニ}再_ミ建_セ之間_ハ不_レ論_セ京城_ニ内外_ヲ由_リ日本官_ニ擇_ヒ便宜_ニ

之地屯駐其館舍須由

朝鮮官吏照料

朝鮮國ヨリ差送ルヘキ謝狀草案 一月九日於議政府議定

大朝鮮國

大君主敬白朕之良友

大日本國

大皇帝朕深惜朝有逆臣致有十月十七日之事一時變亂延及于隣國官商幾使兩國失和乃承大皇帝惠顧邦交不忘素好簡派全權大使伯爵井上馨前來會議現已一切妥協朕以藐躬涼德化導無方重貽友邦之戚曷勝惋惜茲遣禮曹參判徐相雨兵曹參判穆德麟充出使正副

大臣前往東京覲見

大皇帝親呈國書以展懲毖之意恭稔

大皇帝政治綦隆

純嘏無疆深願後此兩國官商相安無事庶萬
民無不平之心以後兩國上下和洽不致再啓
紛爭此我兩國朝廷之福士民之幸也

大朝鮮國開國四百九十三年朕即位二十一年

十一月三日於漢城昌德宮親署名鈐國寶

御名
奉

勅議政府領議政沈舜澤

大朝鮮國特派全權大臣左議政金

爲

照會事、照得此、次本國變亂之由、係亂臣金玉
均朴、泳孝、洪英植、徐光範、徐載弼等、作亂官闡、
殺害大臣之罪、舉國民人所共憤、義當聲明與
衆戮之、洪英植已死、惟金玉均等、四賊及其徒
黨尙稽顯戮、後患非細、若該犯等逃難、寄跡於
貴國地方、應請
貴大使遍飭各地方、無得憐其窮、投之情、查拿
交出、以昭公允、以敦友誼、俾我兩國之間、妖氛
廓淨、禍萌永絕、是所切望、相應備文照會、

貴大使、請煩查照施行、須至照會者、
右 照 會

大日本國特派全權大使伯爵井上

大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十五日

大日本特派全權大使伯爵井上

爲

照覆事准

貴曆十一月二十五日照會內開金玉均朴泳

孝洪英植徐載弼等作亂宮闈若該犯等逃難

寄跡於貴國地方應請貴大使遍飭各地方查

拏交出等因前來查

貴大臣所稱之事所係非細非見詳示其求于

我之理由本大使未知所以答焉貴我兩國現

未有互交罪犯之約

貴大臣素所熟知雖然至在各國所據其互交

罪犯之約捕拿交付者、若萬國公法之認爲合
 交付者、我國亦無爲其逋藪之意也、本大使又
 有欲一言者、
 貴大臣所稱數犯、若係國事犯者、我政府恐不
 易副
 貴大臣之望也、相應照復
 貴大臣查照須至照復者
 右 照 復

大朝鮮國特派全權大臣左議政金

明治十八年一月十一日

井上議官於吳大澂處筆談扣

井

吳大人閣下、我全權大使井上、教弟致意、閣下、

前日我大使在議政府、偶然得閣下臨晤、初接

清丰、不堪欣幸、把臂一堂、固所渴望、但使臣出

派一依訓命、々々之外、不得步趨、閣下於日清

交涉事宜、不帶辨理全權字據、與我訓命所飾不

符、事屬公義、情切傾蓋、遺憾曷極、我大使在本國

職居要劇、不能曠日延留、既與朝鮮員辨結兩國

事宜、即以本日從速就途矣、幸勿勞思、

使者前日在議政府得晤貴大使、忽々握晤未獲

畧通欸曲、知貴大使與朝員議約事畢、竊擬盤

井

桓數日彼此往還作樽酒之叙不圖貴大使返
旆期速望塵不及實深悵惘乞閣下歸國時代
致拳々是所企幸

前日貴國駐在日本欽差黎函致我外署稱兩國

兵營口角莫如兩國各派大員商辨了結等語我

政府想貴使於日清交涉事受辨理之任乃據

貴使所稱云兩國現無可議故無全權字樣我大

使於漢城之變深抱惋惜素願商議善後事宜使

命齟齬不得相俱吐露促期就途茲使弟聊致雅

意惟閣下諒之

吳
黎大臣所稱兩國兵營口角未指何國或不知朝

鮮亂黨起事情由之故本大臣現已查明朝鮮政
 府有公牘請我兵入宮保護朝兵與我兵同至普
 通門外有亂黨數人前來放槍我兵死五人受傷
 九人、始各發槍應之倉猝之間、尙不知貴國有
 兵在內否、本大臣思我兵傷亡、亦應議恤、既係亂
 黨、先行放槍、只可查辨亂黨、所以前在政府所書
 筆談謂中國使臣與貴國現無可議也、
 弟職在記室、無專對之任、不欲多言、生枝節、既致
 我大使之意、當勿々拜別、久渴泰斗之名、得接溫
 容、是爲欣幸、
 此論作爲使者與閣下間談、並無枝節、可生如

吳

井

貴大使問及鄙意現無可議一節即以此次筆談
 呈閱當可渙然冰釋矣此兩國和好之意本大臣
 力顧大局不欲別生枝節實與貴大使所見若
 合符節也
 大人所稱弟當復命于我大使不知我大使意何
 如未便專對諒焉